

昭和54年度県営圃場整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

1980.3

三重県教育委員会



天華寺廢寺博仏

序

埋蔵文化財はすべて、現状保存されることが望ましいことであり、各種の開発事業の実施にあたっては、つとめて保存されるよう要請しているところでもあります。

県営圃場整備事業地内に分布する埋蔵文化財の取り扱いについては、これまで関係の各機関と協議を重ねてまいりました結果、保存される埋蔵文化財も年々増加しつつある現状であります。

昭和54年度においては事業地内に分布する42件の埋蔵文化財のうち、28件が現状保存され、残る14件についても、関係者各位のご協力により、部分的な発掘調査にとどめさせていただき、記録保存することになりました。

ここに、記録保存されることとなった14件の発掘調査の結果を報告する次第であります。

本書の刊行にあたり、発掘調査に協力されました地元土地改良区をはじめとする関係者各位に対し、謝意を表するものであります。

昭和55年3月

三重県教育委員会

教育長 横田英司

例 言

1. 本書は、昭和54年度県営圃場整備事業地内にかかる埋蔵文化財発掘調査の結果をまとめたものである。

2. 発掘調査費用は一部を県教育委員会が昭和54年度国庫補助金の交付をうけ、その他については三重県農林水産部が負担した。

3. 調査のうち、試掘調査は三重県農林水産部の関係各耕地事務所が県文化課係員の立合いのもとに実施した。

4. 発掘調査は次の体制で行なった。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県教育委員会事務局文化課主事、技師、調査補助員

調査協力 三重県農林水産部、各耕地事務所、各土地改良区、各教育事務所、各市町村教育委員会

5. 本書に用いた遺構標示の略記号は次による。

S B; 堅穴住居 ・掘立柱建物

S D; 溝 S E; 井戸 S K; 土壇

S P; 池・水溜 S X; その他

6. 本書に使用した航空写真は農林水産部の提供による。

7. 発掘調査および報告書作成に際し、次の方々の協力を得た。

榎本義讓、御村精治、垣見博一(昭和54年度埋蔵文化財発掘技術研修生)、仁保晋作、野田修久、岩脇彰、前嶋敏文、

増地陽一、三浦儀直、牛田光洋(三重大学)、上村安生(愛知学院大学)、田中久生(奈良大学)、森田尚宏、稲垣卓史、伊勢野久好

8. 本書の編集・執筆には各遺跡担当者があたり、文末にその氏名を明記した。

9. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

I	前 言	1
II	鈴鹿市箕田 大木ノ輪遺跡	7
III	一志郡嬉野町 天華寺 廃寺	15
IV	一志郡嬉野町 上野垣内遺跡	25
V	多気郡明和町 東村遺跡	35
VI	多気郡明和町 斎宮跡・露越遺跡	41
VII	多気郡多気町 カウジデン遺跡	59
VIII	阿山郡大山田村 横枕1・2号墳	77
IX	阿山郡大山田村 山出遺跡	91
X	上野市大野木 木津氏館跡	95
XI	上野市大野木 神ノ木館跡	107
XII	上野市大野木 婦毛遺跡	131
XIII	上野市比自岐 上寺遺跡他	135
XIV	名張市西田原 一本杉遺跡	149

図 版 目 次

卷首図版	天華寺廃寺埴仏				S K 8
P L 1	大木ノ輪遺跡	B地区近景	P L 20		S E 10
		幹線排水路部分近景			S D 20、
P L 2		S E 104、204、301、401			S K 22
		S K 215、404	P L 21		斎宮跡出土土器
		S X 109			露越遺跡出土土器
P L 3		出土土器	P L 22		出土土器
P L 4	天華寺廃寺	遺跡全景	P L 23	カウジデン遺跡	遺跡遠景
		金堂跡全景	P L 24		発掘区近景
		塔跡全景			S B 5、S D 14発掘風景
P L 5		埴仏、軒丸瓦			
P L 6		軒丸瓦、軒平瓦	P L 25		S D 14出土土馬、土師器
P L 7	上野垣内遺跡	航空写真			
		遺跡近景	P L 26		S D 14出土土師器
P L 8		調査区近景	P L 27		S D 14出土土師器、灰
P L 9		S B 27			釉陶器
		S B 28	P L 28		S D 14出土木製品
P L 10		S B 32～35、66	P L 29		墨書土器、その他の遺物
		S K 10			
P L 11	東村遺跡	遺跡遠景	P L 30	横枕古墳	航空写真
		東トレンチ全景			遺跡遠景
P L 12		東トレンチ	P L 31		1号墳調査前近景
		S D 2			1号墳調査後近景
		S E 1	P L 32		2号墳調査前近景
P L 13		西トレンチ全景			2号墳調査後全景
		S D 4	P L 33		2号墳調査後全景
P L 14		S D 7			2号墳調査後近景
		西トレンチ全景	P L 34		2号墳石室上層遺物出土状況
		出土土器			
P L 15	斎宮跡	遺跡遠景	P L 35		2号墳石室下層遺物出土状況
		S D 1538、1535、1515			
P L 16		S D 1515、1517	P L 36		2号墳奥壁付近遺物出土状況
		S E 1530			
		S K 1528			2号墳女室遺物出土状況
P L 17		S D 1504、1507			
		S E 1530	P L 37		2号墳側壁
P L 18	露越遺跡	S D 1			2号墳羨道部分
		S D 1遺物出土状況	P L 38		出土土器
P L 19		S D 3、5、7	P L 39		2号墳出土土器

P L 40		2号墳出土土器	P L 62	S P 22、23
P L 41		2号墳出土土器		S D 24
P L 42		2号墳出土土器、鉄器	P L 63	土師器、瓦質土器、陶器
P L 43	山出遺跡	遺跡全景	P L 64	瓦質土器、陶器、磁器
		調査区全景	P L 65	陶器
P L 44		S X 6	P L 66	陶器
		出土土器	P L 67	陶器、木製品
P L 45	木津氏館跡	航空写真	P L 68	S E 55井戸粹
P L 46		発掘風景	P L 69	婦毛遺跡
P L 47		北東隅発掘区全景		遺跡遠景
		堰		遺跡近景
P L 48		堰	P L 70	A区近景
		堰		B区近景
P L 49		Aトレンチ	P L 71	B区土層
		Fトレンチ		発掘風景
P L 50		出土土器		出土遺物
P L 51		出土土器、五輪塔	P L 72	上寺遺跡
P L 52		木製品		比叺盆地航空写真
P L 53		木製品、硯、古銭他		水路部分、S K 12、S
P L 54	神ノ木館跡	竹嶋氏館、神ノ木館跡	P L 73	D 15、S K 16
		航空写真		S K 17
		調査前近景		S D 18
P L 55		発掘調査後全景	P L 74	水路部分出土遺物
P L 56		S A 25、S D 31、36、37		試掘坑出土土器
		S D 31土層断面		親王塚、石神塚1・2
P L 57		S D 31、51	P L 75	号墳
		S B 11、12、13		一本杉遺跡
P L 58		S B 27		航空写真
		S B 33	P L 76	遺跡遠景
P L 59		S K 7		遺跡近景
		S K 10		S B 1
P L 60		S E 32	P L 77	S B 2
		S E 55		S B 2、3
P L 61		S P 45	P L 78	S B 2床面炭化材出土
		S K 41		状況
			P L 79	S B 2カマドと煙道
				出土遺物

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図……………	3	第 3 図	遺構配置図 1 ……	9
第 2 図	大木ノ輪遺跡 遺跡地形図……………	7	第 4 図	遺構配置図 2 ……	9

第 5 図	遺構配置図 3	11							
第 6 図	遺構配置図 4	11	第 42 図	S D 14 出土土器実測					
第 7 図	土器実測図	13		図					68
第 8 図	天華寺廃寺 遺跡位置図	15	第 43 図	その他の遺構出土土					
第 9 図	発掘区平面図	16		器実測図					70
第 10 図	遺構平面図 1	17	第 44 図	包含層出土土器実測					
第 11 図	遺構平面図 2	18		図					71
第 12 図	屋瓦類 1 拓影	21	第 45 図	石器・鉄器・土製品					
第 13 図	屋瓦類 2 拓影	22		実測図					72
第 14 図	土器実測図	23	第 46 図	横枕 1・2 号墳 遺跡位置図					77
第 15 図	上野垣内遺跡 遺跡位置図	25	第 47 図	遺跡地形図					78
第 16 図	遺跡地形図	26	第 48 図	発掘区平面図					79
第 17 図	遺構平面図	28	第 49 図	(1 号 墳) 調査後実測図					79
第 18 図	土器実測図	32	第 50 図	土器実測図					80
第 19 図	東村遺跡 遺跡位置図	35	第 51 図	(2 号 墳) 調査後実測図					81
第 20 図	遺跡地形図	36	第 52 図	周溝断面図					82
第 21 図	発掘区平面図	37	第 53 図	石室平面図					83
第 22 図	S E 1 実測図	38	第 54 図	土器実測図 1					85
第 23 図	遺構配置図	38	第 55 図	土器実測図 2					87
第 24 図	土器実測図	39	第 56 図	土器・鉄器実測図					88
第 25 図	斎宮跡・露越遺跡 遺跡地形図	42	第 57 図	山出遺跡 遺跡地形図					91
第 26 図	(斎宮跡第 26-3 次) 遺構平面図 1	45	第 58 図	発掘区平面図					92
第 27 図	遺構平面図 2	46	第 59 図	遺構平面図					93
第 28 図	遺構平面図 3	47	第 60 図	土層断面図					93
第 29 図	土器実測図	49	第 61 図	土器実測図・古銭拓					
第 30 図	Q T 遺構平面図	50		影					94
第 31 図	(露越遺跡) 遺構平面図 1	52	第 62 図	木津氏館跡 遺跡位置図					95
第 32 図	遺構平面図 2	53	第 63 図	発掘区平面図					96
第 33 図	土器・石製品実測図	55	第 64 図	遺構平面図					97
第 34 図	カウジデン遺跡 遺跡位置図	59	第 65 図	トレンチ断面図					99
第 35 図	遺跡地形図	60	第 66 図	北東隅遺構					100
第 36 図	遺構平面図	62	第 67 図	南東隅遺構					101
第 37 図	S D 14 出土土馬実測		第 68 図	土器・硯実測図、瓦・					
	図	63		古銭拓影					102
第 38 図	S D 14 出土土器実測		第 69 図	土器実測図					103
	図	64	第 70 図	神ノ木館跡 遺跡地形図					107
第 39 図	S D 14 出土木製品実		第 71 図	竹鳴氏館跡、神ノ木					
	測図	65		館跡平面図					108
第 40 図	S D 14 出土木製品実		第 72 図	遺構平面図					109
	測図	66	第 73 図	S D 31 土層断面図					110
第 41 図	S D 14 出土土器実測		第 74 図	S K 50・51 土層断面					

	図……………110	第95図	婦毛遺跡	遺跡地形図……………131
第75図	S A 25、S D 37・S A 25、S D 36土層断 面図……………111	第96図		A区遺構平面図……………132
第76図	S B 11・12・13実測図 ……………112	第97図		B区遺構平面図……………133
第77図	S B 14実測図……………113	第98図		土器実測図……………134
第78図	S B 27・33実測図……………113	第99図	上寺遺跡	遺跡位置図……………135
第79図	S E 32実測図……………114	第100図		遺跡地形図……………136
第80図	S E 55実測図……………114	第101図		発掘区平面図……………137
第81図	S P 22実測図……………115	第102図		水路部分遺構平面図 ……………138
第82図	S P 45実測図……………115	第103図		水路部分出土土器実 測図……………140
第83図	S K 7実測図……………116	第104図		試掘坑出土土器実測 図……………142
第84図	S K 10実測図……………116	第105図	(親王塚)	土層断面図……………145
第85図	S K 16実測図……………117	第106図		土器実測図……………145
第86図	S K 41実測図……………117	第107図	(石神塚1・2号墳)	1号墳平面・土層断 面図……………146
第87図	S K 43実測図……………117	第108図		2号墳平面・土層断 面図……………147
第88図	S D 24実測図……………118	第109図		土器実測図……………148
第89図	土師器・須恵器・黒色 土器・瓦器実測図……………120	第110図	一本杉遺跡	遺跡位置図……………149
第90図	陶磁器実測図……………122	第111図		遺跡地形図……………150
第91図	陶器実測図……………124	第112図		遺構平面図……………151
第92図	陶器実測図・拓影……………125	第113図		S B 1実測図……………152
第93図	土器・木製品・石製品 実測図……………127	第114図		S B 2・3実測図……………153
第94図	S E 55井戸枿実測図 ……………128	第115図		土器・石器実測図、 瓦拓影……………155

表 目 次

第1表	昭和54年度県営圃場整備事業地内埋蔵 文化財一覧表……………3	第10表	カウジテン遺跡	県内斎串出土遺跡一覧 表……………74	
第2表	第2次調査予定遺跡……………4	第11表	山出遺跡	第一次調査グリッド一 覧表……………92	
第3表	昭和54年度発掘調査遺跡一覧表……………6	第12表	木津氏館跡	館跡現況一覧表……………98	
第4表	現地説明会一覧表……………6	第13表		トレンチ一覧表……………100	
第5表	大木ノ輪遺跡	地区別出土遺物対照表……………14	第14表	神ノ木館跡	遺構別主要出土遺物対 照表……………118
第6表	上野垣内遺跡	周辺遺跡一覧表……………27	第15表	上寺遺跡	試掘調査結果一覧表……………139
第7表		竪穴住居跡一覧表……………30			
第8表		掘立柱建物跡一覧表……………31			
第9表	斎宮跡	S D 1515に伴う土壇一 覧……………128			

第16表	試掘調査出土遺物一覽 表……………	141
第17表	試掘調査出土遺物一覽 表……………	143

I 前 言

昭和52年度より県教育委員会においては、年度当初に県庁内の開発関係課に対し、その年度に計画されている公共事業について照会をしている。そして回答のあった事業についてそれぞれ遺跡地図との照合、分布調査の実施を行ない、埋蔵文化財の有無の確認をし、その結果を担当課に報告するとともに、事業地内に含まれる埋蔵文化財を現状保存されるように要請をしている。

一方、ここ数年来、県農林水産部耕地第二課が実施する県営圃場整備事業にかかる埋蔵文化財の調査

件数及びその規模が増大している。昨年（53年度）県教育委員会が主体となり発掘調査を実施した件数23件のうち実に半数を超える14件が県営圃場整備事業に伴う調査であり、調査面積をみても、総発掘面積33,200㎡のうち、12,500㎡を占めている。このような状況にあるうに、県営圃場整備事業は夏季、秋季施工とあり、夏季施工については年度当初早々に着手しなくてはならない場合が多く、県教育委員会としては出きるだけ早く、事業地内における埋蔵文化財を確認する必要がある。

1. 分布調査

そこで、昭和54年度の県営圃場整備事業についての事業予定を53年度中に報告をうけ、埋蔵文化財の確認を行なうことにした。この報告をもとに遺跡地図との照合、及び分布調査を昭和55年3月より4月

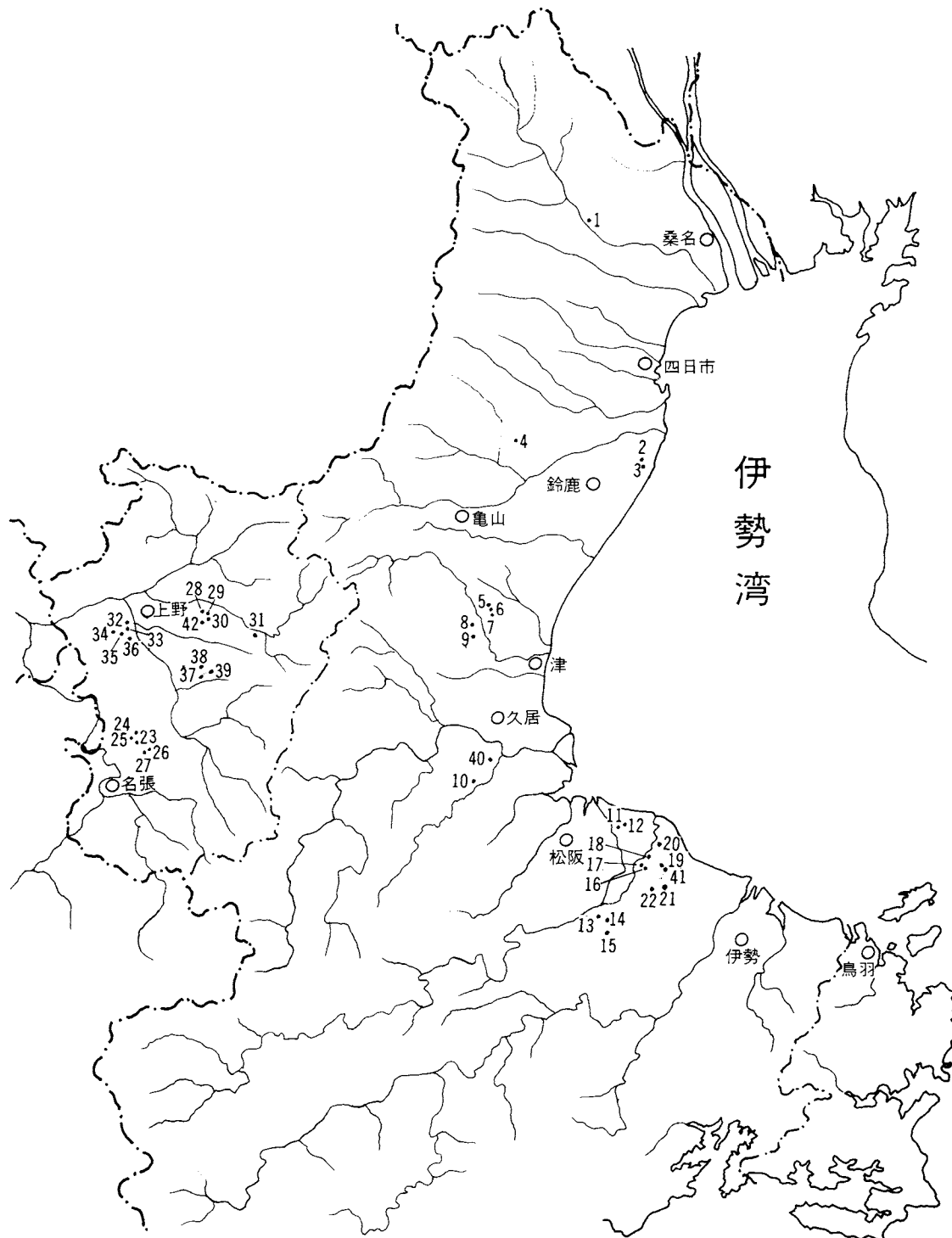
にかけて実施した。その結果、事業面積1,014haのうちで39件、460,000㎡の遺物包含地、古墳を確認した。そして、これらの埋蔵文化財の保護について農林水産部と協議に入った。

耕地事務所	事業地区	事業場所	事業面積	遺跡名	遺跡面積	概況	保存方法
桑名	東員北部	員弁郡東員町	54 ha	1. 北大社西遺跡	12,000 ㎡	水田、古墳時代～	現状保存
	大安東部	〃 大安町	32	—	—	—	—
四日市	菰野	三重郡菰野町	48	—	—	—	—
	ちくさ	〃	22	—	—	—	—
	鈴鹿第2	鈴鹿市箕田町他	62	2. 大木ノ輪遺跡	50,000	水田・畑、弥生時代～	畑寄せ保存 40,500㎡ 記録保存 9,500㎡ 次年度繰越
	〃	〃 北堀江町		3. 神大寺遺跡	5,000	畑、鎌倉時代～	
	深溝	〃 深溝町	28	4. 深溝A遺跡	15,000	水田、古墳時代～	現状保存
龜山北部	龜山市川崎町	32	—	—	—	—	
津	安濃川左岸	安芸郡安濃町	50	5. 荒木A遺跡	12,000	畑、歴史時代～	試掘工事立会
	〃	〃		6. B	5,000	畑、水田、歴史時代	試掘工事立会
	〃	〃		7. C	5,000	畑・水田、歴史時代	試掘工事立会
	安濃川右岸	〃	30	8. 寺社遺跡	6,000	畑、歴史時代	現状保存
	〃	〃		9. 東観音寺西方遺跡	20,000	畑、歴史時代	工事立会

津	津西部	津市片田町	50		—	—	—
	天白	一志郡三雲村	18		—	—	—
	嬉野	" 嬉野町	57		—	—	—
	豊地	" "	40	10. 上野垣内遺跡	60,000	畑・水田、古墳時代～	現状保存56,900㎡ 記録保存 3,100㎡
	白山	" 白山町	46		—	—	—
伊勢	東黒部	松阪市東黒部町	19	11. 東黒部A遺跡	1,500	畑、歴史時代	試掘工事立会
	"	"		12. 東黒部B遺跡	5,000	畑、歴史時代	試掘工事立会
	多気	多気郡多気町	33	13. 南弟国遺跡	3,600	畑、古墳時代～	現状保存
	"	"		14. カウジテン遺跡	9,600	水田、古墳時代～	現状保存 9,200㎡ 記録保存 400㎡
	"	"		15. 東池上遺跡	10,000	水田、歴史時代	地区除外
	上御糸	" 明和町	24	16. 粟垣内遺跡	2,000	水田、古墳時代～	試掘、現状保存
	"	"		17. 塚垣内遺跡	2,400	水田、奈良時代～	試掘工事立会
	"	"		18. 須田遺跡	8,000	畑、奈良時代	地区除外
	"	"		19. 新兵衛山遺跡	14,000	畑、古墳時代	地区除外
	齋宮	多気郡明和町	68	20. 西浦遺跡	15,000	畑、古墳時代～	地区除外
	"	"		21. 齋宮跡	50,000	水田、平安時代～	現状保存 記録保存
	東大淀	伊勢市	66	22. 露越遺跡	60,000	水田、畑	現状保存 記録保存
伊勢南部	"	8		—	—	—	
上野	名張北部	名張市西田原	36	23. 一本杉遺跡	6,500	畑、奈良時代～	現状保存 5,700㎡ 記録保存 800㎡
	"	"		24. 西田原A遺跡	1,800	畑、歴史時代	現状保存
	"	"		25. 西田原B遺跡	100	畑、歴史時代	地区除外
	"	" 東田原		26. 東田原A遺跡	2,500	畑、歴史時代	試掘工事立会
	"	"	27. 東田原B遺跡	1,000	畑、歴史時代	試掘工事立会	
	大山田第1	阿山郡大山田村	69	28. 真泥A遺跡	1,600		現状保存
	"	"		29. 真泥B遺跡	2,000		次年度繰越
	"	"		30. 真泥C遺跡	7,000		現状保存
	大山田第2	"	14	31. 横枕古墳	400	水田、円墳2基	記録保存
	友田第2	阿山郡阿山町	28	—	—	—	—
	上野西部	上野市大野木	53	32. 神ノ木館跡	1,800	水田、室町時代	記録保存 1,800㎡
	"	"		33. 木津氏館跡	11,000	水田、室町時代	地区除外 記録保存
	"	"		34. 大野木B遺跡	10,000	畑、水田、古墳時代	試掘 現状保存
	"	"		35. 婦毛遺跡	1,000	水田、歴史時代～	現状保存 200㎡ 記録保存 800㎡
	"	"	27	36. 大野木F遺跡	30,000	畑、水田、古墳時代～	現状保存
上野南部	上野市摺見	37. 上寺遺跡		10,000	畑・水田、奈良時代～	現状保存 記録保存	
"	"	38. 下り合遺跡	2,000	畑、古墳時代～	試掘 次年度繰越		
"	"		39. 石神1・2号墳	200	水田、円墳2基	現状保存	

			1,014		460,000		
津 松阪 上野	豊地 上御糸 大山田 大第1	一志郡嬉野町 多気郡明和町 阿山郡大山田村		40. 天華寺廃寺跡 41. 東村遺跡 42. 山出遺跡	10,000 3,000 10,000	水田、奈良時代 水田、鎌倉時代 水田、古墳時代	

第1表 昭和54年度県営圃場整備事業地内埋蔵文化財一覧表



第1図 遺跡位置図

2. 第1次調査・試掘調査

39件のうち、鈴鹿市大木ノ輪遺跡については昭和53年度末に試掘調査を実施し、約50,000㎡の大形遺跡であることが判明していた。このうち38,000㎡が畑寄せによって現状保存され、残る12,000㎡が排水路、開田により削平されるため、発掘調査を実施しなくてはならない状況であった。その中でも基幹排水路は既に上流部が完成しており、雨水対策上緊急に調査を実施しなくてはならず、まず昭和54年度の第1次調査として基幹排水路部分約3,000㎡について、5月28日より発掘調査を実施した。

先の分布調査の結果により、耕地第二課及び各耕地事務所、地元土地改良区との間で現状保存が出来ないかどうか検討を重ねた。その結果、まず工期のせまっている夏季施行分について、現地立合、試掘調査を4月から5月にかけて実施することになった。

試掘調査は原則として2m×4mの試掘坑を適宜設定して地山まで掘り下げ、遺物の包含状況、遺構の有無、それらの地上からの深さを確認するという

方法で行なった。その結果、粟垣内・大野木Bの2遺跡については、多数の遺物、遺構が検出され、事業の実施にあたり、事前調査の必要があると考えたが、協議のうえ計画変更をし、現状保存されることとなった。また、荒木A・B・C、東観音寺西方、東黒部A・B、塚垣内、西田原A、東田原A・Bの10遺跡では遺物の出土が微量であり、遺構も認められなかったため、事業を実施してもさしつかえないと判断した。北大社西、深溝A、寺社、南第回、真泥A・C、大野木Fの7遺跡については、現地立合の際に現状保存されることとなり、神大寺遺跡については翌年度に事業を繰り越すことが決定した。

しかし、第2表の13件については現状保存が困難となり、6月末、農林水産部に対し第2次調査の費用の執行委任を申し入れた。このうち、上野南部の親王塚古墳は上寺遺跡の試掘調査の際に、遺跡において、新たに発見された塚である。

事業地区	遺跡名	所在地	面積	調査対象部分
鈴鹿第2	大木ノ輪遺跡	鈴鹿市箕田町外	7,500	畑削平部
豊地	上野垣内遺跡	一志郡嬉野町島田	1,000	排水路部分
多気	カウジデン遺跡	多気郡多気町河田	400	"
上御糸	須田遺跡	多気郡明和町須田	600	畑削平部
名張北部	一本杉遺跡	名張市西田原	800	"
大山田第2	横枕古墳(2)	阿山郡大山田村川北	500	水田削平部
上野西部	神ノ木館跡	上野市大野木	1,000	"
"	姉毛遺跡	"		排水路
上野南部	上寺遺跡	上野市摺見	1,700	排水路
"	親王塚古墳	"		畑削平部
"	石神塚古墳(2)	"		水田削平部
	13件		13,500	

第2表 第2次調査予定遺跡

3. 第2次調査

大木ノ輪遺跡は幹線排水路部分に引きつづき、畑を削平して開田する部分の調査である。調査面積約10,000㎡におよび、調査期間も5月より翌年3月までの長期にわたる大規模な調査となった。

上野垣内遺跡は当初、島田橋北方遺跡と呼称していたものである。排水路部分を7月下旬より調査をはじめた。B区とした中位段丘上の部分において、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡が多数検出された。事前の試掘調査においては、遺構検出面まで40cm近くあると予想していたのであるが、調査区の中央部分では僅か20cm足らずで竪穴住居跡が検出され、排水路周辺部の事業計画では約3,000㎡に亘って遺跡が破壊される状況であった。そこで、現地において緊急に関係者と協議をし、現状保存の困難な部分約3,000㎡を急拠調査区を拡張して実施することとなり、調査期間も延長し、12月上旬まで

行なった。

神ノ木館跡は既に東半部が破壊されており、遺存状況もよくないと考えていたが、予想外に堀や井戸、建物跡等が良好に残っており、1ヶ月程度で終了する予定がのび10月より12月末まで期間を延長して実施した。

また、上野南部の石神塚古墳は事業計画では削平され、水田となる予定であったが、急に地元の人々の強い要望があり、事業地内に現状保存されることとなった。さらに、上御糸地区の須田遺跡の含まれる地域は今年度の事業地より除外され、別の箇所が施工されることとなり、須田遺跡は発掘調査をする必要がなくなった。しかし、新しく事業地になった箇所で、その中に所在する東村遺跡の取り扱いが問題となってきた。これらの遺跡の他は予定通り調査を実施した。

4. 第3次調査

上野垣内、神ノ木、大木ノ輪遺跡の発掘調査が継続中であった10月には、秋季施工にかかる遺跡の発掘準備を進めなくてはならない状況となった。10月末、齋宮地区の齋宮跡、露起遺跡の試掘調査を実施した。齋宮地区の圃場整備事業は国指定史跡齋宮跡の南部分に一部入り込んだ状況となっており、この部分の取り扱いが問題となった。上御糸地区の東村遺跡は前述のように、地区変更のため新しく対処することになった遺跡である。11月中旬に試掘調査を実施し、露起遺跡、齋宮跡とともに排水路部分についてのみ発掘調査を実施することになった。大山田第1地区の山出遺跡は当初事業地内に入っていなかったが、地元が新たに組み入れられることを強く要望している地区で見つかった遺跡である。丘陵の斜面に位置する水田の遺跡で、10月末に試掘調査を実施したが、約10,000㎡におよぶ広大な遺跡であることが判明した。この遺跡の取り扱いについて何度も協議がもたれたが、結局、遺跡のある丘陵は今年度

事業地としないこととなった。しかし、一部分は排水路となるため、その部分については調査を実施することになった。豊地地区の天華寺廃寺は六角形の博仏が出土しており、古くより著名な白鳳期の寺院跡である。この地区は翌55年度に事業が実施されることになっており、その保存が強くのぞまれるところであった。そこで天華寺廃寺の埋没状況を把握し、その保存方法を考える資料とするため、今年度に試掘調査を実施することとなった。11月20日、第3次調査としてこれら5件の遺跡について調査費用の執行委任を農林水産部に申し入れた。

以上のように、昭和54年度は結局14件の遺跡、古墳を部分的ではあるが発掘調査を実施した。調査面積は約23,000㎡におよんだ。今年度事業地域1,014haの中に約460,000㎡の遺跡が所在したが、その大部分は関係者各位の協力、理解のもとに現状保存されることとなった。又、調査期間中に、できるだけ多くの人々に各遺跡の発掘のことや埋蔵文化財について

て理解を深めてもらおうと現地見学会を開催したところ、多数の方々の参加を得た。
分布調査から現地説明会にいたる長い期間、各耕

地事務所、地元改良地区をはじめとして、関係各位には種々ご配慮をいただいた。記して謝意を表したい。
(谷本鋭次)

遺 跡 名	所 在 地	調査面積	調 査 期 間
大 木 ノ 輪 遺 跡	鈴鹿市林崎町、上箕田町、中箕田町、南長太町	9,500 m ²	昭和54年5月－ 昭和55年3月
上 野 垣 内 遺 跡	一志郡嬉野町島田	3,100	昭和54年10月－12月
天 華 寺 廃 寺	一志郡嬉野町天華寺	2,500	昭和55年1月－3月
カウジデン 遺 跡	多気郡多気町河田	400	昭和54年6月－7月
東 村 遺 跡	多気郡明和町佐田	300	昭和54年12月
斎 宮 遺 跡	多気郡明和町斎宮	2,494	昭和54年7月－12月
露 越 遺 跡	多気郡明和町竹川	385	昭和54年11月－ 昭和55年2月
山 出 遺 跡	阿山郡大山田村真泥字山出	250	昭和55年3月
横 枕 1・2号墳	阿山郡大山田村川北	600	昭和54年7月－9月
婦 毛 遺 跡	上野市大野木字婦毛	800	昭和54年8月－10月
神 ノ 木 館 跡	上野市大野木字神ノ木	1,600	昭和54年10月－12月
木 津 館 跡	上野市大野木字神ノ木	300	昭和55年1月－2月
上 寺 遺 跡	上野市摺見	680	昭和54年7月
一 本 杉 遺 跡	名張市西田原	800	昭和54年8月－10月

第3表 昭和54年度発掘調査遺跡一覧表

遺 跡 名	実 施 期 日
大 木 ノ 輪 遺 跡	54. 10. 28、12. 2、55. 3. 2
上 野 垣 内 遺 跡	54. 12. 1
天 華 寺 廃 寺	55. 3. 15
横 枕 1・2号墳	54. 9. 15
神 ノ 木 館 跡	54. 12. 2

第4表 現地説明会一覧表

II 鈴鹿市箕田 おぎのわ 大木ノ輪遺跡

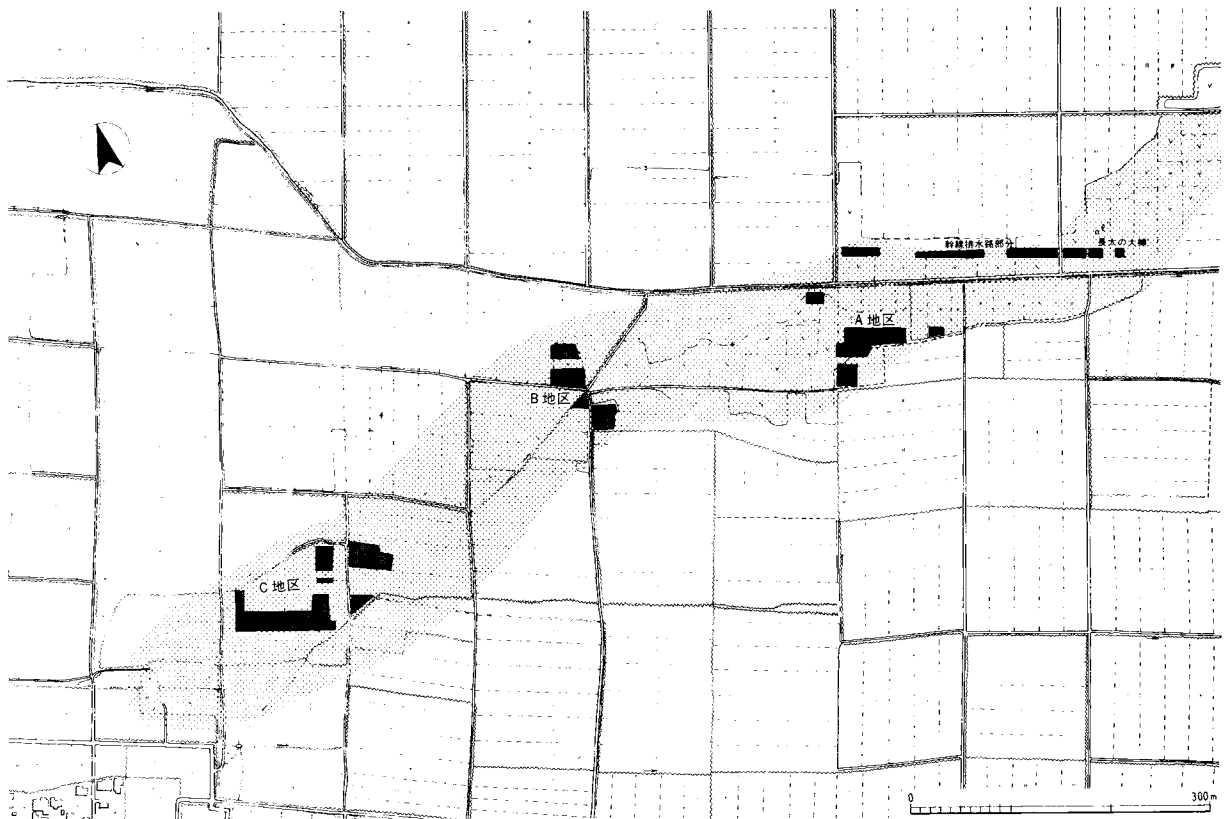
鈴鹿第2期工区計画地内には周知の遺跡は所在していなかったが、すぐ南の上箕田町地内で上箕田遺跡、上箕田北遺跡が知られており、当然この計画地内にも遺跡の所在が予想された。昭和53年5月に事前分布調査を実施し、自然堤防上約100,000㎡の範囲で弥生時代～室町時代の土器片が採集され、大規模な遺跡が確認された。当初、この遺物散布地は林崎東方遺跡と仮称されたが、昭和53年11月～12月にかけて調査された箇所を字名をとり、大木ノ輪遺跡と呼称するようになった。その後、昭和54年2月～3月に自然堤防上に約100箇所の試掘坑をいれて遺跡の規模等を確認し、50,000㎡の工事計画上約10,000㎡については削平して水田にするという事になり、昭和54年度内に発掘調査するという計画がたてられた。

本調査は、昭和54年5月28日から昭和55年3月28

日にわたって実施した。尚、削平される箇所が4箇所にわたった為、最も東部の幹線排水路部分（南長太町字天宮・三方、約1,600㎡）、畑削平部分については東からA地区（中箕田町字石磯、約2,200㎡）、B地区（上箕田町字石津、約1,500㎡）、C地区（上箕田町字両天王、約4,200㎡）と大地区設定し、幹線排水路部分から順次西方へ調査をすすめた。

又、昭和55年2月に各調査区の周囲各所でボーリングによって地表下約2mまでの地質調査を実施した。この結果、自然堤方の形成や遺跡の範囲等を知る上で貴重な資料を得た。多量に出土した木製品については、遺存度が良好な曲物を中心に保存処理を行なった。

本稿は発掘調査終了時にまとめた遺構と遺物の概要報告である。



第2図 遺跡地形図(鈴鹿市都市計画図51・52 1971 1:2500)

1. 遺 構

1. 幹線排水路部分

遺跡の北東部にあたる箇所で、幹線排水路計画部分に沿って、センター杭を中心にして、幅9m延長320mにわたって調査を実施した。開田等によって既に削平されていた箇所を除くと、約1,600㎡の範囲から遺構が検出された。

検出された遺構は、柵列1、溝7条、井戸2基、土壇2基、墓2基である。時期は、出土遺物から全て鎌倉時代後半～室町時代のものと思われる。

これらの遺構は、発掘区の各所で検出されたが、幅9mという限られた範囲のため、溝は一部分の検出であった。又、遺構の検出状況から遺跡はこれより北へは広がらず、南西へのびるものと思われる。

(1) 柵 列

S A 101が東部の発掘区で検出された。北辺で検出されており、構築物がどちらに伴うのか不明である。

(2) 溝

発掘区各所で7条検出された。幅が50cm前後と小さな溝である。その中でS D 103は幅2.2～3.2mと大きい。流れの方向に統一性はみられない。遺物もほとんど含まれていない。

(3) 井 戸

中央の発掘区で近在して2基検出された。共に素掘りのもので、径2m前後の円形を呈するものである。曲物等木製品はない。

(4) 土 壇

中央と東の発掘区で各1基検出された。S K 104からは山茶碗、常滑片が出土している。

(5) 中 世 墓

西の発掘区で検出された2基がある。形態は共に違い、S X 110が常滑焼大甕の埋置、S X 114が方形の掘り方で、深さ30cmの土壇の中に炭化物、骨片を埋置し、埋土の上に河原石を配石するというものである。副葬品は共にない。

2. A 地 区

幹線排水路部分の最西部から南へ約200mの地点がA地区の中心である。計画道路や現況の農道等により、発掘区は4箇所に分散されたが、約2,200㎡の範囲から遺構が検出された。

検出された遺構には、弥生時代前期の土壇1基、平安時代後半～鎌倉時代の掘立柱建物1棟、鎌倉時代後半～室町時代の溝8条、井戸8基、土壇5基、近世以降の土壇1基がある。

(1) 掘立柱建物

中央の発掘区西辺で検出されたS B 201が1棟ある。全体の規模は、農道下へ柱穴がのびるため不明である。方形の大きな掘り方をもち、棟方向はほぼ南北棟を示す。

(2) 溝

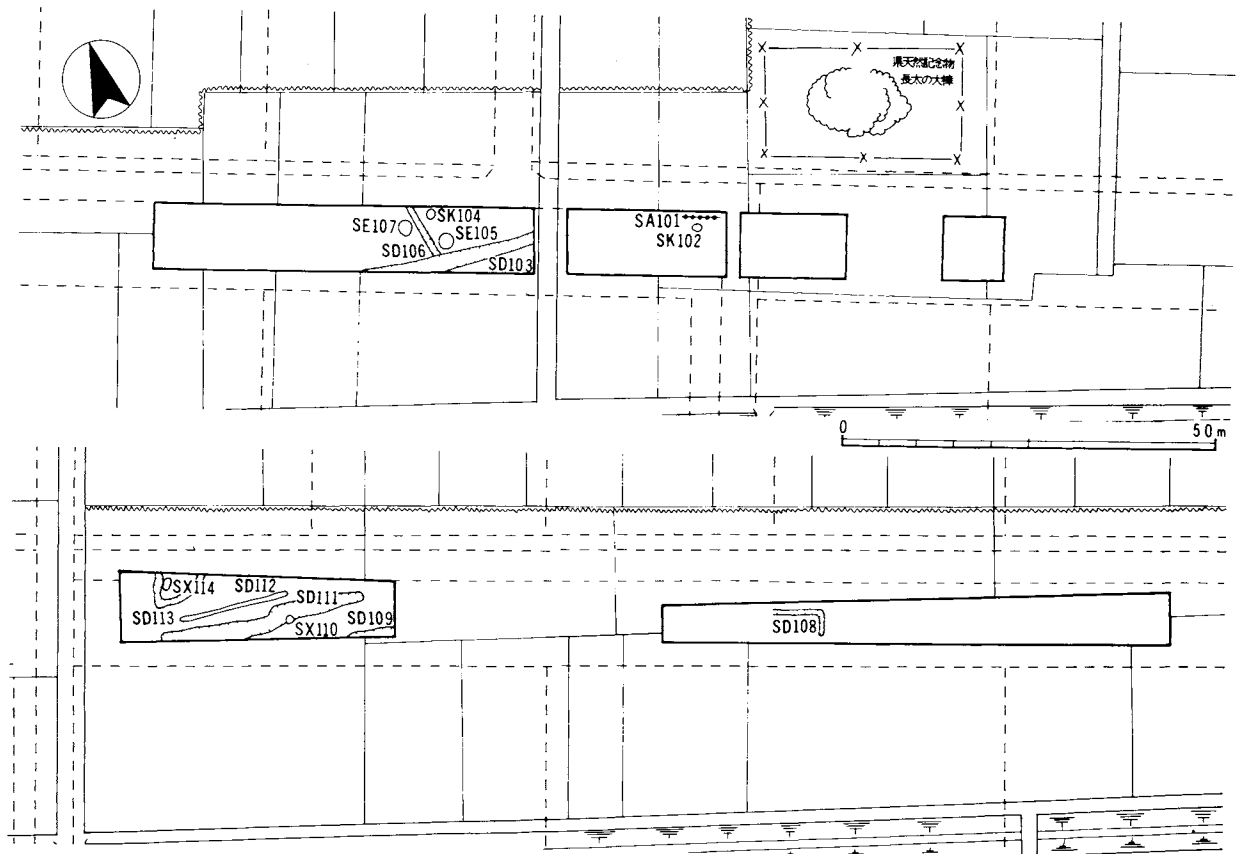
発掘区の各所で8条が検出されている。ほぼ南北流する溝址がほとんどであるが、S D 223は東西に流れる。幅も1m未満のものもあれば、3mと幅広い溝址もある。その中で、S D 202・209・217はほぼ40m間隔で平行に流れる。ただ、一町、半町という単位にはのらない。

(3) 井 戸

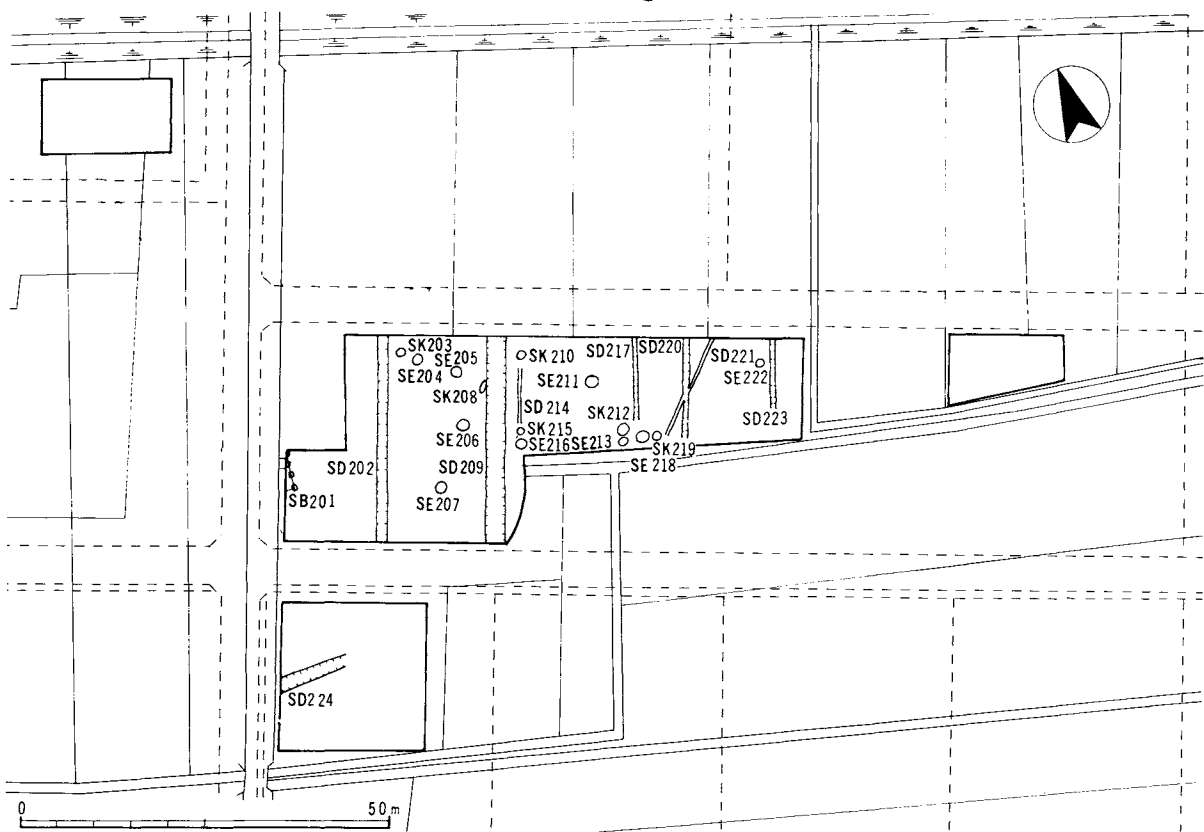
中央の発掘区で8基が検出された。幹線排水路に比べて遺構の遺存度が良好で、多くの井戸内から曲物などの木製品が出土した。素掘りのもの、曲物を置いたもの、側板を円形にならべたものと、各種のものがある。又、S E 205の周囲で多数のピットが検出されたが、覆い屋根であった可能性がある。

(4) 土 壇

中央の発掘区各所で7基検出された。S K 208からは弥生前期の壺、甕が出土した。S K 210からは近世以降の大甕が出土した。他の5基からは、山茶碗、常滑片が若干出土しており、鎌倉時代後半～室町時代のものと思われる。又、S K 215から五輪塔の火輪1、水輪3、地輪1、河原石数個が出土した。底部から若干の炭化物が出土しており、墓を壊して整理した可能性もある。骨片や、副葬品はない。



第3図 遺構配置図1 (幹線排水路1:1000 太線:発掘区、細線:現況、破線:計画)



第4図 遺構配置図2 (A地区 1:1000 太線:発掘区、細線:現況、破線:計画)

3. B 地区

B地区は自然堤防のほぼ中央にあり、A地区より西方約300mにあたる。当地区も現況や計画の農道により、発掘区は4箇所に分散された。遺構は約1,500㎡の範囲から検出された。遺構の検出状況から、このB地区とA地区とのよく畑地が残っている個所が遺跡の中心地の一つと考えられる。

検出された遺構には、平安時代後半の土壇1基、鎌倉時代後半～室町時代の掘立柱建物1棟、溝6条、井戸6基と多数のピットがある。

(1) 掘立柱建物

北の発掘区で検出されたSB314が1棟ある。柱穴が発掘区多へのびていたので、部分的に拡張して規模は2間×3間と確認した。A地区で検出されたSB201とは柱穴の掘り方も棟方向も違う。径40cm前後の掘り方で、柱間はほぼ1.8m、棟方向はほぼ東西棟である。

(2) 溝

発掘区の各所で検出されているが、ほぼ東西に流れるものと、南北に流れるものがある。発掘面積が限られているので、全体が格子の様にまとまるかは不明である。全体に遺物の出土量は少量であったが、SD307・308からは多量の山茶碗、山皿、土師器(皿、鍋、羽釜)が出土した。完形品も多い。

(3) 井戸

発掘区の各所で6基検出された。A地区と比較して深く、井戸内の遺存度も良好である。南部の発掘区で検出されたSE301は、井側として横板、縦板がよく残り、井筒として径40cm前後の曲物が4段に組まれていた。井筒よりも上層で常滑焼、漆器碗、河原石等が出土した。井筒内底部からは山茶碗、土師器皿が出土している。北部の調査区で近在してSE310・311・312と3基検出されたが、中でもSE312は隅丸方形の掘り方の中に径47.5～54cmという大きな曲物が井筒として3段に組まれていた。縦板、添え板と思われる板材も若干出土している。

(4) 土壇

中央の発掘区でSK303が検出された。遺構内から灰釉陶器(碗・皿)が出土した。この発掘区では緑釉陶器片が多量に出土しており、同時期の唯一の遺構である。

4. C 地区

C地区は、今回調査を実施した最も西部にあたる発掘区である。この地区は、周知の上箕田北遺跡と近在しており、関連遺構の検出が予想された。C地区の発掘区もこれまでと同様に、農道によって4箇所に分散された。今回の発掘区では最大規模にあたる約4,200㎡から遺構が検出された。

検出された遺構には、弥生時代後半から古墳時代の溝5条、土壇1基、鎌倉時代後半から室町時代の掘立柱建物3棟、井戸1基、時期不明の溝群1の他多数のピットがある。遺構は発掘区の各所で検出されているが、ピットは北東の発掘区中央、北西の発掘区南寄り、南西の発掘区東寄り、3箇所で集中して検出された。その中で掘立柱建物の柱穴のように整然と並ぶピットは3棟分であった。

(1) 掘立柱建物

北西の発掘区で3棟検出された。SB407は、梁行2間、桁行5間の規模が判明したが、他の2棟については柱穴が欠落しており不明である。柱間はほぼ1.8m(6尺)で、B地区で検出されたSB314と同じである。棟方向もほぼ東西棟を示し、同じ時期の建物であろう。

(2) 溝

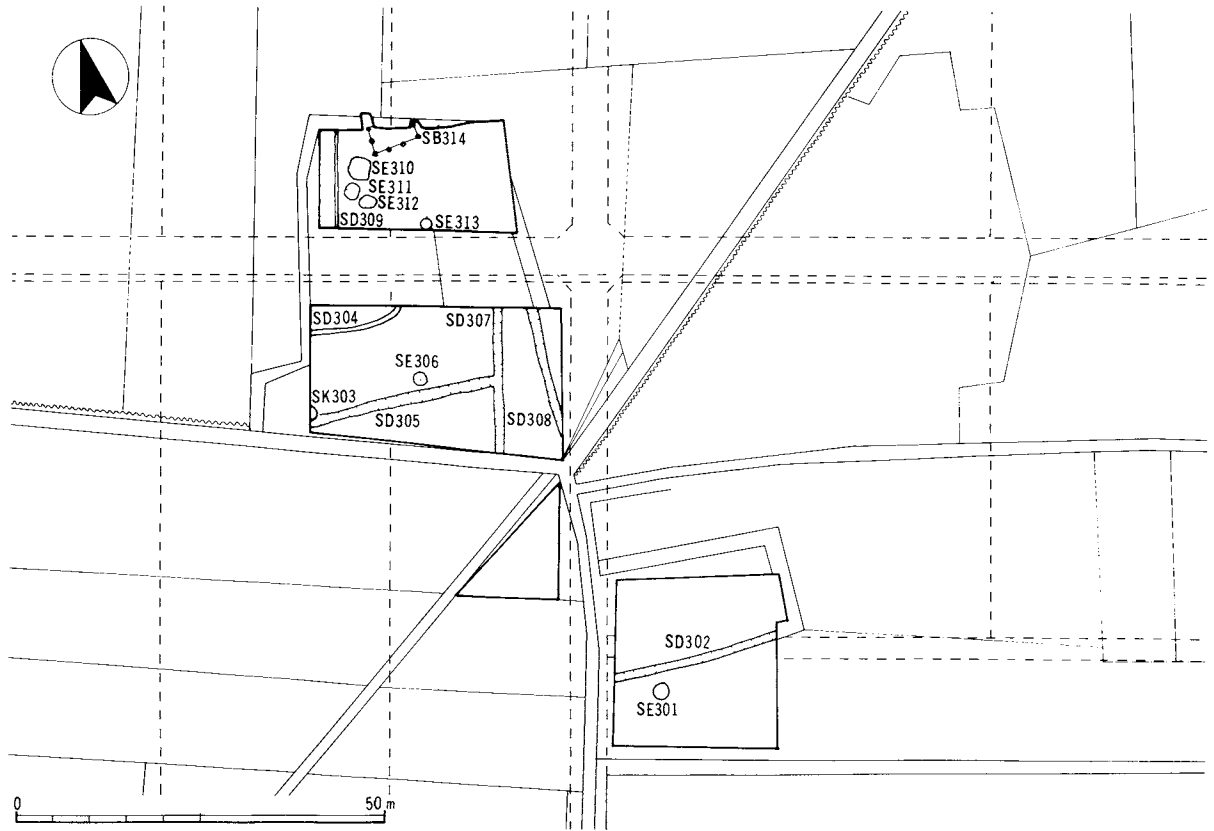
発掘区の各所で5条と、多数条の1群が検出された。南西の発掘区で検出されたSD405は、幅3mもある大きな溝址で、遺物も多量に出土した。南西から北東へ流れる。数次にわたって流水、溜水をくりかえしたのであろうか、下層において数層の細砂層と粘質土層を確認した。又、底部中央で数本の杭列も検出された。出土遺物は、弥生後期～古墳時代の土器片がほとんどで、他にあみ棒状竹製品、土錘、摺り石等が出土している。

(3) 井戸

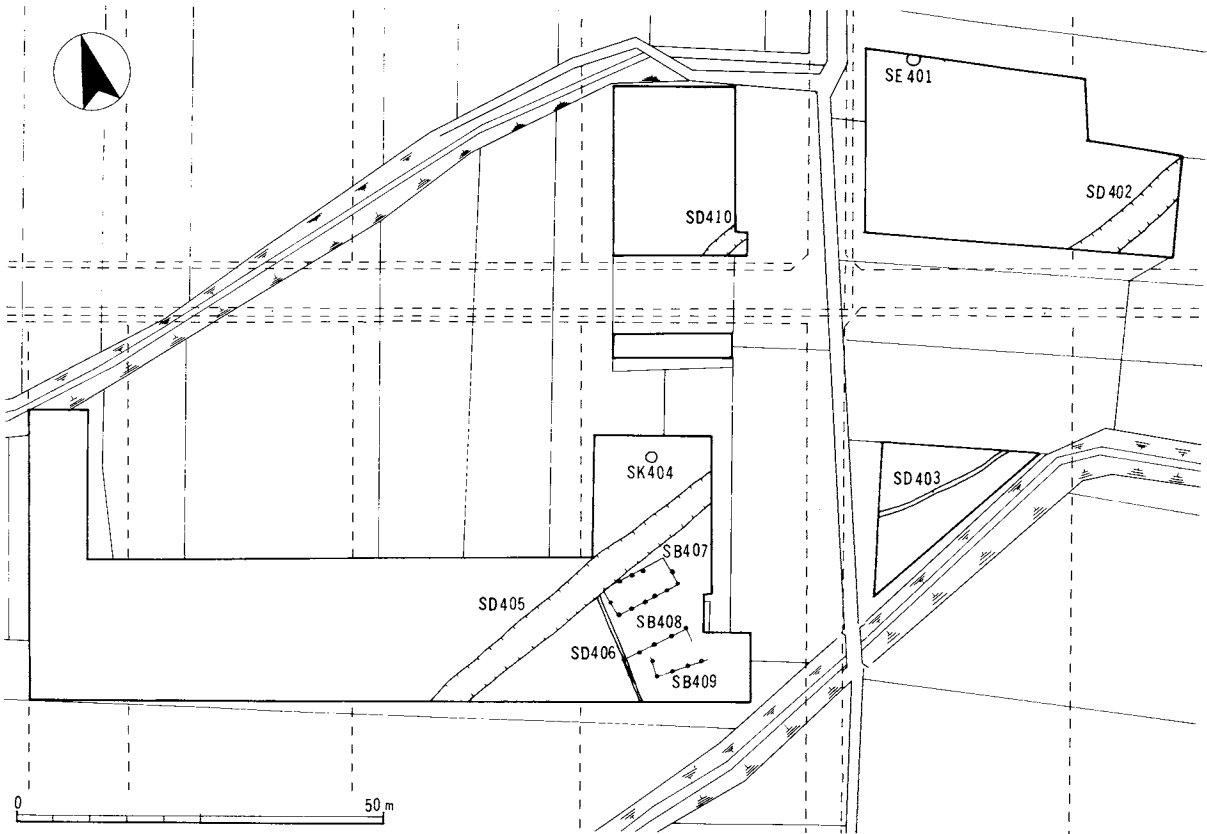
北東の発掘区でSE4011基が検出された。A地区で検出されたSE211と同じように一木のくりぬき材が井筒として使用されている。遺存度が良好で、径47cm、高さ37～46cm、厚さ1.2cm。

(4) 土壇

南西の発掘区東部拡張区で検出されたSK404が1基ある。弥生後期末～古墳時代初頭の土器片が出土している。焼土はない。



第5図 遺構配置図3 (B地区 1:1000 太線：発掘区、細線：現況、破線：計画)



第6図 遺構配置図4 (C地区 1:1000 太線：発掘区、細線：現況、破線：計画)

2. 遺物

1. 幹線排水路部分

今回の発掘箇所の中で一番出土遺物が少なく、土納袋で12袋分であった。発掘面積が約1,600㎡もあったにしては少量であるが、これは遺構検出の状況から、本地区が遺跡の北東のはずれということが判明しており首肯ける。

出土した遺物には、弥生時代前期の壺、甕、後期の壺、甕、高杯、古墳時代前期の土師器、後期の須恵器、灰釉陶器（耳皿）、山茶碗、山皿、土師器鍋、羽釜、皿、天目茶碗、入子、常滑焼甕、近世陶器などである。他には土錘、寛永通宝・文久永宝などの貨銭がある。木製品、鉄製品は出土していない。

出土量が少なかった中でも、やはり鎌倉時代～室町時代の日用雑器である山茶碗が多数を占める。須恵器は古墳時代末期の杯身等が出土しているが、奈良・平安時代のものはない。量的には微々たるものである。

2. A 地区

出納袋で約40袋分出土した。各遺構からの出土は微量で、ほとんどが包含層からの出土である。中央の発掘区西寄りでも出土したものが多い。

出土した遺物には、弥生時代前期壺、甕、後期壺、高杯、古墳時代前期土師器、後期須恵器、山茶碗、山皿、土師器鍋、羽釜、皿、常滑焼甕、古瀬戸碗、皿、おろし目皿など土器がほとんどである。他には石斧、砥石などの石製品、土錘といった土製品、形状不明の鉄製品、井戸側板、曲物などの木製品がある。又、S K215から五輪塔の火輪、水輪、地輪も出土している。

幹線排水路部分の出土遺物と比較してみると、須恵器が古くなり増加したこと、山茶碗、山皿等が増加したこと、ほとんどの井戸内から側板や曲物など木製品が出土したことなどが相違点としてあげられる。

3. B 地区

出土した遺物は、土納袋で約30袋分である。その

ほとんどが山茶碗、山皿で、数百個体分にもほれる。完形品も多い。それに伴う鉢、土師器皿、鍋など鎌倉時代後半～室町時代の土器が90%以上を占める。他に弥生土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、近世陶器などがある。石製品は全くなく、土錘、形状不明鉄製品、漆器碗、曲物など木製品もある。

弥生土器には、前期壺・甕、後期の高杯などがある。いずれも遺構に伴わないが、最下層から出土している。完形に近い壺もある。

須恵器は徐々に増加してきた。杯蓋・身・高杯などがある。6世紀前半のものが多い。

灰釉陶器は、碗・皿・段皿などが出土している。灰釉は内面にとどまらず外面まで施される。

緑釉陶器は、中央の発掘区という限られた範囲で38片出土した。胎土は土師質で、淡黄緑色を呈するものが多い。碗・皿がある。削り出し高台のものはない。

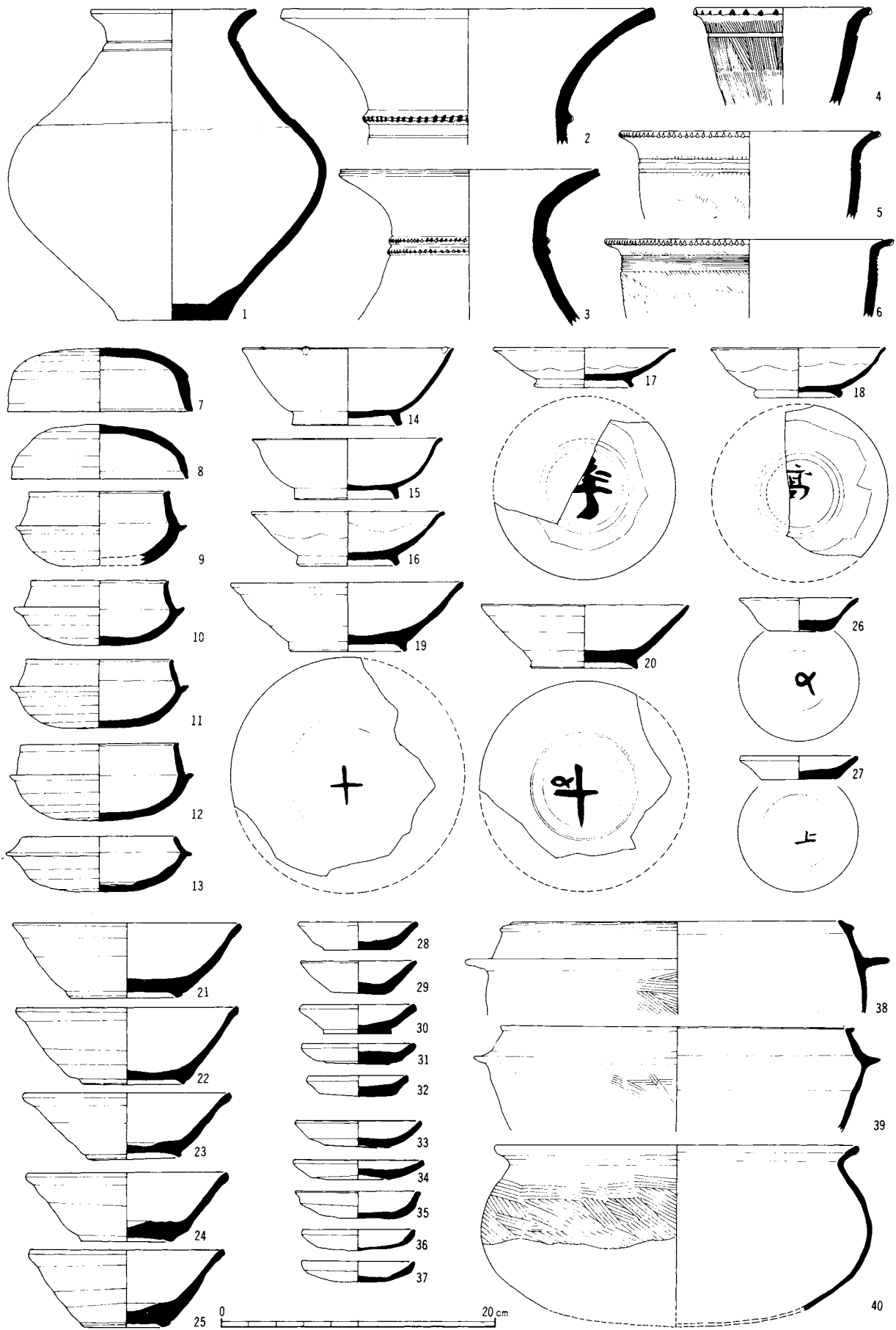
山茶碗、山皿は、高台をもつが雑なつくりであったり、高台をもたないものが多い。底部に墨書を施したものも多い。

漆器碗は、S E301から出土したものである。黒地赤漆のもので花柄である。底部を中心に1個体分が出土した。

4. C 地区

土納袋で約150袋分出土している。今回調査した発掘区の中では、その総出土量の過半数以上を占めるほどの大量出土である。その中でもS D405から出土した弥生後期～古墳時代前期の土器が多数を占める。完形品はなく、ほとんどが細片であった。

出土した遺物には、弥生後期壺・高杯・台付鉢、古墳時代前期の土師器壺・台付甕・高杯、古墳時代後期の須恵器杯蓋・身・高杯、平安時代後半の緑釉陶器（約20片）などがある。他に土錘、石包丁、砥石、摺り石、あみ棒状竹製品などがある。山茶碗、山皿、土師器鍋、羽釜などこれまでに多量に出土している鎌倉時代後半～室町時代の日用雑器は微量であった。



弥生土器(1~6)、須恵器(7~13)、緑釉陶器(14・15)、灰釉陶器(16~18)、山茶碗(19~25)、山皿(26~32)、土師器(33~40)

第7図 遺物実測図(1:4)

幹線排水路部分	38.40
A 地区	2.3.4.5.6.39
B 地区	1.8.13.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37
C 地区	7.9.10.11.12.14.15.16.17.18

第5表 地区別出土遺物対照表

3. 小 結

大木ノ輪遺跡は、鈴鹿市林崎町から南長太町にかけて残る自然堤防上に所在する遺跡である。その範囲は、約50,000㎡にもおよぶという大規模な遺跡であることが、試掘調査及び今回の本調査で判明した。

又、発掘調査の結果からいふならば、中世を中心としているが、弥生時代前期から継続しながらも長きにわたって自然堤防上が生活の場として利用されてきたことがわかった。今回の発掘調査範囲は、約9,500㎡と全体の約五分の一で、遺跡の全容を明らかにすることはできないが、この地域の歴史的背景を把握する糸口になる遺構、遺物が検出できた。残り約40,000㎡余という大木ノ輪遺跡の大部分は、関係各位の協力により今後も地下に眠り続けることになった。

この報告は、昭和54年度調査約9,500㎡の範囲で検出された遺構、遺物の概要を記述したものである。ここでは二、三の問題点を記述して小結としたい。

遺構では、18基にのぼる井戸の検出があげられる。各発掘区で検出されたが、特に遺跡の中心地に近いと思われるA・B両地区では、A地区で東西60m、南北30m、B地区で東西50m、南北70mという狭い範囲に集中して井戸が検出された。検出状況から掘立柱建物などの住居群からやや離れた箇所には井戸を掘りぬいたと思われる。地下水位が高いため、0.5～1.0mの深さで湧き水が得られ、井戸の深さは浅く、

井戸内の側板、曲物等の木製品の遺存度が良好であった。時期的には、主たる出土遺物である山茶碗から鎌倉時代後半～室町時代の頃とみてよいであろう。その使用時期にさほど差はなく、設置・廃棄をくりかえした結果、このように集中して検出されたのではないだろうか。例えば、B地区北部の発掘区で検出されたSE309・310・311は、3基隣りあわせて検出された。SE309は掘りかけ、SE310とSE311は同じくらいの深さで、湧き水も同じような状態であるのに、SE310には曲物がなく、SE311には3段に組まれた曲物が残り、遺物も出土したという例がある。

出土遺物の特徴としては、緑釉陶器の多量な出土があげられよう。県下で32番目の出土地となった。約70片という数は、多気郡明和町に所在する国史跡齋宮跡（千数百点）、伊勢市磯町小御堂前遺跡（約130点）、度会郡御園村高向遺跡（75点）に次いで4番目に多い出土遺跡となった。大木ノ輪遺跡の近くでは上箕田遺跡でも9点出土しているが、その他の遺跡では数片の出土にとどまっている。緑釉陶器はB地区、C地区で出土したが、平安時代後半における大木ノ輪遺跡の歴史的背景を考える上で好資料といえよう。両地区とも面積の限られた発掘調査で、建築遺構は検出されなかった。（早川裕己）

III 一志郡嬉野町 てんげいじ 天華寺廃寺

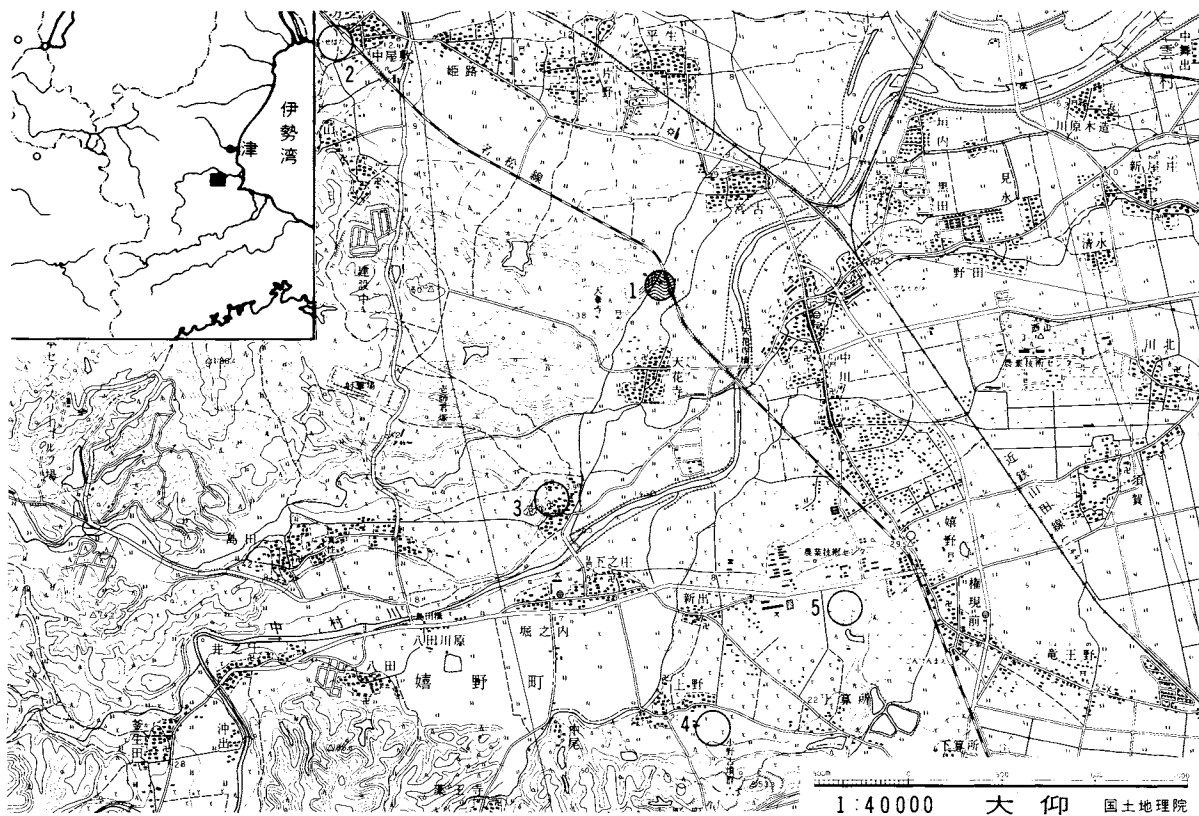
一志郡嬉野町大字天花寺字堀田所在の天華寺廃寺跡は、白鳳期の瓦と「菱形の塼仏」の出土した寺院跡としてよく知られてきた。しかし現地は水田で基壇跡は見られず、ただ瓦の散布範囲からその所在が推測されるにとどまっていた。

今回の調査は、昭和55年度に実施が予定される県営圃場整備事業に先立って建築遺構と寺域を確認するための第一次調査として実施したものである。

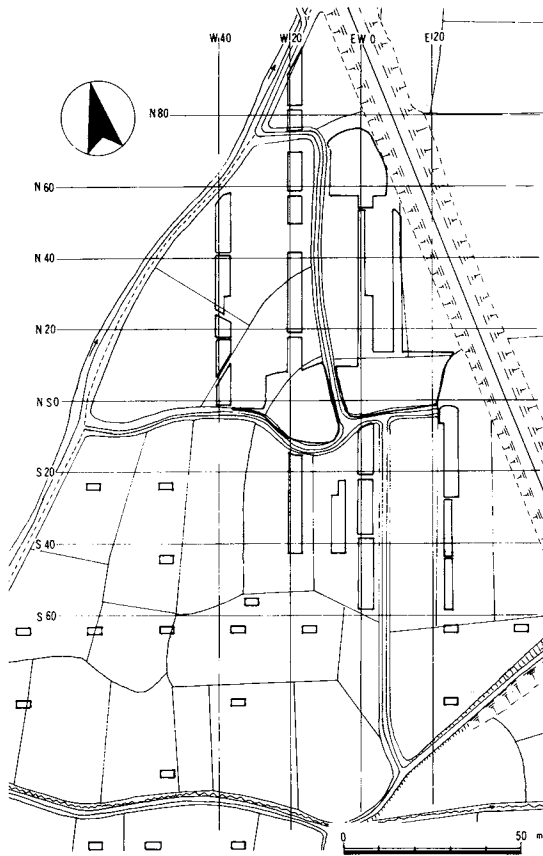
調査を着手するにあたっては、まず地籍図による水田地割の検討と、これまでの水田の床抜き作業等によって瓦片の多量に出土した地点、あるいは礎石等の掘り出された場所等の聞き取りを地元天花寺地区において行なった。その結果、319番地にあたる通称「薬師の田」には戦前も大正期において、当時の子ども達が登り降りできる大型の石が露出し、それらもいつの頃から抜き取られ、どこかへ持ち運ばれたことも確認することができた。

また、嘉永4年(1851)に編さんされた『勢国見聞集』には、「古跡之部」の「天華寺ノ跡」の項に「今に塔の沓石壱柱の沓石数十残り有之。」とあり「名石之部」の1項に、「塔ノ心柱ノ沓石・伽藍ノ柱ノ沓石 数十天花寺村諸堂並塔の跡、其礎石居へ有之。此所を本薬師と云。」と記されている。このように少なくとも江戸期には礎石と塔心礎の露出していたことがわかる。

したがってこのような「薬師の田」を塔跡に比定することができるのであるが、瓦散布地全域の遺構・遺物の埋没状況を把握し、つぎに実施される圃場整備事業との整合をはかるための資料作成も必要であった。そのため、東西に20m間隔をとり、幅4mから2mのトレンチを南北方向に設定して調査した。また、瓦散布地の南側において一段低くなった水田部分については、20m毎に幅2m、長さ4mの試掘坑を設定して、遺構・遺物の埋没状況を明らかにし



第8図 遺跡位置図 1：天華寺廃寺、2：斑光寺、3：東福寺、4：円光寺、5：嬉野廃寺



第9図 発掘区平面図（1：2000）

た。

東西に20m間隔をとって設定したトレンチの中央のものからは、基壇の掘り込み地形が検出されたため、その部分については発掘区を拡張して基壇規模を明らかにした。また、トレンチの北端部では掘立柱建物跡の一部が検出されたので、この部分についても発掘区を拡張して全体の形状を明らかにした。

調査は昭和55年1月16日から始め、同年3月28日におえた。調査をすすめるにあたっては嬉野西部土地改良区の各位をはじめ地元関係者の協力を得た。また、調査中においては奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部森郁夫氏のご指導をうけることができた。それぞれ記して謝意を表するものである。

また、3月15日には寺院跡発掘調査結果の現地説明会を三重の文化財と自然を守る会及び三重郷土会の協賛を得て行ない、多数の参加者があった。

なお調査は、文化課文化財係主査小玉道明をはじめ、昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者研修に加わった御村精治(小俣町立小俣中学校教諭)、榎本義讓(松阪市立第四小学校教諭)及び垣見博一(県立白子高校教諭)があたった。

1. 位置・地形

天華寺廃寺は近鉄中川駅の西方1km余の沖積地にある。寺域の東部は国鉄名松線が横断し、西側は比高30mの天花寺台地の麓に接している。また東方約400mには島田川が北流し、雲出川に合流している。

遺跡は標高11m前後の自然堤防上にあつて、南側にある現在の天花寺集落との間と東側の島田川沿いは、広い低地もあり旧河床を思わせるものがある。したがって、寺院が立地する場所は周囲から見れば現在で1.5m前後高い地形でもある。

天華寺廃寺は、旧伊勢国一志郡に属するが、同郡下には古代寺院が多数分布する。すなわち、天華寺の南西約1.4kmには、川原寺式の瓦や塼仏を出土した東福寺がある。一方、南約2kmには鈴鹿市川原井瓦窯出土例と同型式の軒丸瓦等を出土した円光寺、南南東約1.5kmには嬉野廃寺、北西約2kmには斑光寺があり、これらからは天華寺と同様に、外区に複線鋸

歯文を配した軒丸瓦が出土している。また、斑光寺からは藤原宮式や山田寺式の瓦も出土している。山田寺式は、北西約4.5kmの浄泉寺にもあり、同寺では紀寺式も知られている。さらに、西方約10kmの大角廃寺からは、重圏文軒丸瓦も出土している^①。

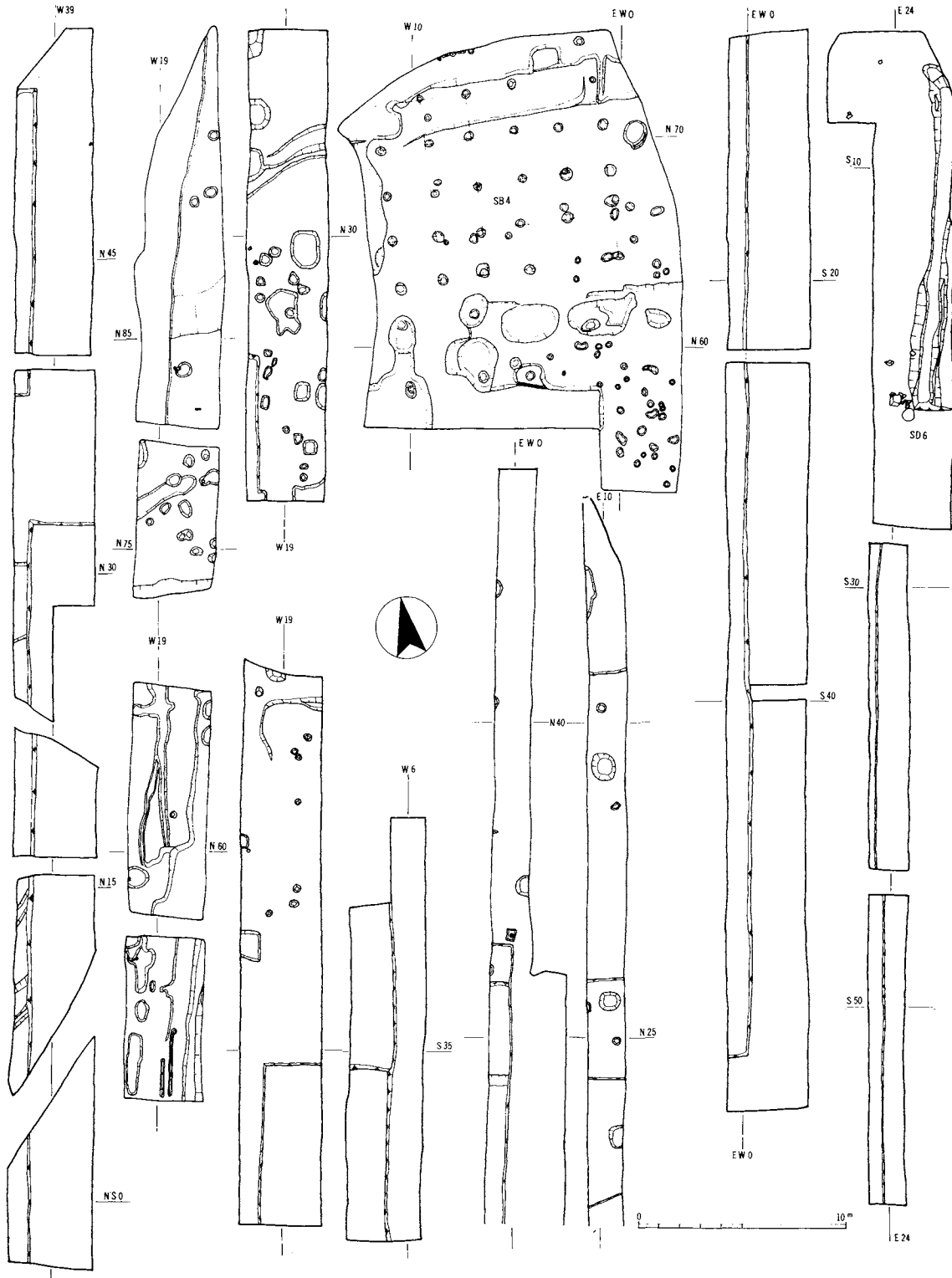
天華寺周辺では、これまでかなりの瓦片の出土が伝えられている。南側約200mの天花寺集落寄りの一段高い畑地からは多数の瓦片が出土したが全て処分されているし、また北東約300mにおける県営圃場整備事業の幹線排水路部分の事前調査においても瓦片等の寺院関係の遺物が出土している^②。

一方、遺構の検出される地山面は標高10m前後であるが平坦ではなく、小規模な起伏がかなりある。そうした状況のなかで、塔・金堂の場所は高く、それらの北と南は凹んでいる。塔の南側のもっとも深い所では現地表下1.5mにも至っている。

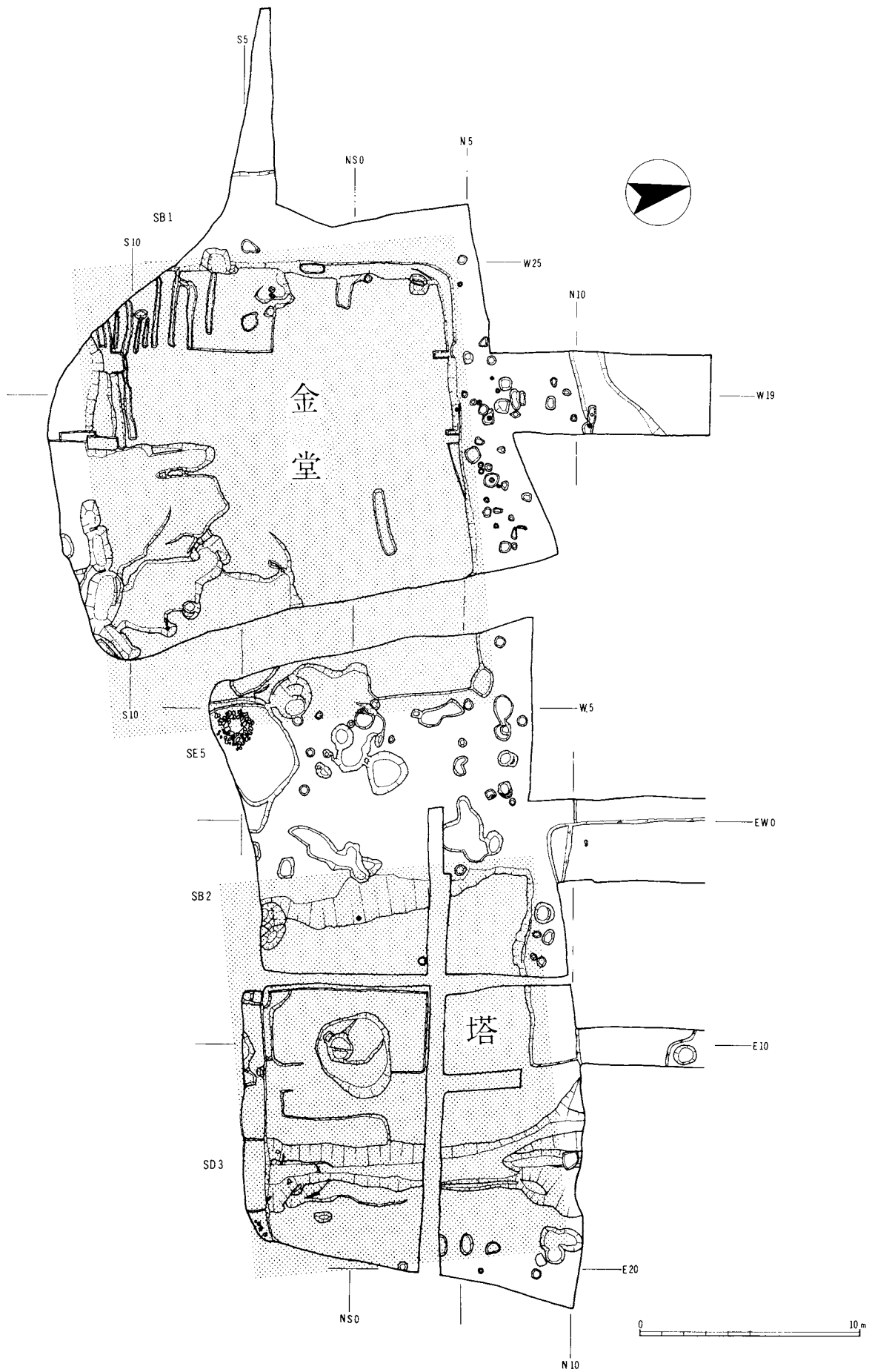
2. 遺 構

検出された遺構には、東に塔、西に金堂を配置した伽藍形式の寺院建築遺構と寺院廃絶後の鎌倉時代

のものと思われる掘立柱建物・溝、さらには江戸時代に埋没した石組井戸などがある。



第10図 遺構平面図（1：300）



第11图 塔·金堂平面图 (1:250)

A. 寺院の建築遺構

1. 塔 (SB1)

東西約15.5m、南北約15mの掘り込み地形として認められたものである。水田床土直下にあつて、基壇面はかなり削平され、礎石はもとよりその根固めもみとめられず、また基壇化粧も全く残っていない。掘り込み地形は、基壇の東部を南北に掘り抜いた鎌倉期の溝SD3の掘り方に版築がよく認められた。

地形の掘り方は、西辺と北辺の一部ではよく検出されたが東辺は不明である。一方、南辺は現在の農道と用水路に重複して確認されなかったが、それらの南側においては検出されず、農道あるいは用水路下にとどまるものと思われる。

残存している基壇の南西寄りには、径約3.9m×3.3m、深さ約1mの心礎の抜き取り穴がある。このことは掘り込み地形の範囲そのものが塔基壇の規模を示すものではなく、基壇は版築の裾部を削除して築成したものと考えられる。塔と金堂の位置関係は金堂の南北中央線から東に約25mに塔心礎が位置する。したがって、塔基壇南面は金堂よりも約4m北になる。

基壇の周辺は、鎌倉期及び江戸期の再堆積あるいは攪乱をうけた瓦堆積に覆われ、さらには古墳時代前期の遺物包含層及び大小の土壇と重複していた。基壇中には瓦片・土師器片が少数混入していた。東部の鎌倉期の溝SD3の埋土中には、礎石の移動によると思われる大型の石材が2個転落していた。

2. 金堂 (SB2)

塔の西側にある東西約20m、南北17.5mの掘り込み地形による基壇跡である。塔跡と同様に基壇上面は削平され、礎石及び根固めも検出されなかった。とくに南辺は瓦堆積の江戸期の攪乱、井戸址SE5等によって著しく改変されていた。また東辺においても塔基壇との瓦の堆積があり、それにつづく鎌倉期の遺物包含層との重複により、掘り込み地形の掘り込み線がかなり削平されていた。

一方、西辺と北辺では掘り込み地形の掘り方は明瞭ではなかった。また北辺の外側には大小の柱穴状のものが検出された。

B. 寺院廃絶後の遺構

1. 掘立柱建物 (SB4)

桁行5間(10.5m)、梁行4間(8.4m)の総柱の東西棟である。柱間は2.1m前後であるが、柱通りはやや悪い。柱穴掘り方は径0.5m、深さ0.5m前後の円形に近いもので、そのうちのいくつかから鎌倉時代の山茶碗が出土していて、この建物の時期を推測させる。

建物跡は地上面より30cm前後高い土壇状のものの上にある。この土壇状のたかまりは東西14m以上、南北約11mのもので、北辺と西辺は瓦の堆積した溝状のもので区画されている。南側には大小の土壇が数基あり、山茶碗・山皿・土師器皿等とともに瓦片も混在していた。また土壇中には瓦片、土師器片が多数含まれていて、少なくとも奈良時代以降の遺物包含層の上に築成されたものであることがわかる。

2. 井戸 (SE5)

金堂の南東隅に掘り込まれた石組みの井戸である。東西約5m、南北3m以上の大型の掘り方によるが、井戸はその中央につくられず、北西隅にかたよっている。石組みの上方部分では石と石との間を瓦片でつめている。内径は0.55mで、深さは底部まで掘り下げていないので明らかでない。

井戸内からは、内径75cm、厚さ16cm、幅9cmの石製井戸枠がいくつか割れて出土している。使用時には最上部に置かれていたものであろう。

この井戸は、金堂と塔の間を埋めつくした瓦の堆積中から検出され、しかも近世の染付茶碗の巴文瓦・一石五輪塔、石臼が井戸内から出土し、江戸期に廃絶したものと思われる。

3. 溝

SD3 塔の基壇東辺を南北に掘りぬいた大溝である。中央では幅1.5m、深さ0.8mを測るが、その両端では幅4.5mに広がっている。溝内には多量の瓦片とともに、かなりの量の山茶碗及び土師器の鍋・皿片が埋まっていた。溝の底は両端が深く、中央では浅い。

SD6 塔の南東約10mにおいて南北につづくものである。幅1.5m前後、深さは0.7m前後で、底面は北に高く南に低くなっている。

溝内には多量の瓦片とともに、山茶碗・山皿・土師器片等が埋まっていた。

3. 遺 物

A. 瓦 埴 類

創建期以降の各時代に及ぶ瓦が出土したが、形態によって次のとおり分類した。すなわち、丸瓦をM、平瓦をH、その外の道具瓦等をEとした。

丸瓦(M)の内、単なる丸瓦を0とし、軒丸瓦はその文様構成によって、単弁重弁の類を1、外区に珠文の無い複弁重弁の類を2、外区に珠文の有る複弁重弁の類を3、重圏文の類を4とした。

平瓦(H)は、単なる平瓦を0、軒平瓦はその文様構成によって、重弧文の類を1、扁行唐草文の類を2、均正唐草文の類を3とした。

その他(E)の瓦は、熨斗瓦を1、面戸瓦を2、鬼瓦を3とした。

以上の分類を例示すれば次のとおりである。

丸瓦(M)

- 0 = 単なる丸瓦
- 1 = 軒丸瓦(単弁重弁)
- 2 = 軒丸瓦(外区に珠文のない複弁重弁)
- 3 = 軒丸瓦(藤原宮式)
- 4 = 軒丸瓦(重圏文)

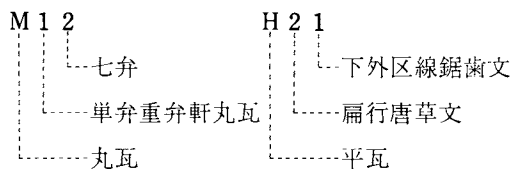
平瓦(H)

- 0 = 単なる平瓦
- 1 = 軒平瓦(重弧文)
- 2 = 軒平瓦(扁行唐草文)
- 3 = 軒平瓦(均正唐草文)

その他(E)

- 1 = 熨斗瓦
- 2 = 面戸瓦
- 3 = 鬼瓦

具体例



以上の大別に基づく各々の細別は、上記の大別番号に続けて、範の相異に基づく文様のわずかな差をアルファベットの大文字で、同範での違いは小文字で表示する。

しかしながら、瓦だけでも出土総量は土ノウ袋にして約2,000袋に及び、その詳細な観察は今後に期するより外ない。したがって当報告では文様瓦の代表例を示すに過ぎない。

(1) 丸 瓦

丸瓦は玉縁が付く例が多いが、行基葺きの例も多い。軒丸瓦も次のように分類した。

M11 単弁重弁八葉蓮華文軒丸瓦である。図示した例は、蓮子が1+8+8と配され、各子葉は輪郭線で区画されている。外区には珠文や鋸歯文がなく、周縁の内半分はまだ範の痕跡が及んでいる。青灰色を呈する硬い焼きあがりで、小石を多く含んでいる。

M12 単弁重弁七葉蓮華文軒丸瓦である。図示した例は、中房がやや大きく、竹管文を施した蓮子が1+4+8と配され、蓮弁はやや短く、子葉の幅が広い。外区には複線鋸歯文を配す。暗灰色を呈し、焼成は良好である。

M13 単弁重弁六葉蓮華文軒丸瓦である。図示した例は、やや大きい中房に1+6の蓮子を配し、子葉は先端が凹んでいる。各蓮弁は界線状のもので接続するが、間弁はこれに接することはない。外区にはやや密に輻線文を配す。暗灰色で焼成は良い。

M21 いわゆる川原式に属する複弁重弁八葉蓮華文軒丸瓦である。完形例はないが、蓮子は3重に回るらしい。蓮弁はやや小さく、外区には、線鋸歯文を配す。

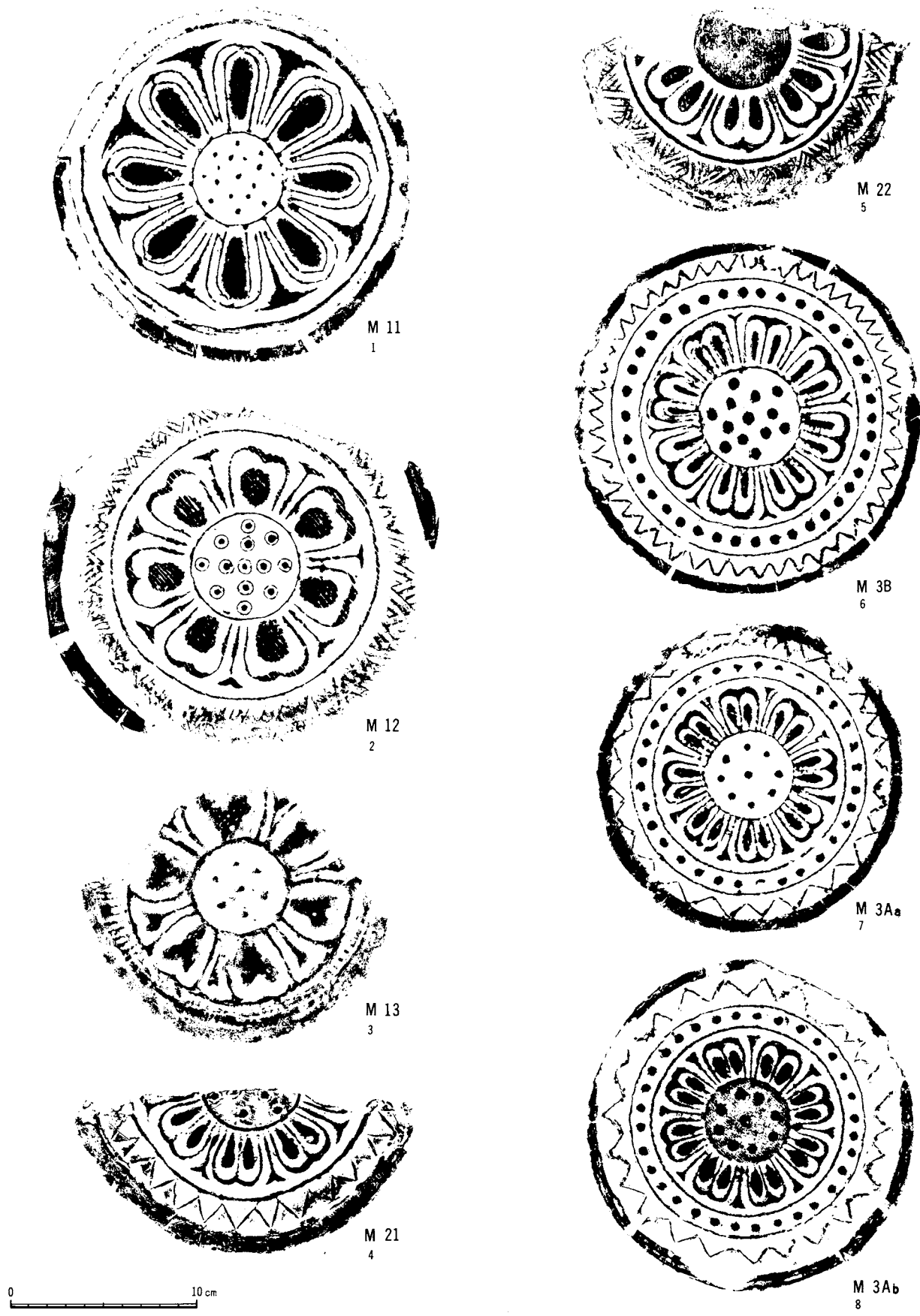
M22 複弁重弁七葉蓮華文軒丸瓦である。中房の周縁に凸線が巡らず、蓮子は磨耗によって観察し難い。外区には複線鋸歯文を配す。

M3 Aa いわゆる藤原宮式だが、同範例は未確認である。中房は窪み、蓮子は1+8であり、外区内縁の珠文は32である。やや小型で、緑灰色を呈す。

M3 Ab 同範のAaとは異なり、中房が突面を成している。これは、範を使用途中に中房のみ彫り窪めたものである。

M3 B 複弁重弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、いわゆる藤原宮式に属すが、藤原宮等にその同範例は認められない。蓮子は1+6+6であり、蓮弁はやや長い。外区内縁の珠文は密に配され、図示した例の珠文は39を数える。外区外縁には線鋸歯文を配す。やや大型であり、緑灰色を呈す。

M41 重圏文軒丸瓦である。本例は表面採集品で



第12図 屋瓦類拓影 1 (1 : 3)

はあるが、天華寺出土には間違いない。三重に圏線が巡り、茶黄色を呈す。

(2) 平瓦

平瓦は、凹面に布目を残し、凸面に格子叩き目や縄叩き目を残す。しかし、叩き目と瓦当文様との関係は未検討である。

H11 3本の弧線を持つ重弧文軒平瓦である。深頸であり、青灰色の硬い焼成品である。

H12 4本の弧線を持つ重弧文軒平瓦である。やはり深頸で、青灰色の硬い焼成品である。

H21B 扁行唐草文軒平瓦である。内区の唐草文はやや間延びし、支葉の先端は強く巻き込む。脇区と下外区に鋸歯文を配すが、上外区には珠文を配す。無頸のものが多いが孤頸の例も見られる。これらは緑灰色を呈し、いわゆる藤原宮式に属す。この種の軒平瓦には凹面に「南万中」と窺書きした隅切瓦例(13)もある。

H22 扁行唐草文軒平瓦と思われる。H21と基本的には同じであるが、唐草文が若干異なる。無頸であり、灰黄色を呈す。

H23 扁行唐草文軒平瓦と思われるが、文様は非常にくずれている。内区には、唐草文の主茎は無く、支葉が各々独立して並ぶ。この支葉は、先端の巻き込む部分が変化して、大きな円形突起を成す。このため、個々の支葉はあたかも巴文のような形状を呈す。内区は狭く、太い界線によって区画されている。

上外区は無文であり、上外区には線鋸歯文を配す。やはり無頸であり、凸面には縄叩き目を残す。茶黄色を呈し、胎土中には小石が目立つ。

H31 均正唐草文軒平瓦である。花頭形中心飾りはなく、支葉状の短線だけで構成された中心飾りである。主茎は3回反転し、第2支葉まで配す。外区や脇区には疎らに珠文を巡らし、外区と脇区を画する界線は無いようである。完形品はなく、個体数も多くない。無頸であり、茶黄色を呈す。

(3) その他

鬼面文鬼瓦や、面戸瓦等の道具瓦のほか、埴も認められた。埴は厚さが約10cmである。

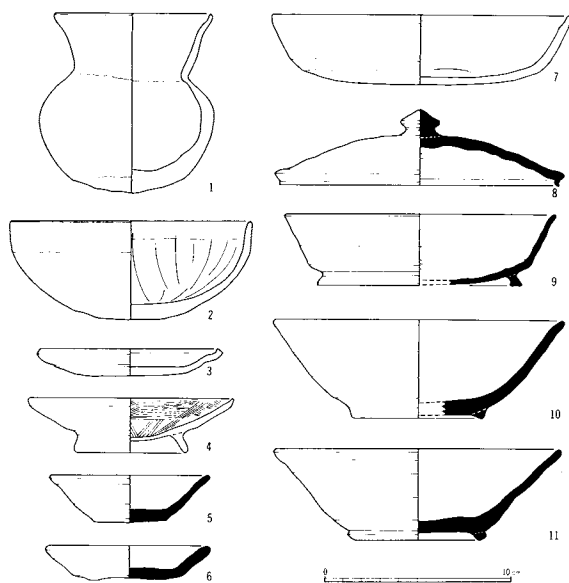
2. 埴 仏

埴仏A 天華寺廃寺出土の「菱形埴仏」として従来から知られていたものである。今回の調査では破片44点が出土し、それらの図上復元により縦長の六角形のものであることが明らかになった。

復元長は約24.5cm、幅約13cmである。少量の破片には、表面に黒漆が残る。他の種類の埴仏とともに大部分が金堂の南と東側の瓦堆積層から出土した。

埴仏B 長方形の独尊仏である。円形光背の上部左右に焼成前の小孔が穿たれている。幅は7.5cmである。1点だけが出土している。

埴仏C 三尊仏であるが小片のために、左脇侍の上半部と右脇侍の下半部が知り得るのみである。黒漆が全面に施されている。



第13図 土器実測図(1:4)

B. 土 器

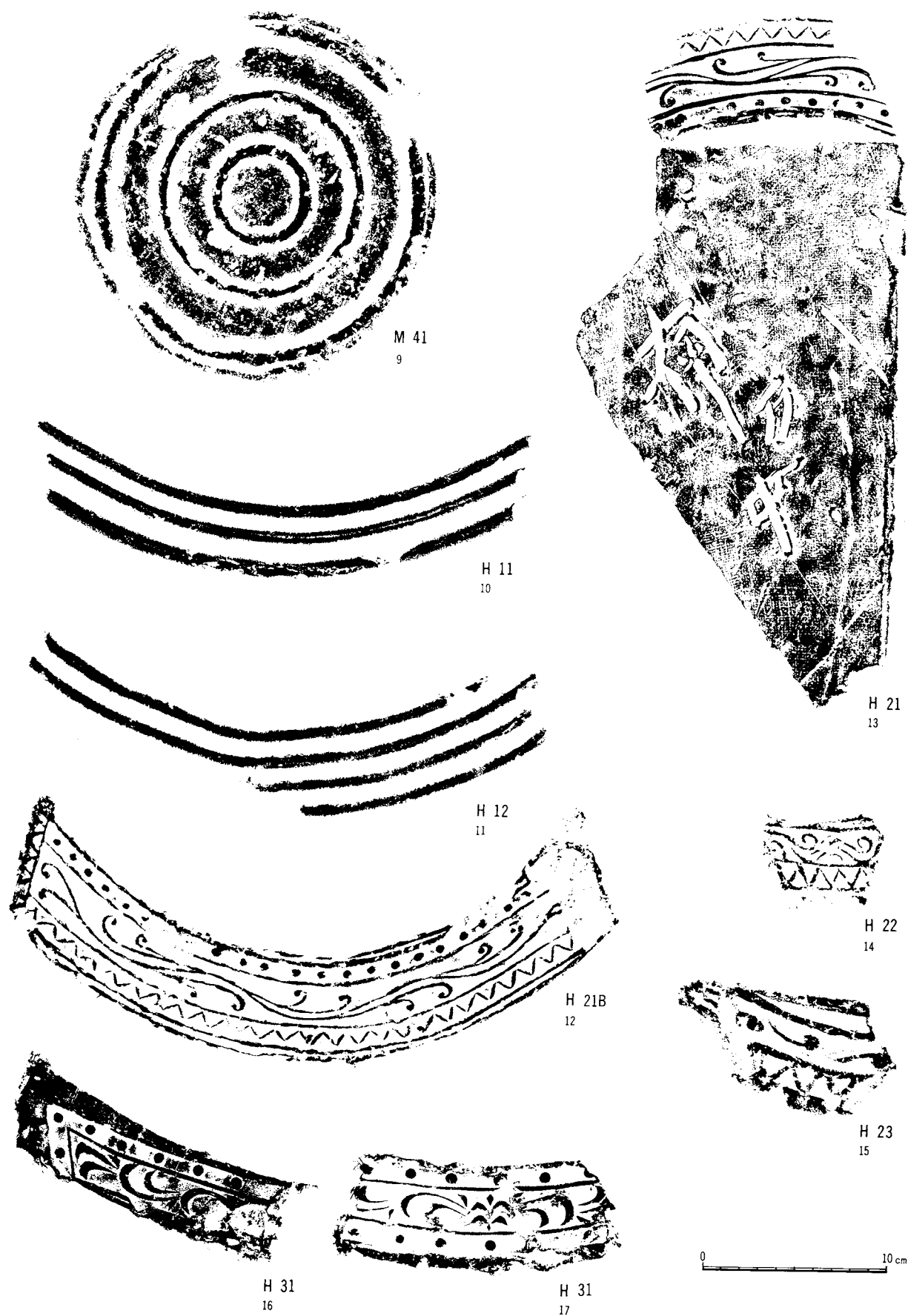
1. 寺院建立前

古墳時代の土師器や須恵器が、少量ながら各地点から出土している。また図示はしなかったが弥生時代中・後期の土器片も少量出土している。

1は土師器の小型壺である。底部外面には荒いヘラケズリを施す。2は土師器杯である。内面にヘラのアタリが斜方射状に認められる。

2. 寺院存続期

7は淡茶褐色を呈し、焼成は良好、胎土も精良な土師器杯である。暗文やヘラミガキは磨耗により不詳だが、元来は施されていたものと思われる。この外にも赤褐色で暗文を施した杯は多い。8は北方建物付近の土壇から出土した杯蓋である。口径は15cm



第14图 屋瓦類拓影 2 (1 : 3)

を測り、灰褐色を呈する胎土・焼成共に良好なものである。

9は天華寺廃寺北東丘陵裾に位置する瓦窯の灰原と推定される灰層断面に露出していたものである。¼程の破片であるが、径は14.4cmを測り、白灰色を呈する。胎土、作りとも良好なものである。

3. 寺院廃絶後

大別して平安時代後葉から鎌倉時代頃と、江戸時

代の2時期に分けられる。

3は口縁端が直立する土師器皿である。口径は9.6cmを測り、赤褐色を呈す。平安時代後期に属すと考えられるが、寺院との関係は明らかでない。4は高台が高く杯部の浅い、いわゆる台付皿である。3・4は平安時代後葉に属す。5・6は山皿であり、10・11は山茶碗である。いわゆる行基焼には数型式が認められ、12～14世紀に属す。

4. 結 語

A. 遺 物

屋瓦 出土瓦の大半は、重弧文軒平瓦(H11・12)と、これに組み合う単弁重弁(M1・2)や複弁重弁(M21・22)の軒丸瓦、および藤原宮式(M3A・3BとH21A・B)である。これらの年代は、前者が7世紀後葉、後者の藤原宮式が7世紀末から8世紀前葉と考えられる。

差し替えたと思われる、より新しい瓦も少量出土した。この内、奈良時代に属すと思われる例には、重圏文軒丸瓦(M41)と扁行唐草文(H21)や均正唐草文(H22)の軒平瓦がある。これらの軒丸・平瓦は、それぞれが組み合うべき型式を持たない。平安時代に属すと思われる例には、単弁重弁軒丸瓦(M13)と扁行唐草文軒平瓦(H23)がある。

埴仏 従来「菱形埴仏」として著名であったAが六角形を呈すことが確認されたほか、新たに、方形独尊Bや三尊Cの例が確認された。Cは大和の川原寺出土例等に類似する。埴仏は金堂を中心に出土しており、点数はAが44点程、Bが1点、Cが2点に過ぎない。おそらく、創建期に金堂の一部にのみ使用されたものであろう。

土器 寺院創建以前では、6世紀を中心に少量出土しているのみである。

寺院存続期の土器は、量的に7世紀後葉から8世紀前葉のものが中心である。この内、土師器杯では良質で赤褐色を呈し、暗文を施した例が目につく。

寺院廃絶以後では、平安時代後葉から室町時代前半に及ぶ土師器や山茶碗等が瓦溜を中心に多数出土

した。この内には、微量の瓦器も含まれており、注目される。この外には、瓦溜や井戸から近世の染付が少量出土している。

B. 寺 院

塔 東西約15.5m、南北約15mの範囲に版築を施した掘り込み地形が存在するが、この中央やや南西に心礎抜き取り穴がある。従って、基壇規模は11m前後と推定されるに止まる。心礎は、おそらく版築中にあり、上面も基壇上に露出していなかったものと推定される。

金堂 版築の範囲は東西約20m、南北約17.5mである。塔の版築との間隔は約7mあり、この中央が伽藍中軸線であろう。版築の規模から、桁行5間、梁行4間の建物が想定される。

伽藍配置 塔の西に南面する金堂が推定される事から、法起寺式の伽藍配置が考えられる。しかし、講堂や回廊・中門等は不明である。また、寺域も明らかではない。

存続期 出土した瓦や土器、および遺構から、造営は7世紀後葉に開始され、8世紀前葉まで続いたものと考えられる。そして、平安時代までは存続したが、遅くとも鎌倉時代までには廃絶している。おそらく、平安時代後半に廃絶したものであろう。

(小玉道明・山田猛)

<註>

① 鈴木敏雄『三重県古瓦図録』1933

② 昭和54年、三重県教育委員会発掘調査

IV 一志郡嬉野町

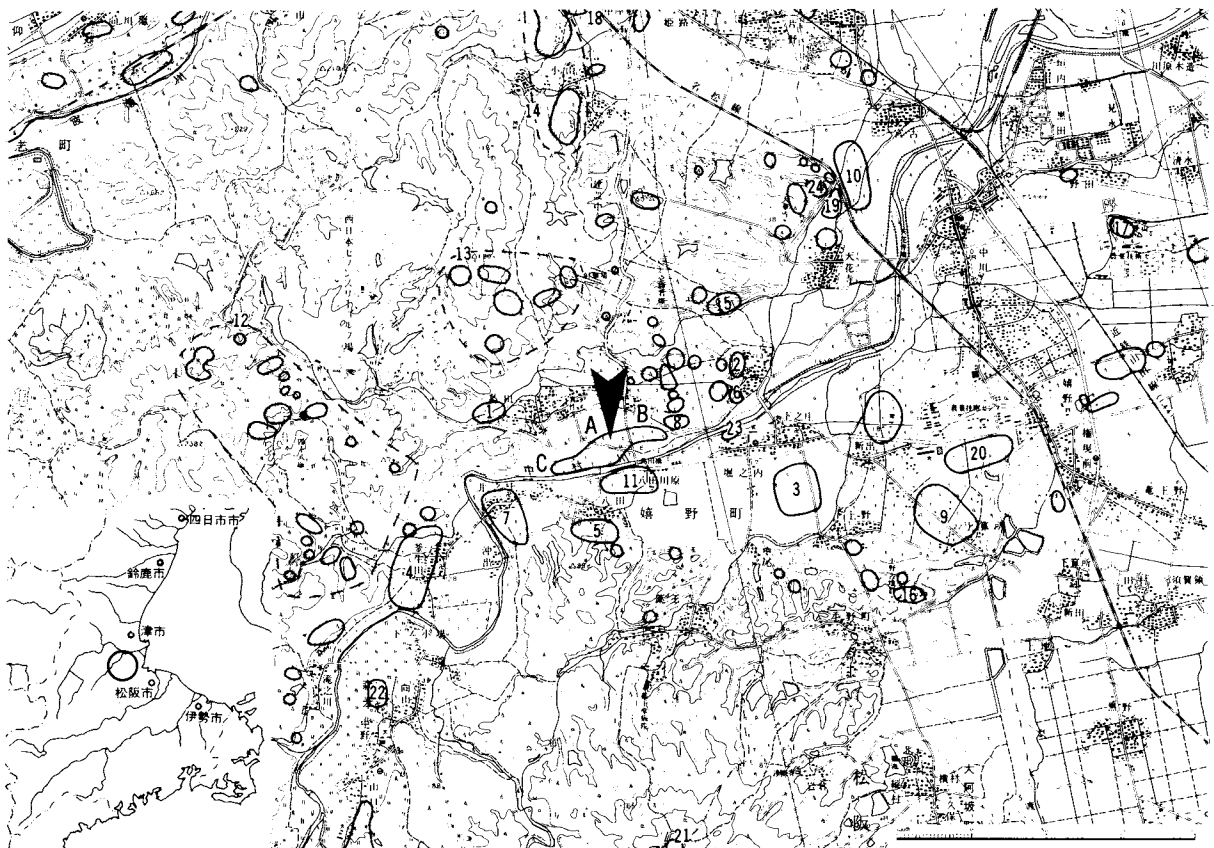
うえの かいと 上野垣内遺跡

昭和54年度県営圃場整備事業地内における埋蔵文化財有無の照会にもとづき、昭和54年5月、中村川左岸の島田地区一帯の分布調査を行なったところ、約50,000㎡ほどの範囲で弥生時代から鎌倉時代にかけての土器片多数を採集することができた。この地域は島田橋北方遺跡にあたるため、同年6月、付近一帯で2×2mの試掘抗を計50ヶ所掘り事前調査を行なった。その結果、多数の試掘抗から遺物、遺構が検出され、また、全体的に表土下20～50cmで遺構面に達することも判明した。そこで、これらの結果をもとに、県農林水産部・津耕地事務所と県文化課との間で協議し、本調査の必要なことで意見が一致した。

本調査は、遺物包含地内のうち、遺構面下まで削平される水路予定地3ヶ所を中心に行なうこととし7月23日から調査に着手した。町道久居・嬉野線の西側をA区、東側をB区、A・B両区のある段丘より一段低い低位段丘をC区とした。

A区は4×20mの範囲を調査した。次いでB区で4×92mを調査したところ、その中央部付近から、古墳時代と考えられる土坑2基、奈良時代末と考えられる竪穴住居2棟等、遺物、遺構が集中して検出された。そのため、同年8月25日、前述三者間で再度協議を行ない、遺構の集中している地点を中心に南北両側へ20×40mづつ拡張して調査することとした。引き続きC区は4×20m及び4×4mの調査抗7ヶ所、秋期施行予定地内に4×2mの調査抗17ヶ所を調査したが、少量の土器片のみで遺構は検出されなかった。その結果、B区拡張部分の調査に重点をおき、次章以下の成果を得、同年12月8日調査を終了した。

なお、調査にあたっては県農林水産部、津耕地事務所、嬉野西部土地改良区の全面的支援をいただき地元島田地区をはじめ近隣の方々の協力を得、無事調査を終了させることができた。記して謝意を表したい。



第15図 遺跡位置図（国土地理院1:25000 大仰）

1. 位置と環境

上野垣内遺跡(矢印)は行政区画上、一志郡嬉野町上野垣内に所在している。遺物散布状況等よりその規模は東西700~800m、南北100~300mにも及ぶ広大な遺跡面積が推定されている。当遺跡は伊勢平野のほぼ中央部を雄走する雲出川の一支流である中村川左岸の河岸段丘上に立地し、南に向かって低下する地形は圃場整備以前は大部分が畑地として利用されていた。現標高18~19m前後である。中村川は標高723mの矢頭山と、松阪市と一志郡の境に位置する標高757mの堀坂山の両山に挟まれた谷をその源とし、上流域では蛇行しながら、当遺跡の立地する中流域では直線状に流れを変え、両岸に肥沃な河岸段丘と多くの遺跡群を形成して、近鉄中川駅北方で雲出川と合流し伊勢湾に注いでいる。

この中村川の形成する河岸段丘、及び、中流から下流にかけて広がる沖積平野一帯は遺跡の宝庫とも言うべき各時代、多種多様な遺跡が密集している地

域として知られているが、特に古墳時代以降~飛鳥・奈良時代においては文化的にも他地域を卓越した容質をもっているのも一つの特性と言える。

とりわけ古墳時代前期のみ取り上げても、南勢域にはみられない4世紀後半の築造とされ、三角縁神獣鏡の出土等、内容的にも際立つ3基の前方後方墳(筒野(15)・向山(16)・西山古墳(17))の一志郡への集中存在が物語るように、当地域が古代の文化・政治の先進地域である大和と伊勢を結ぶ当時の一つの文化伝播経路として重要な役割を担ってきた地域と考えることができよう。

ここで流域の主な遺跡を時代順に概観すると、縄文時代としては鳥田遺跡(1)、薬師寺西遺跡(2)等がみられるが、縄文を遡る先土器時代の遺跡は発見されていない。弥生~古墳時代にかけての遺跡は数多く、広大な範囲を占める釜生田遺跡(4)をはじめ、閉垣外遺跡(7)、郡一遺跡(6)等、中村



第16図 遺跡地形図 (1:5000)

地図番号	遺 跡 名	時 代	地図番号	遺 跡 名	時 代
1	鳥 田 遺 跡	縄文以降	13	射 撃 場 西 古 墳 群	古墳
2	薬 師 寺 西 遺 跡	縄文	14	小 山 古 墳 群	古墳
3	下 ノ 庄 遺 跡	縄文・弥生	15	筒 野 古 墳	古墳
4	釜 生 田 遺 跡	弥生	16	向 山 古 墳	古墳
5	八 田 遺 跡	弥生	17	西 山 古 墳	古墳
6	郡 一 遺 跡	弥生以降	18	斑 光 寺	奈良
7	閉 垣 戸 遺 跡	古墳以降	19	天 華 寺	奈良
8	一 志 西 遺 跡	古墳	20	嬉 野 廃 寺	奈良
9	新 出 遺 跡	古墳	21	阿 坂 城 跡	室町
10	堀 田 遺 跡	飛鳥・奈良	22	森 本 城 跡	室町
11	八 田 川 遺 跡	平安	23	堀 ノ 内 城 跡	室町
12	釜 生 田 古 墳 群	古墳	24	天 華 寺 城 跡	室町

第 6 表 周辺の主要遺跡一覧

川の全流域にわたって点在している。古墳は先述の前期古墳の他にいわゆる群集墳としての後期古墳が多くみられるが、流域左岸の丘陵上に偏在、釜生田古墳群（12）、射撃場西古墳群（13）等が大きな各ブロックを形成している。飛鳥・奈良時代においては、これまで一志郡内では平生遺跡、鳥居本遺跡、堀田遺跡（10）等より畿内の要素の強い良質の土師器の出土が知られ、こうした遺跡分布、遺物出土状況は、明和町の斎宮跡は特別として、県内の同時代遺跡を比較しても一つの一志における地域特性を窺うことができる。それはまた、白鳳・天平期に比定し得る寺跡（斑光寺跡（18）・天華寺跡（19）・嬉野廃寺（20）・円光寺廃寺）の集中所在とも関わり、速断はし得ないにしても畿内と一志郡との結びつき

の強さを示唆する事象として歴史的にも注目されるどころと言えよう。その内、天華寺跡は昭和54・55両年度に発掘調査がなされ、その伽藍配置推定の手がかりと共に、多量の埴輪類、屋瓦類が出土によって徐々にその実体が明確化しつつある。

中世に至ってこの地域は南北朝時代以来、伊勢国司家としての北畠氏の支配下にあるが、こうした時期に相当する城跡も多く、白米伝説で有名な阿坂城跡（21）をはじめ、森本城跡（22）、堀ノ内城跡（23）、天華寺城跡（24）等がよく知られている。発掘調査例はないが、室町期の築造と考えられている。

以上、大まかではあるが、当遺跡の立地する中村川流域とその周辺の遺跡を概観し、加えて、一志郡における地域特性に若干触れるにとどめておきたい。

2. 遺 構

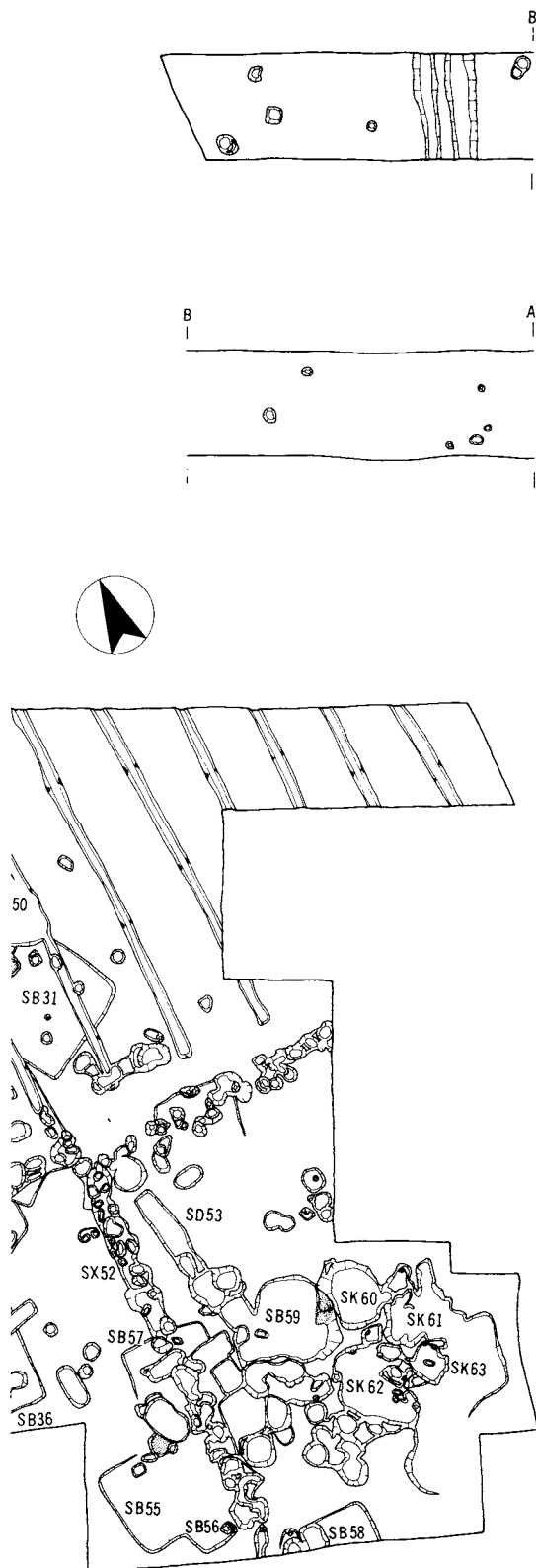
今回の調査は3地区にわたり約3,000㎡について遺構を検出したが、ここでは最も遺構が密集して検出された最東部の発掘区にあたるB地区の遺構について、その概要を記述する。

B地区は当初東西39m、南北48mの範囲で、約1900㎡について調査を進めたが、南東部で遺構が重複しながら発掘区外へ広がった為、さらに発掘区を拡張し、約2,500㎡について遺構が検出された。

検出された遺構には堅穴住居37棟、堀立柱建物6棟、溝2条、土壇17基、柵列状遺構1群がある。これらは発掘区の各所で検出され、僅かに西部と東部の一部で遺構の検出されなかった箇所があるだけで、さらに北や南の発掘区外に広がるものと思われる。堅穴住居や土壇の一部と溝、柵列状遺構は、その遺構内からの出土遺物により鎌倉時代のもものと判明しているが、大部分の堅穴住居や土壇は奈良時代後半



第17図 遺構平面図 (1 : 250)



から平安時代のもので、細分化は遺物の検討に待ちたい。時期がわかる遺構については各項で記述する。

(1) 竪穴住居

37棟の竪穴住居の中で単独で検出されたものは数棟で、ほとんどが発掘区の各所で重複して検出されている。形状は、土壇や柱穴との重複によって不定形となったもの以外は方形又は長方形である。規模は一辺が3 m以下のものが9棟、3 m～4 mのものが19棟、4 m以上のものが5棟で、3.5 m前後が平均的な規模である。最大の規模をもつ竪穴住居はSB 13で、5.3 m×4.8 m。発掘区のほぼ中央で検出されている。最小のものはSB 66で、規模は1.6 m×(1.8) mである。SB 13の北方24 mで検出されている。主柱穴が検出されているのはSB 12、13、31の3棟で、規模が大きいという共通点が認められる。又、遺構の深さは10 cm前後のものがほとんどで、遺存度はよくない。30 cm以上のものは9棟ある。

南北軸による傾きをみてみると5°未満が16棟と多く一定の規画性が認められる。又、25°以上傾く竪穴住居には規模の大きいものが多い。

ここで検出された竪穴住居の特徴をあげるならば、カマドの付設がある。11棟からカマドが検出され、さらに11棟で焼土が認められた。それらは北辺又は東辺にもつものに二分別される。その中でSB 2は西辺、SB 56が南辺と例外が2棟ある。さらに煙道が確認されたものも数棟ある。SB 55、56、57の3棟からは山茶碗が出土しており、鎌倉時代のものであろう。他の34棟は奈良時代後半から平安時代にかけてのものであり時期の細分化は出土遺物の検討に待ちたい。

(2) 掘立柱建物

すべて平安時代後半のもので、6棟検出された。竪穴住居のような複雑な重複はなく、発掘区の中央をほぼ南北に検出された、総柱のSB 20を除いて全体に柱通りが悪く、柱穴の堀に方も円形、方形が混在している。棟方向はN87°Eを示し、ほぼ東西棟であるが、発掘区の北部でSB 33と重複しているSB 22、68の2棟は各々若干ではあるが北、南に振っている。柱間は梁行よりも桁行の方が広いという共通点が認められる。

(3) 溝

名称 (SB)	模 (m)		主柱柱間 (m)	深 さ (cm)	南 北 軸	備 考
	東 西	南 北				
1	3.5	3.8	—	13	N 20° E	カマド (北辺)
2	3.5	3.5	—	29	N 25° W	焼土 (西辺)
3	3.0	3.0	—	10	N 2° W	周溝
5	(3.0)	(3.5)	—	22	N 10° E	
6	4.0	3.0	—	30	N 5° W	周溝、焼土 (東辺)
7	(3.0)	—	—	3	N 10° E	周溝
11	2.6	2.4	—	30	0°	
12	2.6	3.4	2.2	10	N 50° E	焼土 (東辺)
13	3.4	4.8	2.6	10	N 25° W	焼土 (北辺)
14	5.3	4.1	—	10	N 5° E	
15	4.6	2.4	—	5	N 15° E	
16	2.3	3.3	—	10	N 5° W	焼土 (東辺)
17	—	3.5	—	10	N 20° E	
27	3.8	2.7	—	30	N 3° E	カマド (東辺)
28	2.7	2.7	—	10	N 8° E	カマド (東辺)
29	2.9	3.9	—	10	N 10° W	焼土 (東辺)
30	3.2	3.3	—	40	N 2° E	カマド (北辺)
31	3.0	4.2	2.0	19	N 35° W	焼土 (北辺)
32	4.4	2.4	—	44	N 5° E	
33	2.8	(2.5)	—	13	N 2° E	焼土 (北辺)
34	2.5	4.0	—	10	N 9° W	カマド (北辺)
35	(5.0)	—	—	8	N 15° W	
37	4.2	4.5	—	13	N 2° W	
39	3.3	3.0	—	5	N 5° W	カマド (北辺)
40	4.0	3.3	—	6	0°	カマド (北辺)
41	3.4	—	—	5	N 23° W	カマド (北辺)
42	3.7	3.7	—	20	N 13° W	カマド (北辺)
43	5.0	—	—	7	N 10° W	
44	2.4	3.4	—	17	N 2° W	焼土 (東辺)
45	(4.4)	—	—	16	N 25° E	
46	—	—	—	57	N 25° E	
55	3.9	3.5	—	5	N 13° W	カマド (北辺)
56	—	—	—	6	N 25° W	焼土 (南辺)
57	—	—	—	4	N 2° W	
58	3.3	—	—	12	N 3° W	
59	2.7	3.5	—	43	N 5° E	焼土 (東辺)
66	1.6	(1.8)	—	21	N 25° W	カマド (東辺)

第7表 竪穴住居址の規模

() 推定

名称 (SB)	規模 (間)	桁行 (m)	梁行 (m)	棟方向	柱間 (m)		備考
					桁行	梁行	
20	4×2	8.8	4.2	N87°E	2.2	2.1	総柱
21	2×2	3.8	3.4	N87°E	2.2 1.6	1.7	束柱
22	4×3	6.8	4.4	N84°W	1.8	1.3~1.4	
23	4×2	8.8	3.9	N87°E	2.1~2.4	1.8~2.0	
68	3×3	4.5	3.6~3.9	N79°E	1.5	1.1~1.4	
69	3×2	6.6	4.2	N87°E	1.8~2.4	1.8~2.4	

第8表 掘立柱建物の規模

発掘区の西部でS X52と平行して検出されたSD 53が1条ある。高台をもつ大振りの山茶椀が出土している。

(4) 土 坑

17基の土坑は発掘区の各所で検出され、その規模や形状はまちまちである。発掘区の中央やや西寄りでは検出されたS K48や南隅部で検出されたS K61からは平安時代中葉から後半に比定される灰釉陶器椀が出土している。又、山茶椀が出土しているものに南隅部のS K62、63がある。発掘区の中央で他の遺

構と重複していないS K10は5.2m×7.4mと規模が大きく、平坦な底部に二箇所落ち込みがあり、共に河原石が集積していた。

(5) 柵列状遺構

発掘区の南隅部で多数の柱穴が逆L字状に列をなして検出された。S X52である。さらに柱穴は各々発掘区外にのびており、何かを区画するものと思われる。ただ中心が発掘区外であるため全体の形状、規模、中心となる構築物等については不明である。

3. 遺 物

整理箱約100個の遺物が出土している。その殆んどが奈良時代より平安時代にかけての土師器である。他に少量の縄文土器、弥生土器、古墳時代土師器、須恵器、中世陶器などの土器の他に土錘、砥石が出土している。

1. 縄文・弥生土器

10数片の縄文土器は後期初頭頃と思われる沈線文土器の口縁部破片と、晩期の貝殻腹縁による条痕文の施される五貫森式土器の破片がある。

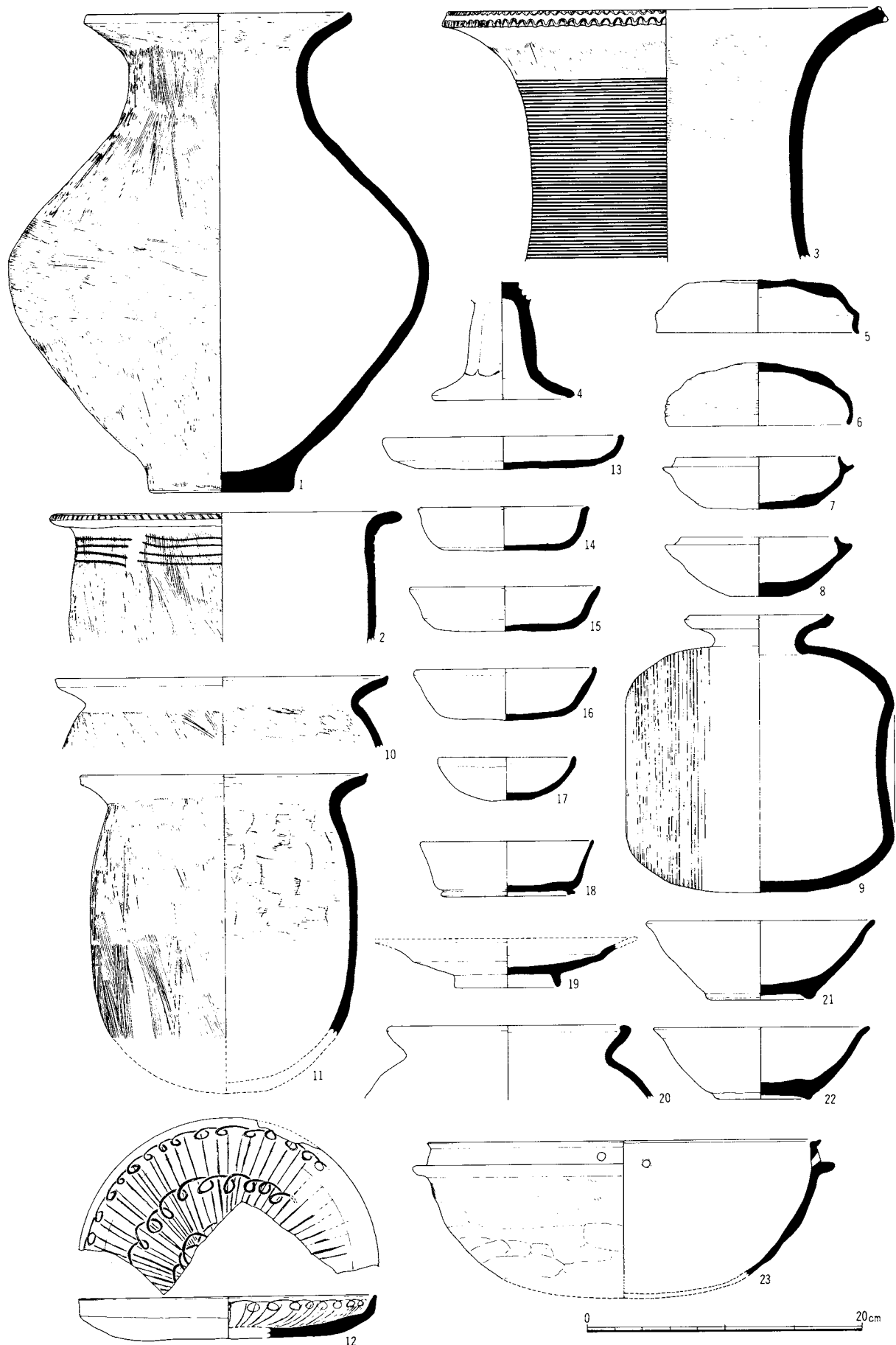
約100片の弥生土器片は殆んどが前期末に属するものである。1の壺形土器は全面に刷毛目が施されるものであるが、多くは同様の形態で口縁部内側に凹線が巡り、肩部には篋摘沈線による横線文、山形文を描くもので、全面鏡研磨される赤褐色を呈するいわゆる赤焼きの土器（亜流の遠賀川式土器）である。

2の甕形土器も同期のもので、やや肥厚する口唇部の先端に刻目を入れ、全面に刷毛目を施したあと、半截竹管による並行沈線が二段頸部に巡らしている。

3は中期初頭の壺形土器である。刻目を口唇部に入れ、頸部には櫛描横線文が密に施される、赤褐色を呈する。

2. 古墳時代の土器

S K10 (4・6・9)、S B12 (7・8) 等から出土した土器であるが量的には少ない。土師器杯、甕、高杯、須恵器杯身、甕、横瓶、大甕などがある。4は杯部の形状は不明であるが、脚部はヘラによって面取りされる高杯である。5、6は須恵器杯蓋で口縁部がやや内弯する。7、8は杯身で口径12cm前後、内傾する口縁部にやや厚手の底部よりなる。9は短径18cm、長径20cmの筒状の胴部に大きく外反す



第18图 土器实测图 (1 : 4)

る口縁部がつく横瓶で、胴部の両端には細かいカキ目が施される、いずれも6世紀後半より7世紀にかけてのものであろう。

3. 奈良時代後半の土器

全地区から出土している。土師器甕、杯、須恵器杯などがある。土師器甕は長胴のものと、小形の球形の胴部のものがある。多くは全面刷毛目が施され内面はヘラケズリされている。土師器杯は赤褐色を呈する堅緻なものが多く、口縁部がヨコナデ、底部は指による押えのものが大部分であるが、12のように浅い皿状で暗文が施され、底部がヘラケズリされるものや、14のように底部をヘラケズリされるものもある。また17のように椀に近い形をしたものも見られる。さらに内面が黒色を呈する内黒土器も数点ある。18の須恵器杯は口縁部が直立する高台のつく杯で、全体に薄手に仕上げられている。これらの

土器の多くは奈良時代後半と考えられるものであるが、一部平安時代に含まれるものもあるようである。

4. 平安時代後半以降の土器

量的には少ないが各地より灰釉陶器や山茶碗、平安時代末頃の土師器鍋、鎌倉時代の羽釜、鍋、皿などが出土している。19は灰釉陶器の段皿である。口縁部を欠くが、内面には淡緑色の灰釉が施され、高台はヘラケズリのあと貼付けている。20は土師器鍋である。口唇部が内側に折れ曲がり、胴部は押えつけのままであるのが特徴的である。21、22は口径16cm、器高5.5cm前後で、やや厚手の深い山茶碗である。23は口径28cm、器高 cmの口径に比較して浅い羽釜である。幅のせまい、厚手の鐙が貼付けられており、胴部は上半部は細かい刷毛目、下半部はヘラケズリされる。

4. 結 語

当遺跡の調査は当初試掘調査の結果からみて、遺物、遺構の検出は相当深く、圃場整備事業の実施は水路部分に限り、遺跡に影響を与えるものと予想していたが、水路部分の調査を実施してみると、僅か20cm足らずで遺構面が検出される個所もある状況であった。このため、計画変更をしていただくとともに、事業の実施によって削平される部分約3,000㎡を急拠発掘調査を実施したものであり、当初の試掘調査の方法の再検討の要が改めて痛感された。

当遺跡は縄文時代より中世にかけて長期間、断続的に営まれた複合遺跡である。嬉野町は従来より弥生文化、古墳文化の三重県における先進地域であったといわれている。弥生文化の県下における始まりは雲出川下流においてまず見られ、そこから北方へと伝播していった。当遺跡の弥生土器はいずれも前期に属するものであるが、いわゆる遠賀川式土器は見られず、赤焼きの垂流の遠賀川式土器で、前期新と考えられるものである。この遠賀川式土器と垂流の土器の二者は津市納所、三雲村中ノ庄、鈴鹿市上箕田等の遺跡では大量の遠賀川式土器と極少量の垂

流のものが伴出する。しかし、他の遺跡では当遺跡のように垂流の土器のみが出土する。すなわち津市上村遺跡、白山町和渥野遺跡、明和町金剛坂遺跡などである。そして、これらの遺跡は決して大規模なものではなく、総破片数100点足らずの小規模なものである。このことはこの垂流の土器群と遠賀川式土器が主体を占める遺跡とは単なる時期差のみとは考え難く、縄文晩期の様相が明らかではないが、晩期の伝統を長く保ちつづけた人々の存在を示すものであろうか。

この遺跡の中心となるのは奈良時代の集落跡である。総数34棟の竪穴住居は何時期かに細分し得ると考えられる。カマドを付設するもの、そうでないものの、周溝やカマドの煙道など住居跡の構造についても興味ある問題を内包している。また、現在各地で奈良時代の遺跡の発掘がなされ、土器の出土も多い。しかし、その編年はまだ確立していない状況である。同じ嬉野町平生遺跡や一志町鳥居本遺跡で奈良時代初頭頃の良好な資料を出土しており、当遺跡の土器群はそれらにつづくもので、奈良時代の編年資料と

なり得るものであろう。

平安時代後半には掘立柱建物が見られる。平生遺跡においても検出されている。一般に奈良時代の掘立柱建物は柱掘り方も大きいですが、平安時代後半にはやや小規模になり、興味あることに当遺跡の S B20 の 2 間×4 間の建物のように総柱の建物が見られる

ようになる。先の平生遺跡や多気町東裏遺跡、鈴鹿市川原井遺跡でも見られる。建物の構造、規模の変化があるのであろうか。平生遺跡ではこういった遺構を有力な農民、名主層の広大な屋敷を想像している。
(田中喜久雄)

V 多気郡明和町 ^{ひがしむら} 東村遺跡

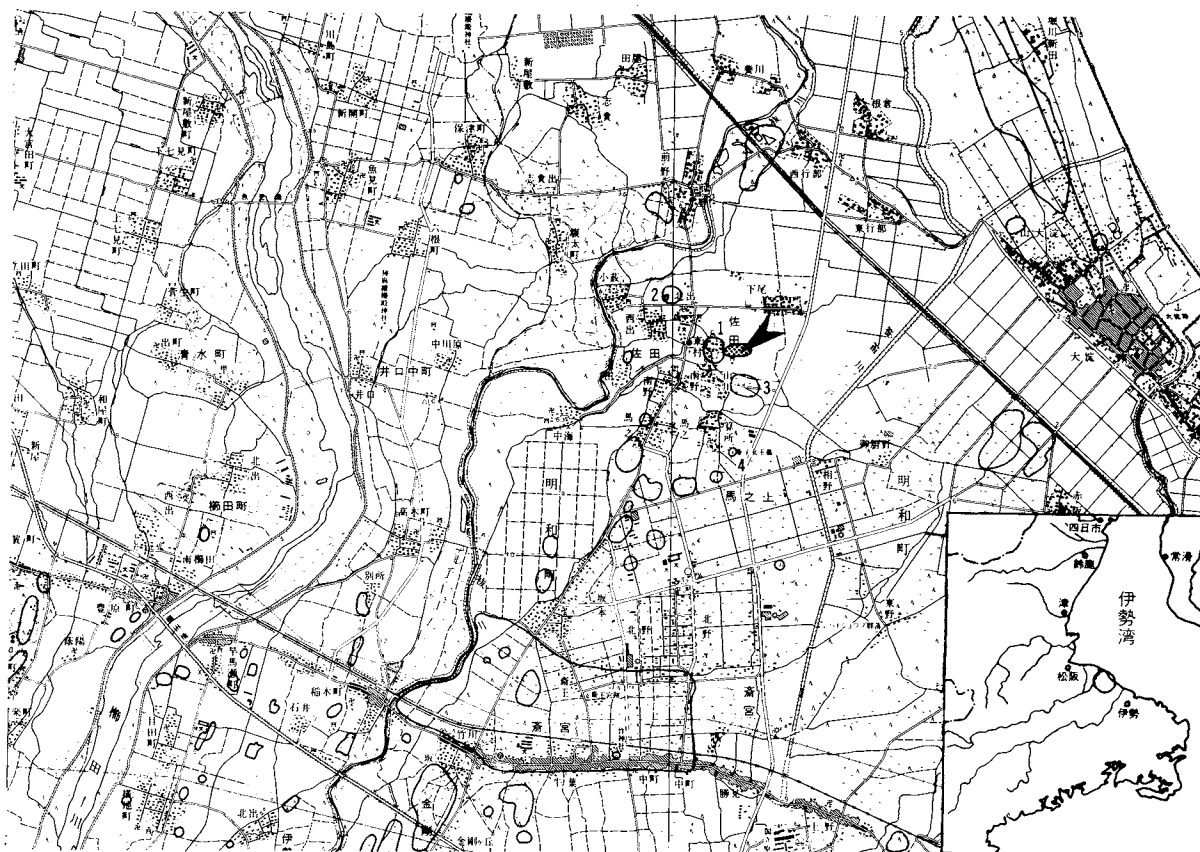
東村遺跡は周知の遺跡としては登録されていなかったが、新兵衛山遺跡に程近く、その一部には周りの水田より一段高くなった台地状を呈する地域を含み、過去の村落立地を推定させるものであった。又、近くの畑地には土師器片の散布がみられた。しかし、この台地状の地形は、地元では、近代以降の人工による盛土であるという話もあった。

昭和54年11月20日、松阪耕地事務所立ち合いの下で、台地状の部分に3ヶ所の試掘坑を設定、遺跡の実態等の確認のための試掘調査を行なった。その結果、盛土は明らかに近代以降のものと判明したものの、その下より遺物包含層を確認、又、地山面において柱穴と思われるピット、落ち込みを検出した。出土遺物は極少量であったが、土師器（鍋）片よりみて中世（鎌倉時代～室町時代）の遺跡であること

が推定された。そして遺跡はその周辺に拡がることを予想し、その地の小字名をとって東村遺跡と命名した。

こうした経過をへて、再度、松阪耕地事務所、上御糸土地改良区と協議したところ、遺跡周辺の水田は現在高を尊重、削平しないこと等で、その保護に努めたが、排水路（幅約3m）構築部分については設計変更不能ということで、排水路部分（幅3m×100m、300㎡）については発掘調査を実施することになった。調査は先の盛土部分（厚さ50～60cm）はブルドーザーによって除去したのち、以下人力による地山までの掘削によって遺構、遺物の確認に努めた。

尚、調査に際しては、松阪耕地事務所、上御糸土地改良区の各位、又、現場作業には地元の多くの方々のご協力を得た。記して感謝の意を表したい。



第35図 遺跡位置図(国土地理院 1 : 25,000 松阪・明野)

1. 位置と環境

東村遺跡は行政区画上、多気郡明和町佐田字東村に所在する。佐田の集落の東はずれに位置し、すぐ南は若之神社（若宮八幡宮、若宮神社ともいう）が鎮座している。この神社のわずかな茂みの他は、若干の畑地以外、見わたす限り水田が東方へと広がっている。西方700~800mには蛇行する祓川が流れるが、地形的にはおそらく、こうした河川による沖積によってできたと考えられ、現標高4m前後の低い土地である。

周辺の遺跡としては、文明年間、伊勢国司北畠教具の三男佐田左兵衛小将具郷が初めて居城し、佐田、中海、馬の上、行部、根倉の五ヶ村を知行した拠点といわれる佐田城跡(1)があるが、今はその面影を全く見ることはできない。又、北西約500mの地点には、昭和53年度県営圃場整備事業に伴い発掘調査のなされた西出遺跡(2)が所在する。この西出遺跡では

東海地方では珍しい縄文時代の人面土版をはじめ、弥生時代の竪穴住居、平安時代末の掘立柱建物址等、縄文時代から中世に至るまでの数々の貴重な遺構、遺物を検出している。西出はより祓川に近く位置するが、地形立地的にはよく似ている。その他、東村遺跡に隣接、若宮神社から東方にかけての畑地は新兵衛山遺跡(3)として知られており、南隣の村、馬の上字算所には、天禄2（971）年よりわずか3年の在位で斎宮寮で薨去された第43代斎王隆子女王の墓(4)がある。

文献上からは古代末から中世にかけて神宮領荘園としての佐田御園が設置されたことがわかるが、現在の佐田集落内のどこに所在したものは定かではない。

こうして明和町のある一角、佐田周辺を取りあげただけでも数々の文化財、遺跡を拾うことができる



第20図 遺跡地形図（1:6000）

が、古代以来、伊勢神宮直轄地という性格の中で、又、時には齋宮に程近いという位置関係より、この

複雑な宗教的、文化的な影響下の中で、現在までの歴史がはぐくまれたものと思われる。

2. 遺 構

南北に約10m離れた東西2つのトレンチを発掘した。遺構は、両トレンチを合わせて、井戸址1、溝址8を検出した。他にピットと小段がある。

層位は東トレンチで二つに分かれる。SE1東7mを境に、東側は、I層；水田耕作土(暗青灰色土)、II層；やや黄色をおびた暗灰色土（“ナカトコ”と呼ばれる土である）。III層；黄褐色土で砂利を含んでいる）でプラン確認面はIII層上面で、小段・溝は若干異なるが暗茶褐色の粘質土を埋土に持つ。極めて少ないが土師器片を包含している。西側は、I層；黒色土、II層；黄褐色土であり、井戸のプランはII層上面で確認された。

西トレンチも同様に、東側一部分でI層；黒色土、

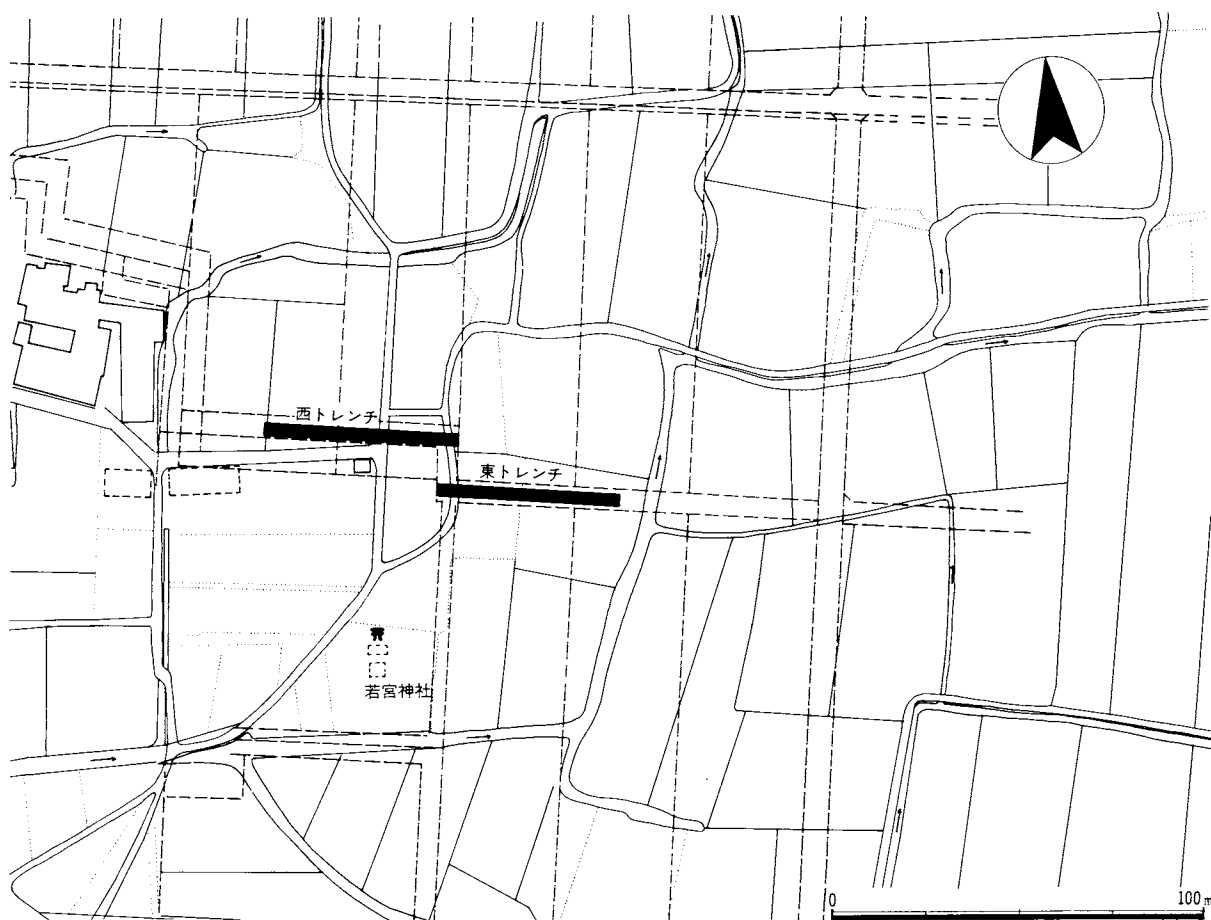
II層；黄褐色土であり、他はI層；水田耕作土、II層；“ナカトコ”、III層；黄褐色土となっている。III層は東トレンチに比べて砂利が少ない。

1. 東トレンチ検出の遺構

SE1 一辺170~180cmの隅丸の方形を呈する素掘りの井戸である。底に近い所で北側に半月状のテラス部を持つ。北壁は垂直に近く、南壁は急傾斜する。深さ170cmで底部は砂利層まで届く。

現時点でも水が湧く。遺物は土師器皿、土師器鍋、山茶碗が一括して出土している。総数約20点である。

SD2 幅170cm、深さ約40cmの南北に走る溝址である。小段の埋土を除いた段階で検出され、肩部



第21図 発掘区平面図 (1:2000)

も良く残っていた。遺物はない。

SD 3 トレンチの東端で検出された幅40cm、深さ10cmの南北に走る溝である。SD 2と平行するが、上半を水田により削平されている可能性がある。遺物なし。西側に幾つかのピットがあるが、規則性はない。

2. 西トレンチ検出の遺構

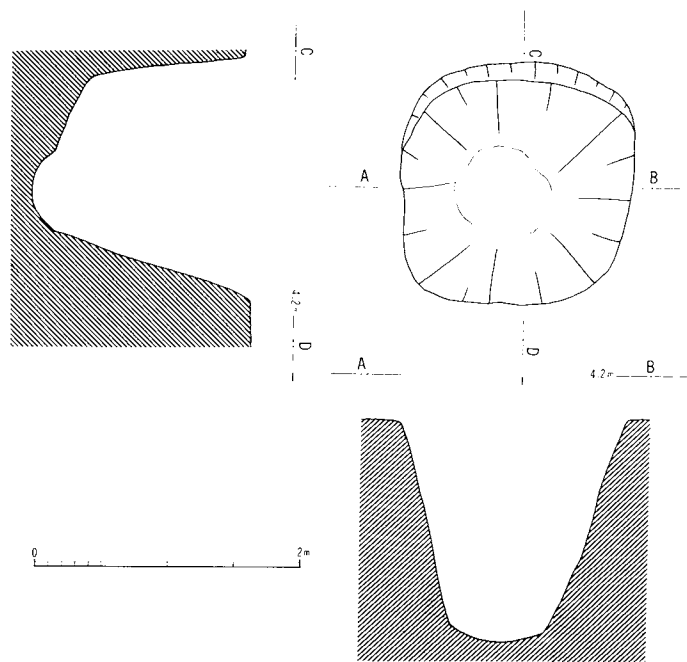
SD 4 幅40cm、深さ10~25cmのほぼ東西方向に走る溝址である。一部農道部分にかかり、プラン確認面で他の部分と約20cmの高低がある。溝の掘り込み面は一段高い農道部分であり、他は削平されたものである。遺物は土師器皿片、土師器鍋、山茶碗がある。

SD 5 SD 4より始まり北へ延びる幅20cm、深さ2mの浅い溝である。平面ではやや低くなっている程度だが、断面で確認できる。遺物はない。

SD 6 幅18cm、深さ10cmの溝である。SD 4が一度とぎれ再び延びる感じである。やや南に弯曲して掘り方の壁につづく。遺物はない。

SD 7 幅20cm、深さ8~10cmの北東から南西に走る溝である。遺物はない。

SD 8 幅20~50cm、深さ5~10cmでSD 9より



第22図 SE 1 実測図(1:60)

始まり、南へ延びる。SD 9の側で幅狭く、南へ行くにつれ広がる。遺物なし。

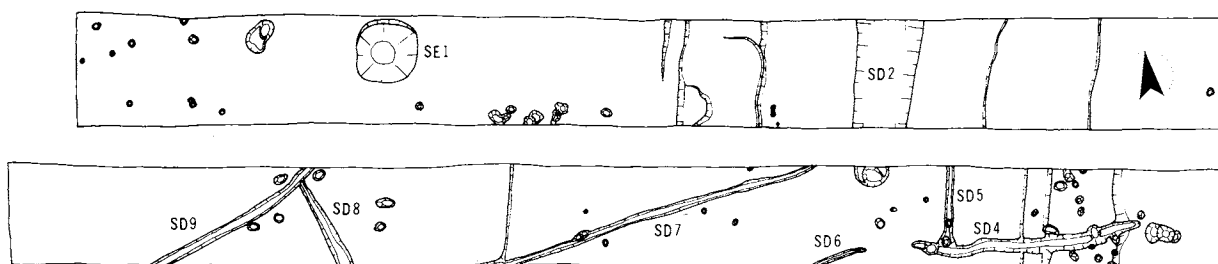
SD 9 幅30cm、深さ10~15cmの溝である。SD 7と平行し、北東から南西方向に延びる。遺物は土師器皿片、土師器鍋片がある。総て細片で約50片ほどである。

西トレンチの溝址は、全て上半が削平されていると考えられ、残存状態は極めて悪い。

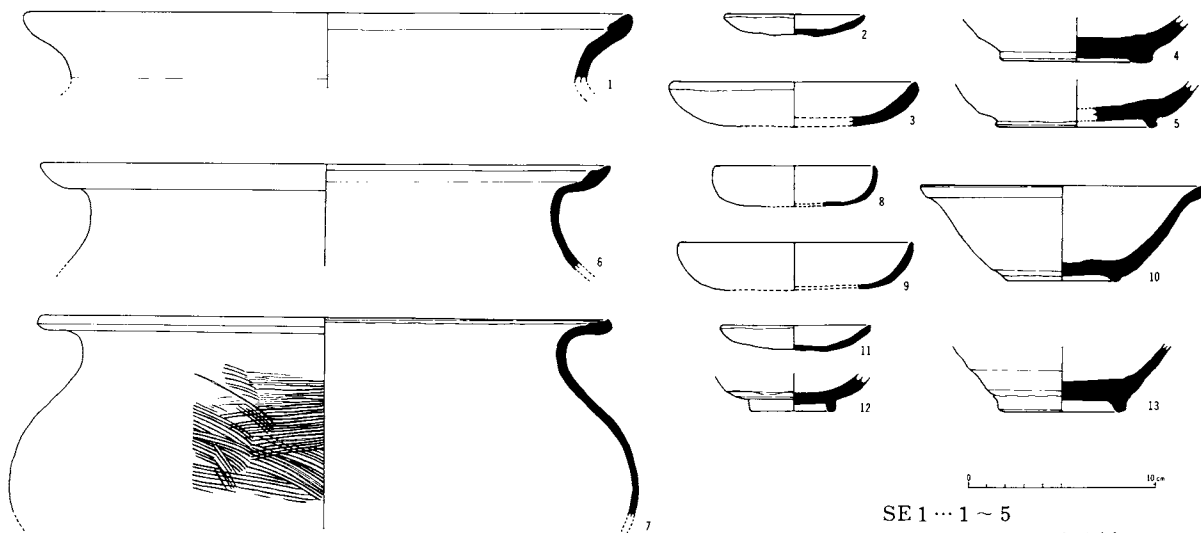
3. 遺物

調査面積(約300㎡)も小さいが、今回の発掘により検出された遺物は少量である。出土遺物は全て土器で、種類としては土師器(鍋・小皿)、山茶碗の他は若干量の常滑陶器片と灰釉、鉄釉の施された瀬戸産と思われる陶器片がある。青磁片、白磁片も1片

ずつみられる。時期的には中世(鎌倉~室町時代)に属するものである。小片が多いが、以下図示したものについて概述しておきたい。尚、数量は少ないが、SE 1、SD 4埋土出土のものは一応、一括遺物として取り上げておきたい。



第23図 遺構平面図(1:500)



第24図 土器実測図(1:4)

SE1…1~5

SD4…6~10 包含層…11~13

1. SE1出土の土器

土師器鍋(1) 復元口径32.4cmの口縁部のみ残るものである。口縁端部は内側に折り返され面をつくる。内外面ともにヨコナデされている。淡茶褐色を呈し、胎土は砂粒、細石粒を多く含む粗い。外面には煤の付着がみられる。

土師器皿A(2) 比較的薄手の小皿で、内面はナデ調整、外面は口縁端部の狭い範囲のみヨコナデされている。以下は不調整で凹凸がのこる。やや黄味を帯びた白褐色を呈し、胎土は石粒、砂粒を多量含む。

土師器皿B(3) 厚手の大ぶりの皿で、内面はナデ調整、外面は皿Aと同様、口縁端部に近い狭い範囲のみヨコナデされている。以下は不調整であるが、凹凸はみられず、全体につくりは丁寧である。皿Aよりやや褐色味をもち、胎土は砂粒を少量含むが、緻密な方である。

山茶椀(4・5) いずれも底部近くの破片であ

る。高台は、4は平べったく低い、5はやや高くしっかりしている。5の高台には穀殻圧痕が多くみとめられる。胎土は4・5とも砂粒を少量含む程度で、色調は淡灰色、白灰色を呈する。4の内面には煤の付着がみられ、灯明皿の代用として用いられたものかも知れない。

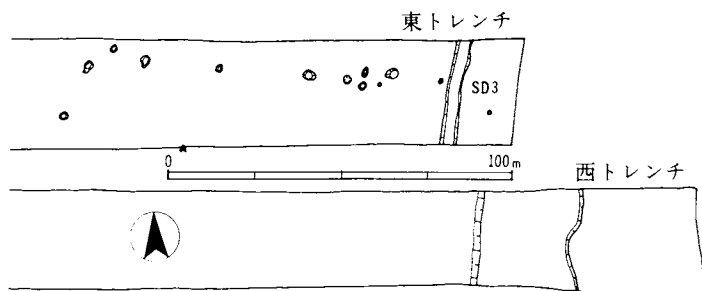
2. SD4出土の土器

土師器鍋A(6) 口縁部は内面に折り返され、段を形づくり、内面二重口縁状を呈する。内外面はヨコナデされている。茶褐色を呈し、胎土には細石粒、砂粒を非常に多く含むザラザラしている。外面には煤が多量に付着している。

土師器鍋B(7) 6と同じく折り返し口縁をもつが、6と比べ、口縁部は水平である。又、内面に段をつくらない。色調、胎土は6とよく似ている。型的的には1・6の流れをひくものと思われ、1より時期的にやや下るものであろう。

土師器皿C(8) 白っぽく緻密な胎土をもつ小皿で、口縁部は真直ぐに立ち、端部はわずかに尖り気味である。内面はナデ調整されているが、外面は不調整でユビオサエによる凹凸がのこる。

土師器皿D(9) やや大ぶりの皿で、口縁部は内湾しながらなだらかにのび、端部は丸くおさまる。内面はナデ調整がみられるが、外面は磨滅して不明である。淡黄褐色を呈し、



胎土は砂粒を若干含むが緻密といえる。

山茶碗 (10) 完形に近いもので、高台は低く、胴部の丸みは失われ、直線的になっている。口縁部はわずかに外反し、外側に面をつくる。内底部と胴部との境は認められるが、不明瞭である。高台には粃殻圧痕がみられる。内面胴部には部分的に煤が厚く付着している。淡灰色を呈し、胎土は細砂粒をやや多く含む。

3. 包含層出土の土器

土師器皿 (11) 不定形な粗雑なつくりの小皿で、内面はナデられるが、外面は不調整で凹凸がみられる。明るい白褐色を呈し、胎土は砂粒を少量含むが、緻密といえよう。

4. 結 語

東村遺跡は祓川右岸の沖積地に所在する。標高4m前後である。今回の調査は、県営圃場整備事業の排水路予定部分300㎡に対して行なった。掘立柱建物等の住居址の検出はみられなかったが、井戸址1、溝址8、ピット、不明の小段を検出した。井戸址から土師器皿、土師器鍋、山茶碗等の遺物が一括して出土している。溝址は南北方向に走るもの(SD2・SD3・SD5・SD8)と東西方向に走るもの(SD4・SD6)、さらに北東から南西方向に走るもの(SD7・SD9)がある。今回の小範囲の発掘では遺跡全体の性格を明らかに出来ない。遺物はSD4・SD9から土師器皿・土師器鍋・山茶碗がある。鎌倉時代後半～末頃の所産である。

東トレンチからはSE1・SD2・SD3・ピット・小段が検出された。井戸址のプラン確認面とSD2・SD3のプラン確認面とは約30cmの段差があ

陶器碗 (12) 削り出し高台による堅緻なつくりの碗形態と思われる。内外面に淡緑灰色の灰釉が厚く施されている。内面の釉には貫入がみられる。胎土は白灰色を呈する。

山茶碗 (13) 逆台形の比較的高い高台を有する山茶碗である。胴部は丸みを失い、直線的に立ちあがる。白っぽい灰色を呈し、胎土も緻密である。

以上が土器についての説明であるが、すべて中世(鎌倉時代)に属するものと考えられる。一括遺物としてのSE1、SD4に伴う土器はそれぞれ、SE1は鎌倉時代前半～中頃、SD4はそれよりやや下り、鎌倉時代後半～末頃に比定されるものであろう。

り、後者が低い。

西トレンチはSD4～9までの溝址がある。東端には東トレンチの井戸址を検出した面と同じ土層がみられる。他は現水田面となり一段低い。しかし、中央部に農道があり、この部分を走るSD4はプラン確認面が高く、その両側は約20cm低くなっている。つまり、西トレンチは元々全体が20cm高い面であり、後世の削平により水田化されたと考えられる。

以上を考え合わせると、SE1の東7mの小段は、当時の自然地形の段差であり、それ以东は低地、それ以西は微高地であったと考えられる。この微高地の東端に井戸址が作られており、当然人の居住があったであろう。建物等の検出はできなかったが、西方向に集落址の存在した可能性は十分に考えられるところである。(三ツ木貞夫・新田 洋)

VI 多気郡明和町

さいくうあと つゆこし 齋宮跡・露越遺跡

古里、齋宮、露越遺跡が周知の遺跡として遺跡台帳に登録されたのは、昭和45年であった。

齋宮遺跡は同年から始まった古里地区の調査を発端に10年を経て、昭和54年3月27日付で、「齋宮跡」として国史跡に指定された。その範囲は、齋宮の中町、牛葉、竹川の古里地区を含め、東西約2km、137haに及んでいる。

露越遺跡はこの齋宮跡の南西部に接しており、明和町大字竹川字露越と南裏地区の一部を含め、南北約500m、東西400mに及ぶ遺物包蔵地で、畑と一部の山林が含まれている。昭和53年度に行なった県農林水産部耕地課への照会による分布調査でも、平安時代の土師器片や灰釉陶器片の散布が認められた。齋宮跡と北限を境にしている位置関係からも、齋宮跡の関連遺跡であるものと推定されてきた。

昭和54年度齋宮地区県営圃場整備事業は、牛葉地区の宮城南限に沿って南方に開ける水田より露越遺跡が所在する畑の東半に及んでいた。

昭和54年9月、松阪耕地事務所、齋宮土地改良区と行なった保存対策協議の結果、宮城南限を通る幹線道路及び排水路部分の試掘調査と、宮域内の鈴池

地区を通る部分の本調査を実施することになった。

試掘調査は昭和54年10月12日から同27日にかけて、2m×6mと2m×4mのグリッドを83ヶ所に設定して行なった。調査の結果、すでに協議済みの鈴池地内の幅8m、延長約250m(1890㎡)の調査と、露越遺跡の牛葉墓地を南から西へめぐる幅2mの排水路部分、約160m(385㎡)の本調査を実施することになった。なお、露越遺跡の遺構面は表上下30cm以上あるため、排水路以外は工法上、遺跡の破壊も軽微であるものと判断された。

本調査は、齋宮跡の鈴池地区(第26-3次)を昭和54年11月1日から同12月12日に、露越遺跡(第26-4次)を昭和54年11月26日から昭和55年2月2日にかけて、齋宮跡調査事務所が担当して実施した。

なお、齋宮跡の遺構実測図作製にあたっては、国土調査法第6座標系を基準とし、方位の標示は真北(N5°40'E)を用い、露越遺跡については磁北を用いた。

調査に際しては、地元土地改良区、松阪耕地事務所、工事請負会社山野建設KK等の協力を得た。記して謝意を表したい。

1. 位 置

多気郡明和町は宮川と櫛田川によって形成された段丘と沖積地に位置している。齋宮跡、露越遺跡はこの段丘の一つ、齋宮段丘の中央西端部に位置している。

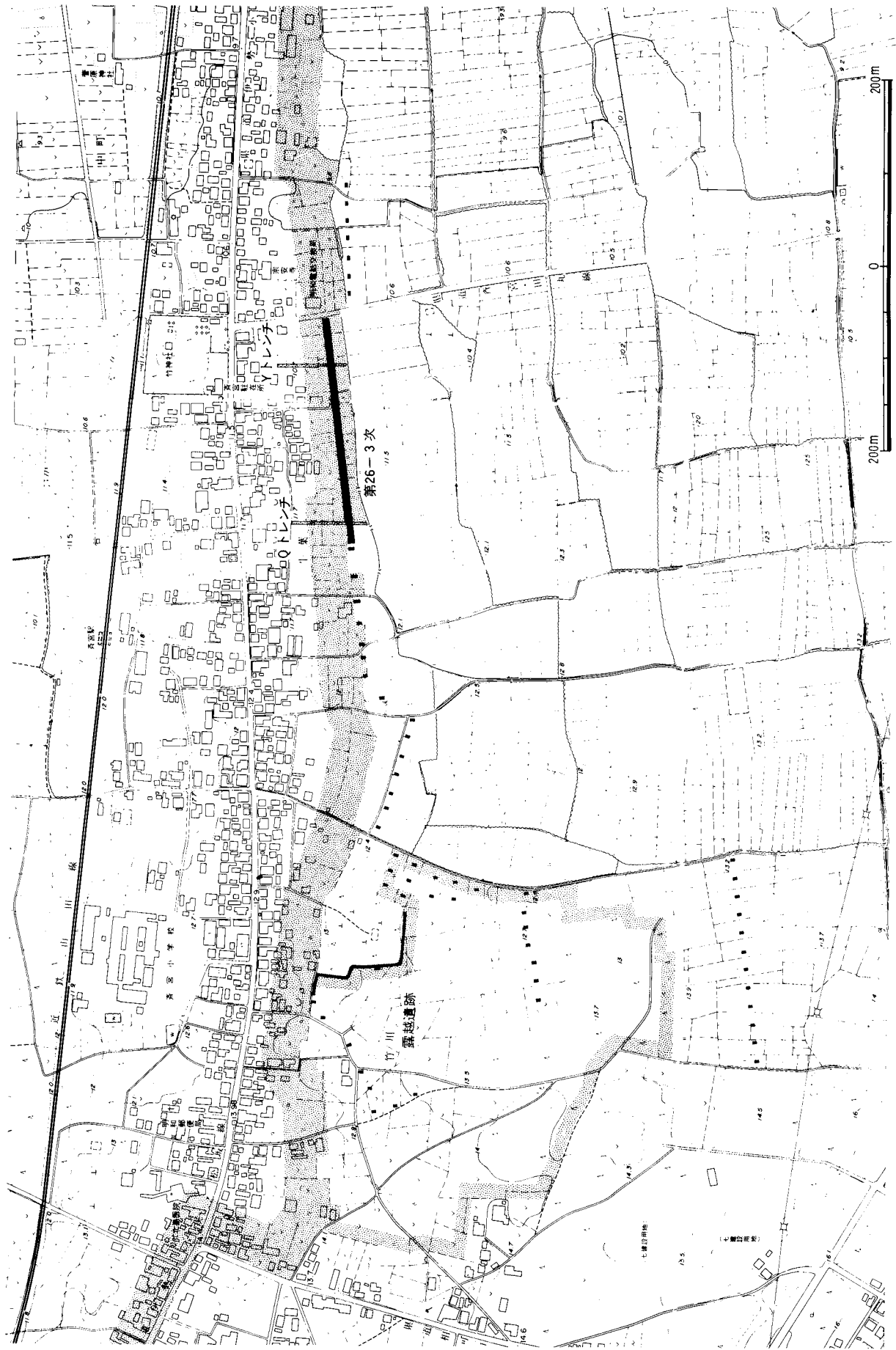
両遺跡の標高は、露越遺跡の所在する段丘西端部で13m前後、宮域東限に当たる部分では10.5m前後であり、遺構面は平坦で東方へゆるやかに傾斜している。また、宮域の南限になっている畑と水田との比高差は20cm～30cmであった。

最近、明和町近辺では、齋宮跡と並行期の遺跡から、齋宮跡と深いかかわりを想起させる資料がふえている。露越遺跡の南西に隣接する金剛坂遺跡、齋

宮跡北方1kmにある粟垣内遺跡、昭和52年国史跡に指定された明星の水池遺跡、多気郡河田の東裏遺跡等がそれである。金剛坂では円面硯、粟垣内では土器焼成遺構と土馬、水池では奈良時代の土器焼成遺構、東裏では緑釉風字硯と「中臣」銘の墨書土器などが認められている。

齋宮跡の調査は、昭和53年度から本格的な面的調査に着手したところであるが、資料がふえるに従いこれら周辺遺跡を含めた、より広範な保存対策が今後の問題として残されている。

なお、調査区は多気郡明和町大字齋宮字鈴池、同木葉山と大字竹川字露越、同南裏地区に属している。



第25図 発掘区平面図 (1 : 6000)

2. 斎宮跡(第26—3次調査)

1. 遺 構

調査区の遺構は全て黄褐色粘質土の地山面で検出した。東端部で表土下50cm、標高10.2m前後、西端部で表土下25cm、標高11m前後であった。包含層は東端で15cmを測るが、西へいくほど浅くなり西端では認められず、遺構上面も多少、削りとられているものと考えられる。

発見した遺構は土壇や溝が多く、その大半が室町時代以後のものであった。平安時代のもは少なく、井戸跡1、土壇4を検出した。

遺構は井戸をSE、土壇をSK、溝をSDの略号で示した。

1. 平安時代後半の遺構

一定量の土器を伴出し、時期が判断できるものに、調査区西端部のSK1510、SK1514と中央部のSK1527、SK1528、SK1529、SE1530がある。この時期の遺構分布には、かたよりがみられる。宮城南限でも、南方に張り出した畑の接点に当たっている。

(1) 土 壇

SK1510 深さ37cmで、西側はSD1507で切断される。全容は不明であるが土壇とした。土師器の杯、小皿、甕片と灰釉碗の小片が出土した。平安時代末期のものとして推定される。

SK1514 東西3.1mを測る。この土壇は、昭和50年のQトレンチ調査で、その東半が確認されている。これらの結果より、南北は1m以内で、東西に細長いものと推定される。西半は約6cm、東側は一段低く、約12cmであった。土師器の杯、小皿、甕の細片が少量出土した。SK1510と同期の土壇である。

SK1527 長径4mで、深さは10cm前後。中央と東半に深さ25cmの深みがあるが、全容は不明。出土遺物は土師器杯(20・21)、皿(22~26)、灰釉広口瓶(30)がある。図示したものを以外に山茶碗片と、土師器甕の細片を含む。平安時代末のものであろう。

SK1528 確認できる長径は3.3m、深さは62cmで底部は平坦であった。出土遺物は少ない。図示した土師器甕(1・2)、碗(5)以外に土師器碗片が含まれる。SE1530出土品よりやや古いものであろう。

SK1529 4.3m×2.7m、深さ5cm~8cmの不定形で、浅いくぼみ程度のものである。西側の4ヶ所に隣接する径50cm前後の浅いくぼみ(深さ10cm前後)も、同じ黒褐色の埋土で、この土壇に伴うものであろう。灰釉皿(28)、碗(29)と、土師器の小皿、高杯、甕の細片が出土した。SK1510と同時期のものであろう。

(2) 井 戸

SE1530 径2.6m×2.4mの円形に近い素掘井戸である。断面は漏斗状を呈し、上から1.1mまではゆるい傾斜で狭まり、以下の底部は垂直に近い断面を呈する。深さ2.3mで湧水多く底に達する。底部は70cm×50cmの楕円形で非常に狭い。出土遺物は図示した土師器杯(8~18)、碗(7・19)、甕(3・4)、鉢(6)の他に、土師器杯3、高杯1、甕3、灰釉皿27を含めて3個体分の細片がある。

2. 室町時代以降の遺構

室町時代から近世初頭のものとして推定される溝SD1515を中心に、これに伴う土壇や同時期の溝跡を調査区全面に渡って検出した。

(1) 溝

SD1515 調査区の東端部から西端部にかけて、延長194mを検出した。幅は1.2m~2.5m、深さは20cm~34cmで、底部が平坦な溝である。壁面は北より南側の傾斜がゆるい傾向があり、2段になる所もある。また部分的に2条に分かれる小溝を伴っている。調査区はE83°Nで、東で7度近く北へ偏っているが、この溝もほぼ調査区に沿って東西に延びている。また、一定間隔で南方へ直交して分かれる溝が9ヶ所にみられる。中央部の最も広い部分で37m、東側では14m~16m、西半では36m前後の間隔であった。

出土遺物は、山茶碗(36)、ねり鉢、常滑鉢や甕、天目茶碗(35)やすり鉢等の陶器類と、薄手の土師器である落し蓋(34)、鍋類(31~33)が多く、近世初頭頃のものと思われる志野、有田系の茶碗類が少量含まれる。また、平安時代の土師器の皿、杯、高杯や灰釉皿等も混入する。整理箱に一箱ほど出土しているが細片が多い。各時期の土器が入り混って出

土した。

SD1535 調査区東端部から西方へ70mまで続き、SD1515に吸収されるように跡切れ、東は調査区外東方へ延長する。幅は0.6m～1m、深さは6cm～12cmで浅い。出土遺物は微量であったが、SD1515に切れ、埋土もやや黒色を呈していること等よりSD1515より古い溝である。しかし、SD1515に沿って延びていることから、時期差の少ない、関連するものであったと推定される。

SD1538 2条とも幅30cm～50cm、深さ5cm内外の浅い溝で、中世陶器片1が出土した。SD1515かSD1535のどちらかに関連するものであろう。

SD1534 幅50cm～70cm、延長30mで両端とも跡切れる。深さは中央部で6cm、両端部で14cm前後である。土師器の鍋片が出土しており、SD1515に並走することから、SD1515に係わるものと推定される。

SD1526 SD1515に伴う溝で、延長27mに渡って分流する。深さは、中央部で約10cm、SD1515に合流する東端部は19cmで、SD1515より一段高い。西は徐々に深くなりSD1515と同レベルで交わる。

SD1524 幅1m前後で、延長42mを検出した。中央部は5cm前後で跡切れているが、西端は約12cmであった。出土遺物に中世の施釉陶器があり、SD1515に並走していることから、SD1534と同質のものであろう。

SD1522 幅25cm、深さ約12cm、延長は7mで、東端はSD1515に伴うSK1523に、西端はSD1515に交わっている。SD1515に伴う溝であらう。

SD1517 東端のSD1515と交わる地点では、深さ23cmを測り、西方へ徐々に浅くなり、西端部では約10cmであった。SD1526によく似た状況の溝であり、調査区外の西方でSD1515に合流するものであろう。

SD1516 幅30cm～60cm、深さは10cm前後。出土遺物はなかったがSD1515の西端の南北溝に並走しており、これに係わる溝である可能性が高い。

SD1512・1513 2条とも深さ5cm程度の浅いものである。昭和50年のQトレンチ調査の結果から、この2条は南方8mの地点で交わり、幅1.2mの溝になり南へ続いていることが明らかである。SD1516

と平行する南北溝であり、これと同質のものであろう。

SD1504・1506・1507・1509 SD1504とSD1507の2条は共に幅1m、深さ18cm内外の並走する溝で、埋土は暗灰褐色土で、SD1515に類似する。SD1506は深さ10cmで、両端はSD1504とSD1507に交わっており、形や規模はSD1522に似ている。SD1509はSD1507に伴うものと思われる。

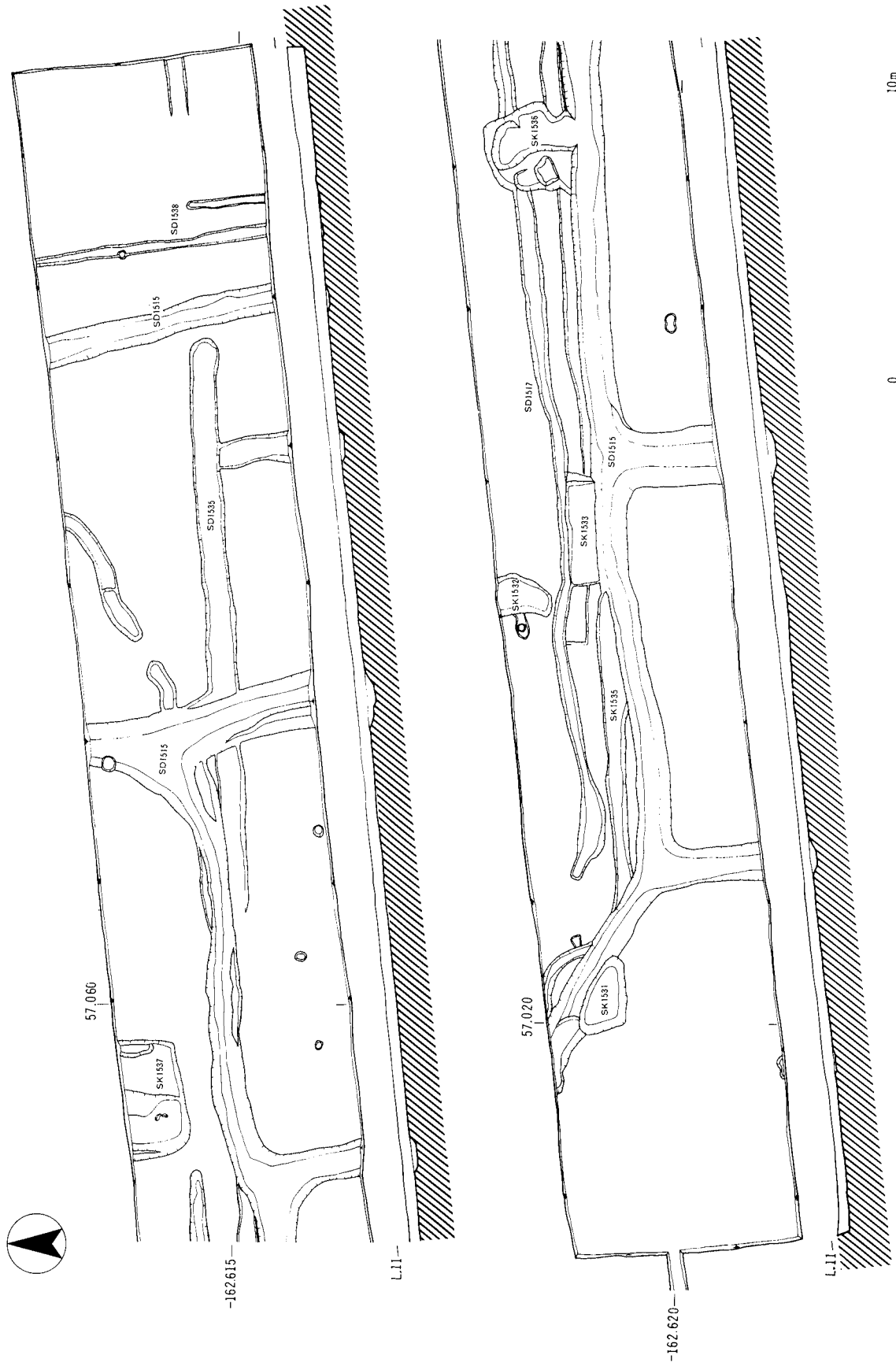
出土遺物に山茶碗や天目茶碗を含んでおり、SD1515と同時期のものと推定される。なお、Qトレンチ調査で発見されたSD1502、SD1503は深さ20cmで、土師器の鍋片が出土している。SD1504、SD1507は、それぞれSD1502、SD1503に続いているものと考えられる。また、SD1502、SD1503は、更に東へのびて、調査区北方でSD1515の東西溝につながっている可能性が高い。

(2) 土 塚

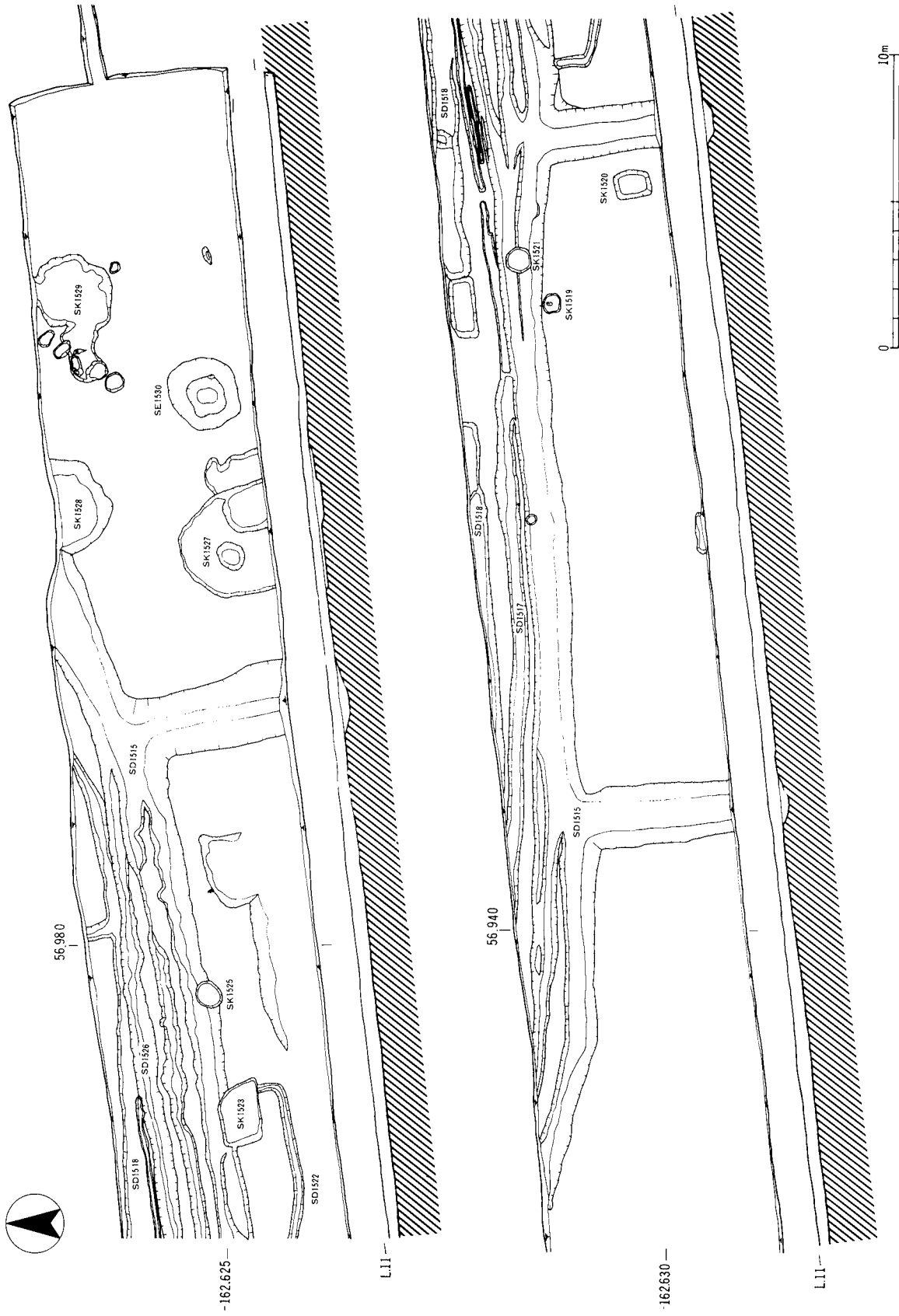
SD1515に伴う土塚、出土遺物はほとんどないが、埋土状況、位置関係等より、SD1515に伴うものと考えられる土塚である。SK1533、SK1536以外は垂直に近い壁面を呈し、平安時代の土塚に比べて深いものが多い。平面プランや規模はそろはないが、詳細は表の通りである。

遺構番号	規模 (cm)		出土遺物	備 考
	長径	深さ		
SK1536	320	39	なし	SD1515より新底部凹凸
SK1533	380	18	土師器鍋片	SD1515より新
SK1531	280	51	土師器片	SD1515より新
SK1525	90	80	なし	SD1515との新旧不明
SK1523	120	43	施釉陶器片	SD1515より新
SK1520	120	46	山茶碗片 施釉陶器片	—
SK1521	90	90	土師器鍋片	SD1515との新旧不明
SK1519	60	31	なし	底部に径20cmの自然石

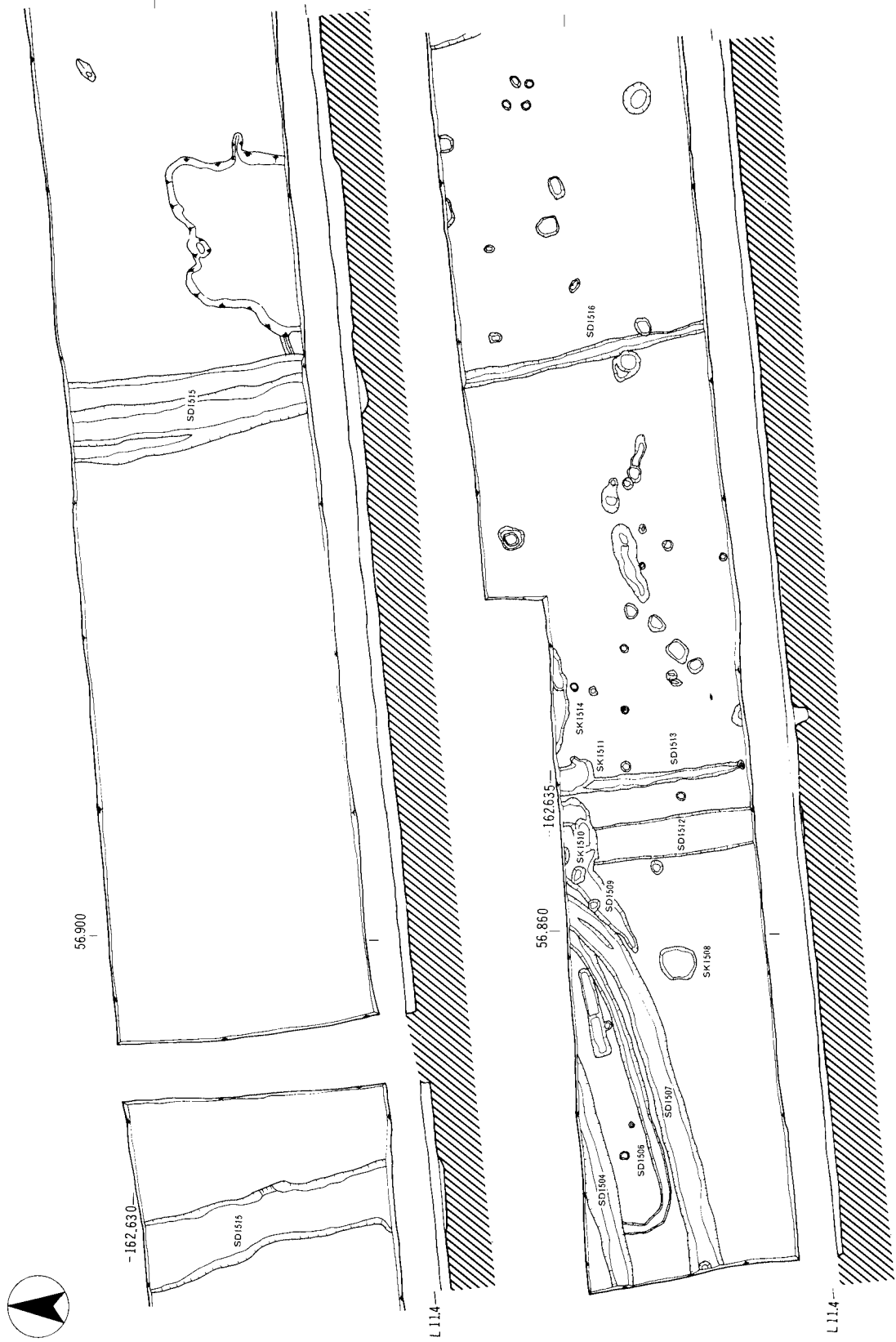
第9表 SD1515に伴う土塚



第26図 遺構平面図 (1 : 200)



第27図 遺構平面図2 (1 : 200)



第28図 遺構平面図3 (1:200)

3. その他の遺構

(1) 土 塚

SK1537 長径4mの方形土塚である。深さは中央部が11cmで、西半は25cmで一段低い。壁面は西がゆるく、東は垂直に近い。西壁沿いに、深さ10cm前後の溝が北へのびている。黒褐色の埋土中に、平安時代後半の土師器片2点が出土したのみである。

SK1532 幅1.3m、深さ15cmの土塚である。近辺に浅い溝も多く、北へのびて溝になることも考えられる。

(2) ピット群

西端部に散在する。径20cm～80cm、深さ20cm～50cmのものが多い。平安時代末のものが多いが、室町時代のものも混じる。

2. 出土遺物

奈良時代から近世初頭に至る各種土器が出土した。遺構に伴うものは少ないが、総出土量は、耕作土や包含層より採集したものを含めて、整理箱に20箱程度であった。

常滑系の山茶碗、鉢、甕、瀬戸系の天目茶碗、黄瀬戸鉢、すり鉢、土師器の鍋、茶釜、近世初頭の染付け碗等が大半をしめる。ついで、平安時代後半の土師器や灰釉陶器が多い。奈良から平安前半のものは、須恵器の甕や杯の細片が少量であった。また青磁碗の細片も2点出土した。なお、緑釉陶器片は31点が出土しており、調査区の西端部に多い傾向がみられた。

1. 平安時代後半の土器

(1) 土 師 器

土師器の杯は、すべて平城宮跡における分類で、e手法に属するものである。しかし、SE1530とSK1527出土のものには、胎土や調整法等に差異がある。前者は、胎土が良く、薄手で淡茶褐色のものが多い。後者は、胎土に砂が多く、厚手で調整度も粗雑であり、伴出品にハケ目のない甕や山茶碗がたまに混じる。最近の調査では、両者を同時に伴う土塚がみられないことから、多少の時期差が考えられる。前者をA、後者をA'とした。また、SK1527出土の小皿については、「齋王宮跡発掘調査報告I」に準拠し、B、B'とした。

甕 (1～4) 1は口径14.6cm、胴部で19.6cm。口縁部先端はわずかに内側に折り返される。表面は継方向、内面は右方向へのハケを施し、後で口縁部のみヨコナデされ、やや肥厚する。2は1と類似するが、口縁部折り返しが小さく、内面は横方向のナデ調整である。3、4は、口径が16cm内外でやや大きく、口縁部の折り返しも明瞭で、ハケ目も粗い。胴部以下の底部は内外面共にヘラ削りされ、内面は3がナデツケ、4はヨコナデされる。胴径が器高より大きく、球形に近い。いずれも胎土良く、淡茶褐色を呈し、肩から底部まで煤が厚く附着する。

台付碗 (5) 口径19.2cm、器高9.6cm。糸切り痕の残る底部以外は、白っぽい淡茶褐色を呈する。耳を欠く。

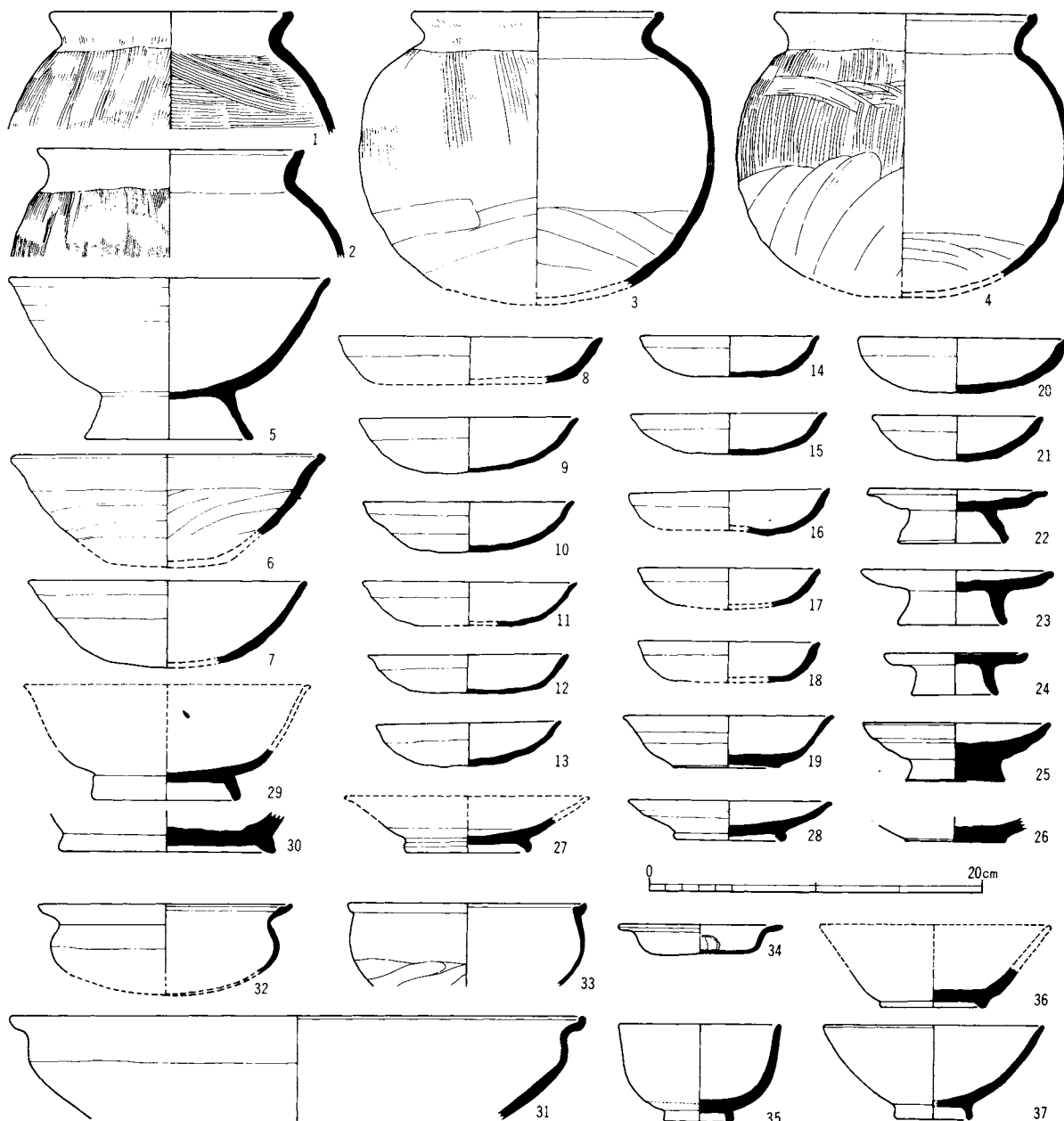
碗 (7・19) 7は口径17cm、器高約6cm。調整、胎土は杯Aと同質である。鍋に利用されたものか、下半部に煤がつく。19は口径約12.7cm、高さ3.1cm。ロクロ挽きで製作されたもので、底部は糸切りされ、端部は台状にわずかな段がつく。底部以外は、ていねいにヨコナデされる。

杯A (8～18) 口径16cmに復元されるもの(8)と口径11cm～13cm、高さ2.5cm～3cmのものがある。内面と口縁部はヨコナデされるが、外面は不調整で凹凸があり、指圧痕がつくものが多い。口縁部がわずかに外反し、かすかに稜がつく。厚さ3mm前後の薄い杯であるが、17・18のように口縁部がやや肥厚するものがある。また、口縁部にゆがみがあるものが多い。色調は白っぽい淡茶褐色のものが多いが、淡灰褐色も混じる。胎土は良いが、白色半透明の砂粒を少量含む。

杯A' (20・21) 20は口径12.5cm、高さ3.3cm。21は一回り小さい。口縁部内側を押さえて先をまるくおさめる。茶褐色で、胎土は白色と灰白色の砂が多く、粗い。

皿B (22～24) ヨコナデ調整による浅い小皿に高台をつけたものである。口径は23が12cm、25が8.6cmで、高さもそろわない。22は、口縁部を水平にひきだし、高台先端部に平らな面をつくる。茶褐色で胎土も良く、金雲母を含む。24・25は杯A'と同色、土質の胎土である。

皿B' (25・26) 共にロクロ挽きによるもので、



第29図 土器実測図 (1 : 4)

(SK1528; 1・2・5, SE1530; 3・4・6~19・27, SK1527; 20~26・30)
 (SK1529; 28・29, SD1515; 31~37)

底部の糸切り痕と、ロクロ目が明瞭である。25は26の高台を高くしたもので、径11.2cm、高さ3cmの小皿である。胎土に砂を含み、やや粗い。

鉢 (6) 口径19cm。口縁部のみヨコナデされ、他は全面に横方向のヘラ削りが施行される。明茶褐色で、胎土は白色の砂が多く、粗い。内面胴部に炭化物のこげつき痕が残る。口縁部を欠く。

(2) 灰釉陶器

皿 (27・28) 27は高台の端部を内弯させ、底部はヘラ削りされる。28は高台端部をまるくおさめ、

底部から体部までヘラ削りされる。灰釉は内面だけで、27が重ね焼き痕の残る見込み部分までで、28は全面にうすく施され、淡黄緑色を呈する。灰白色で胎土は緻密である。

椀 (29) 高台径9cm。底部は糸切りのあと高台が貼り付けされる。内外面共にし、ていねいにロクロ挽きされ、重ね焼き痕の残る中心部以外の内面に、淡黄緑色の灰釉がうすく施される。

広口瓶 (30) 幅の広い高台を貼り付け、高台部のみヨコナデされる。底部は、内外面共にナデツケ

され、体部表面はへら削り、内面はヨコナデされる。灰釉は外面だけうすく施される。

2. 室町時代から近世初頭の遺物

土師器鍋 (31~33) 31は口径34.5cmで、浅いほろく状の鍋で、外反する口縁部の先端は、内側に引きだされる。32は小型のもので、折り返し口縁をもつ。32は口縁部を外側に折り返し、上端に面をつくる。口径14cm。いずれも、口縁部と内面をヨコナデし、外面は体部から底部をへら削りされる。31・32は茶褐色で、胎土は緻密である。33は茶褐色で、胎土もやや悪い。

落し蓋 (34) 径10cm、内面中央部に薄く扁平で、粗雑なつまみを貼り付ける。平らな底部より口縁部を水平に外返させる。口縁部ヨコナデ、外面不調整。淡茶褐色で、胎土は緻密である。

天目茶椀 (35) 径9.8cm、器高6cm。径4cmの小さい削りだし高台で、底部から体部をへら削りされる。底部以外の全面に茶褐色の鉄釉が厚くかかる。白灰色で、胎土に白色の砂を含む。

山茶椀 (36) 断面逆台形で、靱痕のつく粗雑な高台を貼り付ける。糸切り底の底部より、直線状に体部に達する。内面は底部と体部の境が明瞭である。白灰色で、胎土に灰白色の砂が多い。

茶椀 (37) 径13.2cm、高さ5.6cm、底部以外の全面に淡黄褐色で、貫入、光沢のある釉が施される。削りだし高台で、内面底部にトチ痕跡がある。胎土は灰白色で、きわめて緻密であり、磁器に近い。近世初頭まで下るものであろう。

3. まとめ

調査区の近辺では、宮域範囲確認調査に際し、Qトレンチ調査とYトレンチ調査が行なわれている。今次調査区東端部で行なったYトレンチ調査では、SD1515以外の遺構は皆無であった。しかし、Qトレンチ調査では、今次調査以北の畑で多くの遺構が検出されている。

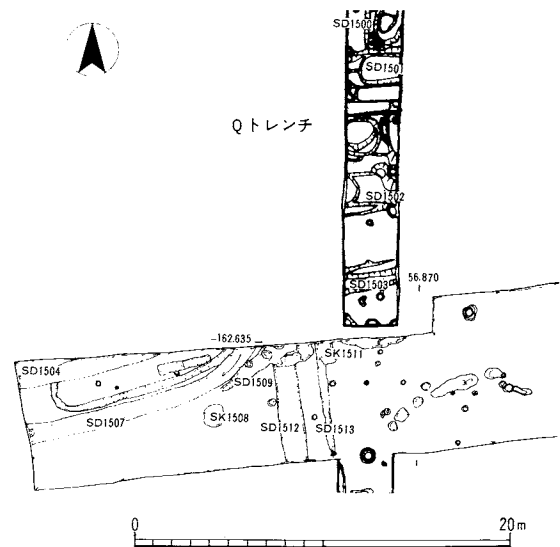
Qトレンチで検出したSD1500、SD1501は、いずれも平安時代後半の溝である。SD1500は、真北へ44mのびて東西溝と交わる。SD1501は、これに対応するものと考えられる幅2m、深さ80cmの東西溝であり、これらの溝の近辺には、土壇やピットが

多い。しかし、SD1502を境に南側の遺構検出面は、20cmほど低くなると共に、平安時代の遺構も急に少なくなる。これらの状況より、SD1501は宮域の南限を限る溝であるものと推定されてきた。昭和54年度に行なった個人住宅新築に伴う緊急調査(第25-10次)でも、平安時代後半の井戸や溝跡の他に、奈良時代の土壇等も検出されており、宮内でも遺構密度が高い地区であることが、明らかにされつつある。

一方、SD1510以南の水田では、今次調査区でも、検出した平安時代の遺構は少なく、その分布にもかたよりがみられた。概ね、現状の畑と水田の境界に沿って公布する傾向をみせている。調査区より南方の広い水田は、今日まで、古代条里制の地割りが良く残されてきた所である。SD1515等の溝はN-10°-Wに復元される斎宮条理の地割りに、きわめて近い方向であった。

これらの状況は、現状の畑と水田部との境が古来より、大きな改変が少なかったことを想起させると共に、斎宮跡の南限の様子的一端を示すものと判断される。

SD1515は、中世以後の溝であるものの、宮域南限の状況を把握する上で、重要な意味をもつものであろう。



第30図 遺構平面図4

3. 露越遺跡

1. 遺 構

調査区は標高13m～13.3mで、ほぼ平坦な畑である。遺構は表土下25cm～40cmの黄褐色粘質土の地山で検出した。中央部が浅く、両端部が深い。耕作土が25cm内外、黒色土の包含層は5cm～10cm内外であった。

検出した遺構は奈良時代後半から近世初頭に至る各時期の土壇、井戸、溝等があるが、調査区が狭く全容が不明なものが多い。溝17条、土壇6、井戸1基と多数の小ピットを検出した。

1. 奈良時代後半の遺構

SK8 径4m、深さ50cm。底部が平坦な土壇で、両壁が2段になる。全容不明で、竪穴住居の可能性もあるが、土壇とした。土師器杯(1～3)、甕(7)の他に、土師器皿、須恵器杯の細片が出土しただけである。

2. 平安時代中葉の遺構

井戸1基、溝2条、土壇3を検出した。

(1) 井 戸

SE10 径3mの素掘り井戸で、西半は深さ74cmまで地山を削り一段を設けている。東半は径1.8mの円形である。深さ2mまで掘り下げたが底がでず、井戸と判断した。出土遺物は図示した灰釉段皿(10)皿(11)、土師器甕(8)、杯(5)以外に、製塩土器片1を含み少ない。

(2) 土 壇

SK15 径80cm、深さ8cm、土師器甕片が数点出土したにとどまる。

SK21 長径2.2m、深さ47cm。**SK22**との切り合いも不明である。土師器杯片、甕片が各1点ずつ出土した。

SK22 径2.2m、深さ45cm。南側に深さ13cmの浅い土壇を伴う。埋土は黒褐色であった。出土遺物は、黒色土器碗(6)、土師器杯(4)、甕(9)、灰釉皿(12)があり、他に土師器杯3、こしき1、志摩式製塩土器の細片が出土した。

(3) 溝 跡

SD13 幅1m、深さ10cmで、東西の方位(磁北)

に乗る溝である。遺構検出面が表土下25cmで、包含層も認められないことから、上面が削りとられていることも考えられる。土師器甕片1点が出土しただけであるが、平安時代中葉とした。

SD16 幅80cm、深さ6cm～12cm。出土遺物はない。**SD13**と同規模で、東西の方位に乗ることや、**SD13**と同じ黒褐色の埋土であることから、平安時代中葉とした。

3. 平安時代後半の遺構

SSK14 深さ74cm。全容は不明であるが土壇とした。灰釉皿と厚手で胎土の粗い杯の細片が出土した。

ピット群 **SD13**から**SD16**の周辺に、埋土が良好で、深さ20cm～30cmのピットが多い。出土遺物はほとんどないが、土師器の杯、皿の細片が出土している。

4. 室町時代から近世初頭の遺構

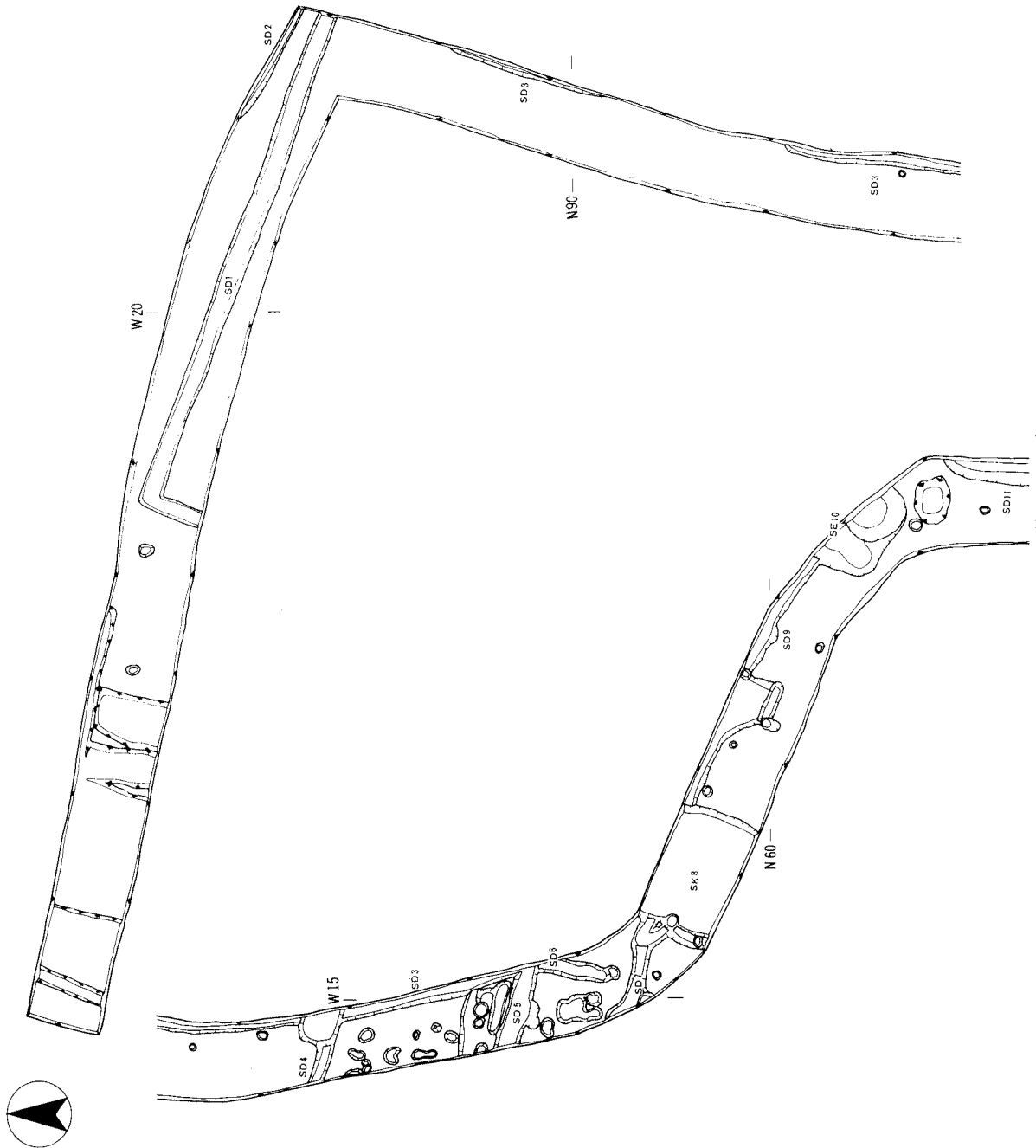
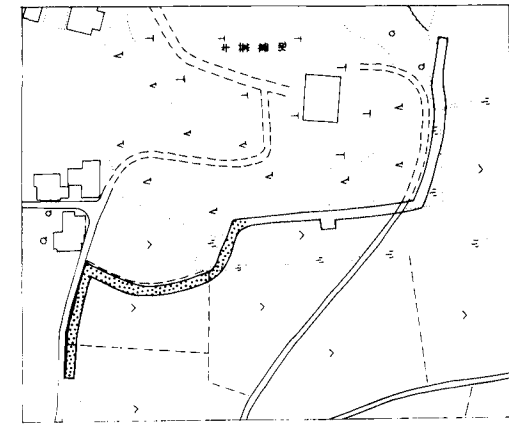
溝13条が検出された。

SD1 包含層上面より確認される。幅50cm～70cm、深さ50cm内外。壁面はほぼ垂直で、底部の平坦な溝である。E-20°-Sの方向で東西に延び、西端は直角に南へ曲る。

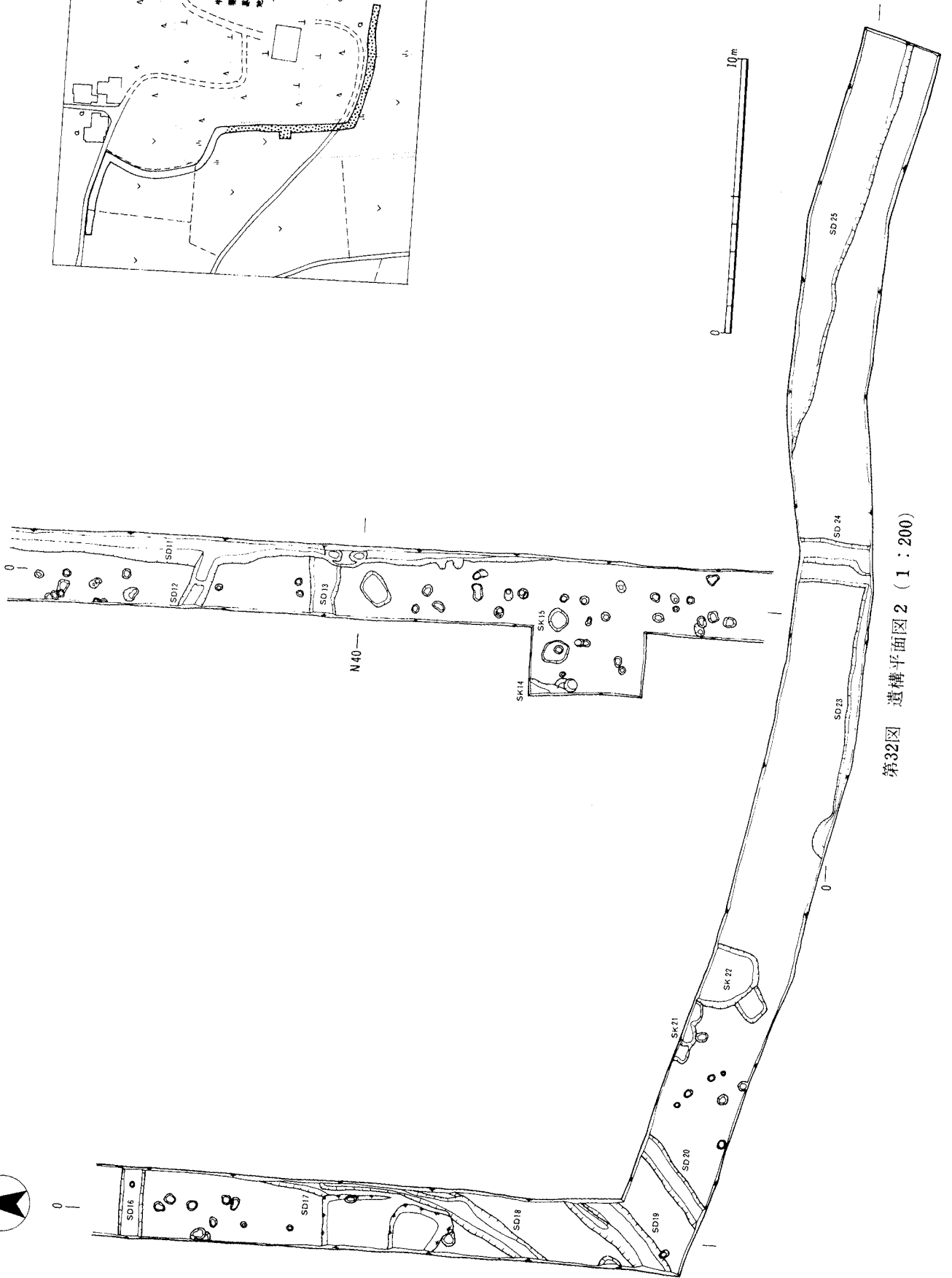
溝が25cmほど埋った後で、図化した茶釜形土器(13～16)、陶質鉢(24・27・30)等の各土器が、西端コーナーの西壁にもたせかけるように出土した。これらの土器は、3列で2～3段に重ね積みされ、いずれも土師器小皿(17～23・25・26・28～31)や、落とし蓋(32)が内容物として納められていた。また、東端部よりの溝底部より土師器鍋(33・34)も出土した。

SD2・3 調査区の北隅から東側に通ずる農道に沿って南にのび、**SD5**を削り東へ曲るものと推定される。**SD3**は深さ14cmであるが、**SD4**の南端部は30cmで、南方へ徐々に深くなっている。**SD3**よりすり針と土師器燈明皿の細片が出土した。

SD4～7 **SD4**、**SD5**、**SD7**は、**SD1**の東西溝に並走し、**SD6**は**SD1**の南北溝に平行である。**SD4**、**SD6**、**SD7**は同規模で、幅46



第31図 遺構平面図1 (1 : 200)



第32図 遺構平面図2 (1:200)

cm内外、深さ20cm内外である。SD5は幅2mで、深さは北側が24cm、南半は31cmであった。SD4、SD5、SD7は西に、SD7は北に延長しており、SD1と直交して、長方形の区画をなす可能性が強い。SD5より茶釜、SD6より鍋と山茶碗の細片が出土した。

SD9 SD4より続く溝であろう。SE10の土面を削り東方へのびる。出土遺物はない。

SD11 SE10の直前から南へ22m続く。調査区の東側には牛糞墓地を西から南へめぐる幅1.5の溝が接しており、かって、この溝の西肩部分であったものと推定される。山茶碗、鍋の細片が数点出土した。

SD12 幅80cm、深さ36cm、西方よりSD1と同方向でSD11と交わっている。出土品はないが、SD11に係わるものであろうか。

SD17・18・19・20 いずれも同じ方向に並走する溝で、東方でSD11と交わるものであろう。SD18は幅80cm、深さ30cm、SD19は幅1.4、深さ40cm、SD20は幅60cm、深さ20cm内外であった。SD19より山茶碗(36)、瓦、土師器鍋、鉄釉陶器片が出土した。

SD23・24 SD23は延長20mで、東端はSD24と交わる。深さは24cm。SD24は幅1.6mで、深さは西半が24cm、東側は42cmで、一段深くなる。SD24より、天目茶碗、鉄釉すり鉢片が出土した。

SD25 幅2m以上、深さ20cm前後で底部の平坦な溝。SD24と共に牛糞墓地の周溝に交わるものであろう。天目茶碗、鉄釉皿、志野系の茶碗、山茶碗の細片が出土した。

2. 出土遺物

1. 奈良時代後半の土器

図示できたものは、SK8出土の土師器だけであった。いずれも保存状態悪く、磨耗がはげしい。

杯(1~3) 2は口径17.4cm、深さ3cm。口縁部と内面を横なでし、他はへら削りされるものであろう。茶褐色で胎土は精良、口縁先端部が剥落する。2・3は1とタイプの異なる杯である。口径に比して、やや深く、底部から内弯気味に口縁部に達する。口縁部と内面はヨコナデされるが、杯下半部は指押

えで、粘土ひもつなぎ痕が残る。淡黄褐色で胎土に細砂を含む。

甕(7) 口径が16cm内外の小型の甕で、胴径が口径より小さいものである。外面は細いハケ、内面は肩部にやや粗いハケを施し、体部以下はへら削りされる。口縁部は磨耗するが、ヨコナデされるものであろう。

2. 平安時代中葉の土器

(1) 土師器

杯(4・5) 4は口径14cm、高さ3cm内外の浅い杯で、茶褐色を呈する。5は口径、深さともに大きく、口縁部もあまり外反しない碗状の杯で、淡褐色を呈する。手法は同じe手法であるが、タイプのちがう杯である。

甕(8・9) 8は口径約24cm。口縁部はくの字に外反し、上端を強くナデて面をつくり、先端は内側に折り返されたようになる。胴部は縦方向の粗いハケを施す。9は口径約26cm、球形に近いものであろう。口縁上端はわずかに内側に折り返される。口縁部はヨコナデされる。外面は煤がつき、胎土に砂粒を含む。胴部に凹凸がめだつ。

黒色土器碗(6) 口径約20cm、高さ6cm、内面は底部に一定方向の、体部に横方向のへら研きを施し、いぶし焼きされる。外面は口唇部のみヨコナデされ、体部はへら削りされる。淡茶褐色を呈する。断面V字型の低い高台を貼り付けている。平安中葉でも前半に近いものであろう。

(2) 灰釉陶器

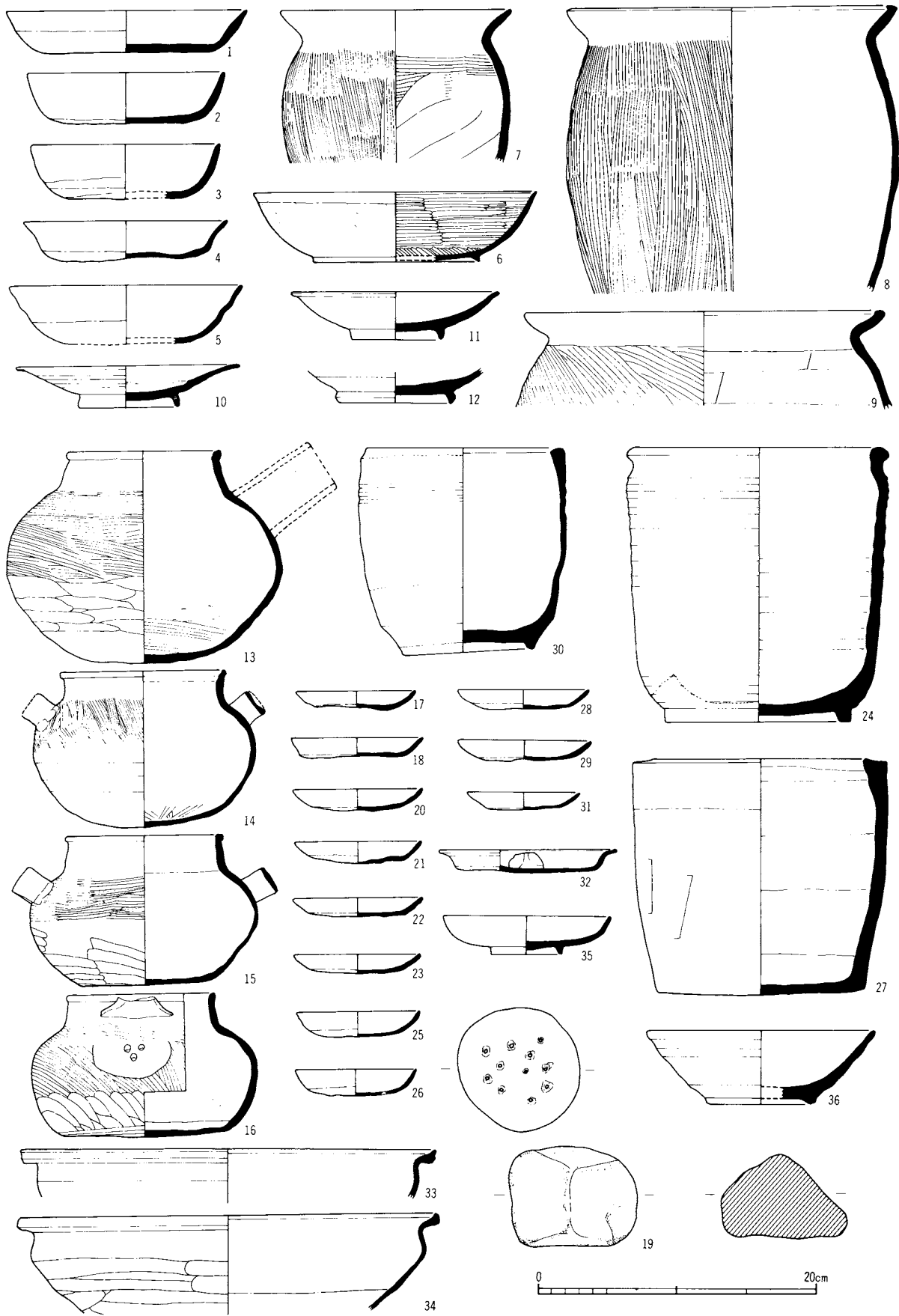
段皿(10) 口径16cm、器高3cm、底部はへら削りされ、付け高台の先端はまるくおさめられる。外面は施釉なく灰白色、内面は重ね焼き痕の残る見込み部分まで淡黄緑色の灰釉が薄くかけられる。胎土は白色の砂粒を少量含む。壺を欠く。

皿(11) 口径15cm、器高3.4cm。底部はへら削りのあとヨコナデされる。付け高台の端部は内弯気味になる。施釉は10と同様でハケぬりされている。

碗(12) 碗であろう。高台は低く、先端部は内弯する。平安時代後半のものに類似するが、SK22の伴出品であり、中葉とした。

3. 室町時代から近世初頭の土器

山茶碗(36) 以外は全てSD1の一括出土遺物で



第33図 土器・石製品実測図 (1 : 4)

(SK 8 ; 1 ~ 3 · 7、SE10 ; 5 · 8 · 10 · 11、SK22 ; 4 · 6 · 9 · 12)
 (SD 1 ; 13 ~ 35、SD19 ; 36)

ある。土師器小皿はいずれも同様のもので、径8.5cm～9cm、高さ1.6cm～2cmである。口縁部がいびつで、底部に凹凸が目立つ。淡茶褐色あるいは黄褐色を呈し、胎土の良い皿である。底部内外面をナデて、他をヨコナデするものと、外面底部は不調整で、他をナデて仕上げるものがある。

茶釜形土器(13・14・15・16)は、胴径が器高より大きい平底の土器で、口縁部は上端に面をつくり、わずかに外側に折り返される。口縁部はヨコナデ、頸部から胴部はハケ調整、下半部はヘラ削りされ、底部はナデられるものと、ナデとヘラ削りを併用するもの14がある。胎土は緻密で茶褐色を呈する。

茶釜形把手付鍋(13) 口径11cm、器高15cm、把手径は約4cm。内面頸部以外は粗いハケ目が残る。口縁部に煤が付く。底部中央に土師器小皿17、18の2枚を18を下にして重ね、その上に自然石19を置く。南側の下段より出土する。

茶釜形耳付鍋(14・15) 14は口径12cm、胴径16cm、高さ11cm。内面はナデられ、底部に3本一対のカキ目が残る。土師器小皿28を底部に置き、口縁には瀬戸系施釉皿35が高台を下にして、蓋をするように置かれていた。中央下段の陶質鉢27に乗せるように重ねられて出土する。15は口径11.4cm、胴径18.4cm、高さ10.8cm。片方の耳を欠く。内面は底部のまわりに細いハケを施すが、他はナデられている。内部に小皿20・21が入れられていた。15は、胴部から口縁部の大半を欠く鉄釉鉢24の底部に納められ、北側中段より出土する。

吊手付茶釜形注口土器(16) 口径10.6cm、胴形18.2cm、高さ10.2cm、底部平坦で胴部との境が明瞭である。長径5.5cmの楕円形の注口貼り付け痕と、口縁部に一対の吊手貼り付け痕(幅2.5cm)が残る。内面は底部をヨコナデし、胴部はヘラによるナデ痕が残る。外面に煤が厚く付く。土師器小皿22・23を裏がえしに重ねて内蔵し、北側の下段より出土する。

鉄釉鉢(24・30) 口径18.8cm、高さ19.4cm。底部と高台外縁部を削りだし、口縁部は上面を丸くおさめ、端部は外側に引き出される。灰褐色で胎土良く、茶褐色で光沢のある鉄釉が厚くかかる。中に土師器小皿25・26を重ねて置く。下に置かれた26は、11ヶ所に直径約2mmの穴が底部外面より穿孔されて

いる。茶釜形土器16の上に重ねられていたと推定されるが、北側にずれ落ちた状態で出土する。30は口径14.2cm、高さ14.6cm、口縁部を欠く。口縁部の下に2条の沈線をめぐらす。調整、施釉、胎土共に24に類似する。底部に土師器小皿31を置き、その上に落し蓋32が乗せるように置かれていた。南側上段で、茶釜形土器13の口縁部に重ね置きされて出土する。

陶質鉢(27) 口径18.4cm、高さ17cm。口縁部はヨコナデ、胴部はヘラ削りのあとヨコナデされる。内面は底部をヨコナデし、胴部はナデツケされ、輪積痕と指押え痕が残る。底部に土師器小皿29が置かれ、皿の上に赤漆の剥片が認められた。高台をもつ木製漆碗が乗せられていたものと推定される。中央下段より出土する。前述の茶釜形土器14がこの上に乗せられていた。

瀬戸系皿(35) 全面に貫入があるにごった淡緑色の施釉があり、内側中央部にうすい紺色の梅花風の染め付け文様があるが、不明瞭である。削り出し高台で、外面はヘラ削りされる。

落し蓋(32) 口径12.8cm。底部に板の上で押えられたと思われる稿状の跡が残る。前述の鉄釉鉢30の内容物である。

土師器鍋(33・34) 共に口縁部の大半を欠く。口径約30cm。水平に外反させた短い口縁で、先端は上方へ引きだされる。体部のハケ目はみられない。

山茶碗(36) S D 19の出土遺物。口径16.5cmで、底部は糸切りのあと、靱痕の多い低い高台を付ける。ロクロ調整粗雑で、胎土は灰色の砂が多く粗い。伴出した土師器鍋より古い鎌倉時代のもので、混入品であろう。

3. ま と め

今回の調査では調査区が狭く、断片的な資料しか得られなかったが、露越遺跡および齋宮跡南西端部の様子を知る手がかりを得た。

本調査区で検出した平安時代の遺構はかなり多い。しかし、旧参宮街道以北の宮域内における遺構分布状況に比べると、大きな差異が認められる。

宮域内では、掘立柱建物跡や溝跡、土坑等が東西、南北に連続的に配されるのに対し、本調査区では、

中央部に集中的に検出されただけであった。また、試掘調査でも、今回の調査区以外には、同期の遺構は皆無であった。32ヶ所に設定したグリッドの内、5ヶ所より室町期以後の溝が検出されたにとどまっている。これらの結果は、齋宮跡に係わる同期の遺構が、露越遺跡全面に広がる可能性が少ないことを示すものであり、齋宮跡が現在の南限を越えて南に広がる可能性も少ないことを示すものであろう。

しかし、今回の調査で検出したSD13やSD16のように、真北に対し、5度内外西へ偏る溝が並走したり、近くにピットが多く、井戸跡や土壇を伴う状況は宮域内の様子に類似する。調査区の南から東側の畑では多量の土師器が表採されることから、調査区中央西側の畑を中心に齋宮跡に係わる遺構が部分的に包蔵されるものと推定される。

室町時代以後の遺構は、溝跡を中心にかなり広範に渡っているものと推定される。検出した溝は、平安時代のものと比べて、方向が揃わないものが多い。

<参考文献>

- 山沢義貴 谷本鋭次「齋王宮跡発掘調査報告Ⅰ」 三重県教育委員会 1974
山沢義貴 谷本鋭次「齋王宮跡発掘調査報告Ⅳ」 三重県教育委

おおむね牛葉幕地の周溝であったと推定されるSD11と、これに関連するものと、SD1と、これに係わるものと思われる溝に大別される。

後者は、前述のとおり、長方形の区画をなす可能性もあるが、詳細は不明である。ただ、西隅より出土した茶釜形土器を伴う一括土器は、明らかに溝に埋設された状況を示すものである。上段に乗せられた茶釜形土器14は別の皿35で蓋がされていた。重ね積みされたことに意味があるものであろうか。しかし、上段に置かれた鉄釉鉢等は、いずれも、口縁部が欠損しており、木蓋がなされていたとしても意味がなさそうでもある。性格はわからないが、溝に納められたことに意味がある。呪術的なものではなかろうか。

調査結果は、齋宮跡の第26-3次調査と同じく、南限を画すると思われる顕著な遺構はなかったものの、今後の調査の指針になるものであろう。

(大西素行)

員会 1977

- 新田 洋「山添遺跡発掘調査報告」、三重県教育委員会 1977
弥永貞三 谷岡武雄「伊勢湾岸の古代条里制」 1979

Ⅶ 多気郡多気町 カウジデン遺跡

カウジデン遺跡は、昭和53年度に発掘調査を実施した多気町河田「東裏遺跡」の南西700mの個所に位置する。当遺跡は、現状保存について協議したが、昨年度の事業地より排水路を延長しなくてはならず排水路部分以外の現水田面については削平をしないということであったため、この排水路部分についてのみ発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は昭和54年6月28日より7月30日まで、幅4mの排水路部分を延長100mに亘って、東より順次調査を実施した。一部、掘立柱建物跡を検出するために拡張した個所もある。

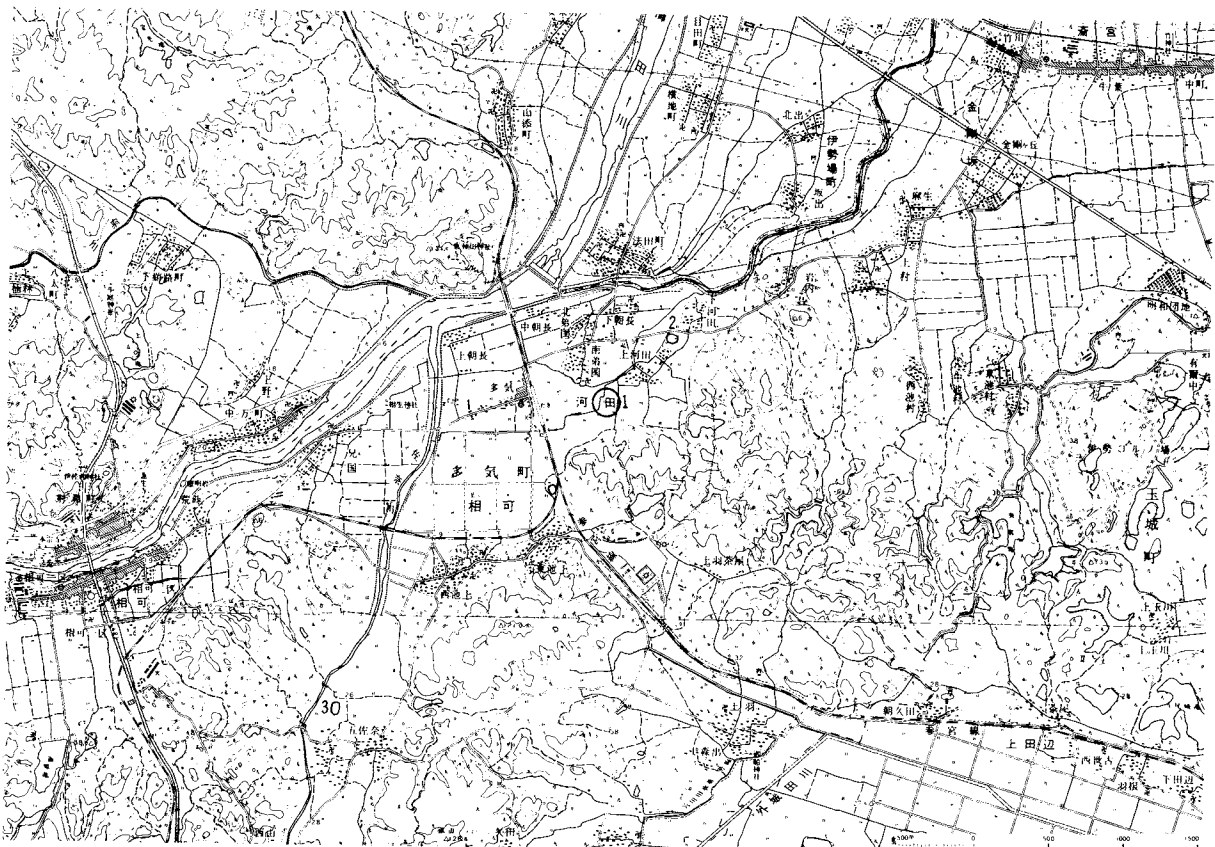
調査に際しては地元河田地区の方々の協力を得、相可土地改良区、松阪耕地事務所には種々ご配慮をいただいた。記して謝意を表したい。

1. 位置

カウジデン遺跡の所在する多気郡多気町河田は旧多気郡相可村に属し、西に弟国村、朝長村と、東に岩内村に接し、櫛田川より祓川が分流する右岸の水田地帯である。現在の河田部落はこの櫛田川と祓川に並行して走る自然堤防上に位置し、一段低い水田にとりかこまれた状況になっている。水田を隔てた

東側の丘陵は河田古墳群と称し、100基近くの古墳を擁している。

カウジデン遺跡は下河田部落の南西300m程の水田中の遺跡で、国鉄多気駅のすぐ裏手500mである。標高15mの平坦地の水田で、これまで全く存在のしられていなかった遺跡である。遺跡のすぐそばを櫛



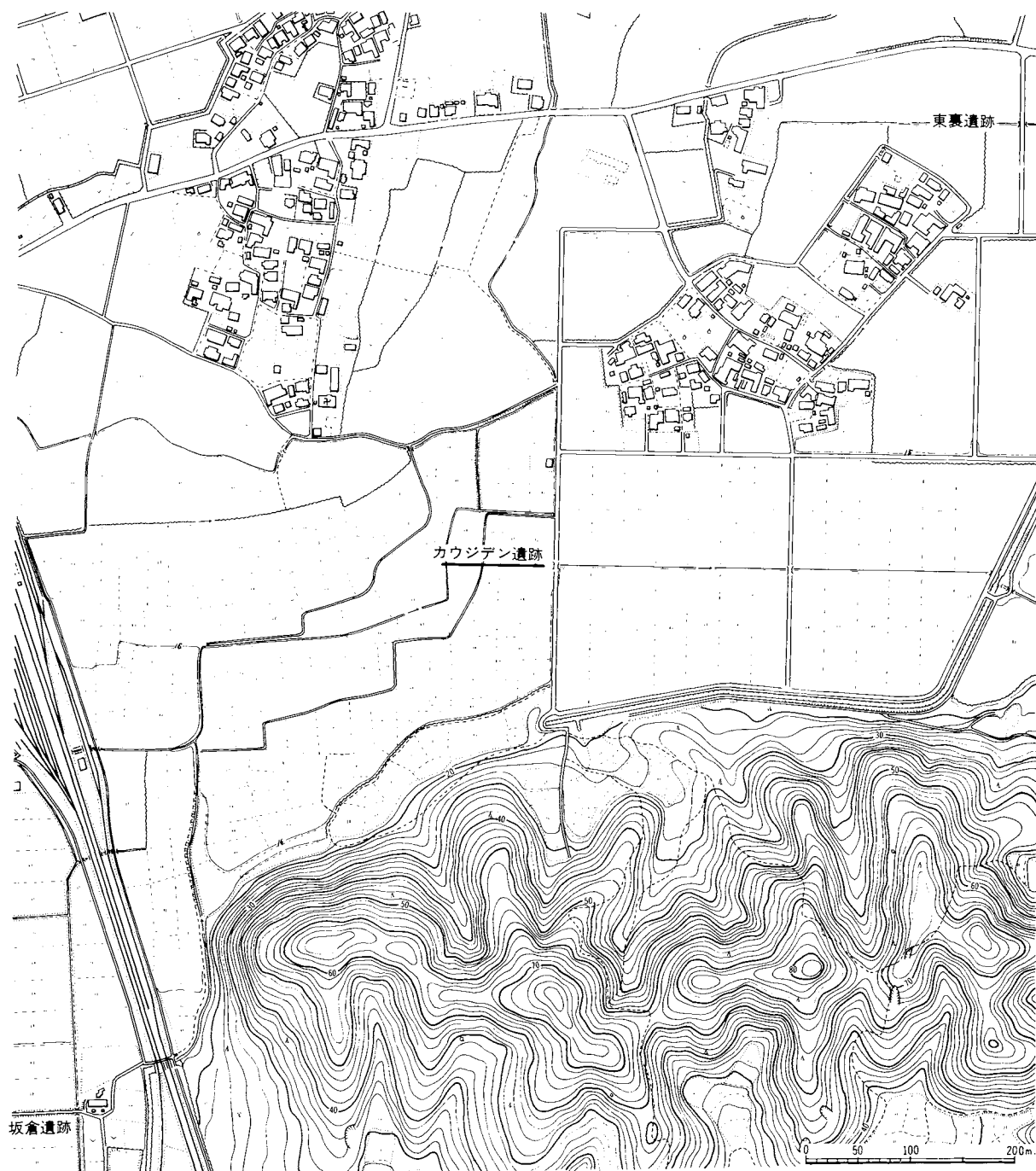
第34図 遺跡位置図 1：カウジデン遺跡 2：東裏遺跡 3：五佐奈遺跡

田川の支流である佐奈川からの小さな用水路が南東側の丘陵に並行して流れ、河田と弟国、朝長の部落の間を横切り、祓川に流れこんでいる。この水路はある時期、佐奈川の旧河道であったとも考えられる。

この地域は県下でも有数の埋蔵文化財の豊富な地域である。旧石器時代以降古墳時代にいたる各時代の遺跡が知られている。この遺跡の分布には榊田川の果たした役割が大きかったと思われる。すなわち、榊田川は各時代を通じて重要な文化传播ルートであった。旧石器時代、縄文時代の遺跡、さらに古墳の分布については既にこれまで発掘調査された遺跡の

報告書でも触れられているところである^①。

この地区が圃場整備がされるまでは条里制の地割がよく遺存していた。多気町相可、河田地区では阡線はほぼ正南北となっている。また、平安時代以降大国庄、川合庄といった荘園として著名である。これまで、この地区では奈良時代、平安時代の遺跡は知られていなく、あるいは洪水の多い氾濫原を避けて丘陵裾に集落があるのではないかと考えられていた^②。しかし、昨年度の東裏遺跡の発掘調査では奈良時代より平安時代にかけての遺構、遺物が見つかった。桁行9間×梁行6間の掘立柱建物をは



第35図 遺跡地形図 (1:6000)

じめ倉庫、納屋的な建物もあり、遺物としては須恵器円面硯、緑釉花文風字硯、中臣銘墨書土器も出土しており、また、昭和52年同じ圃場整備事業の際に

調査した五佐奈遺跡、では平安時代前後の井戸が見つかっており、斎串が出土しており、周辺部にも歴史時代の遺跡の存在があきらかになりつつある。

2. 遺 構

現状が水田であり、水田への小排水路もあるため湧水が多く、調査は排水になやまされた、層序は基本的に第Ⅰ層—表土、第Ⅱ層—茶灰褐色粘質土、第Ⅲ層—黄褐色粘質土（地山）である。第Ⅱ層が遺物包含層で、地表より地山まで60cm程度である。小規模な調査であったが、遺構として掘立柱建物、土壇、溝などがある。

(1) 土 壇

SK1 トレンチ東端部で検出。南北径2.3m、東西径1.7mの楕円形を呈し、深さは地山より15cmと浅い。土壇内の埋土は黒っぽい赤褐色粘質土で、土師器杯、甕片、山茶椀片が含まれており、木炭片も見られた。平安時代末頃のものと思われる。この土壇の見つかった区の上層からは次の区とともに常滑焼の破片や山茶椀、灯明皿が比較的多数出土している。

SK2 SK1の南西側に接して見つかった。長さ2mの細長い土壇で、深さ25cmとSK1に比べ深い。土師器杯、甕片、山皿等が出土している。SK1同様平安時代末頃のものである。

SK4 SK2より西へ8m離れて検出 1.8m×1.0mの楕円形を呈する。西側にpitが重複しているようである。埋土はSK1同様黒っぽい赤褐色粘質土で多数の土器が含み、木炭片も見られる。87～95の土器が出土している。

SK6 掘立柱建物跡を確認するために設けた試掘壇において検出。SK4の北西16mの個所である。径2.2mの方形を呈する。深さ地山上面より30cm前後である。この区の上層からは多数の土師器杯、甕、山茶椀、山皿等平安時代末頃から鎌倉時代にかけての土器が多数出土している。土壇内からは83～86のような平安時代に属する土器が比較的多数出土した。

SK7 トレンチ中央部、SK4の西方21mの個所である。幅4.5m、南北径4m以上の方形を呈する。105～115のような鎌倉時代の土器を出土している。

SK8 SK7のすぐ西側6m離れて検出。すぐ西の南北に走るSD9に切られている。5～10cmの浅い土壇で、埋土は青灰褐色土である。土師器の細片が出土したのみである。平安時代末頃のものと思われる。

SK15 SK6のすぐ西3mの個所で小さな方形の土壇の一部を検出した。81・82の土師器甕、甌の他に杯など約50片近くの土器片が出土している。

(2) 溝

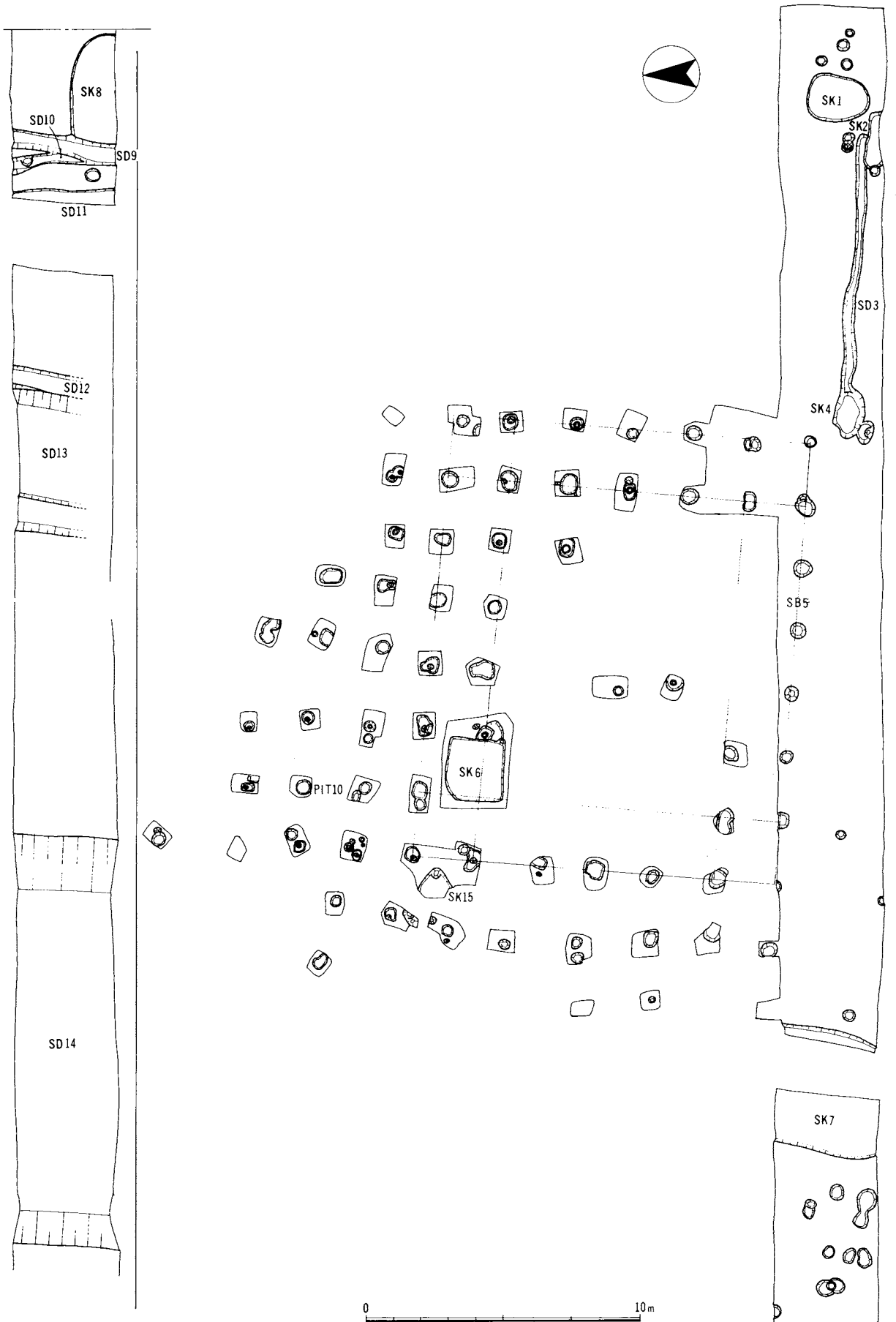
SD3 トレンチの東側部分SK2とSK4を結ぶ状態である。幅50cm、深さ10cmで、暗茶褐色土が埋まる。延長9m。溝の方向は掘立柱建物跡SB5の棟方向に並行する。溝内からは少量の土師器片が出土する。土壇SK2、SK4と同様のものである。

SD9・10・11 SK8のすぐ西側で検出。南北に走る溝である。SD9とSD10の間の地山は一段低く、SK8の底面と同じである。SD9は幅70cm、深さ50cm。SD10は幅40cm、深さ30cm。SD11の西側は農道で不明である。深さ10cmと浅い。SD9からは土師器杯、甕が比較的多く出土している。SK8と時期差はあまりないようである。SD10・11は遺物の出土は少ない。

SD12 トレンチの西側部分、農道のすぐ西側で東西に走る溝である。幅80cm、深さ30cm。黄褐色砂質土が埋まる。羽釜、鍋、青磁片などが出土。

SD13 SD12のすぐ西側である。幅5.1mで、西側は幅1mの20cm程一段低くなる。溝底までは深さ70cm。埋土は灰褐色粘質土である。東側の肩の部分に河原石の集石があり、その中に常滑焼の甕の破片が多数混ざっていた。溝内からは山茶椀、灯明皿、摺鉢、羽釜など116～119の土器が出土している。

SD14 トレンチ西端部で検出。SD13より11m離れた個所で東側の肩を検出。丁度、この部分に現在の水路が流れており、発掘は困難をきわめた。そ



第36図 遺構平面図(1 : 200)

のため西側の肩は明確でないが、幅15m程度と思われる。このあたりの基本的な層序は第Ⅰ層—耕作土、第Ⅱ層—暗黄褐色土、30～35cm。第Ⅲ層—酸化鉄分を含む暗灰粘質土、60cm。第Ⅳ—暗青灰粘質土（地山）である。地山は70cm程で灰色粘質土となり、更に70cm程で青灰色の砂利層となる。SD14はこの地山上面より砂利層まで切り込んでいる。逆台形を呈し、底は平坦である。溝内上層は黒褐色砂質土、下層はやや淡い黒褐色土となる。この下層より多数の遺物が出土する。遺物は全面に亘って見られるが、底部の東側部分からは木炭片、木製品、自然木が特に多く出土している。また、溝内の中央部は青灰色粘質土となる。

3 掘立柱建物

SB5 トレンチ東側部分で東西に並ぶ柱穴を検出した。トレンチの南側では柱穴は殆んど認められなかったため、東端部を北側に拡張したところ、連続して柱穴が確認された。そこで、この建物の規模を見るため柱穴の存在が予想される個所に試掘坑を設けてみた。そうすると、いたる所で柱穴が確認された。トレンチの北側部分はトレンチ内と異なり、相当数の建物の存在が考えられた。トレンチで確認した建物がどのような規模であるか判断し難いが、一応ここでは4間×5間の身舎に四面廂がつくものと考えている。柱間は桁行、梁行とも2.3m(7.5尺)となる。柱穴はいずれも径50～70cmの円形もしくは楕円形で、深さ40～60cmを測る。柱穴内から出土する土器は平安時代末頃の土師器杯、甕の破片が多い。

3. 遺物

整理箱50箱ほどの遺物が出土している。その中でもSD14より出土したものが大半を占める。時期的には縄文土器片より中世の陶器片までである。種類としては土器（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、中世陶器、青磁、白磁）、石器（砥石、石斧）、鉄器（鉄斧）、土製品（土馬、土錘、瓦片）、木製品（斎串、曲物等）がある。

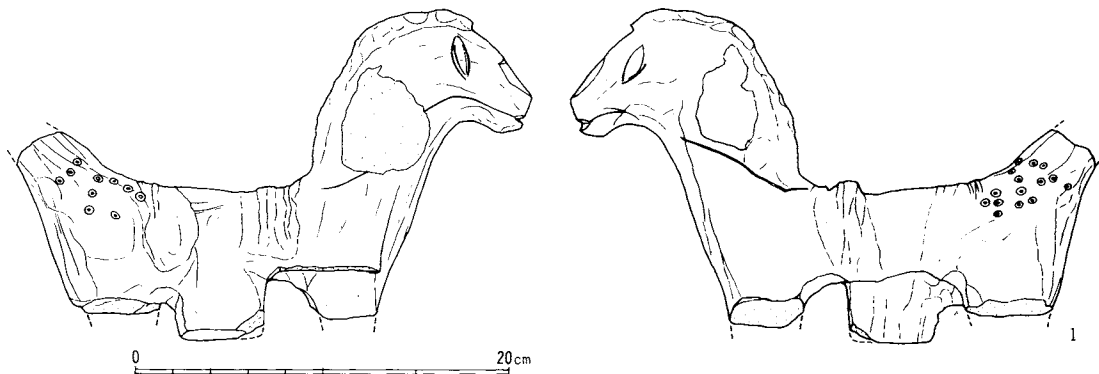
1. SD14出土の遺物

奈良時代の土師器、土馬、木製品、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器がある。

<奈良時代の遺物>

(1) 土馬

全長27.6cm、現高16.4cmの飾馬である。尾、四脚、耳の一部を欠損する。顔は小さく、へらによる面取りをしている。口はへらで刻目を入れ、鼻は径1mm程度の孔を二個あけ、額のすぐ下に正面よりみだ目と思われる円形竹管の刺突が二個見られる。また、両側には篋描沈線による目をレンズ状に描いている。手綱は口の部分より耳の下を走り、鞍の前輪の前の部分へと篋描沈線によって描いている。鏡板、引手は認められない。たてがみは指で小さくつまみあげている。耳は全て剥落して形状は不明である。胸より前脚にかけても篋による面取りしている。鞍は粘土紐の貼付で表しているが、剥落しており後輪は痕跡のみである。後輪から尻の部分にかけては円形竹



第37図 SD14出土土馬実測図(1:4)

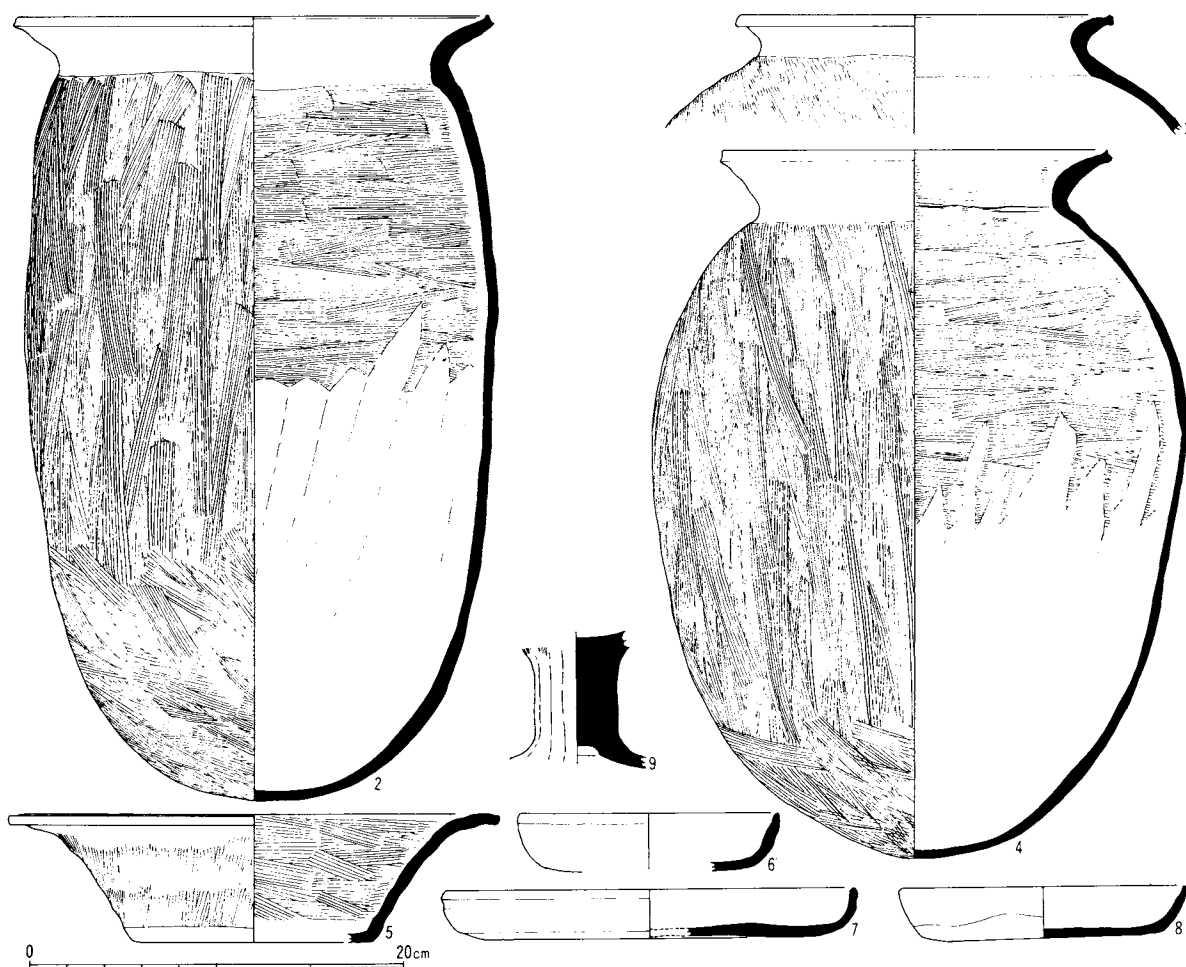
管の刺突が施され、杏葉、尻繫を表したものであろうか。障泥は厚さ1.5cmの板状で、片側しか残っていない。尾は凹柱状で先端部は無い。後脚にかけてヘラのナデツケで面取りしている。脚は完存しないが、障泥と同じく板状であるが、前脚はやや厚く、長楕円状である。脚と障泥の部分も篋で削りとっている。前脚より後脚にかけて腹部は篋で粘土を取り、溝状となっている。顔より胸、前脚、尾より後脚および障泥、腹部はヘラで調整しているが、他の胴部はナデツケ、押えで調整している。脚はそれぞれ外方へ張り出すようであり、想定するに高さ25cm足らずのものと思われる。全体にやや青味をおびた淡褐色であり、胎土は緻密で、スサ状のものを含む。

(2) 土師器

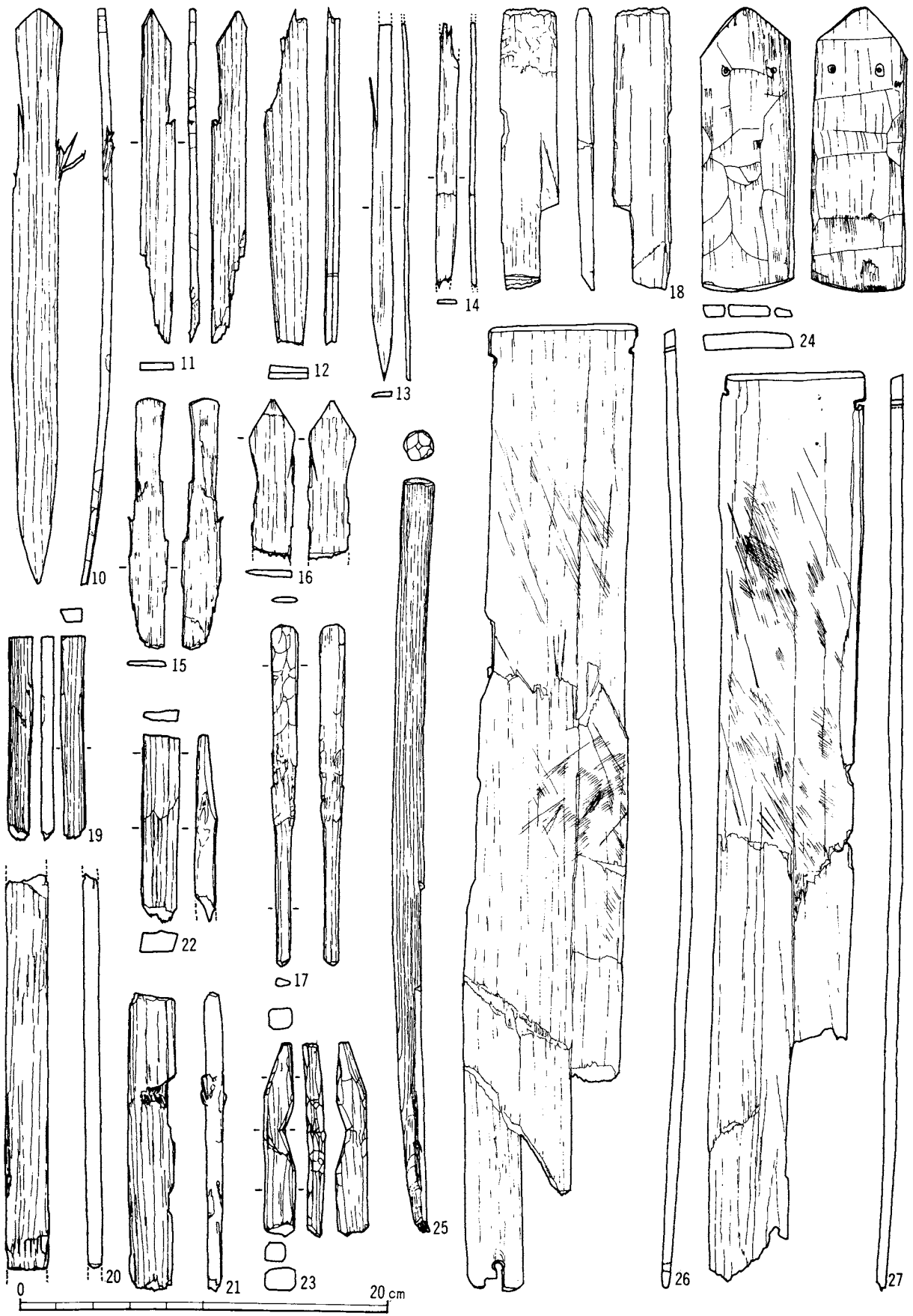
甕 (2~4) 胴部が長胴となる長甕(2、4)と球形となるもの(3)がある。いずれも外反する口縁部中央が僅かに肥厚するもので、胴部には刷毛目が施される。2はこれまで奈良時代によく見られ

る長甕であり、表面は全面粗い刷毛目が施される。刷毛目は胴上半部を縦方向に、その後底部周辺を横、斜方向に施している。胴部内側は表面と同じ刷毛目が横方向に施し、胴下半部は底部より上方に向ってヘラケズリしており、口縁部は内外面ともヨコナデをしている。黒褐色を呈し、胎土は緻密である。3は球形の胴部となると思われるものである。口縁部のつくりは2、4と同様であるが、表面の刷毛目は粗く、また、内面には刷毛目が見られず、ナデツケのようである。淡褐色を呈する堅緻な土器である。4は長甕であるが、2に比べ短かく胴部は中央部で張り出し、球形に近くなる。調整法は2と同様であるが、口縁部内側には刷毛目が消されずに残っている。黄茶褐色を呈する堅緻な土器である。

鉢 (5) 大きく開く口縁部上端が平坦となる厚手の鉢である。輪積みの痕跡が見られ、底部の他に三段に輪積みされている。内外面ともに粗い刷毛目が施され、底部の内外面をナデツケている。肌色を



第38図 SD14出土土器実測図(1:4)



第39图 SD14出土木製品実測图 (1 : 3)

おびた褐色を呈し、やや軟質な土器である。

杯（6～8） 底部をナデツケるものと、ヘラケズリするものの二者がある。6は口径14cmと小さく、口唇部のみナデツケ、杯下半部は押えつけと思われるもので、茶褐色を呈する。7、8は口縁部はナデツケ、その後底部のみをヘラケズリしている。いずれも黄褐色を呈し、胎土は緻密である。

高杯（9） 脚上半部だけの破片である。脚の径4.5cmと太い。杯底部近くに刷毛目が一部のこる。脚は縦方向にナデツケており、幅1cm程度の面取り状となっているが、この部分は厚さ4mm程の粘土が全周囲に貼付いた状態となっており、粘土が貼付けられる前から芯の部分が面取りされていることがわかる。白っぽい黄灰色を呈する。

(3) 木製品

斎串（10～16） 全形の窺えるものは10のみの一点で他は全て一部を欠損している。15を除いて上端部を山形に削り、肩部両端より切り掛けを施し、下端部は両側より細長く尖らしている。10は全長30cm、幅3cm、厚さ0.5cmで、柾目材でやや反り曲っている。肩部の切り掛けは4回程認められる。11、12は10とほぼ同様のものと思われるが、11は縦に4程割れており、下半部も欠損している。12は下半部のみの破片であるが、二枚が重なった状態で出土しており、縦方向に割った状態で使用したものであろうか。ともに柾目材である。13、14は先のものに比べやや小形で薄い。13は先端部の山形の部分と、片側を一部縦に欠損する。現長19cm、幅1.2cm、厚さ2mmで、肩部の切り掛けは3回程認められる。14は12同様13と接合するものかと考えたが明白でない。板目材を使用。16は先端近くの破片で、山形のすぐ下より切り掛け

を施し抉るようにはがれている。15はこれまでの切り掛けと同様に見られる。下半部は欠損する。柾目材を使用している。

木札状製品（18～22） 幅1.5～3cm、厚さ1cm程度の細長い板状製品である。上下端とも欠損するものが多い。19は板というより角柱状であるが、一方の端部はきれいに切断されている。また22の上端は斜めに削りとっている。

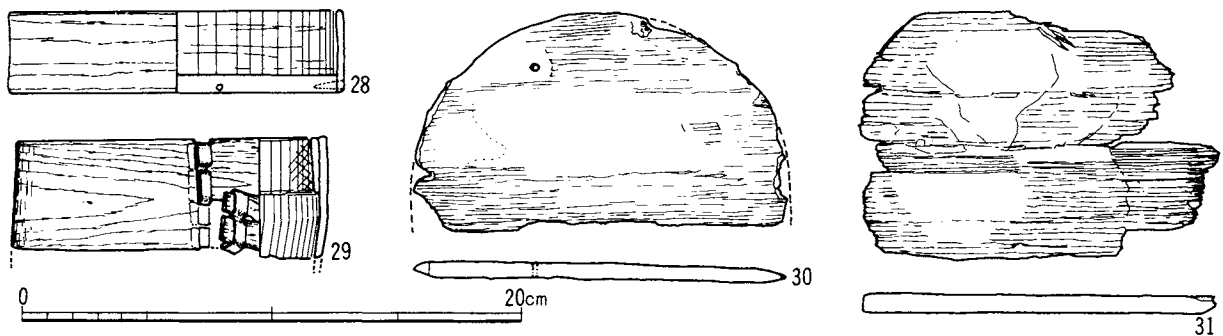
双孔板状製品（24） 全長15cm、幅5cm、厚さ0.8cmの板である。先端部は斎串のように山形に尖らしているが、下端は弧を描くように丸く仕上げている。上端近くに径2～3mmの孔が2.5cm離れて二個あけられている。孔はきれいに貫通していない。両面とも何回にも細かく面取りされた状態であるが、稜はそれほど明らかでない。先端より下端にいくに従いやや厚くなる。

筥状製品（17） 全長18cm、上半部が細かく面取りされて平たく板状となるが、下半部は楕円の棒状となる。上下端とも周囲より切り込みを入れ、中央で折り取った状態である。板目材を使用。

不明木製品（23） 全長10.2cm。径1.5×1.2cmの角状製品の先端を斜めに尖らし、やや下った箇所にくびれ部をつくっている。周囲を削り面取りしている。上下端を欠損する。

棒状製品（25） 全長40cmで杓の柄かと思われるもので、上端部径1.6cm、下端部はやや細くなる。削り出しにより丸い棒に丁寧に仕上げている。上端部も面取りしている。

板（26～27） 現状では接合しないが、同一個体と思われる。何に使用したものか不明である。幅8cm前後、厚さ0.6cm、長さ51.5cm、板目の板で両端に



第40図 SD14木製品実測図（1：3）

径3mm程の孔が二個づつあけられている。それぞれ別の板の孔と孔を紐で結んだものか、あるいは釘で何かに打ちつけたものであろうか。上半部には両側とも刃物による傷と思われる痕跡が見られる。

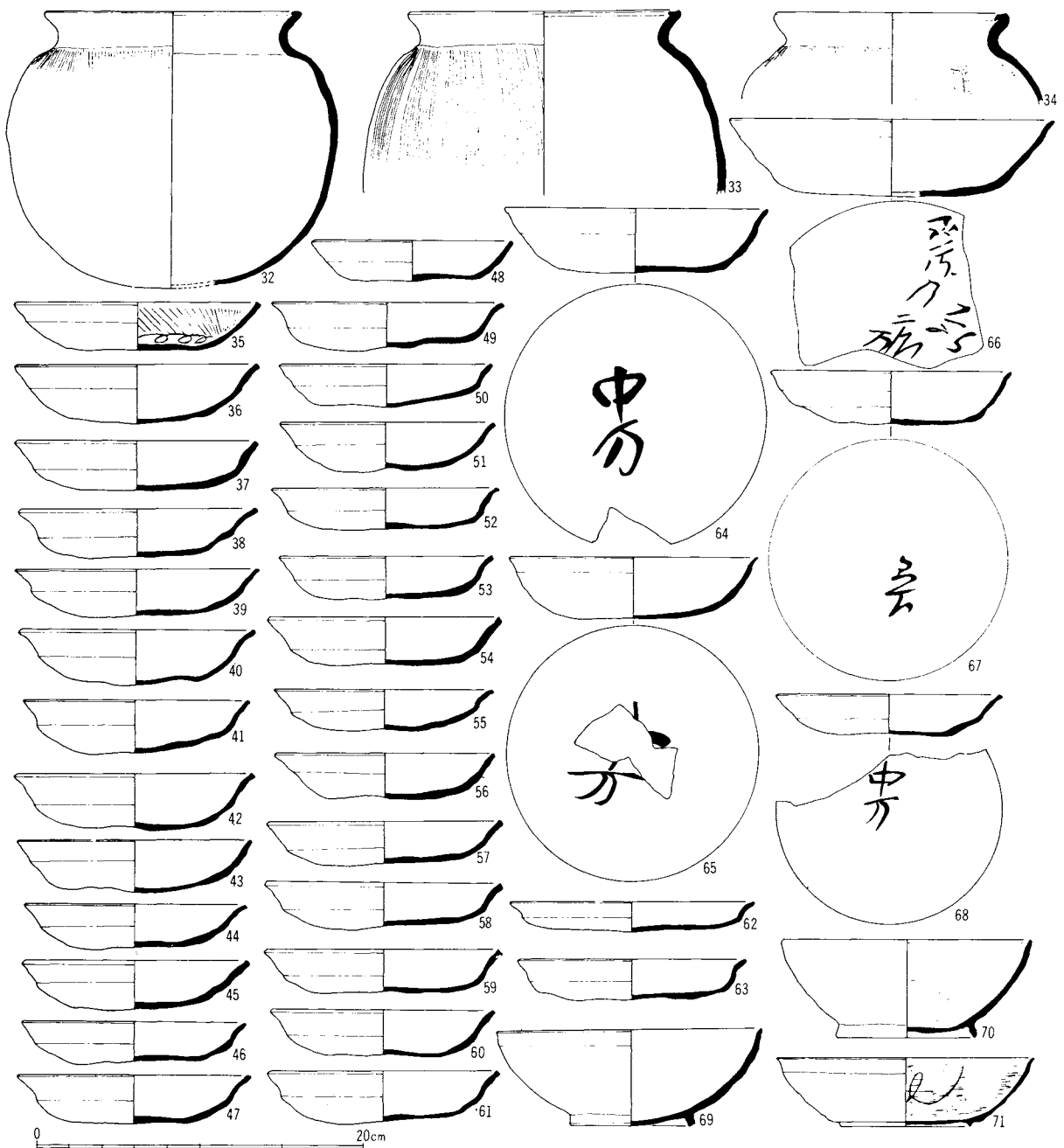
曲物容器 (28~31) 径15cm未満の小形品である。28は径13.3cm、高さ3.3cm。側板は板目板を使用しており、厚さ0.3cmで、内側に縦方向に刻み目を入れているが、間隔は不規則である。1/3程欠損しており、重ね具合は不明である。底板は柾目板で、厚さ7mm。やや不正な円形を呈する。釘穴は6.5cmはなれて

二箇所確認でき、計6箇所あったものかもしれない。29は側板のみである。径12.6cm、高さ4.5cm。板目の板で厚さ0.3cm、一周と1/3程重ねて、桜の皮でとめている。内側には28同様刻み目を入れているが、部分的に斜格子状に入れている。30・31は底板である。柾目板を使用しており、厚さ5~7mmである。腐朽がはげしく、木目の軟質部が剥落している。

〈平安時代の遺物〉

(1) 土師器

甕 (32~34) 小さく外反する短かい口縁部の先



第41図 SD14土器実測図 (1:4)

端部が内側に折り曲げられるようになり、球形の胴部をもつものである。32は $\frac{1}{2}$ 程しか残らないが、全形の窺えるものである。肩部は他に比べ強く張り出し、その部分に細かい刷毛目が縦方向に施されている。胴中央部は煤が付着し、調整法は不明であるが、凹凸があり、指による押えつけであろう。底部周辺は内外面ともヘラケズリしている。淡い茶褐色を呈し胎土はやや軟質である。33・34は上半分のみの破片である。胴部全体を押えつけのあと、上半部に縦方向に刷毛目を施している。33は幅2.8cm、10条の刷毛目を、34は幅1.4cm、9条の刷毛目を間隔をあけて施している。34は内面にも細かい刷毛目が見られる。いずれも胎土は緻密で、茶褐色を呈している。

杯 (35~68) いずれも外反する口縁部はヨコナデ、下半部は押えつけにより凹凸のはげしい薄手の土器である。内面もヨコナデであり、その方向は時計廻りである。64~66のように深くて椀に近いもの、62のように皿と呼べるものもある。胎土は緻密で、堅く焼きあげられた明るい褐色のものと、やや軟質で茶褐色を呈するものがある。また、薄く仕上げられたためか、口縁部が正円をなさないものや、平坦ではなく歪んだものもある。

35はただ1例であるが暗文の施されるものである。

杯上半部は斜方向に、底部周辺は螺旋状に暗文が見られる。螺旋暗文は時計廻りである。肌色をおびた褐色を呈する堅緻な土器である。

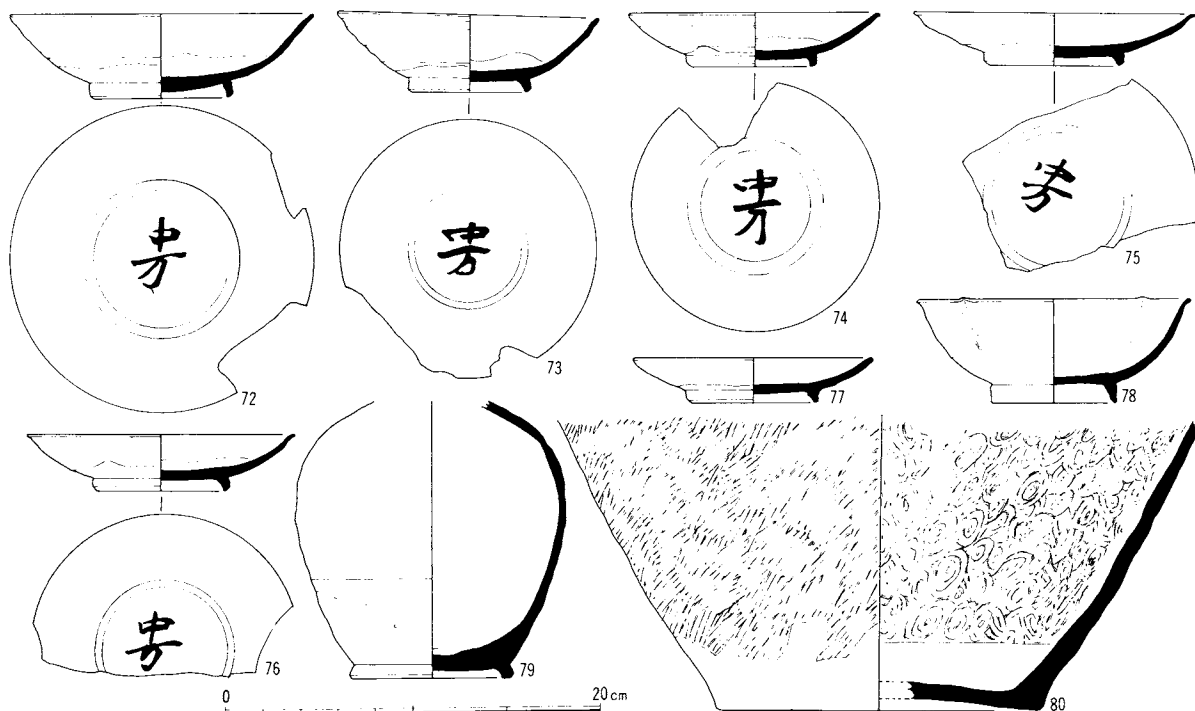
64~68は底部に墨書が見られる。64・65・68の3例は明らかに「中万」と判読出来るが、66・67の2例は判読し難い。66は口縁部近くまで墨書されている。他に1片「中万」と墨書された杯底部の破片がある。64・67・68は堅緻であるが、65・66はやや軟質で暗茶褐色を呈する。

35・39・41・42・57~59・61の8例には口唇部に灯芯痕が見られる。また、46・52・53・56・67の内面には黒褐色の有機物が付着している。さらに56・60の内底面にはヘラ描き沈線が一条見られる。

椀 (69) 高台のつくやや大ぶりの椀である。先の杯同様、口縁部はヨコナデ、下半部は指による押えつけにより凹凸のあるものである。淡い茶褐色を呈するが、表面はもともと黒色を呈していたものが脱色したものであろう。内面は一部黒色を呈する部分もあり、底面に有機物が付着している。やや軟質で胎土は緻密である。

(2) 黒色土器

椀 (70・71) 70は口径に比較して深く、口径部が内湾気味に大きく立ちあがる。口径部内側には浅



第42図 SD14土器実測図 (1:4)

い沈線がめぐって段状となっている。高台は高く貼付高台である。内外面とも横方向の篋研磨が施されるが雑である。外面は口縁部近くを除いて淡褐色を呈する。胎土には細砂を含む。71は70に比べ浅く、薄手であり、高台も極端に低い。外面は押えて、篋研磨は見られない。内面は丁寧な篋研磨が施され、対称の位置に螺旋を二箇所描いている。外面は茶褐色を呈し胎土は緻密で、金雲母を含んでいる。

(3) 灰釉陶器

椀 (72~73・78) 72・73は口径に対しやや浅い椀である。大きく張り出す口縁部の先端が僅かに外反する。底部より杯下半部をヘラケズリしたあと高台を貼付けている。ロクロは全て時計廻りである。高台は強くふんばるように張り出す。高台内部に「中万」と墨書される。上半部のみ在白っぽい灰釉がツケガケされており、灰釉の見られない部分は黒灰色で堅緻である。内側底部には重ね焼きの痕がのこる。72は中万という字以外にも墨書が認められる。78は先のものに比べ深い輪花椀である。口縁部の立ちあがり急で、口唇部が薄く仕上げられている。多少残っていないため輪花の数は4箇所か5箇所であるか不明である。胴中央部より長く刻目を入れ、輪花としている。ヘラケズリのあと、高く直立する高台をつけている。淡緑の灰釉が部分的に付着しており、大半は剥落している。底部内外は墨書されたのか墨が付着している。

皿 (74~77) 口径13~15cm、器高2.4~3.0cmの高台のつく皿である。いずれも下半部をヘラケズリのあと、72・73の椀と同様の高台が貼付けられている。口唇部は77を除き薄く外反するように仕上げられている。灰釉はいずれも胴上半部内外に施されている。74はハケヌリであるが、他はツケガケのようである。灰釉の施されない部分は75・76は灰色、74・77は暗茶灰色である。高台内側に「中万」と墨書されており、77も判読出来ないが、墨書の痕跡が認められる。他に2例、椀、皿が不明であるが、墨書された底部の破片がある。

長頸壺 (79) 口縁部を欠失する。やや長い胴部を有し、最大径は中央よりやや上にある。上半部は器厚4mmの薄手に仕上げられている。底部周辺は厚く1cm近くとなる。底部および胴下半部をヘラケズ

りしている。ロクロは時計廻り。高台は低く貼付けられている。やや青味をおびた灰色で、灰釉は濃い暗緑で、光沢がある。ハケヌリと思われる。内外面に黒色の有機物が付着している。

甕 (80) 底径17cmの須恵器大形甕の底部破片である。器厚0.8cmと薄手である。底部はヘラオコシで、外面は粗い並行叩目、内面は同心円の叩目がうすくのこっている。やや青味をおびた灰色で、内面は暗茶灰色、胎土は緻密で、焼成は良い。

2. SK15出土の土器 (81~82)

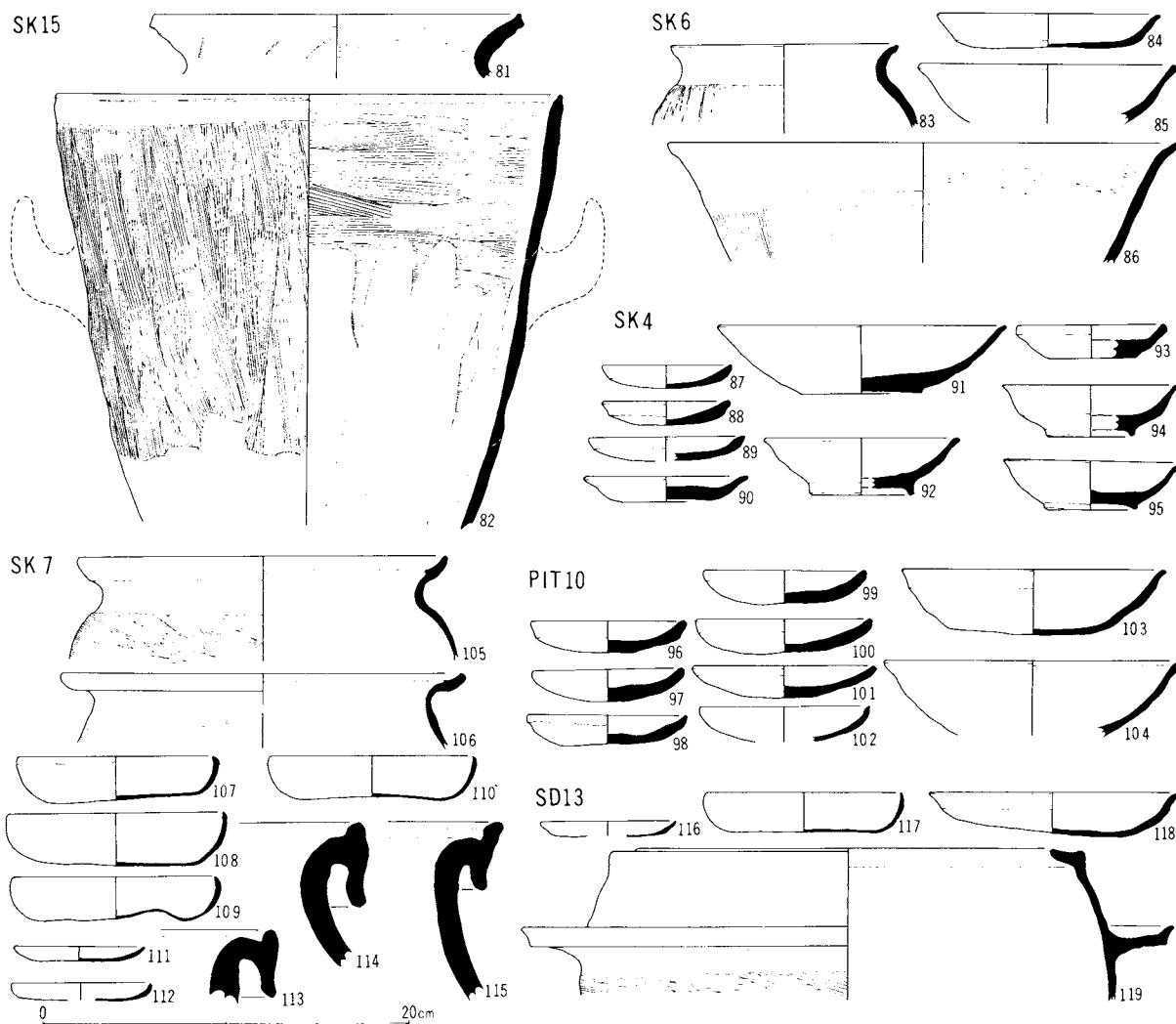
約50片近くの土器がある。多くは土師器杯、甕の破片である。81は口径20cmの甕の口縁部破片である。口縁中央部が僅かに肥厚し、口唇部がつまみあげられたようになる。ヨコナデされるが、内面には横方向の細かい刷毛目がのこり、外面にも刷毛状工具の痕が見られる。白っぽい肌色を呈する。82は把手を欠損する甕である。口径28cmの大形品で、口唇部のみヨコナデ、胴上半部は粗い刷毛目が外面では縦方向に、内面は横方向に施している。胴下半部は刷毛のあとヘラケズリしている。外面は底部に向って、内面は逆に口縁部に向ってヘラケズリしている。淡い茶褐色を呈し、胎土は緻密である。

3. SK6出土の遺物 (83~86・169)

土師器甕、杯、鉢、鉄斧などがある。83は口径12cmの小形品である。胴部には細かい刷毛目が見られる。やや軟質で、淡い赤褐色を呈する。摩耗が甚だしい。84は口縁部ナデツケ、底部を押えつけによる薄手の杯で、淡褐色を呈し、やや軟質である。85はロクロ挽きされた土師器杯である。器形は灰釉陶器の椀に似る。胎土も一般の土師器とは異なり細砂を含み、焼成は良い。一見、灰釉陶器の焼成の悪い生焼けとも思われるもので、肌色をおびた黄灰色を呈している。86は口径28cmの鉢で、内外面とも粗い刷毛目を施したあと、口縁部内外をヨコナデしている。淡い茶褐色を呈する。169は揆形の鉄斧の刃部破片である。最大幅4.2cm、厚さ中央で1.3cmを測る。

4. SK4出土の土器 (87~95)

土師器杯、甕、山茶椀、山皿、白磁片、布目瓦片



第43図 その他の遺構土器実測図（1：4）

等多数が出土している。

土師器小皿（87～90） 87～89は手捏の小形品である。口径7.0～8.0cm、器高1.5cm前後である。口唇部のみヨコナデしている。90は前者と大きさは変わらないが、ロクロ挽きによって成形されたものであり、底部には糸切痕をのこす。ロクロは時計廻りである。黄灰色を呈している。

土師器杯（91） 90同様ロクロ製品である。口径16cm、器高38cm。底部に糸切痕をのこす。全面摩耗が甚しく、茶褐色を呈する。

山皿（92～95） 93を除いて口径10cm、器高3cm前後の高台のつく皿である。糸切りのあと低い高台を貼付けている。92・94の内面には自然釉が見られる。また、94には重ね焼の痕跡が内外面に見られ、95には灯芯痕が見られる。灰色を呈し、堅緻である。93は高台のつかない皿である。厚手の底部には糸切

痕をのこし、内面には自然釉が見られる。

布目瓦（181） 4×3cmの小破片である。厚さ2.2cm、淡茶褐色を呈し、胎土は緻密で、やや軟質である。

5. PIT 10出土の土器（96～104）

小皿（96～102） 手捏の小皿である。内面および口縁部のみナデツケている。口縁部が平坦でなく、また正円をなさないものが多い。焼成は良く、胎土には細砂を含む。

杯（103・104） 103は口縁部をナデツケ、杯下半部が押えによる凹凸がある。器厚3mmの薄手である。小皿同様、全体に歪んでおり、淡褐色を呈し、胎土には細砂を含む。104は85同様生焼けの須恵器とも考えられるもので、ロクロ挽きされ、胎土には細砂を多く含み、白っぽい淡褐色を呈する。

6. SK7出土の土器 (105~115)

鍋 (105~106) 口径22cmの小形の鍋で、口縁部が受口状に内湾し、内側に折り曲げられたようになる。口縁部および頸部はヨコナデ、胴部は横方向の細かい刷毛目が施される。器厚4mmの薄手で、暗茶褐色を呈し、胎土には細砂を含む。

杯 (107~110) 口縁部が内湾する杯で、口径11~12cm、器高2.5cm前後、器厚2mmである。焼成による変化で口縁は正円ではなく、底部も平坦でなく歪んでいる。胎土は緻密で、黄味をおびた白灰色を呈する。

小皿 (111~112) 先の杯と同様の胎土、焼成で口径8cm、器高0.8cmの小形の皿である。

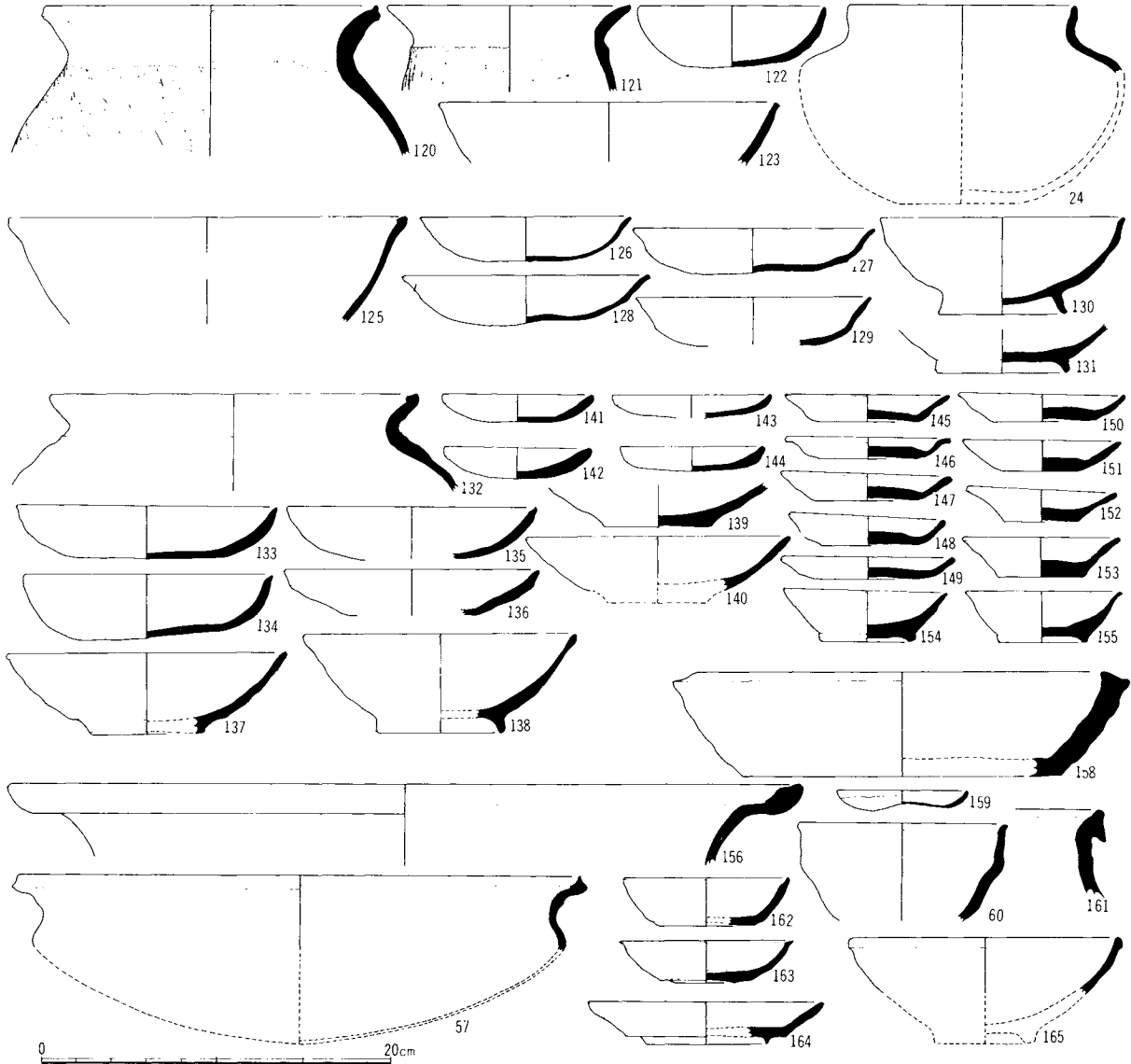
常滑甕 (113~115) 口径50cm近くの大形甕の口

縁部破片で、いずれも折り返し状口縁で、内側は浅い段状となる。赤褐色を呈し、胎土には細砂を多く含む。

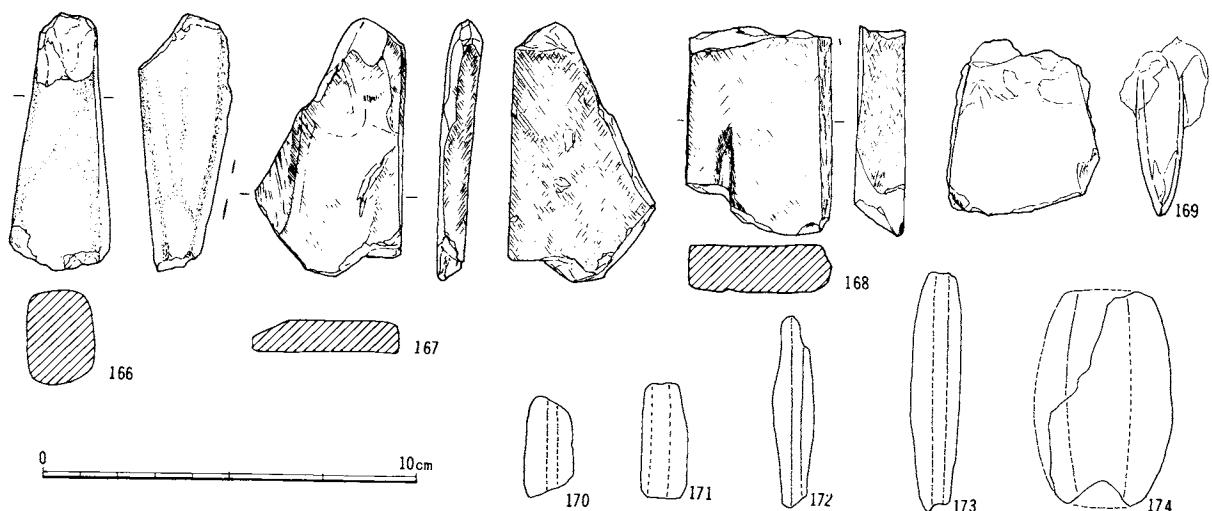
7. SD13出土の土器 (116~119)

小皿、杯 (116~118) 116・117は先のSK7出土のものと同様であるが、118はやや古い様相をもち、平安時代後半のSD14出土の杯と同様のものである。

羽釜 (119) 口径26cm、口縁部が強く内側に折れ曲げられる。鏝は幅3cmで、器厚に対しやや厚い。先端は上方につまみあげられたようになる。鏝、口縁部はヨコナデ、胴部は横方向の刷毛目が施される。鏝より下方は全面に煤が付着する。淡褐色を呈し、



第44図 包含層土器実測図 (1:4)



第45図 石器・鉄器・土器製品実測図（1：2）

胎土には細砂を含む。

8. 包含層出土の遺物

縄文土器（175～176） 掘立柱建物を確認するために設けた試掘壇より出土した。いずれも深鉢の破片である。LRの二段の細かい縄文が全面に施される。暗茶褐色を呈し、胎土には細砂、金雲母を多く含む。後期前半頃に属すると思われる。

弥生土器（177） 縄文土器同様試掘壇より出土。壺形土器の肩部分破片である。篋描沈線が二段施されている。表面は淡褐色、内面は一部黒色を呈する。胎土には細砂を多く含み、焼成は良い。前期末のものであろう。

奈良時代の土器（120～124） 土師器甕、杯、須恵器、短頸壺がある。120は2と同様の長胴の甕である。121は口径14cmの小形で胴部は球形となるものであろう。淡褐色を呈する。杯122はSK10より出土したもので半球形の椀に近い器形である。123はやや大形の杯で肌色を呈している。摩耗が甚だしく、調整法は不明である。124は直立する口縁部より大きく張り出す肩部にかけての短頸壺の破片である。暗い青灰色を呈する堅緻な土器である。

平安時代後半の土器（125～131） 多くは前述のSD14より出土したものとかわらないものであるが、130の台付椀は口径14cm、器高5.6cmで、口縁部はヨコナデ、下半部は指による押えて杯同様の手法であ

る。外方に反るように貼付けられた高台は高く、淡褐色を呈し、やや軟質であるが、焼成は良い。131は灰釉陶器椀の底部破片である。低い高台の内側には糸切痕がのこり、墨書が認められるが判読出来ない。

平安時代末頃の土器（132～155・178～180） 土師器甕(132)はSK1より出土。やや内弯する口縁部の先端が内側に曲がる。肩部は少し肥厚し、球形の胴部となる。口縁部のみヨコナデ、胴部は押えてである。暗茶褐色を呈し、胎土には細砂を多く含む。全面に煤が付着している。土師器杯(133～136)は手法的には前の時代のもと同様であるが、器厚は厚く、口縁部の外反はほとんどなく、逆に内弯気味となる。胎土も異なり、多量の細砂を含む。137～140の椀は白灰色、黄灰色を呈する土師質のものである。細砂を多く含み、底部には糸切痕をのこす。138などは灰釉椀の焼成不良の生焼きのものかと思われるものである。土師器小皿(141～144)は杯を小形化したもので手法も同じである。小皿(145～153)はロクロ挽きされたもので、いずれも糸切痕をのこす。137～140同様の色調、胎土である。山皿(154～155)は口径9cm、器高3cmの小形で、いずれも高台内側に糸切痕をのこす。154の高台には靱痕が見られ、155の底部内側には墨の付着が認められる。緑釉陶器(178～180)は全て椀の破片である。口縁部および底部の破片で、淡緑の釉が施されている。

鎌倉時代以降の土器（156～165） 土師器鍋は口

径45cm以上の大形で厚手のもの(156)と、やや小形で薄手のもの(157)がある。前者は胎土は粗く、鎌倉時代に、後者は緻密で室町時代に属するものである。158の鉢は器厚1.2cmの厚手で、肌色をおびた淡褐色を呈し、口唇部には煤が付着している。159は薄手の灯明皿である。緻密な胎土で淡褐色を呈し、焼成の際に歪んでいる。160は天目茶碗である。内外面にやや緑がかった白っぽい釉があつくかかる。古瀬戸製品であろう。161は常滑焼の甕の口縁部破片である。濃緑の釉が全面に施されている。162は青磁の皿、163・165は白磁の皿、碗である。164は古瀬戸灰釉皿

である。これらの多くは室町時代に属するものと思われる。また、この他にも近世と考えられる染付のものも出土している。

その他の遺物(166~168・170~174) 時期不詳であるが、砥石土錘がある。砥石はいずれも一部欠損する。全面を良く使用したものである。166は断面が楕円形となるが、他は板状である。土錘は長さ3cm前後のもの、5cm近くのもの、径4cm、長さ6cmの長大なもの三種がある。いずれも胎土は緻密である。

4. 結 語

カウジデン遺跡は僅か4m幅の排水路部分を中心とした400㎡足らずの小規模な調査であった。この調査によって当遺跡の性格を判断することは出来ないが、検出した遺構、遺物は他遺跡に見られない特異なものを含んでいる。以下に若干の考察を加えて結語としたい。

1. 溝について

幅15m、深さ1.4mの大きく深い溝跡である。検出幅が僅か4mであるため、方向は明確でないが、ほぼ南北方向に走り、現在まで使用していた幅1.2m足らずの溝に重複した形となっている。恐らく当時から河川であったものと思われる。これは圃場整備事業実施前の図面を見ても、標高16mの等高線が丘陵に並行して走り、あるいは佐奈川の氾濫原の山際を流れる一つの水路かもしれない。また、この溝の個所が条里の地割にもっている。

溝内より出土する遺物は奈良時代および平安時代に属するものである。土器については後述するが、木製品も多く出土しており、奈良時代のものと考えられる。この溝は既に奈良時代より使用されていたものであろう。しかし、当遺跡では奈良時代に属する他の遺構はSK6のみである。東裏遺跡でも土壇が見つまっているのみであるが、この近辺に奈良時代の集落が存在したと思われる。

溝より出土する土馬、および齋串をはじめとする

各種木製品は祭祀用具と考えられる。平安時代の遺物についても出土土器の殆んどが土師器杯であること、「中万」と墨書された土器が多数見られることなど、土器の器種、墨書の画一性を見ると、限られた部分の調査とはいえ、これらの出土状況は祭祀に伴う意図的なものを感じさせるものである。

2. 祭祀遺物について

祈雨、止雨の祭祀に使用されたものとされている土馬は明和町齋宮跡をはじめ県下において現在14ヶ所、計24点知られている^③。明らかに溝跡より出土している例は齋宮跡のみで、他遺跡では窯跡を除いて不明である。今回出土した土馬は齋宮跡古里地区の大溝より出土した30cm以上の大形土馬に比べ一廻り小形であるが、鞍の部分を粘土紐貼付で表している点および太い円形竹管による刺突文等似ている点もあるが、手綱の表現はなく、彩色も認められずやや簡略化した感じがする。一方、齋宮跡の他の土馬^④やカリコ遺跡の土馬と比較すると、鞍のみを粘土紐で、他は篋描あるいは円形竹管で表現する点など類似する点が多いが、障泥が表現されていない点はやや異なる。これらの土馬は従来7世紀末より8世紀初頭と考えられていたが、大形飾馬を除いてもう少し新しく8世紀中葉より後半のものと考えたい。

一方、齋串は県下においては古く多度町桶井遺跡^⑤をはじめ、上野市北堀池遺跡^⑥、下郡遺跡の井戸^⑦およ

遺 跡	所 在 地	遺 構	主 な 遺 物	時 代
柚 井 遺 跡	多度町柚井	不 明	齋串21点以上、舟形、木製品 刀子形木製品、火鑽白、木簡、曲物等多数	奈良～平安
下 郡 遺 跡	上野市下郡	井 戸	齋串3点、横櫛、糸巻貝、銅製鈴、木簡	平 安
北 堀 池 遺 跡	上野市大内	井 戸	齋串2点、剣形木製品、ヒョウタン 土師器、甕、曲物	奈 良
五 佐 奈 遺 跡	多気町五佐奈	井 戸	齋串13点、土師器	平 安
カウジデン遺跡	多気町河田	溝	齋串7点以上、剣形(人形)木製品、土師器	奈 良

第10表 県内齋串出土遺跡一覧表

び当遺跡の南方2.7kmの五佐奈遺跡の井戸から出土している(第10表)。齋串は勿論祭祀に使用されたものという考え方が一般的であるが、最近この齋串について種々の考え方が報告されている。木製模造品という観点より銚の模造品としたり、挿幣帛木とする^⑧考え、或いは神聖な木とする考え等である。県下で出土する齋串は黒崎直氏の分類^⑨によれば B₂ 類に属し、その年代は奈良時代末頃より10世紀とされている。県下においては齋串が出土する遺構は井戸、溝跡であるが、これは保存状態が良いということであり、齋串は他の遺構にも存在していた可能性は充分ある。また、同じ井戸より出土してもその伴出遺物は他の木製品、木簡、櫛、銅製鈴等があり、当遺跡では土馬、山形に尖らし、孔を穿った人形かとも考えられるものや曲物等の他の木製品が出土しており、伴出遺物は多種多様である。おそらく土馬、人形、鈴、櫛などを用いた祭祀が行なわれ、その際に齋串も同時に使用されたものであろう。すなわち、祭祀行為の主体となるものではなく、祭祀行為に伴う小道具的なものとして使用されたのではないかと思われ、各種の祭祀に共通して使用されたのではなかろうか。尖端を尖らしていることは何かに突き刺したものであったろうし、肩部を削ることによって、神聖性を表したのものかもしれない。祭祀の場所の聖浄性或いは行為の神聖性を示したものであったのであろうか。

3. 墨書土器について

平安時代とした溝より出土した土器の殆んどが土

師器杯である。土師器甕、灰釉陶器は図示したものが全てといってよい状態である。その上、土師器杯の5点、灰釉陶器皿、椀の総数9点のうち7点までが底部に墨書され、そのほとんどが「中万」と判読出来るものである。

当遺跡の西方3kmの簡所、櫛田川の西岸に松阪市中万町がある。この中万は和名抄では乳熊と記され、神鳳抄には中万郷とあり旧飯野郡に属している。一方、当地域には東寺領大国庄、川合庄があったことは著名である。9世紀初頭より平安時代末の12世紀まで存続したとされる両庄の庄域については未だ明白とはいえ、当遺跡の簡所が庄域に入っていたかどうかは不明である。しかし、大国庄の四至の西限は「中万氏連墓」と平安遺文に記され、中万部落の近くまで大国庄の一部があったことが窺われる。

中万と墨書された土器と中万郷がいかなる関係であったかは即断出来ないが、あるいは当遺跡の周辺が中万の人々による作出といった状態にあったのかもしれない^⑩。

墨書された土器の出土は各地においてみられる。東裏遺跡では「中臣」と墨書された土師器杯があり齋宮跡や柚井遺跡等からも多数出土している。それらは人名であったり、吉祥句であったり、場所をあらわしたりするといわれている。高向遺跡では当遺跡の墨書された土器と同様のものが出土している^⑪。中でも土師器杯は全く同形態である。墨書土器は8点を数え、その全てが「主」(1例のみ「主口」と判読出来るものである。主と中万という字の違いはあるが、土器の器種、墨書される場所、単一語句で

あることなど両遺跡は共通性がある。高向遺跡では人名とするより建物群の名称を示すものかもしれないとされている。とすれば当遺跡の「中万」も建物群を示す可能性もあるが、いずれにせよ中万部落との関連は無視出来ない。あるいは高向遺跡の周辺に「主……」という集落が存在したのであろうか。

さらに、高向遺跡の墨書土器の出土地点は井戸周辺であり、また、五佐奈遺跡の井戸、当遺跡の溝(S D14)同様祭祀的な意味あいの強いものかもしれない。

4. 年代について

奈良時代とした土器はS D14の下層のものとしてS K12より出土した一群であるが、土器の量も種類も少ない。一般に奈良時代の土師器甕は長胴および球形となる器高40cm近くの大形のもの、器高20cm程度の小形のもの二種が見られ、この時期より内面のヘラケズリが顕著となってくる。当遺跡の4の甕はやや異形であるが長胴の一種と思われる。また、杯の2点は口縁部をヨコナデ、底部をヘラケズリするいわゆるb手法であり、暗文は見られない。こういった甕、杯を出土する遺跡として東裏遺跡S K12、高向遺跡A区S B101、C区S D313、齋宮跡S D79^⑬などがあげられる。7世紀末より8世紀初頭とされる平生遺跡ではb手法が全く見られず、暗文が盛行している。ここでは当遺跡等の一群の土器を8世紀中葉と考えておきたい。

一方、同じS D14より出土している平安時代とした土器は土師器では小形の球形の甕、薄手で平滑に仕上げられた杯が特徴的である。杯には暗文の見られるものもあるが、この期まで当地域では一部に残存するものであろう。他遺跡を見ると齋宮跡S K407、小野遺跡A地区井戸1^⑭などがある。以前齋宮跡S K57の土器群を10世紀末より11世紀と報告をしたことがある。それと当遺跡の土器を比べてみると当遺跡の土師器杯はS K57のように赤味をおびたやや厚手のものでなく、茶味をおびた薄手である。甕は長胴ではなく球形に近く、刷毛目も顕著ではない。形態的に当遺跡のS D14や齋宮跡S K407、小野遺跡の井戸の土器は齋宮跡S K57、S K1214の土器より後出と考えられ、齋宮跡S E1530とはよく似る部分も

多く見られるが、それよりやや古いと考えられる。それはS E1530には後述するが、ロクロ挽きされた土師器杯が存在することからもいえる。

一方、伴出の灰釉陶器の釉の施され方を見ると、74、79のみがハケヌリであるが、他の椀、皿は全てツケガケである。猿投古窯編年にてらしてみると、これらは折戸53号窯式に比定されそうである。折戸53号窯式は11世紀後半代と考えられており、この年代は大国庄が見舞われた永保2(1082)年、保安2(1121)年の大洪水の年代に近く、あるいは当遺跡のS D14もいずれかの洪水によって埋没したものかもしれない。一応ここではこれらの土器群の年代を11世紀後半代の土器として扱っておきたい。

次に当遺跡ではS K4やpit10の土器群がある。この時期の特徴は径9cm足らずの小形の土師器皿とロクロ製の土師器杯、皿の存在である。これはS D14では全く見られないものである。土師器杯は一見灰釉陶器の焼成不良品かとも思われるもので、他の土師器とは胎土は全く異なる。これは土師器はそれぞれの地域で製作されたものであろうという従来の考え方から見れば、異った製作者の出現あるいは新しい製作技術の採用といったことを考えなくてはならない。この時期は齋宮跡S E1530では灰釉陶器を伴っており、当遺跡のS K4では山皿が伴い、平安時代末頃、12世紀前半以降と思われる。一方、この種の土師器を出土する遺構には他にS B5とした掘立柱建物跡のpitがある。S D5もこの時期と考えられる。S D5は遺構の個所で、4間×5間の身舎に四面廂がつくものかと述べたが、あるいは床束のつく総柱の建物と考えた方がよいかもしれない。それは東裏遺跡においても時期は明白ではないが、9間×5間の総柱の建物があり、今年度調査を実施した上野垣内遺跡で2間×4間のものや、嬉野町平生遺跡では3間×6間の床束のもつものがあり、平安時代後半以降、12世紀以降には柱穴はあまり大きくないが、床束のもつ桁、梁ともに間数の多い建物が出現するようである。

その後も、この地は少なからず人々の痕跡が認められる。S K4やP I T10は12世紀末より13世紀に、S K7やS D13は室町時代に属するものであろう。

(三ツ木貞夫・谷本鋭次)

<註>

- ① 下村登良男「大阪変圧器KK三重工場埋蔵文化財発掘調査報告」多気町教育委員会 1974
吉水康夫「河田古墳群発掘調査報告Ⅰ」多気町教育委員会 1974 1974
- ② 下村登良男前掲
- ③ 小玉道明・山沢義貴・谷本鋭次「齋王宮跡資料」三重県教育委員会 1978
- ④ 山沢義貴「カリコ古墳・カリコ遺跡発掘調査報告」玉城町教育委員会 1972
- ⑤ 鈴木敏雄「三重県考古誌考1・桑名郡多度町袖井貝塚誌考全」三重県郷土資料刊行会 1971復刻
- ⑥ 「北堀池遺跡発掘調査概要Ⅲ」三重県教育委員会 1980
- ⑦ 中森英夫・山田猛・山本雅靖「下郡遺跡発掘調査報告」上野市教育委員会 1978
- ⑧ 黒崎直「齋申考」古代研究10 1976
- ⑨ 註8に同じ
- ⑩ 飯田良一氏（県立四日市西高等学校教諭）の教示による。
- ⑪ 伊藤久嗣「高向遺跡」「南勢バイパス埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会 1973
- ⑫ 谷本鋭次「齋王宮跡発掘調査報告Ⅰ」三重県教育委員会 1974
- ⑬ 吉村利男「平生遺跡発掘調査報告」嬉野町教育委員会 1974
- ⑭ 谷本鋭次「齋王宮跡発掘調査報告Ⅳ」三重県教育委員会 1977
- ⑮ 吉村利男「松阪市小野遺跡」「昭和50年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」三重県教育委員会 1976
- ⑯ 「史跡齋王宮跡発掘調査概報」「三重県齋王宮跡調査事務所年報1979」三重県教育委員会 1980

VIII 阿山郡大山田村 ^{よこまくら}横枕1・2号墳

横枕1号墳・2号墳（県遺跡番号5864・5865）の2基の古墳は、阿山郡大山田村大字川北字横枕 218番地（1号墳）及び235番地（2号墳）の水田中に所在した。

当該古墳を含む地域は、昭和54年度県営圃場整備事業大山田地区の対象地となった。このため、この取扱いについて、県教育委員会文化課では農林水産部及び上野耕地事務所と協議した。その結果、工事

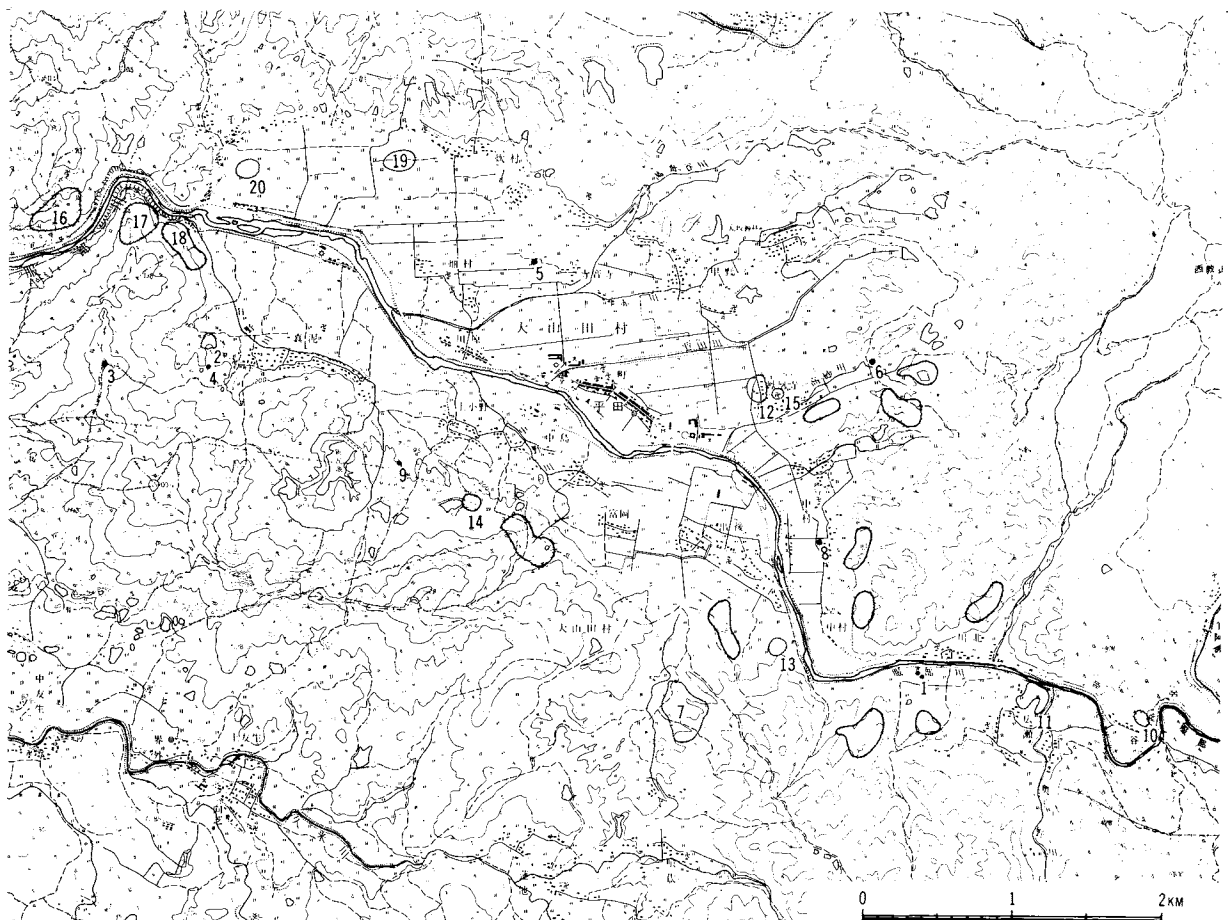
施行に先立ち、県教育委員会文化課が発掘調査を行うことになり、昭和54年7月30日から9月8日までの間に実施した。

調査は地元地区民の参加と協力を得て進めることができた。また、上野耕地事務所、地元土地改良区等のご援助、ご協力を賜った。ここに感謝の意を表する次第である。

1. 位置と歴史的環境

布引山地にその源を発する服部川は、阿山郡大山田村のはほぼ中央部を曲流し、村の西端、中瀬峡を通過し、上野市内でその本流木津川と合流する。

横枕古墳群（1）は、服部川中流、左岸の標高217mの低位河岸段丘上にあり、1・2号両墳は40mを隔てていた。



第46図 遺跡位置図

そこより下流には、この流れによってもたらされた山田盆地が、東西約5km、南北約2kmの範囲にひろがる。山出遺跡(2)は、その西南端の大字真泥地内の標高200mの半島状丘陵先端部に位置する。

これらの古墳や遺跡にかかわるこの地域の古墳時代をみると、前期古墳では、真泥の西方標高340mの荒木山山頂には、山田盆地、上野盆地を望んで、伊賀最古の前方後円墳であるといわれている県指定史跡車塚古墳(3)がある。全長90m、葺石と埴輪をもつものである。また、この東麓にも埴輪をもつ寺垣内古墳(4)が、盆地の中央には全長60mの県指定史跡の前方後円墳である寺音寺古墳(5)がある。後期古墳には、横穴式石室をもつ前方後円墳である鳴塚古墳(6)、盆地の南端の高猿古墳群(7)(行政区画上は現在は上野市に属する)がある。また、近年発掘調査が行われた古墳はいずれも横穴式

石室をもつもので、昭和47年の辻堂古墳(8)、昭和54年の平林1号墳(9)がある。とくに辻堂古墳は玄室長5.2m、幅1.9mの石室規模を有する両袖式横穴式石室で、組合せ式石棺を内部主体とし、伊賀ではやや規模の大きいものである。後期の群集墳は三谷古墳群(10)を東限とし、盆地の東部及び南部の山地に160基余りあり、横穴式石室が露出しているものが多い。古墳時代以前では、笠取山山麓で有舌尖頭器の発見があり、弥生時代の遺跡では沢遺跡(11)・轟遺跡(12)・高北遺跡(13)・小上野遺跡(14)等が分布する。

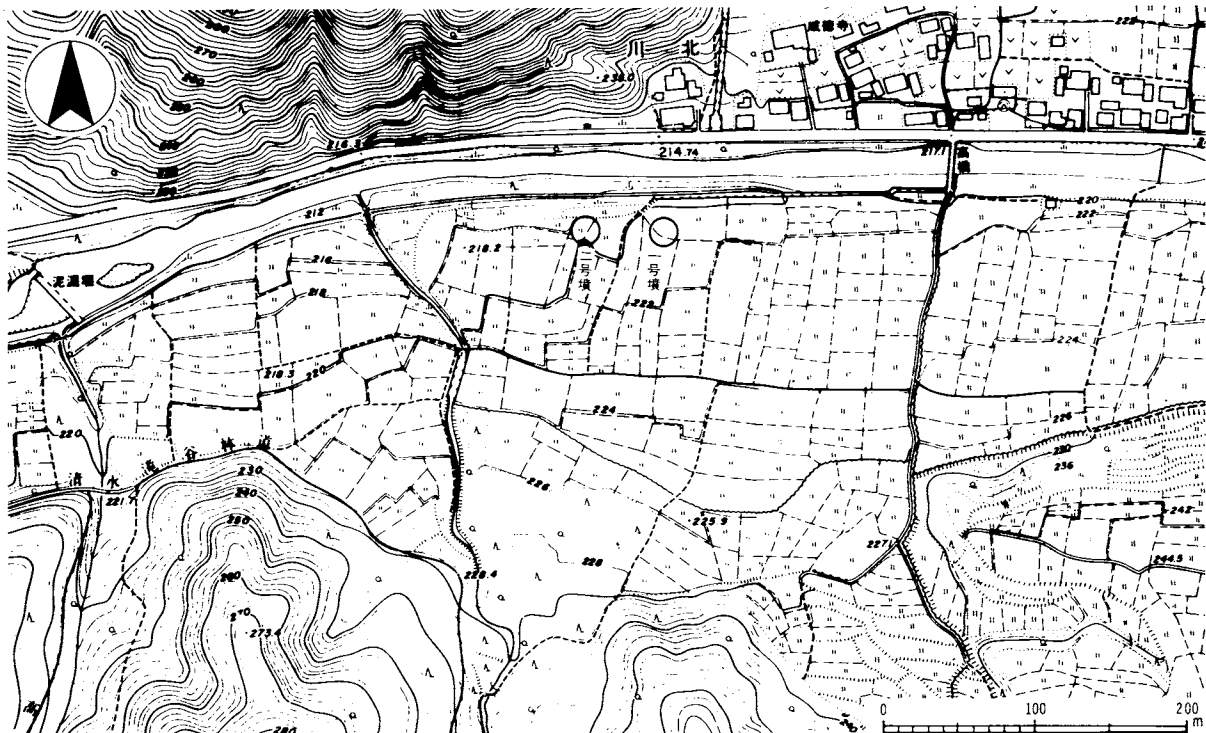
歴史時代になってこの地域には山田郡が置かれ、盆地を横断する服部川の右岸には条里制遺構もみられたが、近年の圃場整備事業で消失しつつある。白鳳時代の県指定史跡鳳凰寺跡(15)もある。

2. 1 号 墳

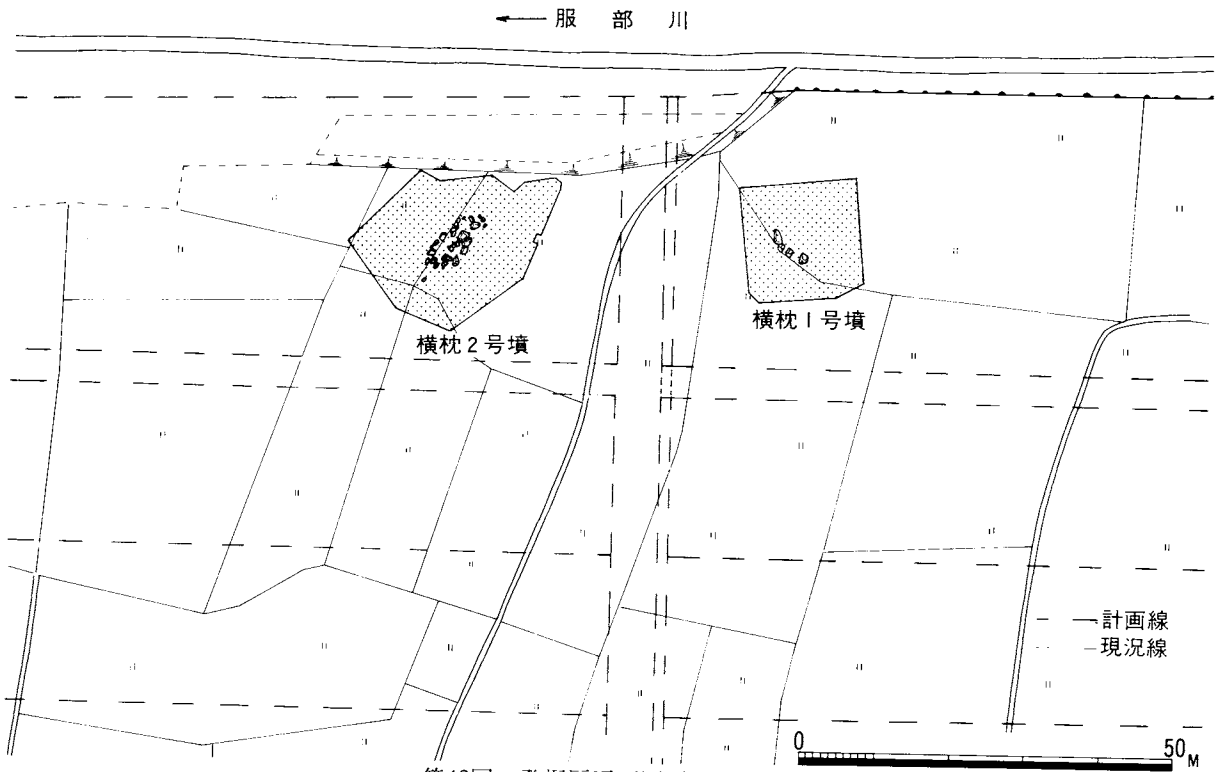
1. 墳丘・周溝・主体部

横枕1号墳は、明治年間の水田改造の際破壊されたといわれ、調査前、畦上にのこる数個の石材がか

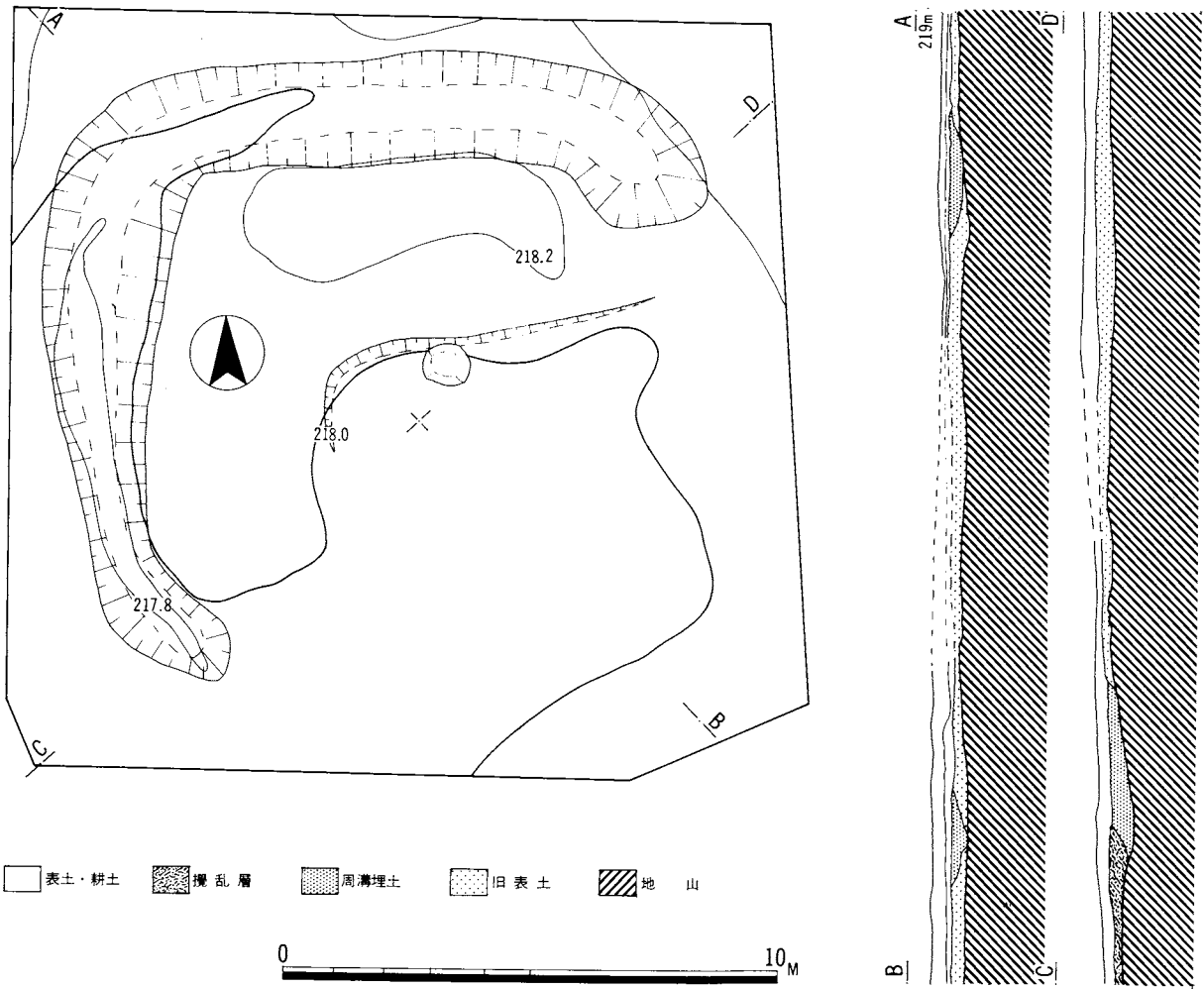
つての古墳の所在を物語るにすぎなかった。調査は、まず1号墳の位置を確認することからはじめ、残存遺構の検出へと及んだ。畦上の石材を手がかりに幅



第47図 遺跡地形図 (1:5000)



第48図 発掘区平面図 (1 : 1000)
 県営圃場整備事業大山田第二地区・川北広瀬地区)



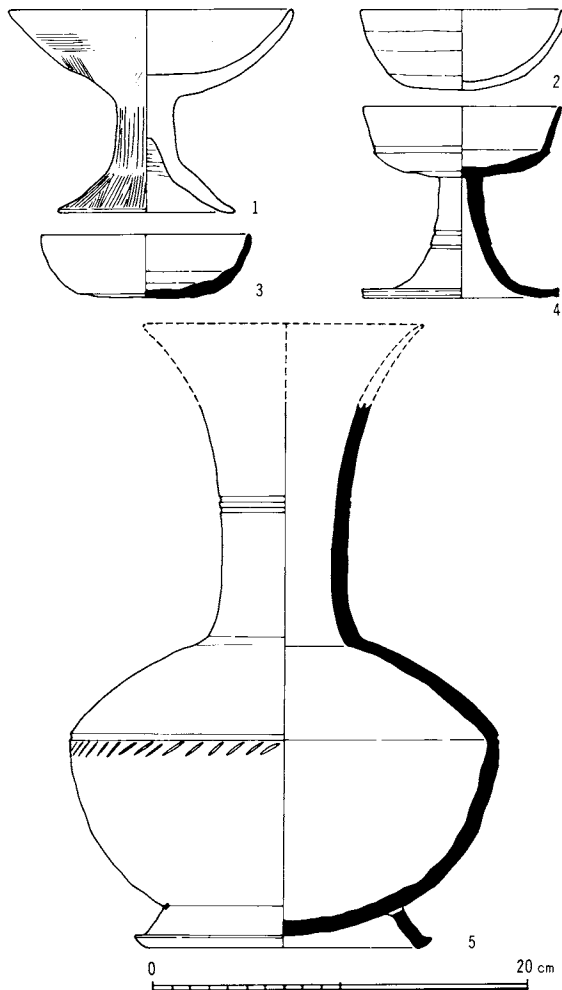
第49図 調査後実測図 (1 : 150)

1 mのトレンチを北西—南東間に設定した。トレンチの土層観察の結果、周溝の埋土と考えられる黒茶色粘質土のレンズ状の堆積が認められたので、これを手がかりに、15 m×15 mの調査範囲を決定した。

1号墳の墳丘は、開墾のため完全に破壊されていたが、耕土下50~70 cmで周溝と考えられる溝を検出した。周溝は、耕土・旧耕土下で確認され、黄褐色砂質土の地山上に堆積する黄茶色砂質土の旧表土から掘りこんでいる。周溝は、幅1.5~2 m・深さ0.3 mほどの基底部のみの確認であり、西側から北側にかけて検出された。北西部にコーナーをもち、この形状から1号墳は、方墳と推定された。

主体部については、横穴式石室の掘方と推定される落ちこみと石室構築時の基底部の用材と思われる石を1個認めることができたのみである。

2. 遺物



第50図 遺物実測図(1号墳) (1:4)

出土状況 攪乱された耕土下からは、須恵器及び土師器片が少量散在して出土した。それらの中から器形として把握できたのは、須恵器(長頸壺1個・杯身1個・高杯1個)、土師器(杯1個・高杯1個)で、いずれも原位置を保ってのまとまりをもった出土とはいいがたいものである。

○土師器

高杯(1) 口径15.2 cm、器高10.8 cm、脚底部径9.5 cm、脚部高6.2 cmで、杯部内面と外面口縁部にはヨコナデが、それより下方の外面には横及び縦の刷毛目の上へヨコナデによる調整が行われている。脚部は、基部より柱状に下る部分には縦のへら削りが、それより「ハ」の字形に開く脚端部までの間には縦方向の刷毛目が施されている。焼成は良好で砂粒を含まず、にぶい橙色を呈する。

杯(2) 口径11 cm、器高4.3 cmで、内面及び外面口縁部にヨコナデによる調整が、その他の外面は未調整で、粘土ひもの痕跡がみられる。

○須恵器

杯(3) 口径11 cm、器高3.4 cmで、半分を欠く。口縁部はわずかな凹凸をもって上外方にのび、端部は丸い。底部は平らで、その外面はへら切り未調整内面には一方向ナデが施されている。その他の部分は、内外面とも回転ナデ調整がみられる。

高杯(4) 口径10.5 cm、器高10 cm、脚部高6.3 cm、脚底部径10.5 cmで、杯部口縁部は上外方にのび、底部寄りを1条の沈線がめぐる。脚部は細い基部から「ハ」の字形に広がり、脚端部近くで水平状になる。脚部中央には2条の沈線がみられる。脚部、杯部とも3分の1ほどを欠く。胎土は白色の砂粒を含み粗いが、焼成は良好で灰白色を呈する。

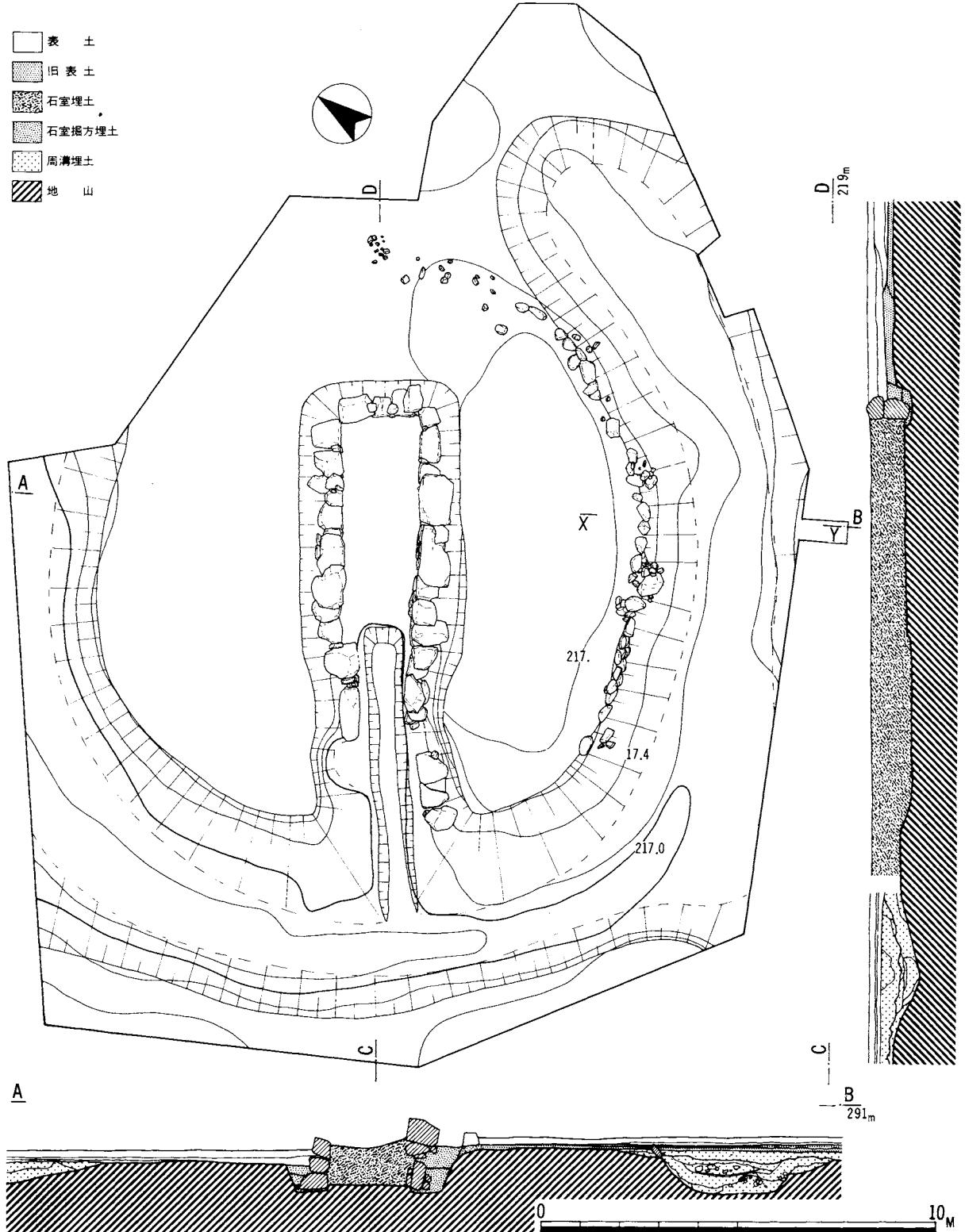
台付長頸壺(5) 口縁部、体部の相当部分を欠くが、肩部は張り、体部上方3分の2に23 cmの最大径を有し外弯して下る。最大径部分には1条の沈線がめぐり、その下部にはへら描き列点文が施されている。底部は丸底で、脚は「ハ」の字形に広がり内側で接地する径14.5 cmの高台が付き、脚部に4か所、円形の透し穴がみられる。口縁部はやや内傾したのちゆるやかに外方に開き、2条の沈線をもつ。径1~4 mmの砂粒を多く含むが焼成は良好で、灰白色である。

3. 2 号 墳

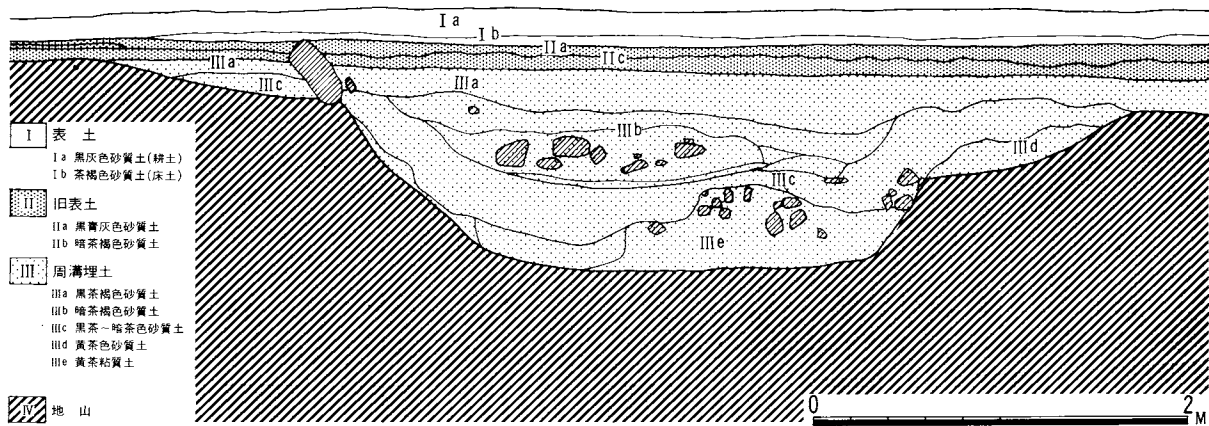
1. 墳丘・周溝

調査前、破壊された横穴式石室の残存石材の散乱状態が古墳の存在を暗示したものの、墳丘や周溝は

削平や埋没で水田下にあったため、その確かな存在を予測できるものではなかった。しかし、調査の結果、横穴式石室をもつ長径20mの円墳であることが



第51図 発掘後平面図 (1 : 150)



第52図 周溝断面図 (1:40)

明らかになった。

奥壁後背部を除く墳丘の周りには幅1.5m～4m、深さ0.6～1mの馬蹄形状の周溝が、地山を掘削しめぐっていた。

墳丘での盛土として確認できるものは少なく、多くは耕土と床土に続いて地山があらわれている。墳丘の東側、周溝と境する端部を、径20cm～50cmの川原石が1～2段、長さ15mにわたってめぐっている。これと対称する西側部分は、調査前すでに水田が一段低い状態であったので、このような川原石の残存が認められなかった。

2. 主体部

内部主体は主軸をN-55°-Eにとり南南西に開口する片袖式の横穴式石室である。石室はすでに天井部及び側壁の上部がなくなっていた。それらの石材のうち持ち去られたものもあるようではあるが、崩落し、流土とともに石室内にあるものも多かった。そのような状況ではあったが、玄室内における副葬品状態は比較的良好に保たれているようである。

石室の全長は8.3mを測る。玄室は長さ5.7m幅2mの長方形プランであり、それに接続する羨道の東壁は玄室の右壁と一線上にあるが、西壁は袖部で玄室よりも20cm内側に入る。羨道はその残存状況から羨門部で一部欠損しているように思われるが、残存の長さは2.5m、幅1.5mである。

石室の構築をみると、奥壁に60cm×1.3m及び50cm×70cmの長方形の2個の石を基底部とし、その上へそれより小形の3個の石を横積みにし、間に割

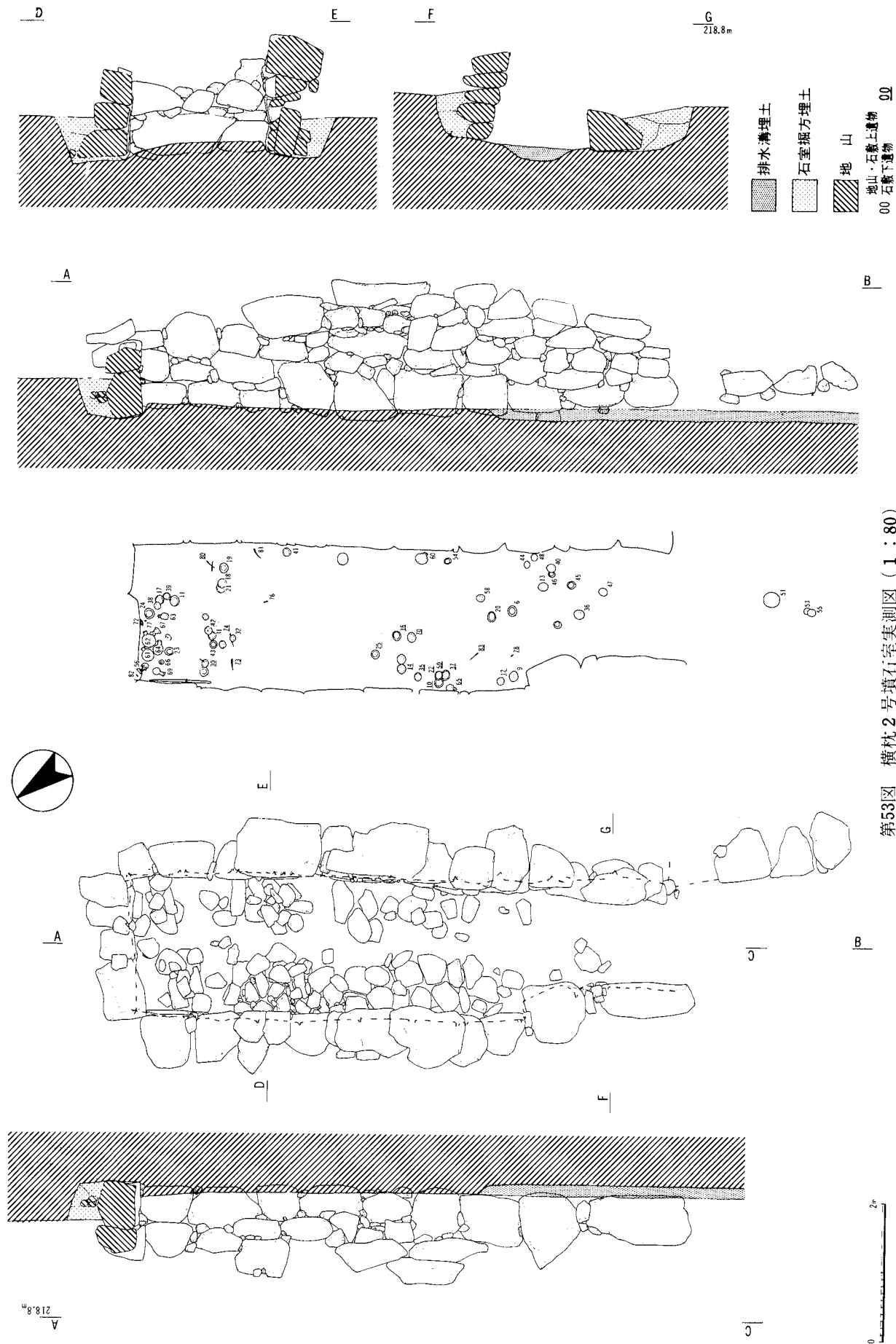
石や自然石の小石をはさんで第2段としている。側壁は東西とも間に割石や自然石の小石をはさみながら長方形の石を横積みしている。東壁は玄室部で基底部が7石据えられ、それに続く羨道部ではやや小さ目の3石が並ぶ。それらの上段は、第3段目から第5段目までが残存し、その最良部の高さは石室内基底部より1.8mであった。左壁は基底部が玄室で7石、羨道部は袖にやや大形の石を立てて用い、それに続くのは横積みされた巨石1個である。西壁は羨道部は第1段のみであるが、玄室部には2段目から3段目までが残存する。両壁ともわずかに持ち送りがみられる。石室の用石は大きいもので幅70～80cm、長さ1.5m程あり、縞状片麻岩^①である。

床面には棺台に使用されたとみられる石もあるが追葬時においてそれ以前のもの整理してある場所へ集めることも考えられるので、それをもって埋葬状態を明確に推定できるものとはならないだろう。

また、奥壁より1.5mの西壁側で、幅80～90cm、長さ4.5mの範囲に石敷がある。人頭大の川原石2個を並べた幅を上下2段30～40cmの厚さに組んであり、その上面は石室内基底部より50cmの高さにあった。石敷上には遺物もなく埋葬時の状況は不明である。

石室の構築にあたっては、平面隅丸形の不整長方形の掘方が急傾斜の壁面をもって掘られている。その奥行きはおよそ9m、幅は上縁部で4m、残存墳丘から測り得る深さは0.6～1mである。

玄門部付近を始端として幅1mの排水溝が設けられている。羨門部から周溝にかけては墓道としての機能も兼ねていたものと思われる。



第53図 横枕2号墳石室実測図 (1:80)

3. 遺物

2号墳は、石室上部及び羨道部を欠いていたが、石室内の攪乱は少なく、副葬品は追葬時の状況をよく保っていると考えられた。副葬品は、土師器4点・須恵器約62点・鉄製品13点であり、装身具の副葬は認められなかった。

出土状況 2号墳では追葬が認められ、追葬時に遺物の整理が行なわれ移動されたことも窺われる。遺物の出土状況から一応次の3群として把握することができようか。

A群は、奥壁より前方1~1.5m、主軸よりも西壁側に埋葬されたもので、玄室内西半分には設けられた石敷のすぐ北側にあたる。遺物は、須恵器(杯身7点・杯蓋3点)で構成される。また、近くに鉄鏃2点があるが、この鉄鏃は石敷の下から出土したものであり、時期が異なるものと思われる。本群の遺物は石室中最高位のレベルでの出土であり、石敷の北側に位置することから、石敷に伴うものと推定されるが、断定はしかねる。本群の須恵器類は、後述する本墳に関する須恵器の形式分類によるⅢ期のものと考えられ、杯身Ⅲ類・Ⅳ類・杯蓋Ⅲ類がこれにあたる。

B群は、玄門部付近から羨道部にかけての遺物で本墳Ⅱ期の杯身Ⅱ類・杯蓋Ⅱ類を除くほかは、本墳Ⅲ期の須恵器(杯蓋5・杯身片)等よりなる。これらとはなれた羨道や墓道中に散在するものではあるが、Ⅲ期の71や高台付の杯身Ⅴ類51もみられる。

C群は、石室内における位置から一時期の副葬品としてとらえ難く、石室内のA群及びB群以外の遺物であり、石敷の下にあるものや奥壁前に集められた状態のもの等、後の埋葬による移動があったと思われるものである。奥壁前面の中央西部分には、須恵器杯身3点・杯蓋3点・提瓶3点・横瓶1点・甗1点・高杯1点、土師器長頸壺1点・甕1点の他、鉄鏃4点が、集められた状態で出土し、これらの遺物群の西側の、石室側壁には大刀が切先を北にしておかれていた。更に、この周辺では、A群よりも下層にあたる位置で、須恵器・鉄鏃が出土している。また、玄室内の石敷の下からは、須恵器の杯身・杯蓋が多く出土しており、ことに玄門部付近では集中していた。これらC群の遺物は、本墳Ⅲ期に先行す

るⅠ期・Ⅱ期の時期が考えられ、Ⅰ類・Ⅱ類の杯身や杯蓋をはじめとして、これと同時期と考えられる須恵器・土師器・鉄鏃から構成される。

上記以外では、石室内及び周溝等で多数の須恵器片、土師器片が出土した。周溝中には、須恵器の長頸壺1点、Ⅱ類の杯身1点も出土した。

○須恵器

杯 28個出土した。完形あるいは部分的な欠損のあるものである。成形技法、形態の特徴により次の5つに分類する。

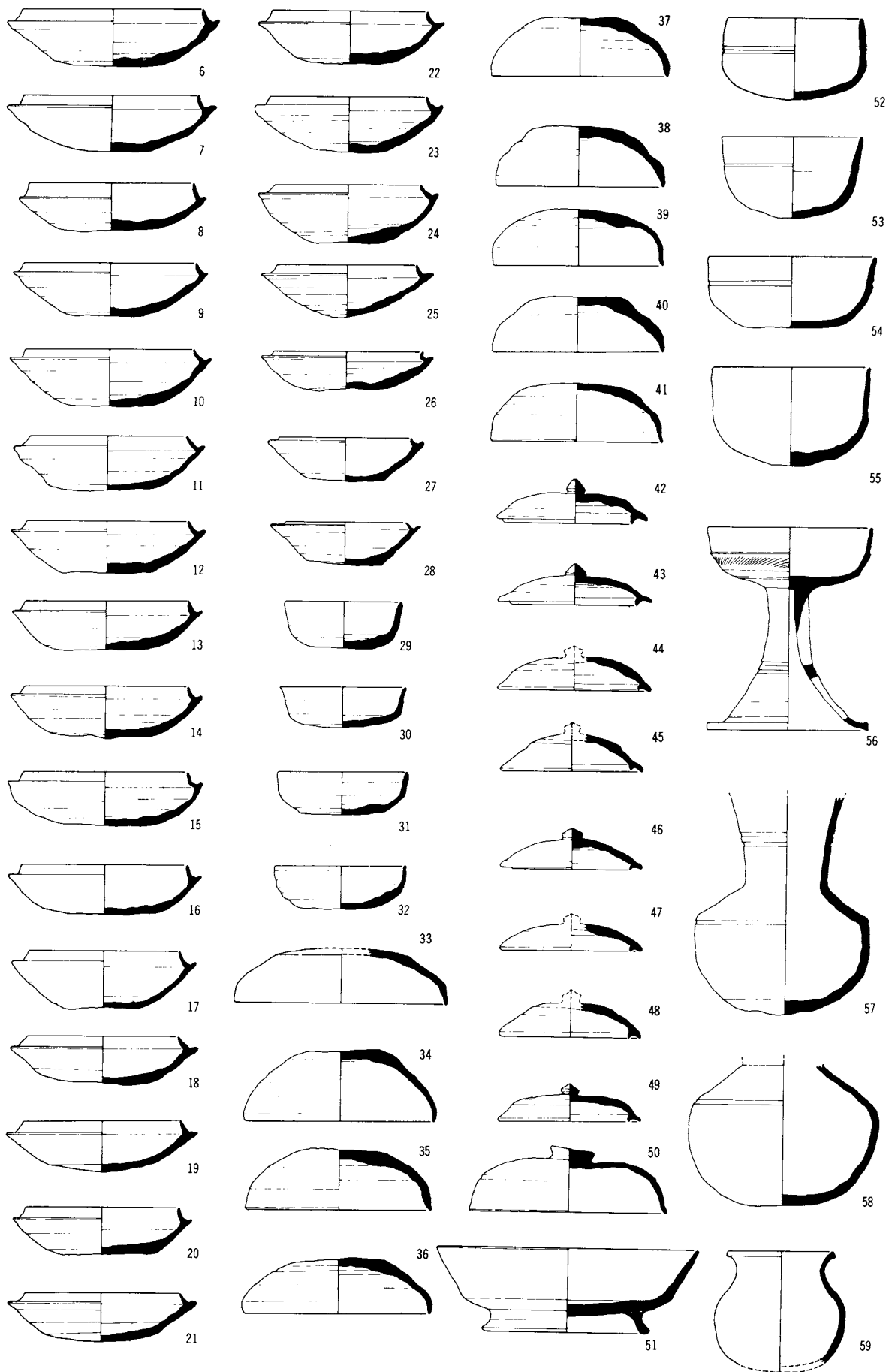
Ⅰ類(6~7) 口縁部はたちあがりは内傾して短く、底部は回転ヘラ削り調整を施し、他の部分には内外面とも回転ナデ調整がみられるもの。わずかに2点のみで、口径は12.5~12.8cm、器高はともに4cmである。胎土は砂粒を含み、青灰色あるいはオリブ灰色に焼成されている。

Ⅱ類(8~26) Ⅰ類よりたちあがりは短く、外面底部はヘラ切り未調整のもの。それらのうち8~22はⅠ類に近い口径(11~12.5cm)、器高(3.3~4cm)をもち、内面底部には一方向の指先によるナデ痕がみられる。多少の差はあるが白色砂粒を含み、青灰色を基調とした色調を呈し、焼成は良好である。23・24は、内面底部にも回転ナデ調整が施されている。白色の微細粒を含み、浅黄灰色の生やけの状態である。25・26はそれらよりたちあがり短く、口径10cm程度、器高4cmと小さい。内面底部には一方向の指先によるナデ痕がみられる。白色砂粒を含み青灰色あるいは灰色である。

Ⅲ類(27~28) たちあがりみられる最後の形態である。ごく短く、内傾し受部は上外方に丸い端部をもつてのびる。底部内面には一方向の指先によるナデ痕が、底部外面にはヘラ切り未調整が、その他の部分には回転ナデ調整がみられる。ピンク色ないしはうす茶色を呈し、須恵器としては環元不足のみである。

Ⅳ類(29~32) 口縁部がやや外反気味の小型の杯。口径8.4~9.4cm、器高3~3.3cmで、底部内面は平らで一方向ナデが、底部外面はヘラ切り未調整で、そのほかには回転ナデ調整がみられる。緑灰色ないしはオリブ灰色を呈し焼成良好である。

Ⅴ類(51) 高台付の杯で、口径18.7cm、器高6



第54图 土器实测图1 (1:4)

cm、高台11.8cm、高台高1.6cmである。体部と口縁部はやや凹凸をなして外傾する。体部と底部高台との間にはへら削りが施されており、高台は下外方へ屈曲し、先端を丸くおさめている。内面底部には一方方向ナデがみられる。青灰色を呈し、焼成は良好である。

杯蓋

I類 (33) 天井部上面に回転へら削りが施されるもの、他の部分には回転ナデ調整がみられる。口径15cm、胎土、焼成、色調から杯I類との類似性が強く、7と組になるものと思われる。

II類 (34~41) 天井部上面はへら切未調整で口径12~13.6cm、器高3.8~5cmで各個体の差異はあるが、杯I類に組みになるものとして概括的にみることができるとのである。34・38・40は天井部は平担であるが、ほかはやや丸い。

III類 (42~49) 回転へら削りの施された天井部に宝珠形のつまみがつき、口縁部内面にかえりのある小型の蓋である。内面のかえりが蓋の口縁端部よりも下方へ突出する III a類；42・43・46と内面のかえりが蓋の口縁端部とほぼ同じ高さを有するがやや上方の III b類；45・47・48・49・44に区分できる。

椀 (52~55) 口径9.5~12cm、器高4.7~7cmと比較的底が深い。54は体部に1条の沈線が、底部外面には回転へら削り調整後(ㄥ及び×印)のへら記号が、そのほかの部分には回転ナデ調整が施されている。52の体部には2条の沈線が、底部外面には回転へら削り調整がみられる。53の体部にも1条の沈線がみられるが、底部外面はへら切り未調整である。55は器高5.7cmと深いが体部には沈線は施されていない。青灰色ないしは緑灰色を呈し、胎土は1~2mmの白色粒か黒色粒を少量含む。蓋があり焼成は良好とはいえない。

無蓋高杯 (56) 杯部下半には2条の稜の間を櫛描列点文がめぐり、長脚で、二段のスカシを三方にもつ。上段のものはスカシが脚を完全に切りぬいていない。上下のスカシの間には2条の沈線がめぐり、

高杯蓋 (50) 口径14.2cm、器高4.6cm、天井部は低く平らで、上面凹状のつまみを有する。

長頸壺 (57・58) 57の頸部には2条1組の沈線がめぐり、ほぼその三分の一と口縁部を欠く。基部

径6cm。はり出した肩部の最大径は12.4cmで、そこに1条の沈線がめぐり、灰白色に焼成されており良好である。58は、口頸部を欠く。

短頸壺 (59) 口径7.6cm、口頸部は短く外反。肩部はやや丸味をもって下外方に張り出す。体部最大径9.2cm。底部を欠く。胎土には白色砂粒を微量含み青灰色を呈し、焼成は良好である。

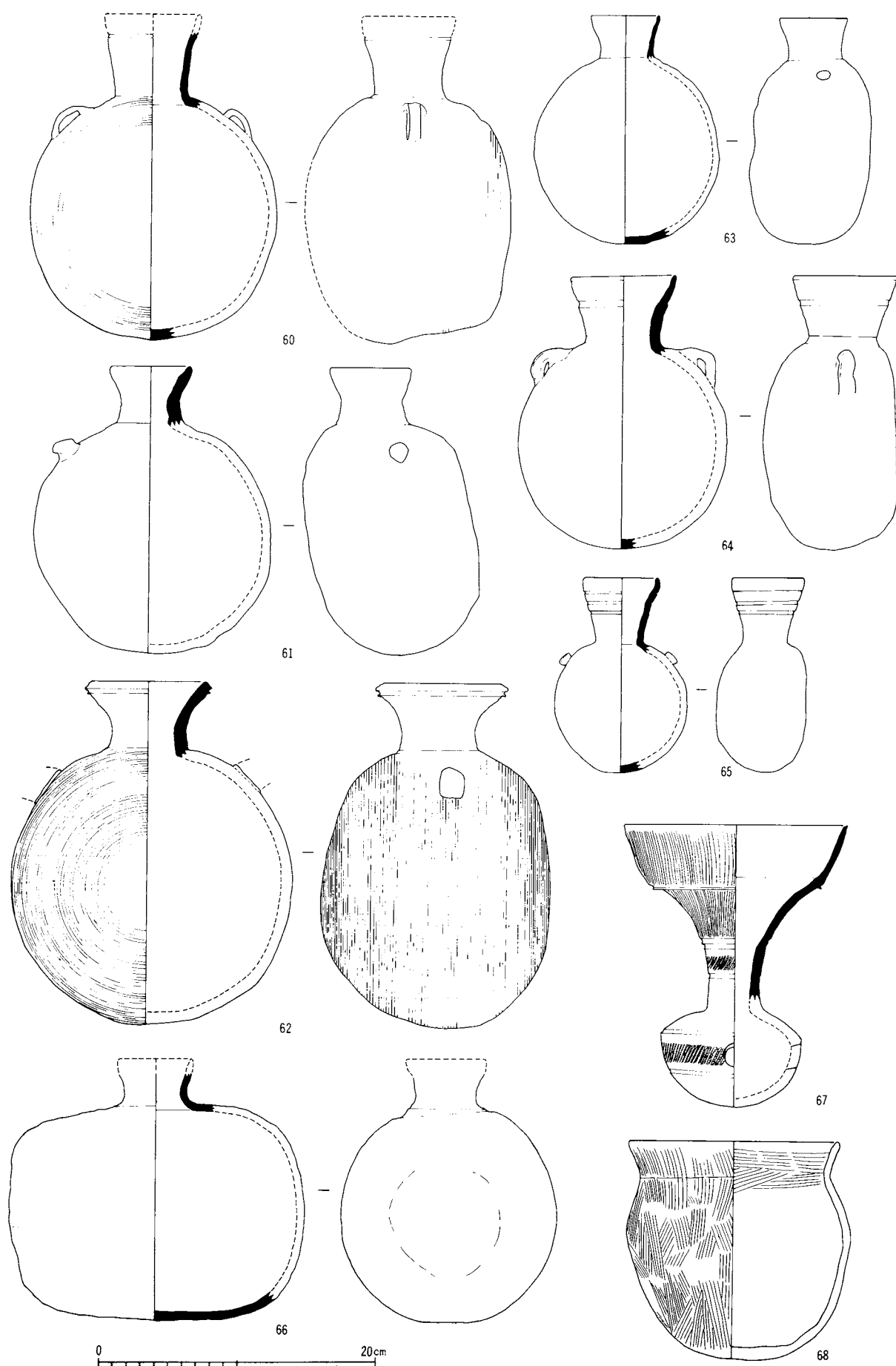
提瓶 (60~65) 6個体出土したが、各々形態上の特徴をもつ。60・64は輪状の把手をもつ。60は口頸部はやや長くゆるやかに外反し口縁部に1条の沈線をもつ。端部は欠損。体部の前面、背面ともまるくつくり、カキ目を施している。灰かぶりで暗緑灰色の部分や器表面がはがれてカキ目消失がみられるなど焼成は不良である。最大径17cm。64は前面がふくらみ、背面は平担な水筒形。口頸部には1条の沈線をもつ。61は把手がカギ形をなす。62は器高24.8cm、最大径19.8cmと最も大きい。体部は前面、背面ともまるく、カキ目調整が施されている。口縁部には1条の沈線がみられる。肩には長方形の把手のはがれた痕跡が認められる。65の把手はボタン状に貼付されたものとなっている。器高14cm、最大径9.3cmと小型で、体部前面のふくらみもすくない。口頸部には3条の沈線がみられる。63の把手は、円形の痕跡が左右にみられるのみである。器形も最大径13.3cmと小さく、前・背面のふくらみも大きくない。

横瓶 (66) 胴径15.4×21.5cmの体部に、口縁端部は欠くが短い頸部をつけたものである。体部外面は回転ナデ調整が施されている。体部の一方は粘土板でふたをしている。

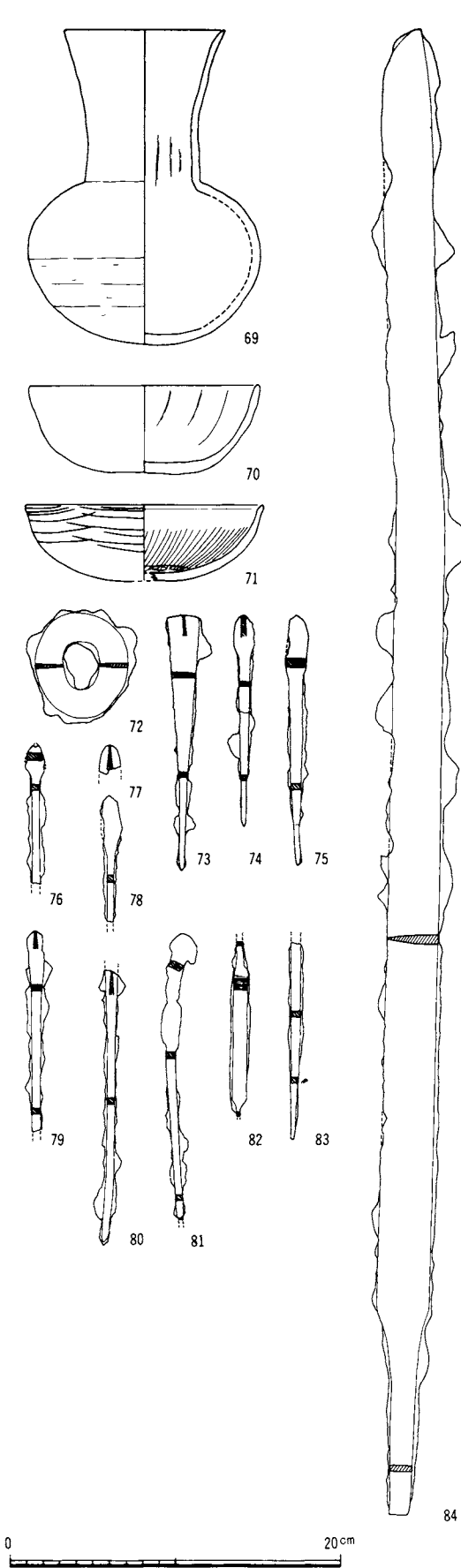
甗 (67) ほぼ半球形の体部に細長くラッパ状に開く口頸部をそなえたものである。頸部には下方に1条、上方に2条1組の沈線をめぐらし、その間に櫛描き列点文を施している。これより上方は口縁部までは縦方向のカキ目がみられる。体部には、上下に各1条の沈線があり、その間には穴及び櫛描き列点文が施されている。外面には灰緑色の自然釉が認められる。

○土師器

甗 (68) 口径15cm、器高15.6cm。体部外面には斜めの刷毛目が施され、その間に部分的にへら削りがみられる。内面は口縁部は刷毛目、体部はナデ調



第55图 土器実測图 2 (1 : 4)



整で、口縁の端部は内外面とも刷毛目の上にヨコナデが行われている。口縁部は四分の一を欠く。

直口壺 (69) 器高18.7cm、口径9.5cm、口縁高9.1cm、基部径7cmである。口頸部は内面及び外面口縁部まではヨコナデが、そこより下方肩部までの外面は、まずタテナデが行われ、その上をヨコナデが施されている。肩部より下方にはヘラ削りが行われている。

杯 (70) 口径13.9cm、器高5.3cm。内面及び外面口縁部まではヨコナデによる調整が、それより下方は不調整である。外面のはく離がはなはだしい。

杯 (71) 口径14cm、器高4.5cm。体部内面に放射状暗文及び底部内面にラセン状暗文が、口縁部外面には横方向のヘラミガキが認められる。焼成は硬く赤褐色を呈する。

○鉄器

鉄鏃 (73~83) 3種類11個出土した。第I類；73鋒部斧形である。全長15.5cm、保存状態もよい。鋒部は先端へ向けて幅が広がり、最大幅2cm、長さ8.5cm、先端がくさび状に尖るほかは、厚さ0.3cmである。茎部は長さ7cmあり、断面は長方形で刃部に近いほど太い。第II類；鋒部が柳葉形のものである。78は茎部を半ば欠く。残存長7.5cmで、鋒部長3.5cm、幅1.3cm、裏面を欠くので厚さは不明、残存の茎部は4cmあり、幅0.4cm、厚さ0.5cmである。74はほぼ完形とみられ、全長13cm、鋒部長2.5cm、幅1cm、厚さ0.3cmである。76は残存長8cm、鋒部は先端を欠く。75は鋒部やや欠くも、全長15cm、鋒部長4cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmで、茎部は長さ11cm、鋒部に向って幅を増す。77は鋒部先端のみ遺存。第III類；鋒部が片刃式と思われるものである(81)。

大刀 (84) 全長90cm、刃部長78cm、幅3cmで、把木、鞘木は遺存しないが刀身は原形をとどめている。

その他 (72) 大刀の鏢かと考えられる。長径7cm、短径5.5cmの楕円形で、厚さ2~3mm、中央に穴があく。

第56図 土器鉄器実測図 (1:4)

4. 結 語

調査前、水田下に姿を消していた1号墳は、その基底部の残存により、1辺9mの方墳で、西及び北の2辺には周溝をも確認することができた。主体部は2号墳より規模の小さい横穴式石室と推定される。

2号墳も、墳丘は削平され水田下に没していたが、長径20m、短径15mの円墳で、横穴式石室の残存も比較的良好、玄室長5.7m、幅2m、西側に片袖をもち、羨道部残存長2.5m、幅1.5mを測るものである。

出土土器から、古墳の造営及び追葬の時期を考えると、2号墳では3期に区分できる。I期に属するものは、須恵器杯身・杯蓋のそれぞれI類に代表されるものである。II期は杯身・杯蓋のII類に相当し、III期は杯身III、IV、V類、杯蓋III類及び暗文をもつ土師器杯等である。それらの実年代は、およそI期は6世紀後葉、II期は7世紀第1四半期（飛鳥編年のI期）^②、III期は7世紀第2四半期におかれよう。従って、2号墳の築造は6世紀後葉と考えられ、7世紀第2四半期までの間に追葬が行われていたと思われる。1号墳は限られた数の土器からではあるが2号墳におけるIII期に相当するものであろう。

すでに大山田地内で発掘調査された横穴式石室をもつ古墳には、昭和47年の辻堂古墳（中村）^④、昭和54年の平林1号墳（真泥）^⑤がある。それらの築造と追葬の時期（期間）、石室の構造、出土遺物をあわせながめることによって、横枕古墳群を理解する一助としたい。

築造と追葬の時期（期間）については、築造順から、まず、辻堂古墳があげられる。6世紀後半（中葉）から7世紀後半に及ぶ。それに次ぐのは平林1号墳で、6世紀後半から7世紀前半にわたる。横枕古墳群は三者の中で最も新しい築造といえることができる。

石室の構造（規模）では、辻堂古墳が玄室長5.2m、玄室幅1.9mの両袖式で、羨道長4m、羨道幅1.2~1.6mあり、組合せ石棺をもつものであった。その墳丘は、径20m位の円墳あるいは前方後円墳であったと考えられている。平林1号墳は、径18mの円墳で両袖式の横穴式石室を有するもので、玄室長5.1~

5.3m、玄室幅2.1~2.2m、羨道部残存長2.8m、幅1.4mである。それらの壁面構成は、残存状態でみれば限り三者とも比較的大きな石組（長さ1m前後、幅70~80cm）である。持送りは辻堂古墳にはなく、横枕古墳にはわずかにみられる。

盗掘される等の破壊が及んだ石室の残存遺物についてではあるが、その特質をみると、およそ、次のことがいえる。須恵器杯身について、辻堂古墳ではたちあがりをもつもののうち約80%の底部に回転ヘラ削りがこれと組になる杯蓋の約50%の天井部に回転ヘラ削りが施されている。新しいものは、平らな底と外傾する口縁部からなる杯身及び宝珠形のつまみをもち内面にかえりのある杯蓋である。平林1号墳では、底部に回転ヘラ削りのあるものは約40%で新しいものでは、杯蓋に宝珠形のつまみと内面にかえりのある杯蓋があるが、これと組をなすたちあがりのない小形の杯身はほとんどない。横枕2号墳では、杯身のうち、底部にヘラ削りのあるものは7%のみで、これと組になる杯蓋の1点に回転ヘラ削りが施されていたにすぎず、杯身、蓋とも多くはヘラ切未調整である。新しいものは、たちあがりをもたない杯身及び宝珠形のつまみをもち内面にかえりのある杯蓋である。暗文をもつ土師器杯は辻堂古墳、平林1号墳、横枕2号墳で出土した。伊賀では、ほかにも、伊賀町齋宮芝遺跡^⑥等から近年確認されつつある。太刀は辻堂古墳で推定全長46cm以上のものが、横枕2号墳では全長90cmのものが出土した。平林1号墳では銀環や玉類も出土している。

この盆地の古墳の東限は三谷古墳群である。横枕古墳群の所在する川北地内の東、広瀬地内にある。横枕古墳群をめぐる北、南、西の丘陵端にも数基あるいは十数基の横穴式石室の認められる古墳が存在する。それらの規模はすでに発掘調査された3古墳ほどではないが、この地域における在地中小共同体の首長層あるいは有力構成員の存在と古墳の築造を推定できるものであろう。

横枕2号墳及び辻堂古墳、平林1号墳からともに暗文をもつ土師器杯が出土したことは、それらの古

墳の被葬者のもつ文化性をもうかがわせるものであろう。

同規模の石室規模をもつ三者のうちでも、とくに辻堂古墳には、敷石があり、組合せ式石棺をもち、前方後円墳であったことも考えられる等のちがいがみられる。横枕1号墳の被葬者は、平林1号墳とともに有力ではあったが、辻堂古墳のそれには及ばなかったと思われる。 (中森英夫)

<註>

- ① 三重県立上野高等学校教諭・奥山茂美氏の御教示による。
- ② 須恵器の絶対年代観については、田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古クラブ 1966
大阪府教育委員会「陶邑Ⅲ」 1978 に依拠した。
- ③ 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」 1978
- ④ 森川桜男、西嶋覚、北川乾一、藤田尚一 「辻堂古墳発掘調査報告書」 大山田村教育委員会 1973
- ⑤ 昭和53年度三重県埋蔵文化財年報9 三重県教育委員会1979
- ⑥ 吉水康夫、岡本武和、寺岡光三 「筒御前古墳発掘調査報告」伊賀町教育委員会 1977

IX 阿山郡大山田村 山出遺跡

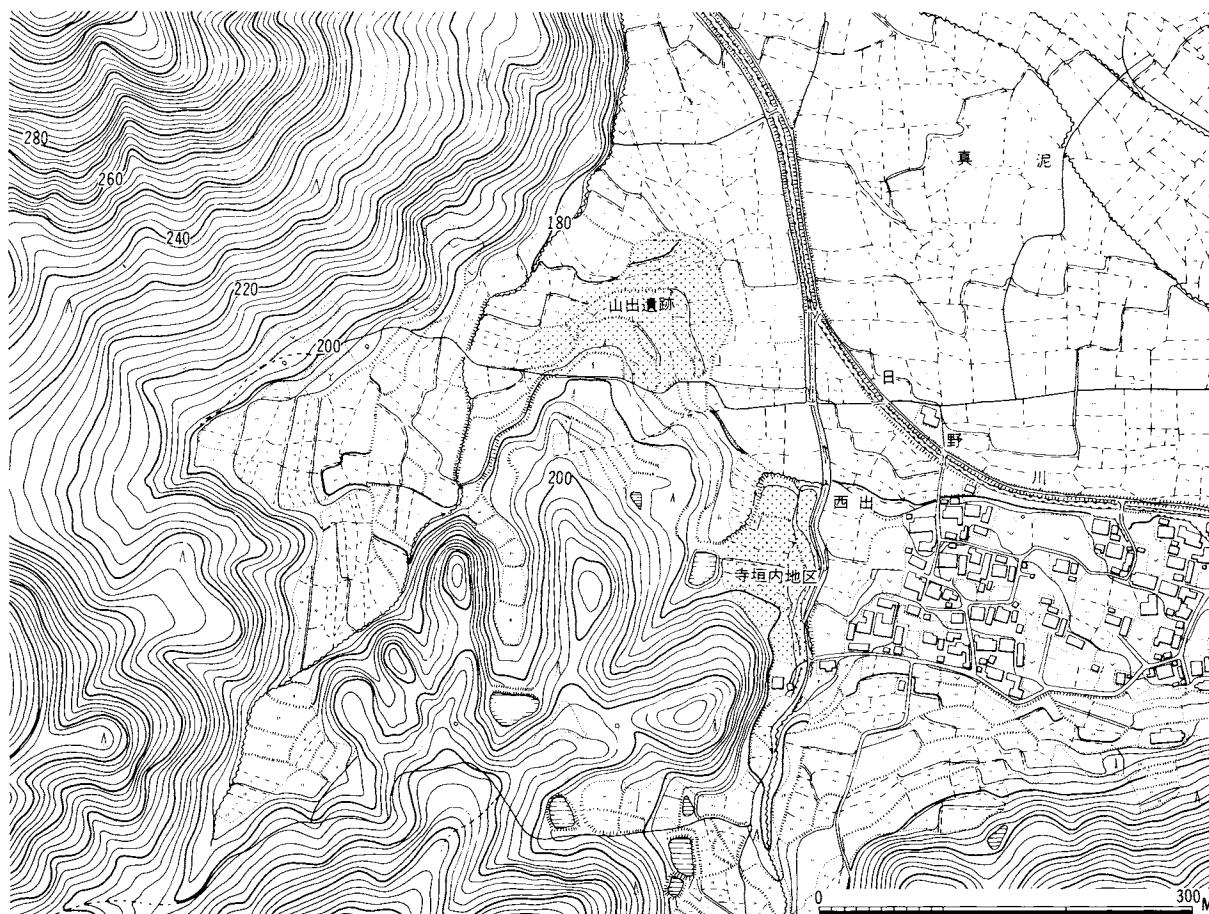
1、位置と歴史的環境

山出遺跡は、大山田盆地の南西端に位置し、標高185m前後の半島状丘陵先端部に営まれた古代・中世の集落跡である。行政上は、阿山郡大山田村真泥字山出に属する。

大山田村と上野市の境には、標高340~350mの丘陵が広がり、大山田盆地と上野盆地を画している。この丘陵地は、大山田盆地の中央部を西流する服部川に浸蝕され、小規模な溪谷を形成している。山出遺跡西方0.8kmの標高334mの丘陵頂部には、伊賀最古と推定される全長90mの前方後円墳である荒木車塚古墳(3)が築かれている。また、この溪谷に分かれた南北の丘陵には、前塚古墳群(16)・中ノ瀬古墳群(17)・下山古墳群(18)等の横穴式石室を

内部主体とする後期古墳が群集する。一方、弥生・古墳時代の遺物包含地は、沢遺跡(11)・轟遺跡(12)・炊遺跡(19)・里の垣内遺跡(20)等が少数ながら盆地周辺に確認されているのみで、古代集落跡の様相は、不明な点が多い。

山出遺跡は、昭和54年10月に第一次調査を実施したものであり、昭和55年3月に削平される道路部分250㎡のみに限り第二次調査を実施した。また、寺垣内地区(真泥字寺垣内)でも、昭和54年10月に第一次調査を実施したが、顕著な遺構・遺物は存在しなかった。従って、本報告では、山出遺跡の第一次・第二次調査の結果を報告するにとどめたい。尚、山出遺跡の遺跡標示略記号は、4 J Y Dである。



第57図 山出遺跡位置図(1/6000;大山田村現況図No.3 1/3000)

2. 遺 構

1. 第一次調査

山出遺跡が立地する丘陵先端部は、後世の開墾により数段の平坦地となり、水田及び畑となっている。分布調査で、ほぼ全域に土器片の散布が認められた為、第一次調査を実施した。第一次調査は、遺跡の範囲を確認する為の試掘調査であり、2m×4mのグリッドを基本として実施した。

遺構検出面までの深さは、平均65cmを測り、遺物包含層の厚さも30前後を測る。丘陵尾根にあたる21Gでは、遺物包含層は存在しない。緩い斜面であったと推定される北から東にかけての各グリッドでは、遺物包含層も厚く、出土遺物も多く、かつ遺構密度も濃い様である。また、丘陵端部の各グリッドでは、遺物包含層が殊に厚い。

4Gでは、堅穴住居と推定される凹地を確認し、古式土師器(1~10)を一括出土した。

2. 第二次調査

第二次調査は、遺跡の西斜面にあたる標高183m

の水田で実施した。調査区は、北西方向へ傾斜しており、比高0.7mを測る。調査区の基本層序は、I層——耕作土・II層——黄灰褐色粘質土・III層——暗灰褐色粘質土・IV層——暗褐色粘質土(遺物包含層)・V層——黄緑色粘土(地山)である。

検出した遺構は、古墳時代の土坑1基、鎌倉時代の土坑1基と溝3条、時期不明の土坑1基、及び調査区北東部と中央部で相当数のピットを検出したが建物としてまとまりをもたない。

グリッド No.	遺 構	遺 物	グリッド No.	遺 構	遺 物
1		土師器片	13		土師器片
2		〃	14		〃
3		〃	15	ピット	土師器片
4	堅穴住居 ピット	(1~10)	16	溝・ピット	〃
5	溝	〃	17	土坑	〃
6		〃	18		〃
7	溝・ピット	土師器片	19	ピット	〃
8	ピット	〃	20	ピット	〃
9		〃	21		〃
10		〃	22		土師器片
11	溝	〃	23		〃
12	ピット	元符通宝	24		〃

第一次調査グリッド一覧表



第58図 山出遺跡地形図(1/2000)

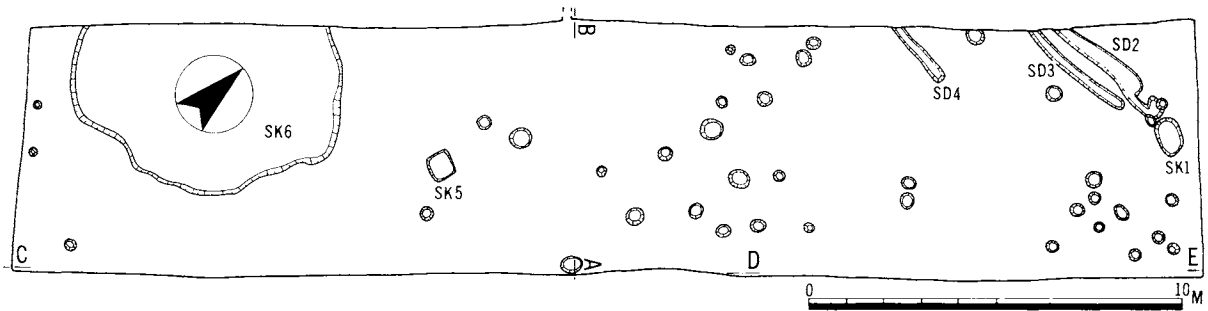
■ 第一次調査 □ 第二次調査 - - - 計画線

SK1 長径1m×短径0.5mの楕円形を示し、深さ15cmを測る。黒褐色粘質土を埋土とする。土師器皿(13)。羽釜片・瓦器碗(16)・瓦器小皿(14・15)出土・13世紀代に属する。

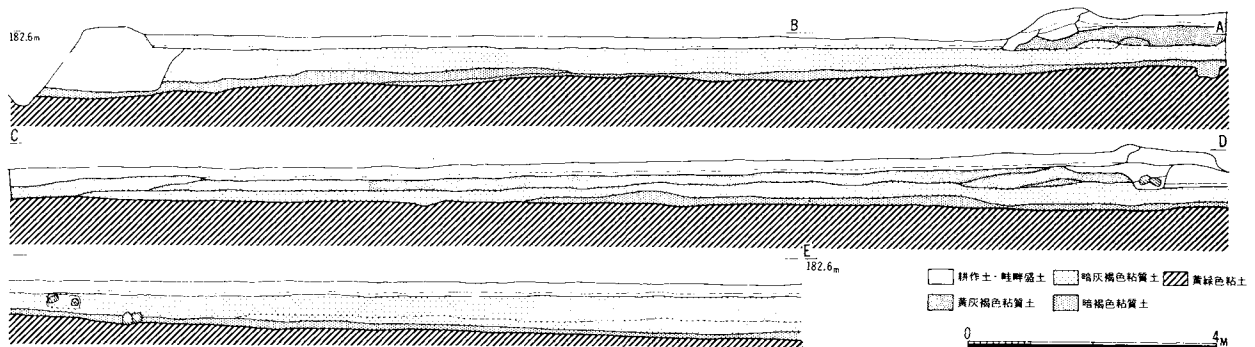
SD2～4 幅0.3～0.4m・深さ数cmの小さな溝である。黒褐色～黒灰色粘質土を埋土とする。**SD2**から瓦器碗(17)を出土し13世紀代に属する。

SK5 0.7m×0.6mの方形を呈し、深さ12cmを測る。黒灰色粘質土を埋土とし、炭化物を多量に含む。出土遺物もなく、時期不明。

SK6 長径7.3m×短径4.5mの不整形の凹地であり、深さ10cm程の浅いものである。黒褐色粘質土を埋土とし、土師器片・須恵器蓋(11・12)を出土。6世紀末頃に属す。



第59図 山出遺跡発掘調査区域全体図(1/200)



第60図 山出遺跡土層断面図(1/120)

3. 遺物

1. 第一次調査の遺物

第一次調査の遺物包含層・遺構から出土する遺物は、大半が土師器である。しかも細片が多く、図示し得る資料は乏しいが、4Gから古式土器が一括出土する。

高杯(1～4) 杯部(1)は、外弯する口縁が大きく開くもので、口径18.3cmである。杯底部で屈曲して脚部へ続くものと思われる。

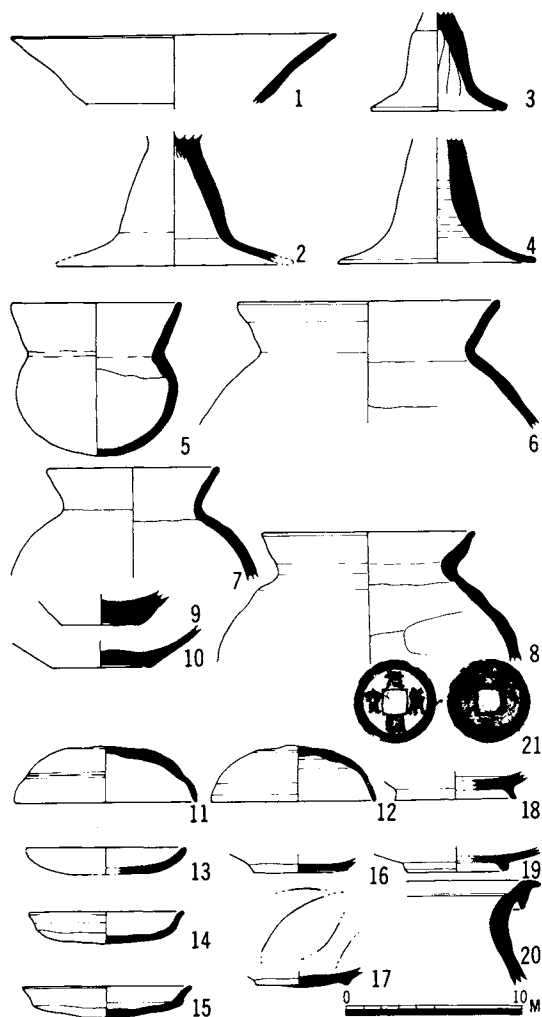
脚部(2～4)は、柱状部がふくらみ、裾部は屈曲して広がる。大小があり、また、中空のもの(4)もある。柱状部内面にシボリ痕をのこすもの(2・3)とケズルもの(4)がある。褐色～茶褐色を呈

し、細砂粒を含む。

小形壺(5) 口径9.5cm・器高8.6cm。球形の胴部に外傾する口縁部がつく。口縁部端面は丸い。内面に口縁部と胴部の接合痕をのこす。口縁部はヨコナデ、胴部はヘラケズリした後ナデ仕上げする。茶色を呈し、砂粒を僅かに含む。

壺(6～10) 口縁部が、直線的に外傾する。6は、口縁部が薄くなり、直立気味に引き出される。器面は、全体に粗雑で凹凸が著しい。体部内面を横位にヘラケズリするもの(8)もある。

これらの土師器は、畿内の布留式に併行するものであり、古墳時代前期5世紀代に属するものであろう。



遺物実測図(1/4)・柘影図(1/2)

2. 第二次調査

須恵器蓋(11・12) 平坦な天井部から、口縁部が外傾気味に開くもの。11は、口縁部と体部との境に丸い段をもつ。ともに、天井部はへら切り未調整

であり、他はナデで仕上げ、天井部内面には仕上げナデを施す。11は、口径11.2cm・器高3.2cm。12は、口径9.8cm・器高3.2cm。灰色～暗灰色を呈し、砂をあまり含まない。TK209前後に比定され、6世紀末頃に属する^①

土師器皿(13) 口径9.0cm・器高1.5cm。丸味をもつ体部をもち、口縁部は丸い。

瓦器小皿(14・15) 丸味のある底部に外反する口縁がつく。内底面には、ジグザグ状暗文を施すが、燻が剥離し鮮明でない。口縁部はヨコナデする。底部外面は、オサエのままである。14は、口径8.6cm・器高1.8cm。15は、口径9.5cm・器高1.8cm。

瓦器椀(16・17) 底部が断面逆三角形の低い高台より低く、高台の意味をなさないものである。ともに13世紀後半と考えられる。

3. その他の遺物

緑釉椀(18) 底径6.8cm。断面方形の高台が「八」字状に開くものである。内面には、僅かな段がつく。暗灰色を呈し、硬質である。内面及び高台外面以上に鮮明な緑釉をかける。第二次調査第III層出土。

灰釉椀(19) 底径5.6cm。断面方形の高台が、ほぼ直立する。高台外面は、面取りし稜をもつ。第一次調査12G出土。

伊賀焼甕(20) 「N」字状口縁の退化した形状を示す口縁部である。暗茶緑色の施釉がみとめられる。口径20cm前後と推定。第二次調査第III層出土。

元符通宝(21) 径2.3cm・厚さ0.1cm。北宋銭で初鑄年代は1098年である。第一次調査12G出土。

4. 結 語

第一次調査では、古墳時代前期を中心とする遺構・遺物の存在を広範囲にわたって確認した。また、第二次調査は、遺跡の西斜面にあたり、遺構密度は薄かった。しかしながら、第一次調査で確認し得なかった古墳時代後期及び平安・鎌倉時代の遺構・遺物を検出し得たことは、成果であった。また、緑釉陶器の出土は、伊賀で四番目であり、注目される^②。

山田盆地が、地域的まとまりを示すのは、5世紀代と考えられ、山出遺跡はそれを支えた集落の1つ

であろう。そして、山出遺跡は、山田盆地の古代・中世を解明する上で、極めて良好な資料を包蔵しており、永く保存されることが望ましい。(駒田利治) <註>

① 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園 1969

② 沖島卯之「三重県田中遺跡出土の瓦器と緑釉土器片」『古代学研究』15・16 1956

中森英夫・山田猛・山本雅晴『下郡遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市下郡遺跡調査会 1978

山田猛「上野市比自岐馬場西遺跡」『昭和52年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告2』三重県教育委員会 1978

X 上野市大野木 木津氏館跡

上野市猪田から長田にかけての県営上野西部圃場整備事業が開始されたのは昭和45年であった。その間、事業の進捗に伴ない周知の遺跡及び新しく所在の判明した遺跡等が、何らかの影響を受ける事となり、これまで上ノ庄の「山ノ川遺跡^①」、朝屋の「内屋敷遺跡^②」、大野木の「北山遺跡^③」が発掘調査され、今年度においては婦毛遺跡・神ノ木館跡・木津氏館跡の三か所で発掘調査を実施する事となった。

木津氏館跡は、当初館跡北側の畑に水路がつく予定であったが、地元の事情により、館跡東側の地割

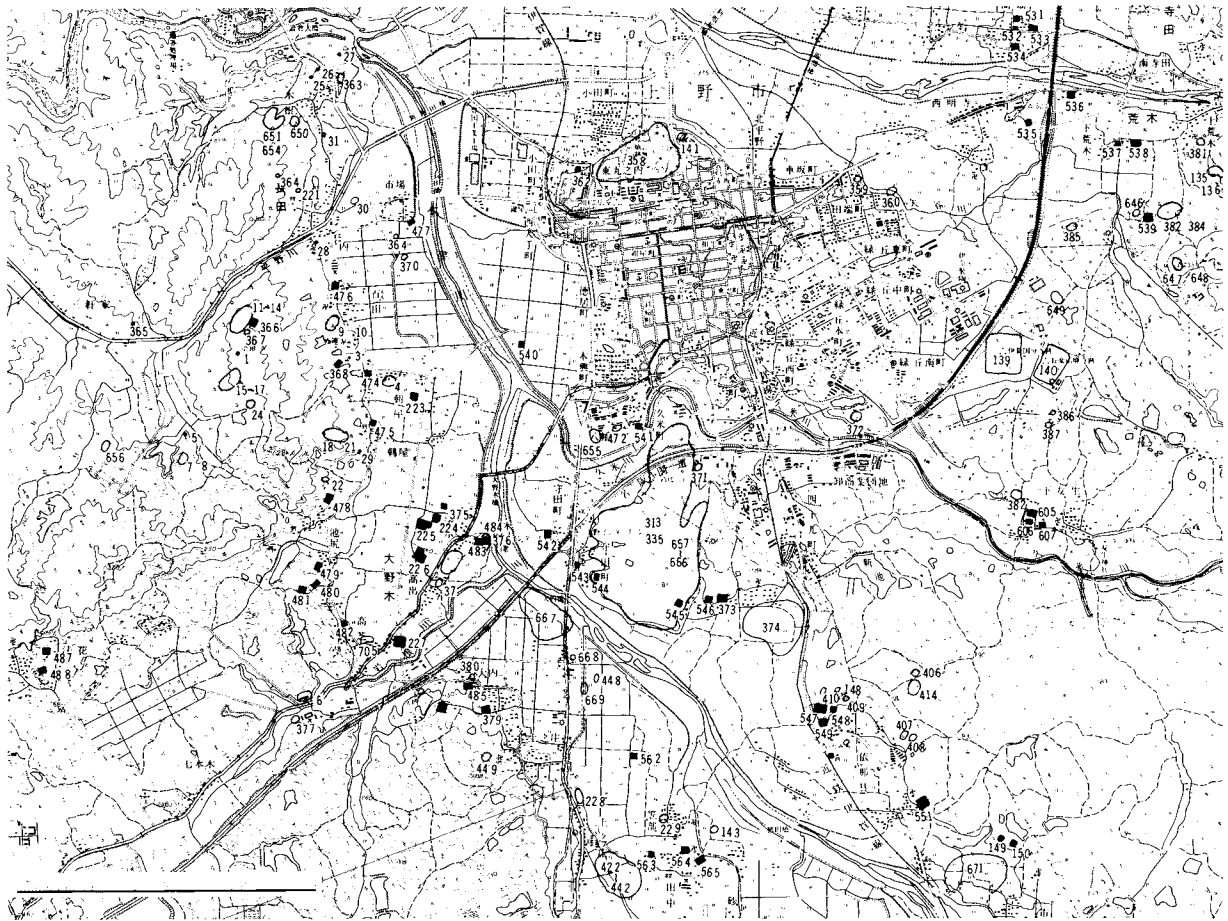
から明らかに堀跡と推定される水田部分に水路をつける事となった。このため、昭和55年1月8日から5日間、水路にあたる水田を対象に発掘調査を実施し、水路は堀遺構を破壊しないで設ける事になった。

調査に際しては、上野耕地事務所、上野西部土地改良区に多々御配慮を頂いた。又、株式会社林建設や地元大野木の方々の御協力と、土地所有者の木津義玄氏と木津拙夫氏には格別の御配慮を頂き、調査が滞滞なく終了できた。記して謝意を表したい。

1. 位置

1. 歴史的環境

四周を山に囲まれた伊賀盆地は、上野・名張・大



第62図 遺跡位置図

婦毛遺跡(705)・神ノ木館跡(224)・木津氏館跡(225)(国土地理院1:50,000 上野・鳥ヶ原・月ヶ瀬・伊勢路)

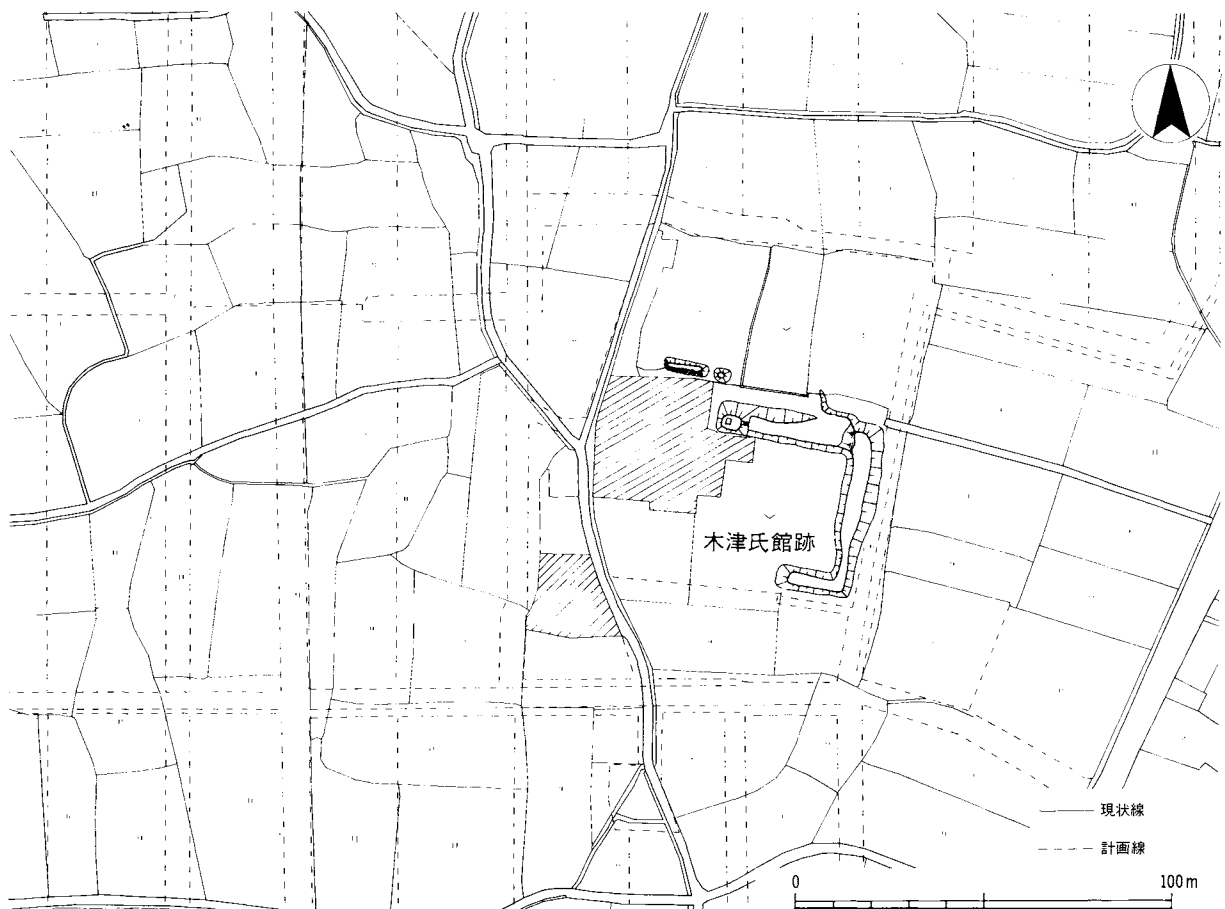
山田などの小盆地と鈴鹿山脈・布引山地に源を發する服部・柘植・木津川の形成した沖積地からなる。伊賀は、畿内周辺地として古くから畿内の影響下にあると同時に、東国への交通路にあたり、東海地方以東の文化をも享受してきた。伊賀で多くの文化遺産が今日まで温存されてきたのは、盆地といった自然環境下にあったことも一つの要因である。

婦毛遺跡(705)・神ノ木館跡(224)・木津氏館跡(226)は、ともに上野市街地の西方木津川西岸の大野木地内に所在する中・近世の遺跡である。西方には、標高300mほどの丘陵が広がり、婦毛遺跡は大池を扇頂とする扇状地に、神ノ木館跡・木津氏館跡は、扇端と河岸段丘が接する地にある。

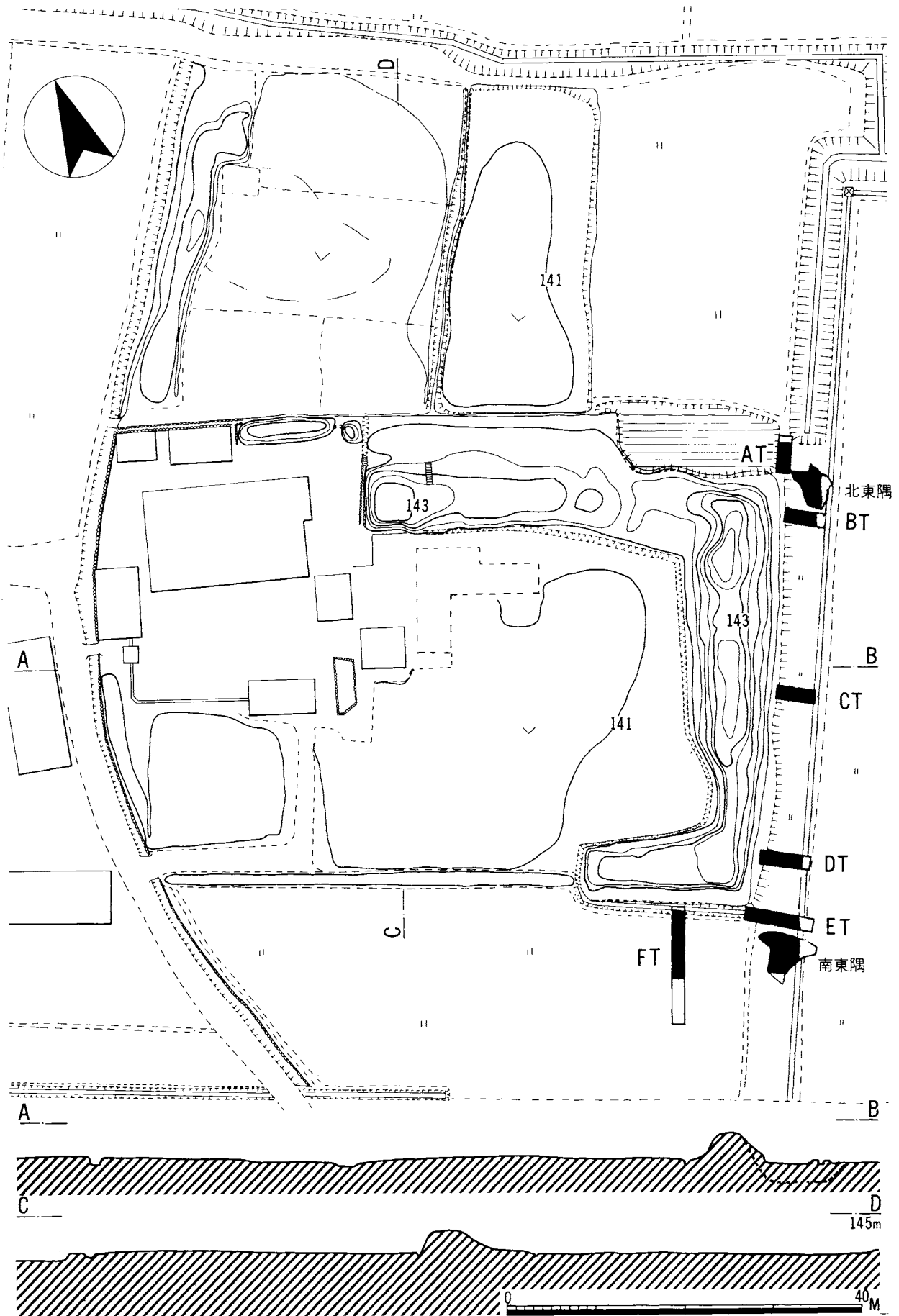
大野木周辺には、縄文時代以降多くの遺跡が知られている。縄文前期から後期までの土器を出土する田中遺跡(143)、後期・晩期の土器を出土した清水北遺跡^④(376)、弥生後期の遺跡として知られている山ノ川遺跡^⑤(669)・田中遺跡・北堀池遺跡^⑥(667)などの遺跡が、木津川西岸を中心に点在する。

古墳時代には、水田跡と集落跡を検出した北堀池遺跡、5世紀以降7世紀まで築造され約60基からなる久米山古墳群^⑥(313~335)をはじめ、長野古墳群(422~446)・塚の山古墳群(11~14)・比自山古墳群(15~17)などの古墳が数多く分布している。しかし、古墳時代にあつて、上野盆地西部は、必ずしも上野盆地の中核ではなく、荒木車塚古墳・御幕山古墳・外山古墳群などの古墳が集中する盆地北東部が、主導的であつたようである^⑦。それは、印代付近に比定される伊賀国庁跡・一ノ宮神社の所在から窺えるように奈良時代でも同様であつたろう。

古代末期から中世にかけては、伊賀の各地域と同様にいくつかの荘園が成立してくる。大野木も、朝屋・木輿・法華・大内下荘とともに長田郷に含まれ、平家領として長田荘を構成していた。長田付近には、長田御厨の名も知られる。また、岩根川南岸には、大内東荘・西荘及び大内御厨の名も史料に散見される^⑧が、その成立・実態は不明な点が多い。しかし、荘園体制の中で次第に力を貯えてきた有力農民層が、



第63図 発掘区平面図(1:2000)



第64図 遺構平面図 (1 : 600)

室町時代以降自立化の道を開き、防禦性を兼ね備えた居館を構築してきたことは、史料の裏付けを欠くが充分推定されることである。

旧大野木村は、清水・高出・高芝・東出・南出・北山・池尻の集落からなり、宝暦13年(1763)に編纂された『三国地誌』^⑨には「大乃木村」所在の古蹟として田上兵庫堡(478)・三波氏堡(482)・廣山氏堡(480)・久保田氏堡(479)・直居氏堡(483)・竹嶋氏堡(225)・木津氏堡(226)・増井氏堡(不明)・廣山氏砦址(481)の城館跡を載せている。然るに、大野木地内には、この他にも神ノ木館跡(224)・大辺神社田社地(375)・清水北館(484)の城館が存在する。これらの城館が、すべて同時期だとする積極的根拠はないが、その大半が戦国期に存在したと考えることに大過ない。さすれば、7集落から構成される旧大野木村では、集落毎に二つほどの城館が存在したことになる。この事実は、伊賀盆地で普遍的に認められる中世城館の存在形態であり、伊賀の戦国時代の社会構成を考える上で極めて重要な課題を含んでいる^⑩。

これらの有力農民層は、天正9年(1581)織田信長の侵攻により比自山での攻防に敗れ^⑪、その後幕藩体制下にあっては、藤堂藩の「無足人制度」に組みこまれていくものが多く、また帰農する者もある。

一方、この地は、木津川の水運にめぐまれ、長田宇市場の地名に繁栄のあとを偲ばせる。天正11年(1583)には、脇坂安治が守護代として市場に館を構える。天正13年(1585)には、伊賀国守として筒井定

次が入封し、同地に居を構えるが、後現在の土野市街地に支配の拠点置き、角倉家に長田川の整備を命じている^⑫。(駒田利治)

2. 館跡の現況

木津川は様々な小河川を支川に持ち、本流は伊賀盆地を北西流あるいは西流するなかで多くの氾濫原と沖積地を形成してきた。木津氏館跡は、木津川の支川、岩根川が本流と合流する地点より西方600m付近に所在する。地形的には木津川左岸の標高140m～150mの東西0.5～1km、南北4kmに発達した下位段丘^⑬の上に館跡が乗っている。行政上は土野市大野木宇高之畑407～413番地に属する。

館跡は、第64図のとおり二郭形式と推定でき、その規模は大體100m四方(方一町)である。主郭の大きさは80×60mで、このうち33×33mは内郭部である。副郭は55×40mの大きさで、そのうち内郭部は25×20m位かと思われる。

館跡の細部^⑭は、第12表に示してある。主郭の遺存は良好で、総延長112m・敷(平均)8mの土塁がコ字形に北・東・南に連係して残る。このため、内部の輪郭の半分以上が明白で、消滅部分も33mの方形として把握できる。内郭の畑には、陶磁器片が散布したり、掘削時には播鉢等が出土している。

副郭は殆んど原状をとどめない有様だが、残存土塁や地籍図及び土地の起伏等が副郭の所在等を告げている。

このあたりの水利は地形に対応して、各溝の流れ

項目	全長	褶	敷	高	(最高所)	内法	外法	現況	地目(番地)	遺存状況	
主郭の土塁	東	47	4	8～10	2～3	143.75	3	3	雑木林	山林(409)	南の狭い褶が崩れていないなら何かの遺構である。南端に地藏三体を祀る。
	西	現存せず						家屋と畑	宅地(401-2)畑及び(410-1)	不明	
	南	20	3～4.5	6～8	2	142.76	2	1	雑木林	山林(409)	遺存は良好。輪郭は直線状。内側の法に通路。
	北	45	4	12	2	142.76	6.5	1.5	雑木林	山林(409)	西端の半担部に八体竜王を祭る。法が大きく崩壊か。
副郭の土塁	東	現存せず						畑	(畑)(408)	消滅。地籍図では崩れた土塁が畑(408)として残る。	
	西	25	不明	5～7	1	141.50	不明	不明	竹藪	(山林)(406)	崩れが激しい。
	南	現存せず						畑	(山林)407-2)	消滅、地籍図に土塁が山林(4×33m)として残る。	
	北	5	不明	8以上	1	141.0	不明	不明	畑	畑 407-1	残存はごく一部。大半は畑になったか。(407-1)

第12表 館跡現況一覧表

の左側の水田に水がかかる事になっている。

館跡西側の常溝は、南から北へ流れ、現況母屋あたりで2つに分岐する。西よりの溝は、300m北流して、竹島氏館の西・北の堀跡ないしはこの隣地を経て、神ノ木館の北ないしは隣地を通過した後、再北流して、木津川に注ぐ。

一方、東よりの溝は、副郭の西の土塁や竹島氏館主郭南東隅と当副郭北西隅を結ぶ直線上の中1mの農道に沿って100m程北流した後、東流する。

この変曲点に、西から別の道が直交し、三叉路をなしている。そばに道標がある。道標には、「左

ならみち 右 志がらきうえのみち^⑬」との銘がある。これは木津氏館を通過してきた人の目に入るものである。120m程東流した溝は、再び北流して木津川に注ぐ。

館跡東側の小溝は稲作の湛水時に利用され、余り水は上記の東流する溝に流れる。

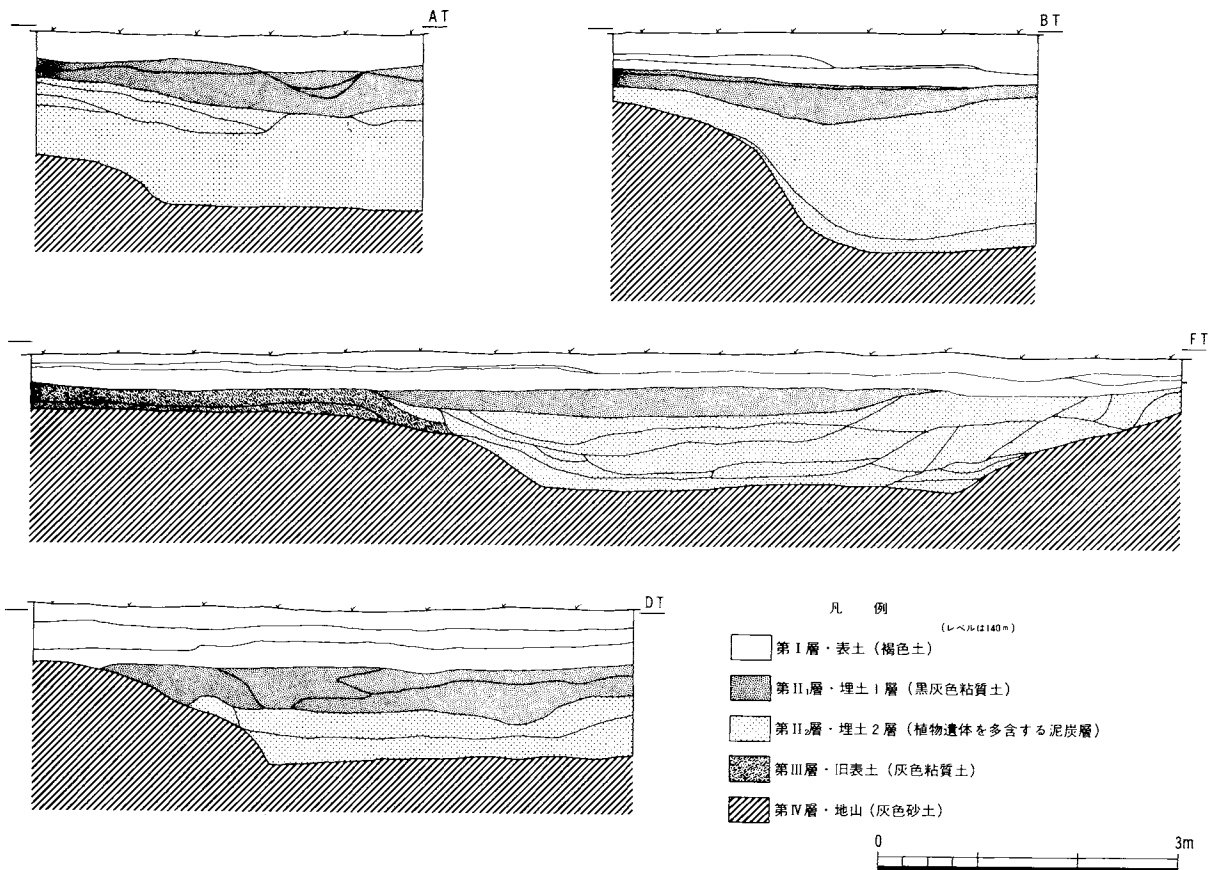
なお、館跡の西側の常溝の南方100m程の地点の公民館敷地にも道標がある。道標には、「左 なばり道 右 てん王道^⑭」との銘がある。木津氏館の南方を東から西へ行く人のためのものだろうか^⑮。

2. 遺 構

今回の調査で第65～67図のように、主郭の東堀については部分的に解明できた。堀底は、全長58mに及び漸次南より北へ深くなり、北端で標高137.8mとなる。南・北のコーナーは各々西へ直角に曲っている。検出した堀の西壁は、堀底より急勾配で0.3～1

m上がった地点で緩勾配となる。南堀も北堀も所在する事は確認できたが、堀の土塁寄りの壁が反対側の壁より急勾配である事を除き、詳細は不明である。

堀の基本層序は、第I層・表土、第II₁層・埋土1層、第II₂層・埋土2層、第III層・旧表土、第IV層・



第65図 トレンチ断面図 (1:75)

地山である。

第I層は厚み20~50cmで、褐色土を主とする耕作土等である。第II層は厚み0~50cmで黒灰色粘質土を中心とする埋土である。第III層は厚み20~150cmの植物遺体を多く含む泥炭等の埋土である。第IV層は厚み15~30cmで、灰色粘質土を主とする旧表土である。第V層は礫が混入した灰色砂土を主とする地山である。

なお、堀の水面は第II層上面にあたり、標高139.5

mを測る。

A T 堀の南壁は下から37度、21度、6度と小刻みに緩斜面になっている。

B T 最深部を検出したためか、付葉の実、木の葉、木片が最も多く堆積している。

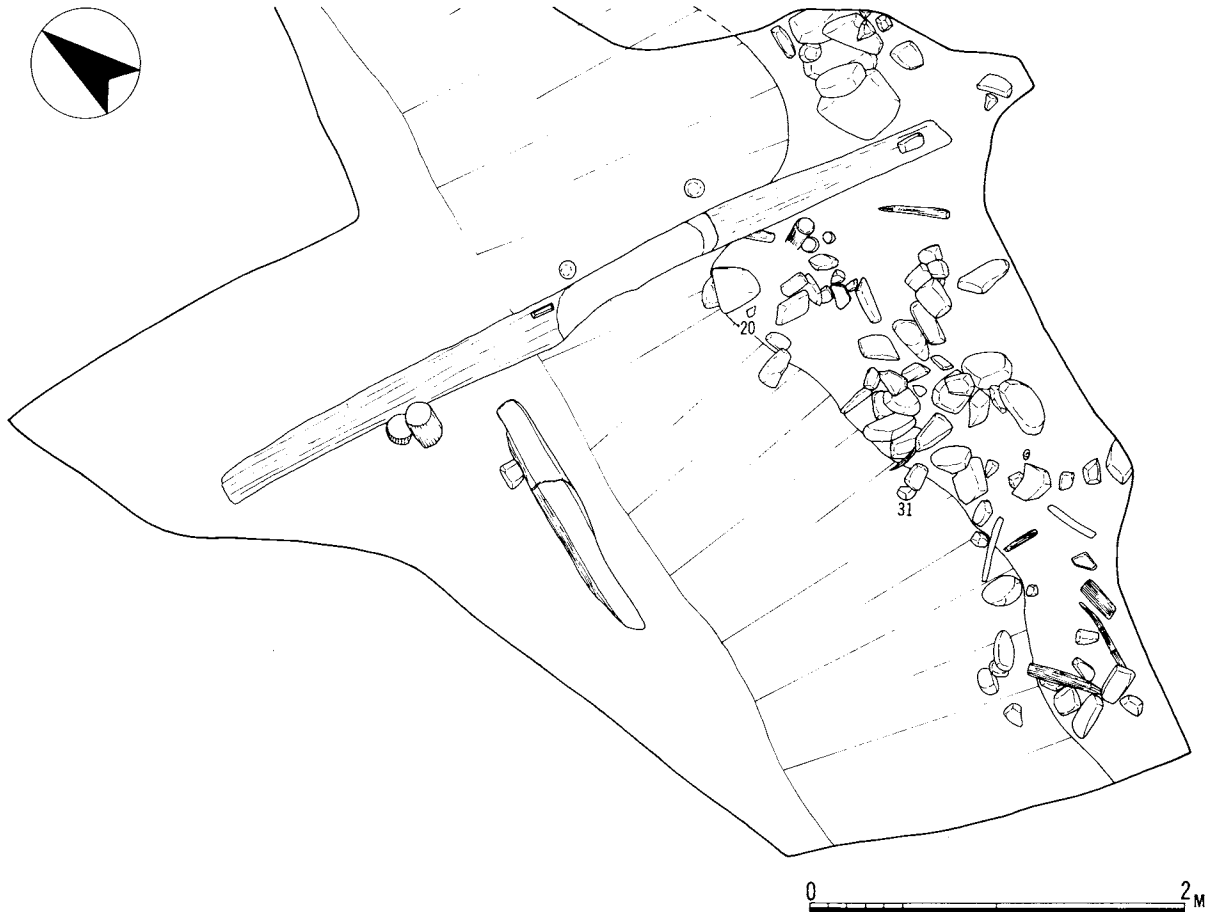
C T 埋土各層が最も整合的である。

D T 土器等の出土は最少である。

E T 堀底と土塁の関係は、大半最寄の土塁に平行するが、この堀底東端は、東の土塁に75度の角度

項目 トレンチ	規模 (m)	方向	堀肩	堀壁勾配 (度)	堀底		第I層	第II層	第III層
					深(m)	巾(m)			
A T	2×4	南北	不明	南壁20	1.7	2	陶器皿②⑤ 播鉢、陶器、埴、瓦 須恵器(1点)	土師器皿③⑨ 水指④④ 瓦質土器④③、空風輪⑥② 播鉢、陶器埴	青磁皿②②、土師器皿④④ 天目
B T	2×4	東西	不明	東壁50のち20	2.2	1	播鉢(1点)	播鉢(2点) 陶器埴(1点)	瓦(1点)
C T	2×4	東西	不明	不明	1.9	4	播鉢 陶器埴・鉢 土師器	陶器埴・椀 土師器	碗①⑦漆椀⑦① 染付⑤⑨-⑥⑩ 陶器埴、土師器
D T	2×6	東西	不明	東壁50のち25	1.6	3.5	染付、陶器埴	陶器 土師器	播鉢 瓦器(1点) 陶器埴
E T	2×8	東西	不明	東壁20のち10	1.35	6.5	燈明皿②③播鉢、瓦、陶、磁 (層位は不明)		
F T	2×14	南北	不明	西壁30 のち南壁10 北壁15	1.4	全長 4	播鉢 陶器	播鉢、陶器埴 瓦質土器 土師器	土師器皿⑥⑥ 漆椀⑥⑨ 播鉢

第13表 トレンチ一覧表



第66図 北東隅遺構(1:40)

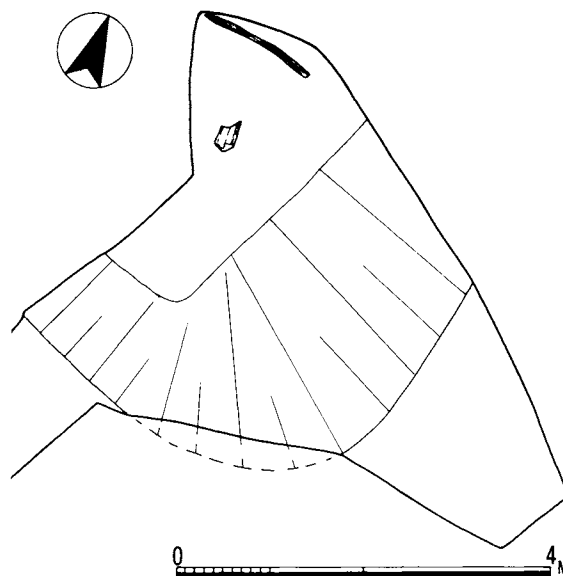
で喰込む形状をしている。

FT 堀底を完全に検出して、その巾4mと確認する。堀壁の緩急勾配の変曲点付近の土中から強い湧水がある。水を湛えた時の堀巾は8m以上である

北東隅、東堀北端部約30m²を立会調査して、東西を向いた木が土塁に直交して固定されている様子を検出した。木の東西両端付近の南側では2本の杭を×印に打ち込み、東端の北側からは石組により固定していた。木の東端下部は、堀の東壁緩斜面の地山直上にあり、西端は堀内の第II層の中にある。

木の大きさは径18cm、長さ4.3mである。木の西半は丸太のままであり、東半は面取りが6面以上施こされている。また、木の中央と東端では夫々2×9cmの柄孔がある。東端の柄孔は巾9cmの面取部分にみられる。

なお、今回の第II層までの発掘では、堀のコーナーを堀底まで完堀できなかつたが、少くとも東堀と北堀が直交した形で、隅丸となっている様子が堀底1m上で確認できた。



第67図 南東隅遺構 (1:80)

南東隅 東堀南端部約30m²を立会調査して、堀のコーナーを検出した。第67図のように、コーナーは堀底では直角で、138,476mを測る。堀壁では内彎傾向の直交線が隅丸となり、互いに東堀と南堀が直交している。

3. 遺物

遺物は、殆んど堀の埋土から出土した。大別すると、陶磁器、土師器、製塩土器、瓦・瓦質土製品、石製品、金属、木製品、自然遺物である。

1. 陶磁器

擂鉢 (1~8) 破片は全部で40点ある。胎土に小石を含み、硬質で、色調は褐色(1・2・4・7)と橙色(3・5・6・8)に大別できる。褐色の大半(1・4・7)に釉があり、他は無釉である。7は有機物が付着し、8は捏鉢の可能性もある。

甕 (9~12) 破片は約50点である。無釉と施釉に大別でき、その各々に口径50cm以上の大振と30cm前後の小振のものがある。無釉の甕(9・12)は折り返し口縁で、胎土には小石が多く、やや軟質である。一方施釉された甕(10・11)は、口縁が内彎するものと直立するものがあり、胎土に小石と金雲母・黒色砂粒を多含し、硬質である。

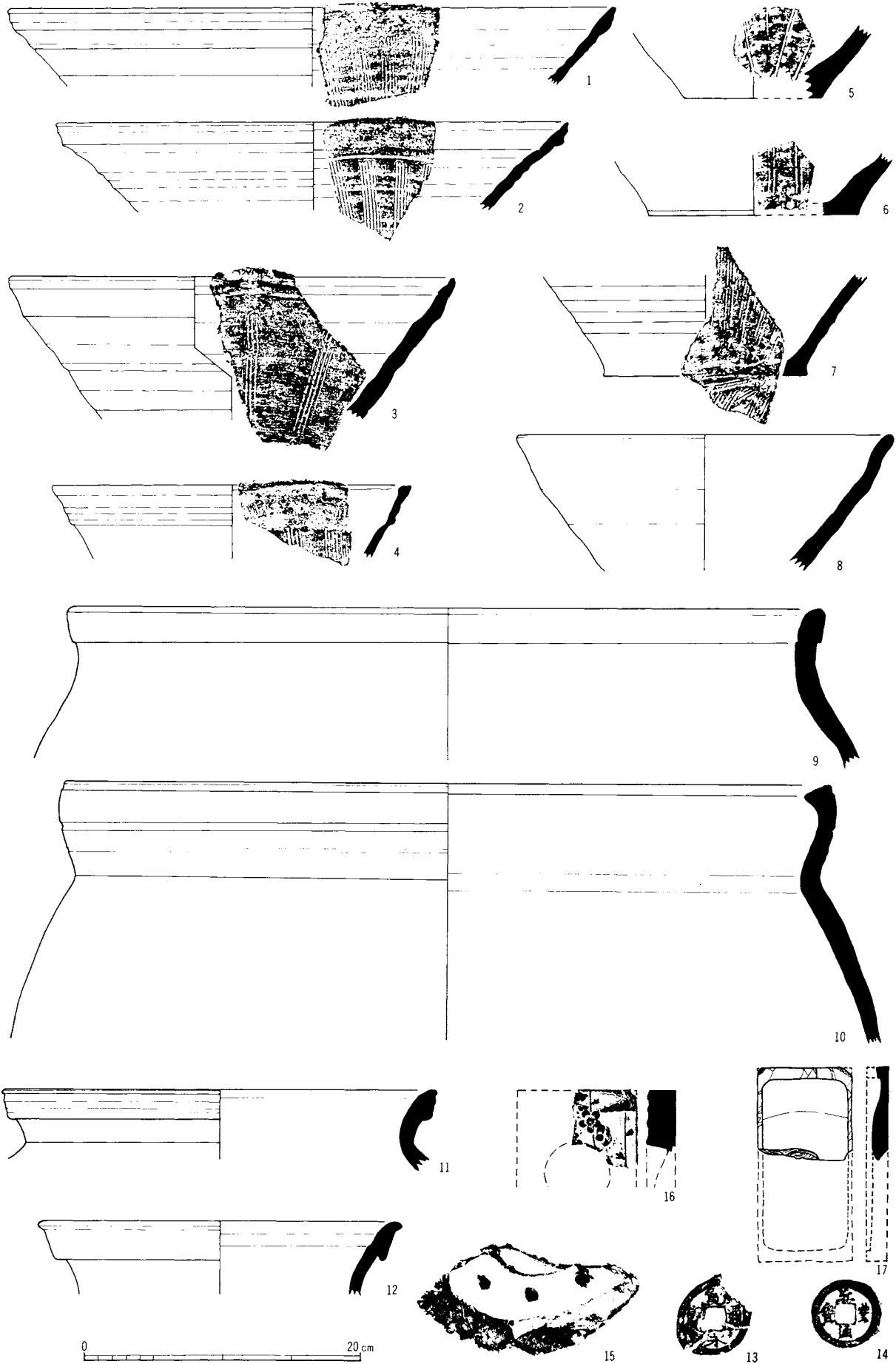
天目茶椀 (18~21) 破片が6点ある。大別すると鉄釉は、光沢のある黒褐色のもの(18)とにぶい茶褐色のもの(19~21)がある。口径は約10~12cmで、口縁部は直立しながら、口縁端で外側にくびれている。

椀 (28~33) 破片は8点である。大半は口径10cm前後にしては、深い陶器椀である。大半は白っぽい釉がかかり、貫入があるが、28は鉄釉で貫入はない。施釉も大半はツケガケであるが、31は高台底面まで釉がかかり、窯の土が付着する。

33は口径の割に浅い磁器椀である。高台内に「清水」の刻印があり、内底部に墨絵風景が絵つけされている。

水指 (44) あまり張らない肩に貼付の耳があり、にぶい褐色の鉄釉が器面全体にかかる。胎土は長石や角閃石を多含し、淡褐色である。

皿 (23~25) 大半は口径11cm前後の陶器である。



第68图 土器・砚実測图(1:4), 瓦・古钱拓影(1:2)

23は口縁部と内面に淡桃色の自然釉がかかり、高台は糸切り後、つまみ出されたもので、完形品である。24は燈明皿で、内面に淡褐黄色の施釉がある。口縁端は二重になり、内側の口縁端一部を半円にして、灯心受けとしている。底部をヘラ切りし、器面は丁寧に仕上げている。25は褐色の鉄釉が全面にかかり、内底部に重ね焼の跡がある。内面はロクロナデされ、外面はヘラ削りされている。

白磁・青磁の皿 (22・27) 22は口径13cm、器高3.6cmの白磁皿である。口縁部の立ちあがりは一見蓋風であり、内底部に重ね焼き跡がみられ、高台は貼付となっている。胎土は精良で、白灰色である。

27は口径18.8cm、器高3cm、底径4.8cmの完形の青磁皿である。内底部に花らしき文様があり、外側に蓮弁文を13数え、高台内の大半は露呈である。

染付 (45~61) 呉須を用い、花卉草木をあしらった伊万里焼と思われる破片で100点を数える。ただ、

57の花文様は濃緑と朱に色どられている。

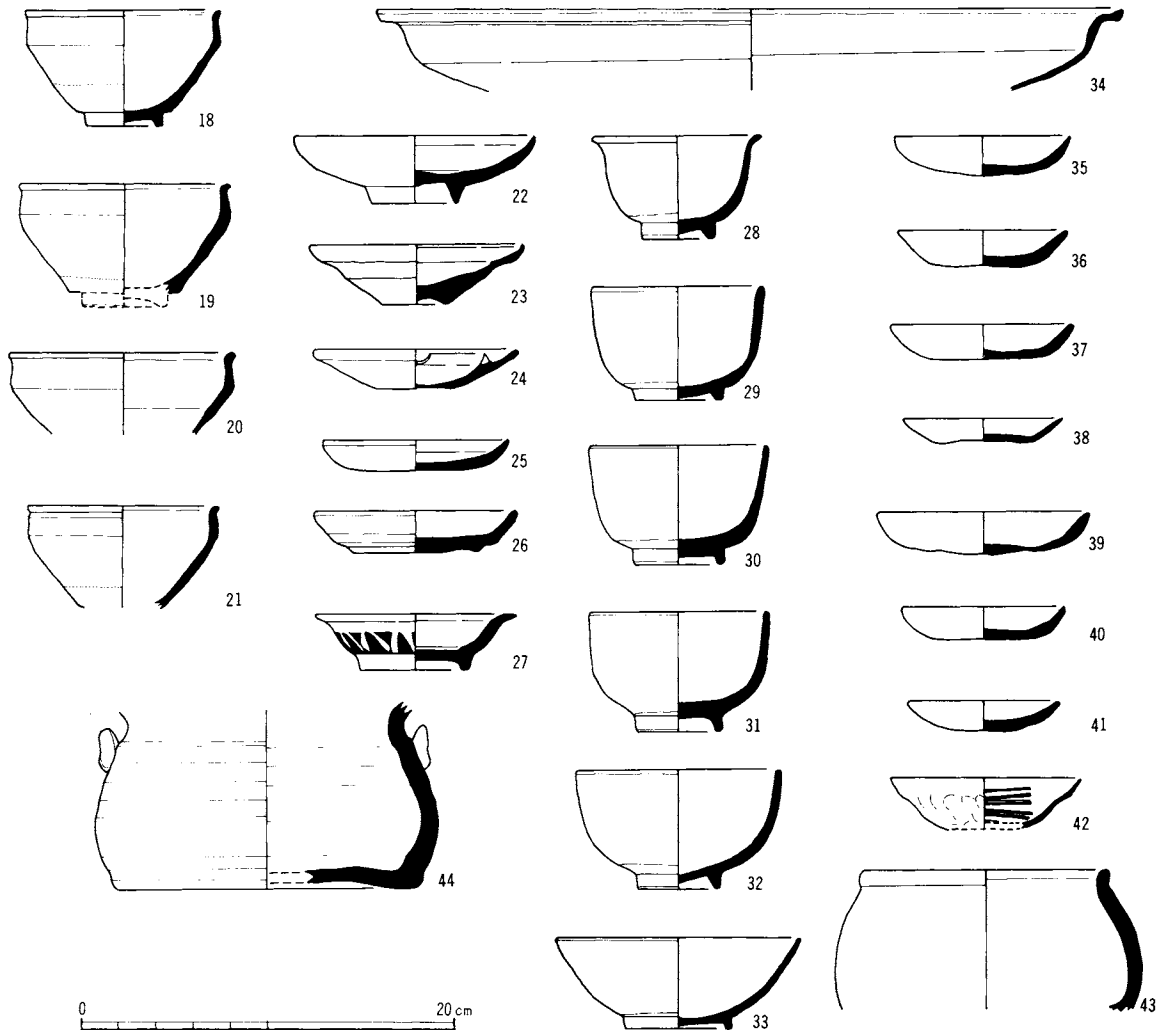
59は内底部に「大年」、高台内に60は「太明化¹⁹製」同じく58は「大明年製」、同様に61は「化年」と記されている。

2. 土師器

鍋 (34) 約10片の細片中最大のものである。口径40~42cmで、口縁端はやや巾のある水平端部で内側へ折り返されており、底の浅いものと思われる。器壁は薄く、口縁部の横ナデを除くと器面はハケ調整され、外面にスガが付着する。胎土は小石を多少含み、褐色である。

皿 (35~41) 約20片ある。大半は口径9cm前後で、胎土に小石と金雲母を含み、褐色である。39は口径11.2cmの大振で、口縁部全体にスガがつく。

3. 製塩土器



第69図 土器実測図 (1:4)

製塩土器 (73) 志摩式製塩土器の器壁の薄手に属し、橙褐色の破片で、器壁は約0.8cmの厚みである。

4. 瓦・瓦質土製品

瓦 (15) 破片が30点あるが、大半は平瓦である。15は軒丸瓦の破片である。平瓦の中には、表が研磨され、裏に布目のあるものもある。

瓦器椀 (42) 小片が4点ある。これは発掘区外の表採である。口縁内側に段をもち、器面は黒色で、内面はヘラミガキされるが、暗文は不明である。胎土には石英砂を少々含み、灰白色である。

瓦質土器 (43) 破片が約10点ある。43は火消壺の口縁部と思われる。他に表面全体を丁寧に研磨した火鉢の脚部と思われる破片がある。

5. 石製品

硯 (16・17) 粘板岩の長方硯である。16は淡赤紫色で、海部の周にレリーフの松竹梅を配している。17は黒色で、陸部の大半を欠くが、残存部はよく磨滅している。

五輪塔 (62・63) 62は径15.3cm、高さ21.6cmの空風輪部である。63は風輪部が半分残っている。

6. 金属製品

銅銭 (13・14) 13は寛永通宝で、歪のため径は不明である。14は北宋銭の元豊通宝である。

引手金具 (78) 桃山時代以降の家屋に使用した小さい戸の金具である。長径3.6cm、短径2.5cmの楕円形で、中央が約1cmの深さで凹状を呈する。銅製で彫金は魚子技法を用い、表面に金箔を施している。

7. 木製品

位牌 (74) 長さ11.9cm、巾5.3cm、厚み0.5cmである。全体に細長く、上下端は尖っているが、下端

はや丸味を帯びる。一面に不鮮明な墨書文字があり、縦書き一行九字で、「□ □ □ □ 禪 □ 門 □ □ □」^㊸と読むことができる。なお、第一字は「利」^(位か)とも「相」とも読める。第二字は「心」とも「度」とも、あるいは「屋」とも読み取れる。第三字は「吉」とも「養」とも、または「彦」とも読める。なお裏面の墨書の有無は不明である。

曲物蓋板 (64) 破片であるが、現長25.7cm、巾4.2cm、厚さ0.5cmのもので、一面に縦書きで三行の文字が以下の如く読み取れる。

□□□

上定

□

一行目一字は不明である。二行目下の字は一見「定」と読めるが、「豆」とも読み取れる。その上は不明である。三行目の下の字は「也」と読み、上の字は「壹」^㊸と読める。

漆塗椀 (69～72) 遺存状態は悪いが、10個体を数えた。内外面に黒漆が塗られ、71は内面全体に朱漆が塗られ、72は朱漆の木葉状文様がある。

櫛 (67) 横櫛の破片で、歯長は3.5cmである。厚さ1cmの棟部はゆるやかに弧を描き、歯の間隔は3cmの間に12枚とまばらである。

糸巻梓木 (68) 全長17.7cm、巾2cm、厚み1.5cmである。梓木を三等分する二ヶ所には横木を挿入するための柄穴がある。

不明品 (65・66) 板以外は用途不明であるが表面を平滑にしたり、穿孔した加工部分がある。

8. 自然遺物

動物遺体 牛か馬の頸骨、淡水産の貝、黄金虫なども出土している。

4. 結 語

今回の調査で東堀、北堀、南堀の所在が確認できた。この成果をもとに、堀巾と堀断面、堀内の施設

等について、若干考察を加えたい。

堀巾と堀断面の問題は、堀の両肩が検出されて初

めて解決できるものである。今回はF T南肩を除くと、片肩も検出されないトレンチが大半である。明白な事は、北堀の堀巾は4 m以上、東堀・南堀の堀巾は8 m以上である。今回の発掘からは、堀の断面形式については、箱堀とも薬研堀とも言えない。

東堀は、現況の土塁の東裾真下から発掘したのにもかかわらず、西壁は検出されなかった。あと2～3 mもトレンチ西端を掘れば、西壁が検出できると推定される。この場合、往時の土塁の城外側法が急勾配であった事が明白となる。4本のトレンチのうちC Tの堀壁が未検出である事の意味は、東堀の形状が曲線になりうる事を示唆する。この曲線の程度によっては、主郭のアウトラインと堀の線との関係が複雑なものとなる。大筋は調査より端折と推定する。E Tで堀の切り方が端折^{つましりず}を呈するが、土塁の遺存度を勘案し、堀の形状の小変化と理解すればよいと考えるものである。

堀内の施設に関する問題として、東堀の北東隅の木を考えねばならない。最初、東壁勾配の変曲点の地山に木があったので、堀に架かる橋と判断した。

その後、堀の水面のレベルを考察中、この橋の大半が水中に没する事が判明した。また、木の西端は東端より50cm低い軟弱な土中で検出され、木の傾きは7度であった。更に、東堀の南北両端の堀底比高は75cmもあり、堀の深浅にかかわって水量調整をする堰板施設の一部であるとの考えに至った。

なお、館跡を取りまく水の問題であるが、木津義玄氏の話では、耕作時以外にも水は南東隅から北と西に分岐して流れていたとの事である。西に流れる方は館跡の南の堀跡と目される水田を流れて、西の、常溝へ注ぎ、一方、北に流れる方は、北東隅で北流するものと、溜池を経て西の常溝に注ぐものとに分岐していた。現況の水利と考え合わすと館跡の堀の水は、単に堀のものだけでなく、まわりの水田灌漑

に十分利用されていた事が考えられる²⁹。

この問題は、在地領主の勸農権とかかわって、重要なものである。

館跡以前の遺物としては、製塩土器と瓦器がある。この製塩土器は県下の出土例を検討している報告書³⁰等から、平安時代のもと思われる。瓦器の出現期は平安時代後期から鎌倉時代にかけてが常識的であるが、42は器形、技法等から室町時代に入るかも知れない。

館跡に伴う遺物として、断定できるものは何もないが、多くの播鉢³¹・甕・染付・瓦・木製品等が埋没期間を示している。堀内の出土遺物は室町時代から江戸時代にわたるものが大半である。

例えば、播鉢の場合、5はへら状工具により筋目が一本づつ入れられた室町時代でも古い時期のものであり、7は櫛状工具で単位7条の筋目が内面にびっしりと刻まれる江戸時代も新しいものである。

遺物の出土地点が堀内の埋土という事で、単純にその層位で時期を決定できない面があるが、染付は堀底の近くで検出された最多遺物である。この点で埋没時期を決定する基準資料とはなりうる。染付58・59・60は、中国の元号が欠落したり、文様とか胎土や焼等から中国の明朝のイミテーションと思われる。その時期は古伊万里の成立以降の江戸時代にあたると思われる。木津館跡の堀の埋没は恐らく江戸時代前半に進み、終末にはほぼ完了し、明治の初めには水田に利用されるまでになっていたと思われる。

出土遺物の中には、近世初頭の信仰生活をあらわす位碑も出土していたが、位碑の主と城主との関係も問題である。三国地誌には、城主木津勝右衛門と記されているが、詳細は不明である。今後の発掘及び研究を経て、より事実が明らかになるであろう。

(森前 稔)

<註>

- ① 谷本鋭治 「上野市上ノ庄 山ノ川遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』1979 三重県教育委員会
- ② 早川裕己 「上野市朝屋 内屋敷遺跡」『昭和53年度県営圃場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』1979 三重県教育委員会

- ③ 早川裕己 「上野市大野木 北山遺跡」『昭和53年度県営圃場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』1979 三重県教育委員会
- ④ 1975年 木津川河川改修工事に伴い三重県教育委員会が発掘調査を実施した。
- ⑤ 谷本鋭次他 『北堀池遺跡発掘調査概要Ⅰ～Ⅲ』

- 1978～1980 三重県教育委員会
- ⑥ 『三重県埋蔵文化財年報』7・8 1977～1978 三重県教育委員会
- ⑦ 森川桜男等 「伊賀」『古代学研究』30 1962
山田猛 「上野市岡波 王塚古墳」『昭和53年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』 三重県教育委員会 1979
- ⑧ 清水健 『荘園志料』 1933
- ⑨ 藤堂元甫編 『三國地誌』 1763
- ⑩ 山本雅靖 「中世城館の分布とその問題——伊賀国伊賀郡比自岐郷の場合——」『古代研究』15 1978
- ⑪ 伊勢では、伊賀とは対照的に一城館の支配する村里は、2～3ヶ村である。
駒田利治 「北勢四十八家」『日本城郭大系』10 1980
- ⑫ 菊川如玄 『伊亂記』 1687
- ⑬ 福永正三 『秘蔵の国』
- ⑭ 立命館大学地理学研究会 『コンター』16号 1975 及び福永正三氏の御教示による。
- ⑮ 内藤昌（『城の日本史』1979）氏等の用語に従った。その説明は以下のとおりである。
土居の断面は梯形で、上辺は「マ踏（馬踏）」、底辺を「カ敷」といい、摺と敷の距離を「高さ」と称する。また土居の斜面を「ホ法」といい、城内側を「ウチ内法」、城外側を「ソト外法」と区別する。
- ⑯ 福永正三 「伊賀の道標」『伊賀郷土史研究』5号 1974
- ⑰ ⑯と同じ
- ⑱ 木津義玄氏の話では『館跡南西部隣地の水田に、昔独立した小高い山があり、人々はこの山の北まわりを通っていたと伝え聞く』との事である。
- ⑲ 立命館大学部教授三浦圭一・寛文生の両氏より御教示を受けた。「タ明化轍」については、全体を四文字にする必要から、最後の字を「年」と「製」の合字にしたとの教えをいただいた。
- ⑳ 森前稔 「三重・木津氏館跡」『木簡研究』第二号 1980
三重県文化財保護審議会委員平松令三氏からは第1字を「松」又は「シ裕」又は「シ積」、第2字を「成」、第4字を「シ介」又は「シ人」と読めるとの教えをいただいた。
- ㉑ 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室長鬼頭清明、立命館大学文学部教授三浦圭一の両氏より御教示を受けた。
- ㉒ 籠瀬良明 「中世の城・館研究調査への提言」『歴史手帖』42号 1977
橋口定志 「「居館」調査の一課題」『歴史公論』66号 1981
- ㉓ 近藤義郎『小海』磯部町教育委員会1976
- ㉔ 大橋康二 「中世播鉢考(1)」『考古学ジャーナル』175 1980
「中世播鉢考(2)」『考古学ジャーナル』176 1980
- ㉕ 朝日新聞社『古伊万里』 1974

なお、この道標は現在、東出公民館敷地内に置かれている。

XI 上野市大野木 かのき 神ノ木館跡

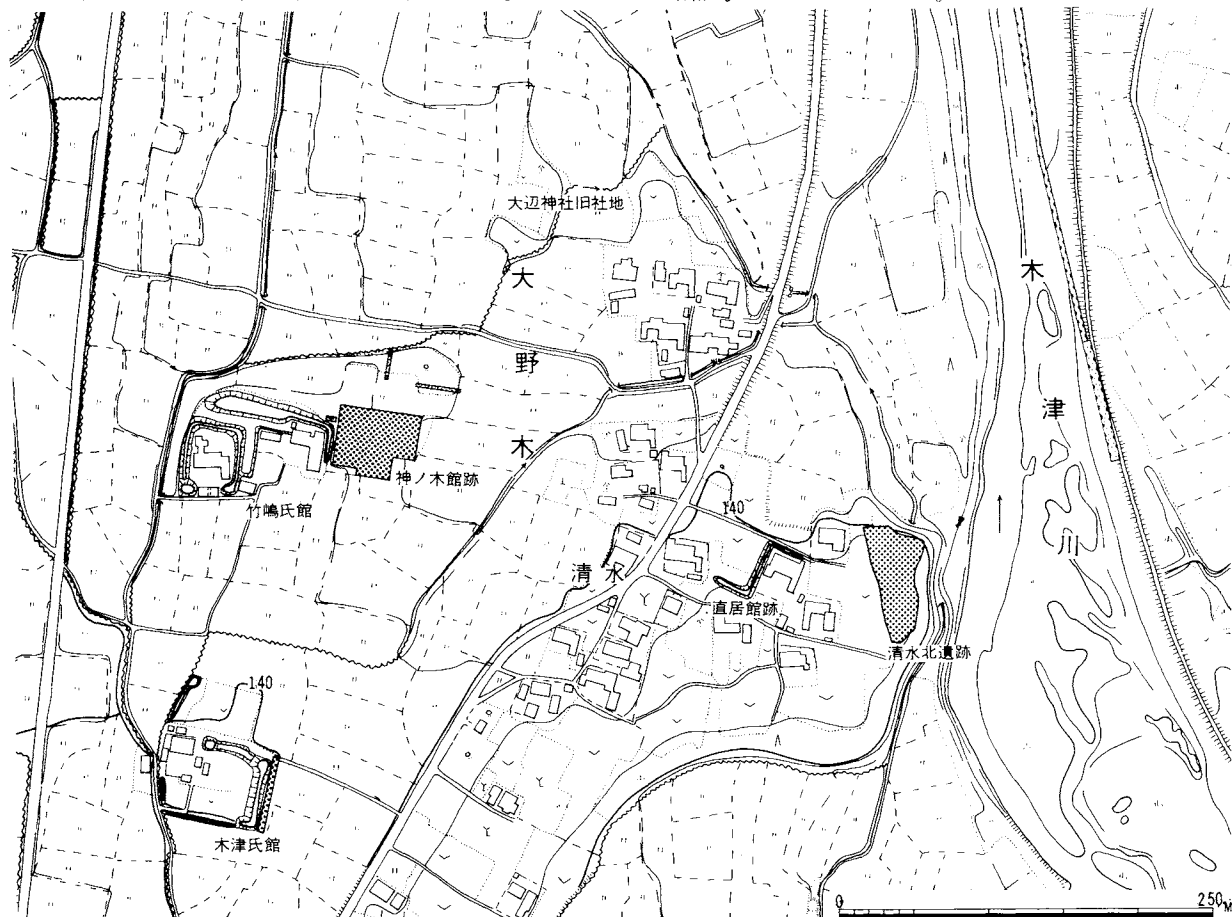
神ノ木館跡は、標高 140 m の河岸段丘と扇状地末端の接点に築かれた館跡である。周囲は、東西方向に僅かに傾斜するが、概ね平坦である。神ノ木館跡と清水集落の間は、「古川」とよばれ、小河川が北流したと伝えられる。

館跡は、方形館跡である。西・南半分の土塁は既に消滅しており、北・東半分の土塁は削平され、痕跡をとどめる程度であった。東土塁は削平され、東側の畑に盛土されている。南土塁と竹嶋氏館の外郭線は一致する。北土塁の北方は、低い自然崖となり濠は、当初より存在しなかったと思われる。西・東・南の濠は、今回の調査により明らかにし得た。

また、神ノ木館跡の南西には竹嶋氏館が現存する。竹嶋氏館は、北・東側を外郭土塁が巡る複郭型式の館跡である。主郭は、郭内東西 27 m (15間) × 南北 36 m (20間) を測り、四方を土塁に囲まれる^①。南土

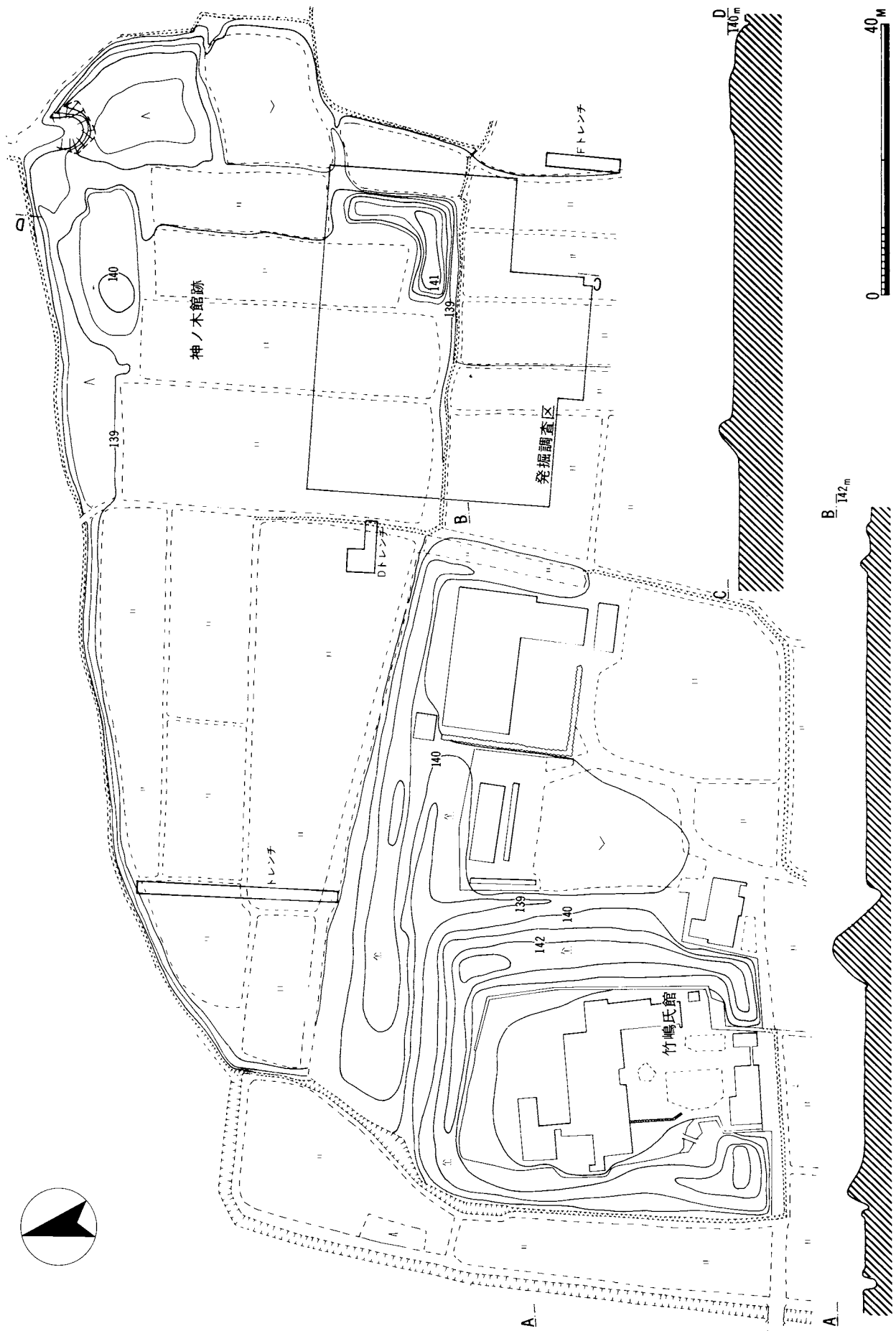
塁は、中央部が開き長屋門が築かれる。南西隅で土塁は、一段高く広くなる。主郭の土塁をとり囲むように濠が掘られ、西側は水田にその地割が認められる。南側は、水田地割には姿をとどめないが、濠跡存在の可能性は強い。主郭北側から始まる外郭土塁は、東西に約 81 m (45間) 続き南へ折れる。この外郭土塁北側にも、濠の存在が予想されたが、試掘調査の結果存在しなかった。東郭は、南に折れた外郭土塁で限られ、主郭とは濠のみで区切られる。郭内で 45 m (25間) × 45 m (25間) の規模と推定されるが、南半分は水田となり東郭の規模・外郭線の詳細は明らかでない。また、外郭線の東側には、細長い水田が濠跡のなごりをとどめる。

尚、神ノ木館跡は、「たぬき屋敷」とも呼ばれ、大野木神ノ木 229～231 に所在する。館跡の遺跡標示略記号は 9 V K N である。



第70図 神ノ木館跡・木津氏館地形図(1:5000 上野市都市計画図16)

調査区域



第71図 竹嶋氏館・神ノ木館跡実測図 (1 : 800)

1. 遺 構

今回の調査は、館跡の南半分に限られた区域であり、また仮排水路工事により西側の濠跡が破壊されており、館跡の全容を明らかにし得なかったが、いくつかの貴重な結果を得ることができた。

調査の結果、検出された遺構は、土塁・濠・掘立

柱建物6棟・井戸2基・水溜4ヶ所・土壇18基・溝・石組排水路等がある。遺構の大半は、館跡に伴うものであるが、館構築以前の遺構や、館跡廃絶後の遺構もある。



第72図 神ノ木館跡遺構全体図 (1:300)

1. 土塁・濠

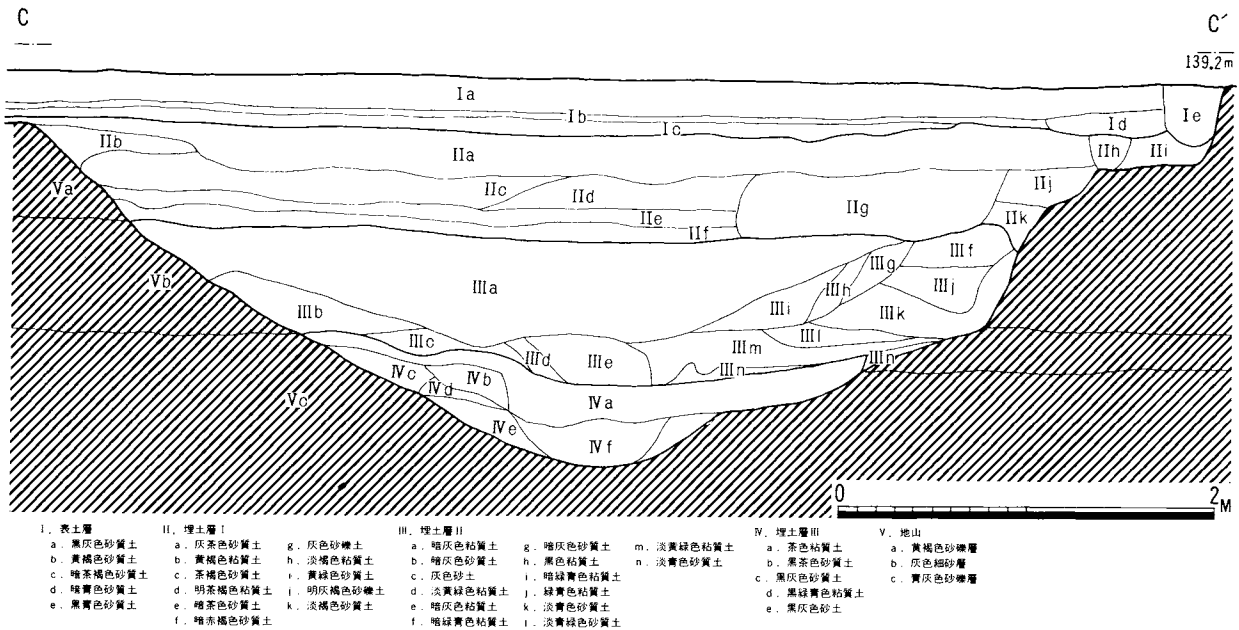
SA25 調査区域内に現存する土塁であり、上面幅2.3m・下面幅5～6m・高さ2m(東土塁)・2.9m(南土塁)を測り、南東部隅以北は、一段低くなる。南土塁西端は、旧状をとどめるが、東土塁は削平されている。盛土は、黄褐色砂質土の地山直上に、濠掘削の土を主体にした黄灰色～黄褐色砂質土を盛っており、堆積状況は郭内外へ傾斜する。盛土は、比較的柔らかく、構築時の固め方は弱いと思われる。

SA1 土塁の痕跡であり、館跡の南と西を囲むものである。屈曲するSD2は、土塁直下を流れる排水路である。SA1は、南辺部で下面幅4.2～4.5mを測り、やや郭内へ折れる。SD2は、SB27の直前でとまり、土塁もこの部分まで続いていたものと推定される。また、SA1とSD31の間には、幅0.5～0.7mの平坦地が並走し、犬走りと考えられる。

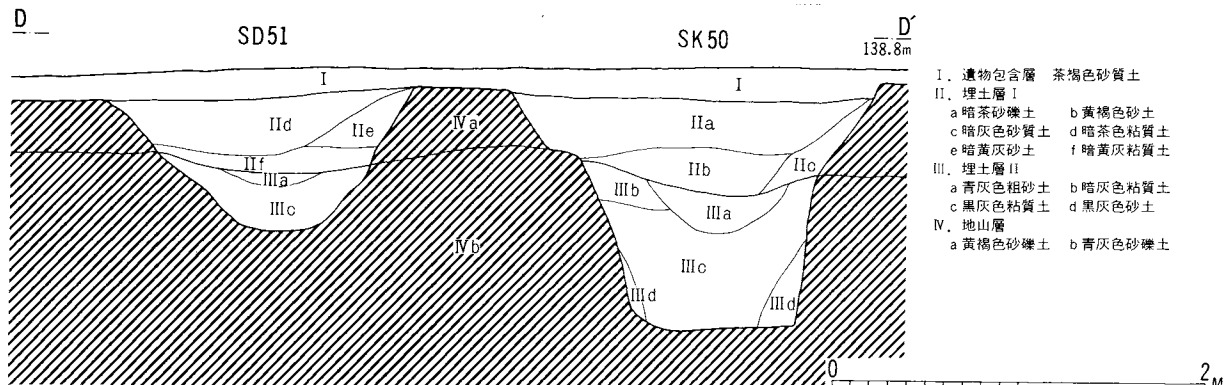
検出した面は、郭内の遺構検出面とほぼ同じ高さであり、盛土の痕跡をのこさない。

SD31・36・37・54 館跡をとり囲む濠跡であり、南・東・西の三方で確認している。SD31・36は、ともに南濠跡であるが、中央部の土橋SX34により分断される。

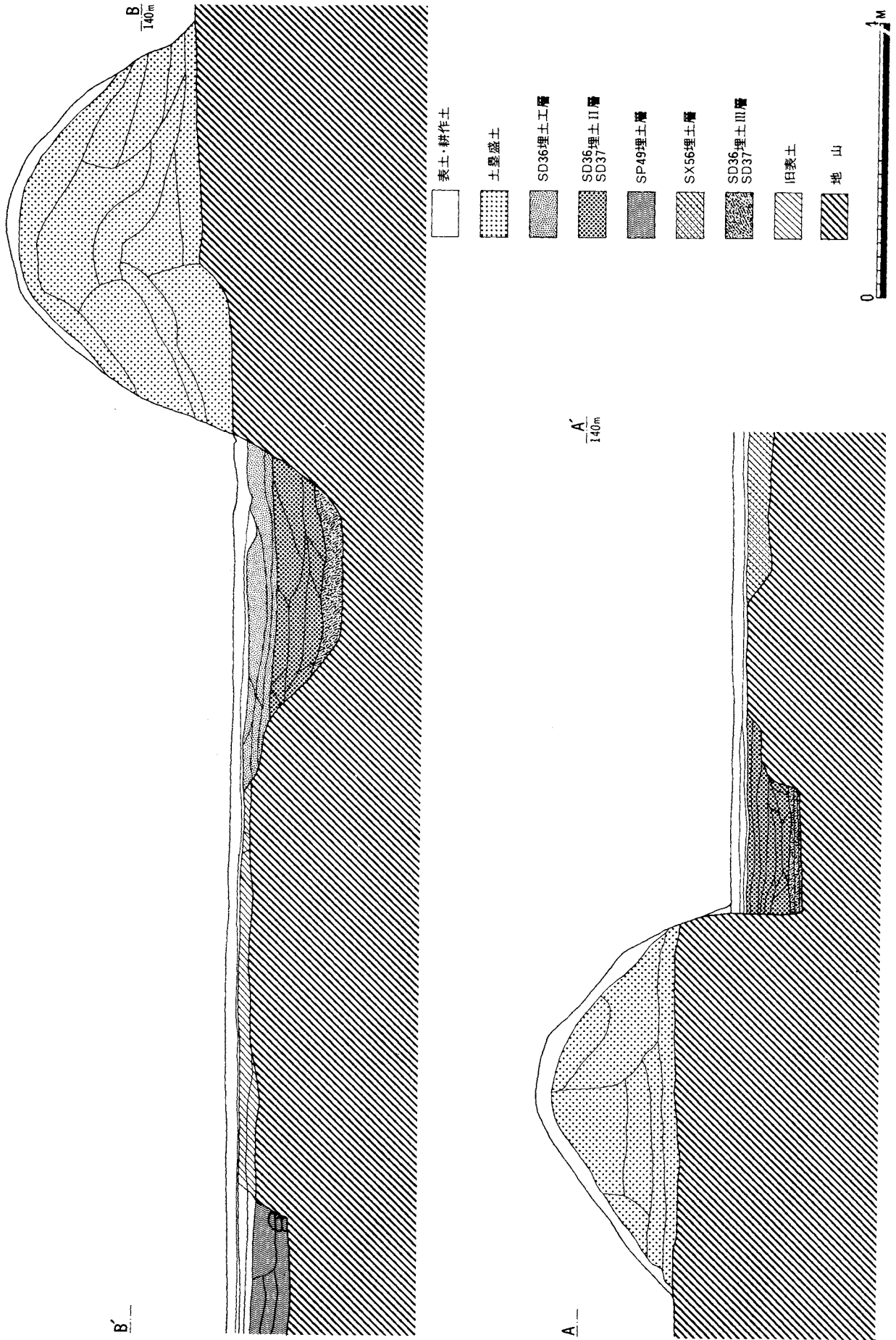
SD31 上幅5～6m・下幅0.8m・深さ1.8mを測り、断面が逆三角形を示し、薬研堀となる。SD31・36は、広さが多少異なるが深さは同じである。埋土は、ともに三層に大別できる。埋土層Iは、茶褐色土からなりIIgのような砂礫土が埋まっている様相等から、一時期に埋められた状況を呈している。I層内よりは、天目茶碗・播鉢B類～D類を出土する。埋土層IIIは、黒灰～青灰色土からなり、堆積状況もレンズ状を呈し、比較的長期にわたって堆積したようである。土相は、還元色を示し、濠の水位が



第73図 C地点(SD31) 断面図 (1/40)



第74図 D地点(SK50・SD51) 断面図 (1/40)



第75图 上：A地点(SA25·SD37)、下：B地点(SA25·SD36)断面图 ($\frac{1}{40}$)

II層上面までであったものと考えられる。木製品は、すべてII層内より出土する。埋土層IIIは、濠の最下層にあたり、黒色～黒褐色の植物遺体を包含する泥炭層である。

SD36 上幅5.2m・下幅1.8m・深さ1.4mを測り、断面が逆台形を示し、箱薬研堀となる。**SB36**は、南東隅部とほぼ中央部の二ヶ所に青灰色砂礫土の地山を掘りのこした鞍部をつくり出す。鞍部は、濠に直交し、濠底より0.2～0.3m高くなっており、濠内の水量の調節用として機能を果たすものであろう。

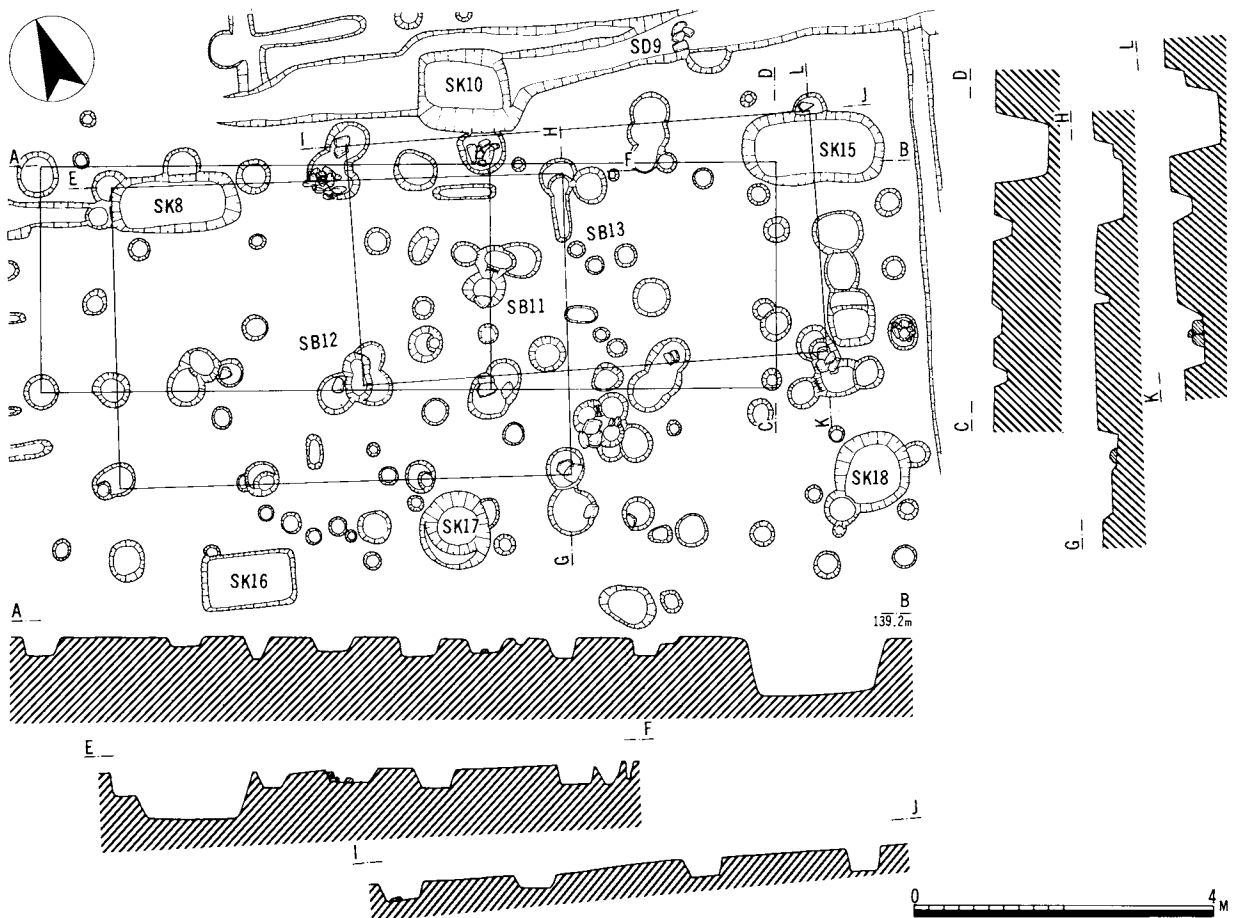
SD37 館跡の東を巡る濠跡であり、**SD36**から続く。**SD31・36**より規模は小さく、上幅3m・下幅1.2～1.8m・深さ0.8mを測る。南部分は、一段低くなる。断面は、逆台形を示し、箱薬研堀となる。埋土は、I層を欠き、II・III層のみである。

SD54 調査区西側に掘られた圃場整備事業の仮排水路に破壊されたが、Dトレンチにより西肩を確認した。規模は、**SD31**とほぼ同規模のものと推定

される。

SD51 館跡の南約11mを館跡に平行して東西に流れる濠跡であり、11mを検出している。調査区西側の仮排水路断面でも確認しており、館跡の外濠と考えられる。ただFトレンチでは、濠跡の存在は認められず、**SD51**は、**SK52**を経て**SD53**へ続き南進する。上幅1.6m・下幅0.4m・深さ0.7mを測り、断面は逆三角形を示し、薬研堀となる。濠の一部には、青灰色砂礫層の地山を掘りのこした鞍部をつくり出している。濠の東端には、1.6m×1.7mの方形土坑**SK52**が掘られ、**SD51**は**SK52**をコーナーとして南へ直角に折れ南進する。**SK52**よりはじまる**SD53**は、幅0.6m・深さ0.2mと規模を減じて、浅い溝となる。**SD51**と**SD53**の底の比高は0.4mあり、**SK52**は両者を結ぶ貯水溝の機能を果たすものと考えられる。

また、**SD53**の東側が大手道となり、屈折して**B33・SX34**の虎口に至るものと推察される。



第76図 SB11・SB12・SB13実測図(1/100)

2. 掘立柱建物

SB11 5間×2間の東西棟の建物である。桁行10.0m(2.0m等間)×梁行3.0m(1.5m等間)のものと考えているが、東西の梁行とも中央の柱を欠き、建物として疑問がのこる。建物は、東西を3間と2間に分ける間仕切りをもつ。柱穴は、径0.6m程の大きな掘形をもつ。柱穴内に、拳大の礫を詰める例もあり、礫群をもって根石の代用として機能させたものであろう。

SK8と重複関係にあり、SB11が古い。また、SK8とSB12も重複関係にあり、SK8が古いので、SB11は、SB12より先行する。

SB12 3間×2間の東西棟の建物である。桁行6.0m(2.0m等間)×梁行4.0m(1.4m+1.3m+1.3m)の建物と考えられるが、梁行の柱穴の遺存状況はよくない。柱穴は、径0.4m程の掘形をもつ。

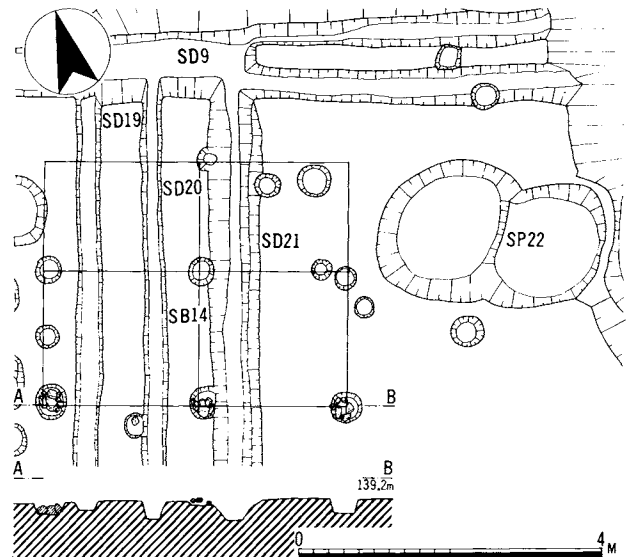
SB13 3間×2間の東西棟の建物である。桁行6.2m(2.0m+2.2m+2.0m)×梁行3.2m(1.6m等間)を測る。柱穴掘形は、0.4~0.5mを測り、柱穴底に拳大の礫をのこし、根石として用いたものであろう。

SB14 2間×2間の総柱建物である。桁行4.0m(2.0m等間)×梁行3.3m(1.8+1.5m)を測る。柱穴は、0.3~0.4mの掘形をのこし、やや小さい。南側柱列のみ柱穴内に礫群をのこす。北側柱の柱穴を欠く。SD21と重複関係にあり、SB14が古い。SD21は、館跡内を東西に区分する機能も果しており、SB14は館以前の建物で倉庫跡であろうか。

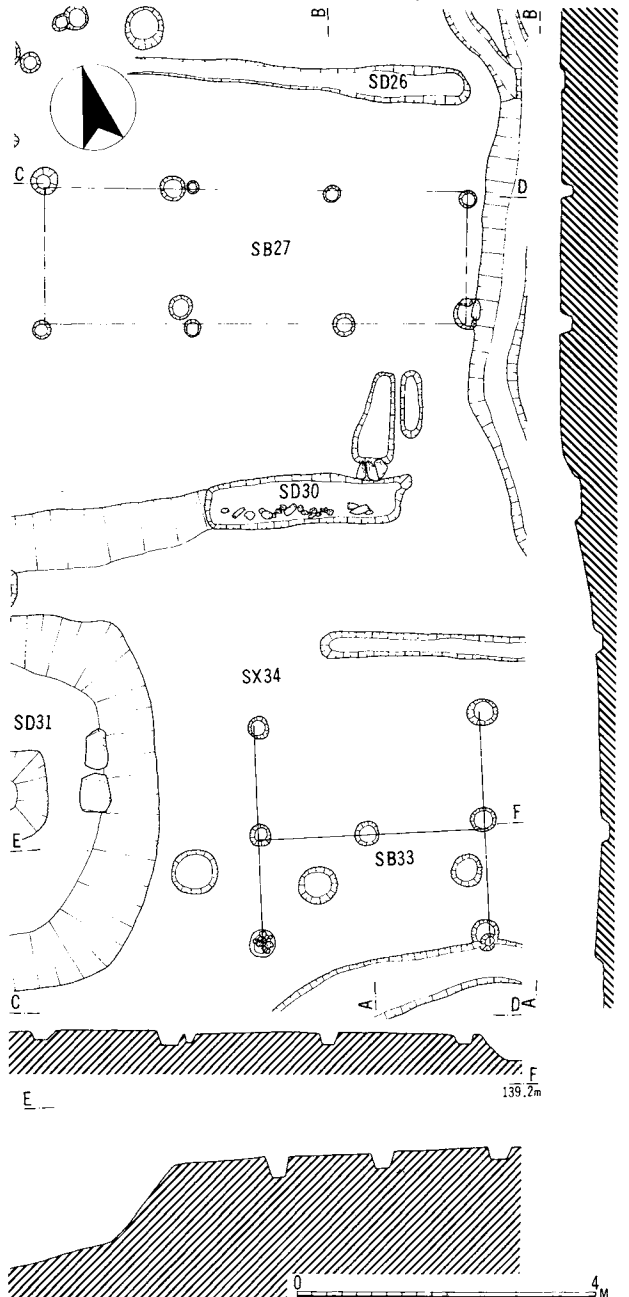
SB27 3間×1間の東西棟の建物である。桁行5.6m(2.0m+1.8m+1.8m)×梁行1.8mを測る。柱穴は、0.2~0.3mと小さい。

SA1とSA25が途切れて、館跡の虎口にあたる部分に位置し、長屋門と考えている。扉の開口部がどの部分にあたるか等構造の詳細は明らかでない。建物北側には、1.5m離れて、SD26が並走し、南側には、2.0m離れてSD30が並走する。SD26は、雨落ち溝と考えられる。SB27と土橋SX34は、0.6m程の比高があり、SD30は郭内に入る階段状遺構の名ごりかも知れない。

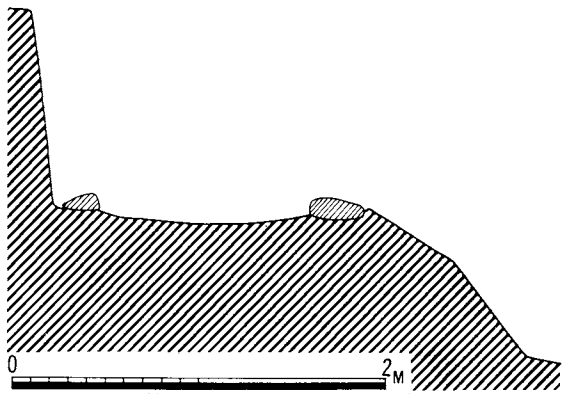
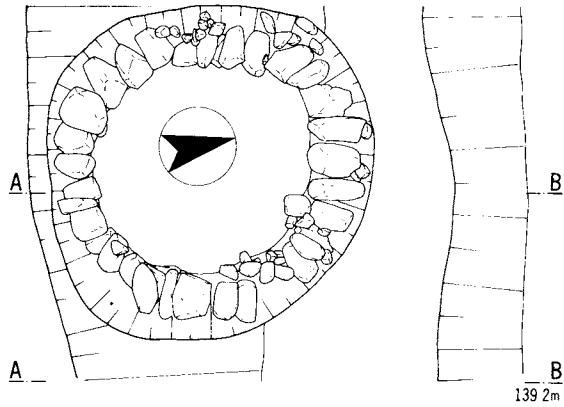
SB33 SX34の中央部に位置し、側柱2間の建物で、門跡と考えられる。中央に径0.3m・深さ0.1



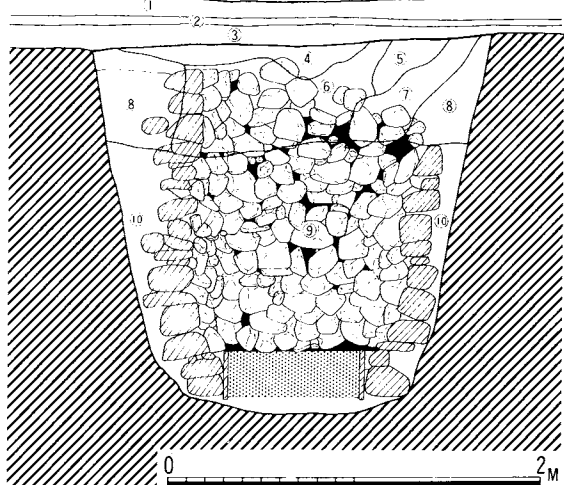
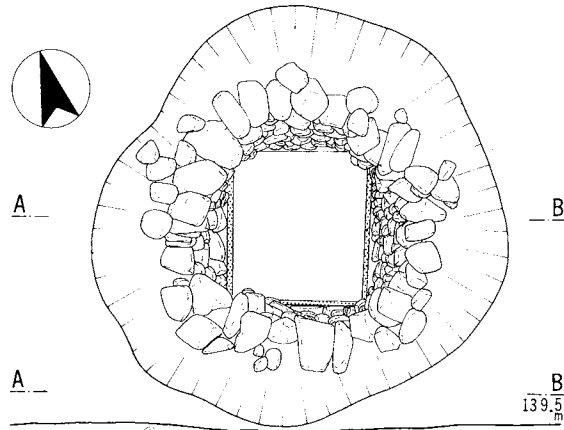
第77図 SB14実測図(1/100)



第78図 SB27・SB33実測図(1/100)



第79図 SE32実測図(1/40)



- ①耕作土 ②床土 ③暗灰褐色粘質土 ④灰褐色粘質土
- ⑤暗灰茶褐色粘質土 ⑥暗黄褐色粘質土 ⑦暗茶褐色粘質土 ⑧灰黄褐色粘質土
- ⑨青灰色粘質土 ⑩青灰色砂礫土

第80図 SE55実測図(1/40)

mの柱穴をもつ。

3. 井戸

SE32 SD31掘削の際に破壊されたもので基部のみをのこしていた。径1.1mの円形に河原石を小口積みにするもので、深さは1.5m程のものと推定される。土師器皿(26)を出土するが、SD31に伴うものであろう。

SE55 館跡の西濠跡を確認する為に設定したDトレンチで検出したものである。径2.2mの比較的小さい円形掘形内に、築かれた石組井戸である。井戸の規模は、径1.1m・深さ1.95m以上を測る。基部には、25cm×85cm、厚さ3cmの板を方形井桁組みし、その上部から河原石を小口積みする。基部が方形である為、中間部は不整形を呈するが、上部に近くなるにつれ、円形に積まれる。埋土は、上層部で暗灰褐色粘質土・確認面より0.6m以下は青灰色粘質土となる。井戸内⑥層から、瓦器羽釜(14)・鍋(15)及び播鉢D(92)を出土する。

館跡との時期関係は、明瞭でないが出土する播鉢片は、16世紀後半を遡るものではなく、SE55は同時存在した可能性が強い。

4. 水溜

SP22 径1.7mと径1.5mの円形土塚が連らなったものであり、両者の間に明確な重複関係は認められない。深さは、0.85mと0.6mと西側が深い。西側の最下層及びその周囲には、鉄分が凝結して厚さ3cmの層をなし、その上層に青灰色粘質土がヘドロ状に堆積する。東側の壁及び底には、黄褐色粘土が貼り付けられ、水もれを防いでいる。SP23と重複関係にあり、SP22が新しい。

SP23 東土塚下に検出された方形の水溜であり6m×7m以上・深さ0.5mを測る。SD9が流れこみ、土塚下を流れる石組排水路SD24を経て、東の濠跡SD37へ排水される。SD24の底と0.15m程の比高をもち、ある程度の水量は、絶えず貯えられている。

SP45 長さ6m、最大幅2.1mを測り、細長い楕円形乃至は弧状を呈す。深さは最深部で0.3m程であり壁の傾斜は緩い、中央部に0.9m×0.8m・深

さ0.2mの方形土壇がある。SP45の西壁のみ挙大～人頭大の礫が貼り付けられる。東壁に3条の小さな溝がとりつき、2条はSP49に流れこむ。簡単な池のようなものかも知れない。時期のわかる遺物はないが、大手道にあたる位置にあることから考えて、館跡以前のものであろう。

SP49 4m×3.7m以上の方形土壇であり、深さは0.5mを測る。北辺中央部のみに人頭大の河原石が粗雑に積まれる。石臼(118・119)は、この石組から出土。埋土層から下駄(116)等が出土する。

5. 土 壇

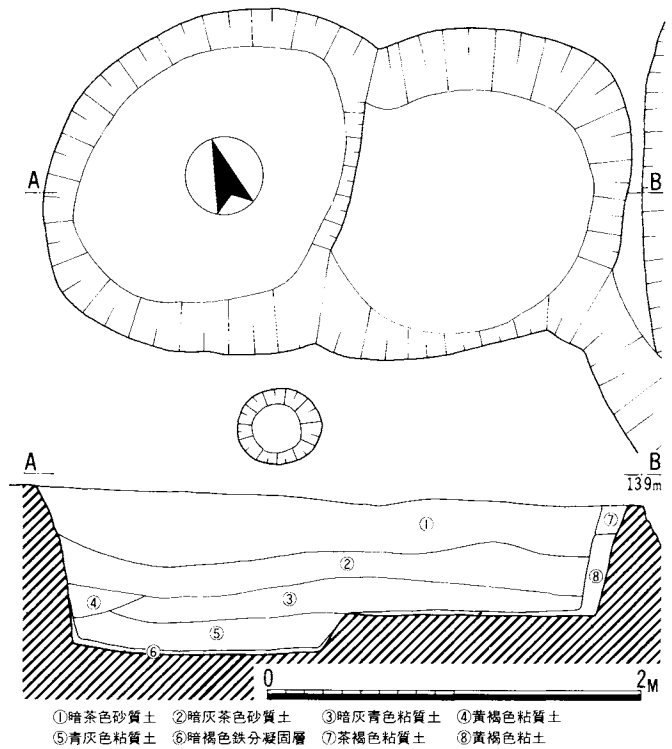
SK5 径1.5m・深さ0.35mを測る。SD3と重複関係にあり、SK5が古い。埋土は、上層より暗茶褐色砂質土・明灰褐色砂質土となり、最下層に黒青灰色粘質土がヘドロ状に堆積する。上層から播鉢(77)が出土する。

SK6 長径2.4m×短径1.7mの楕円形を示し、断面は皿状となり、最深部で0.25cmを測る。埋土は、暗灰色砂質土と底直上に薄くヘドロ状の黒灰色粘質土が認められる。土師器皿(21・22)が埋土上層から出土。

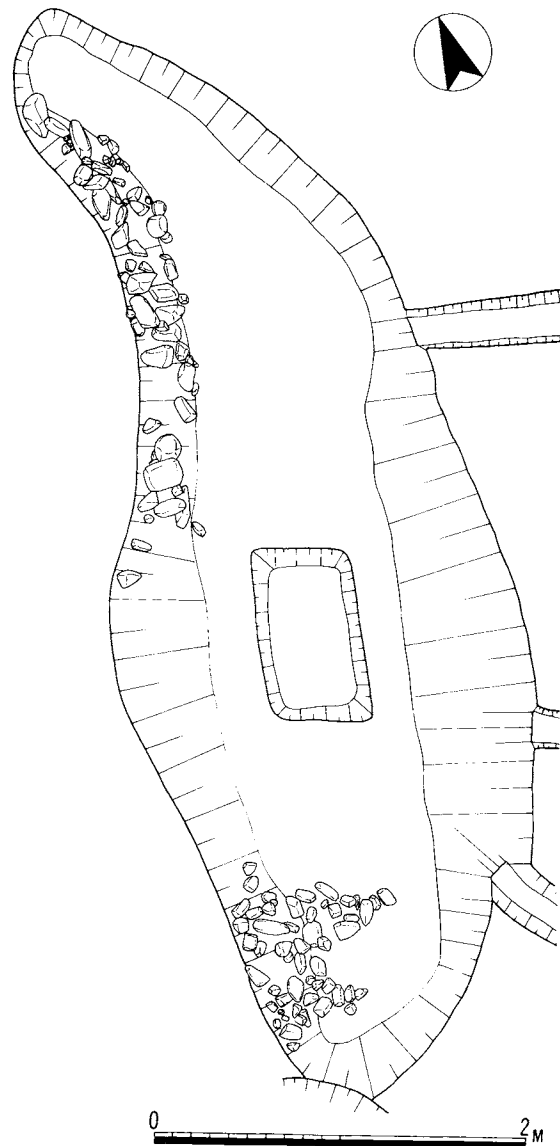
SK7 SA1に沿って位置し、SA1と重複関係にあり、SK7が古い。1.7m×3.6mの長方形を呈し、0.4mの深さを測る。中央よりやや南の東西壁に、径0.2mのピットを一对検出する。簡単な覆屋をもったのであろうか。埋土は、数層に区別でき、最下層にヘドロ状になった黒灰色粘質土が堆積する。

SK8 1.7m×0.8mの隅のとれた長方形を呈し、0.6mの深さをもち。SB11・SB12の柱穴と重複関係にあり、SB11より新しくSB12より古い。茶色粘質土を埋土とする。播鉢(89)を出土。

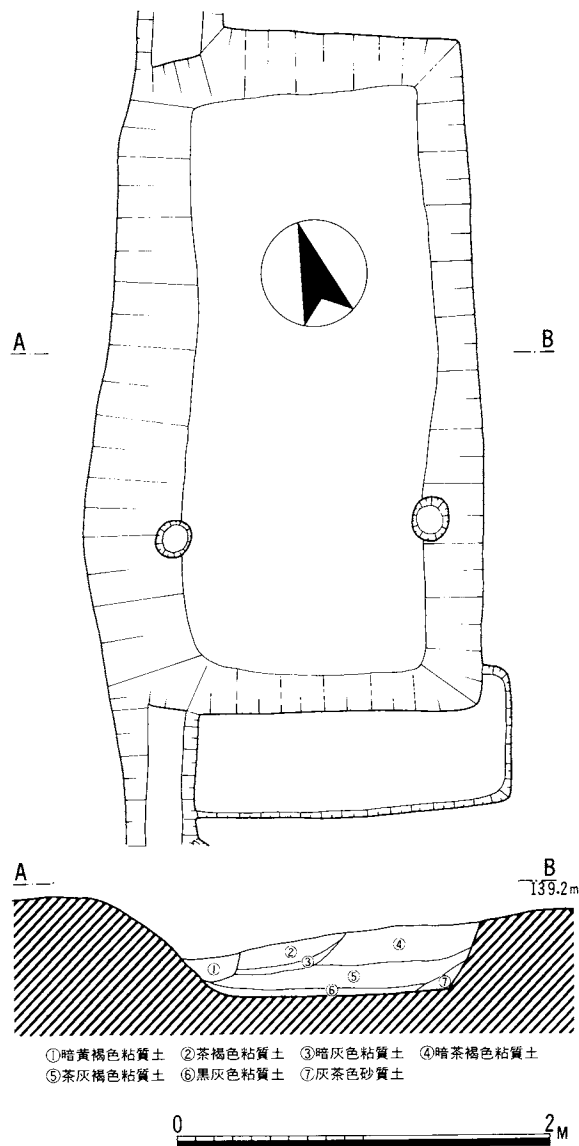
SK10 建物群の北を東へ流れるSD9内に掘り込まれた土壇である。1.7m×2.5mの長方形を呈し、建物群の位置する方向である南辺には挙大～人頭大の河原石の石積がこの。石積は、最下部に比較的大きな河原石を小口積し、中央部までは挙大の河原石を、上部を人頭大の河原石を小口積みする。他の辺には、石積が築かれてなく、南辺の崩れを防いだものと考えられ、建物群の北側の溝内にあることから推察して、建物の排水口の機能をもつものかと思



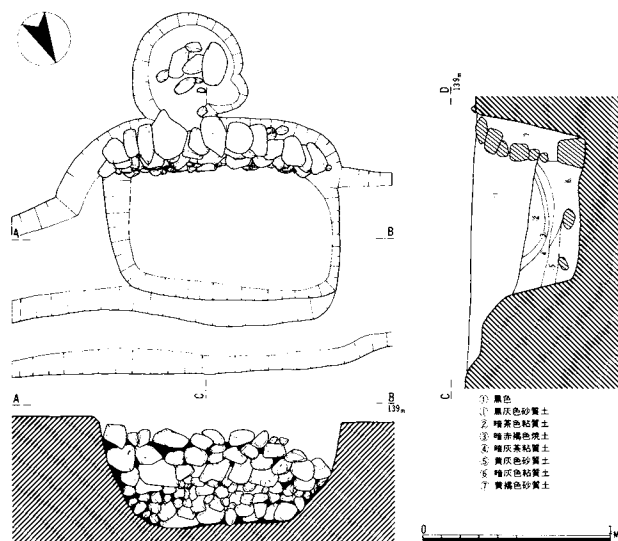
第81図 SP22実測図(1/40)



第82図 SP45実測図(1/40)



第83図 SK 7実測図(1/40)



第84図 SK10実測図(1/40)

われる。埋土は、6層に区別され、①層は、SD 9と同じである。最下層は、へドロ状となった暗灰色粘質土が堆積する。①層から磁器椀(60)・徳利(95)を、⑥層から土師器鍋(40)を出土する。

SK15 1.4m×0.7mの隅のとれた長方形を呈し、0.7mの深さを測る。SB12の隅柱と重複関係にあり、SK15が新しい。茶色砂質土を埋土とする。SK8と規模・形態・埋土が類似するが、出土遺物もなく、その性格は不明である。

SK16 1.2m×0.7mの長方形を呈し、0.2mの深さを測る。最下層に黒色炭火層が全面に厚さ10cm程堆積する。壁面及び底面は、それほど強く火を受けたとは認められないが、何らかの物質を焼却した土壇であろう。

SK17・18 ともに径1m・深さ0.5mを測る円形土壇である。両者の間は、5.4mあり一対のものかと思われる。

SK29 SA1内で検出したものである。径1.9m・深さ1.7mを測る円形土壇である。埋土は、上面より0.25cmまでは茶褐色砂質土が堆積するが、それ以下には、灰色の拳大ほどの礫が詰められる。この礫層から、陶器椀(65)・磁器椀(61)・天日茶椀(53・54)・水指(73・74)等多数の遺物を出土するが、その大半は江戸初期に属する。従って、この土壇は、SA1が削平されて後掘られたものであろう。

SK35 1.3m×1.3mの方形土壇であり、深さ1.5mを測る。SX34を掘り込んでいる。埋土は、灰色の拳大ほどの礫が詰められている。埋土の状況は、SK29と同じであるが、遺物は出土しない。SK35も館廃絶後のものであろう。

SK41 辺1.4mの略方形を呈し、深さ0.6mを測る。茶褐色粘質土・暗青灰色粘質土を埋土とする。底面近くに拳大～人頭大の礫が認められ、礫の間に長さ0.2mと0.3mの竹が2本出土する。土器を出土しない。SK44・SK46・SK47・SK48も規模・形態・埋土の類似点が多く、同じような機能を有するものと思われる。ただ、遺物も少なく、その性格については不明である。

SK42 2.8m×1.7mの楕円形状を呈し、深さ0.1mの浅い壇である。

SK43 径2.1m・深さ0.1mを測る円形土坑であり、断面は皿状を示す。中央部に0.7m×1.3mの方形に礫群がみとめられ、礫は底面より浮いている。出土遺物はない。SK44と重複関係にあり、SK43が古い。

SK44 径1.3m・深さ0.6mを測る円形土坑である。数個の礫と木片1点出土する。

SK46 長径2.2m×短径1.8mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。灰茶色砂質土を埋土とする。

SK47 一辺1.5mの略方形を呈し、深さ1.2mを測る。灰茶色砂質土を埋土とする。出土遺物はない。

SK48 径1.6m・深さ0.4mを測る円形土坑である。出土遺物はない。

SK50 長さ8.0m×幅2.1mの溝状の細長い土坑である。西側は、5.5m×2.1mの一段深い土坑となる。深さは、西側で1.3m・東側で0.3mを測る。埋土は、SD51と類似し、中央下半は黒灰色粘質土となる。

SK52 一辺1.7m・深さ1.1mを測る方形土坑である。青灰色砂質土を埋土とする。SD51とSD53を結ぶ貯水溝の機能を果たすものであろう。

6. 溝

SD2 土層直下を流れていた排水路であり、「L」字状に検出した。幅0.4m・深さ0.2mを測るが、南辺では、幅0.2m・深さ0.1mと遺存状況は良くない。SB27の直前で途切れる。

SD3 調査区北西部で「L」字状に検出した。幅0.3m・深さ数cmの小さな溝である。SD4とともに、郭内を区画する小溝と思われる。SK5と重複し、SK5より新しい。また、SK8とも重複するが、新旧関係は不明である。

SD4 SD3と対応するものと思われる。幅0.3m・深さ5cmを測る。南端でSD9に合流する。

SD9 建物群の北側を東へ流れ、SP23に流入する。途中で南流する三条の溝と接する。幅0.6～0.8m・深さ十数cmと比較的幅広い。三条の溝と合流する地点より東は2条に分流する。

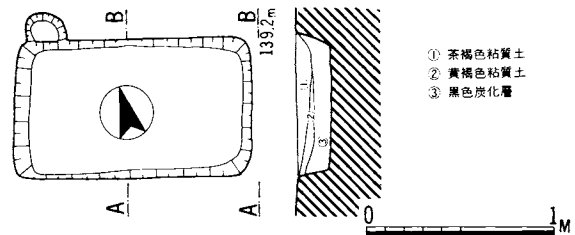
SD19 SD9より分流する溝で、幅0.3m・深さ十数cmを測り、南で緩く内曲してSD21に合流する。

SD20 SD9より分流する溝で、幅0.3m・深さ

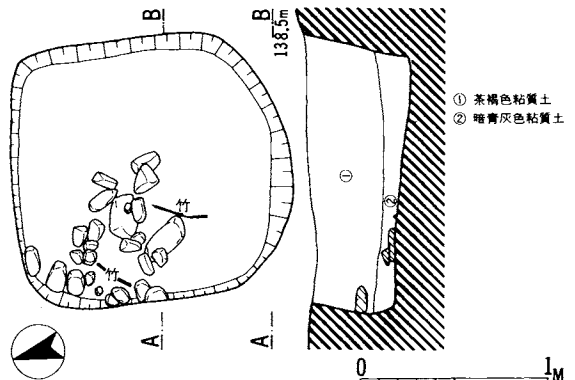
0.25mを測る。SD19と同様にSD21に合流する。

SD21 SD9より分流する溝の一つである。幅0.7m・深さ0.25mを測り、規模も大きくSD9から続くものである。SB14と重複関係にあり、SD19が新しい。このSD19以東には、SP22・23以外館跡に伴う遺構は存在しない。

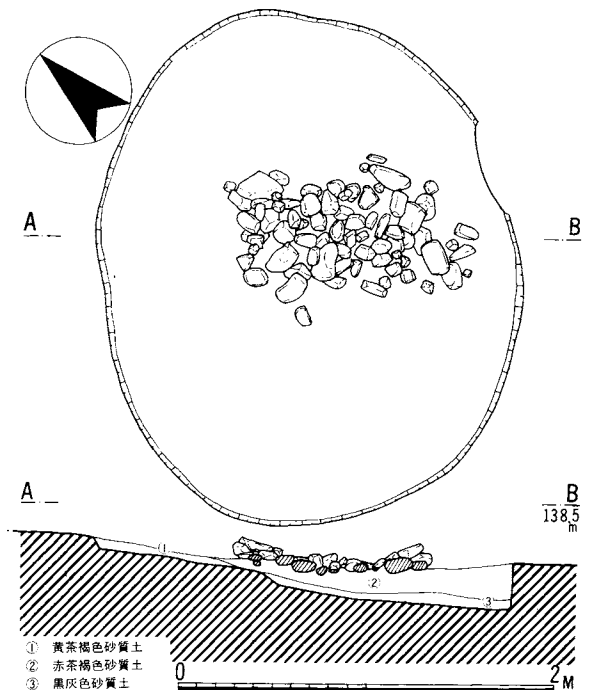
SD24 土層下に築かれた石組排水溝である。SP23に集められた水を、濠SD37へ排水する。長さ



第85図 SK16実測図(1/40)



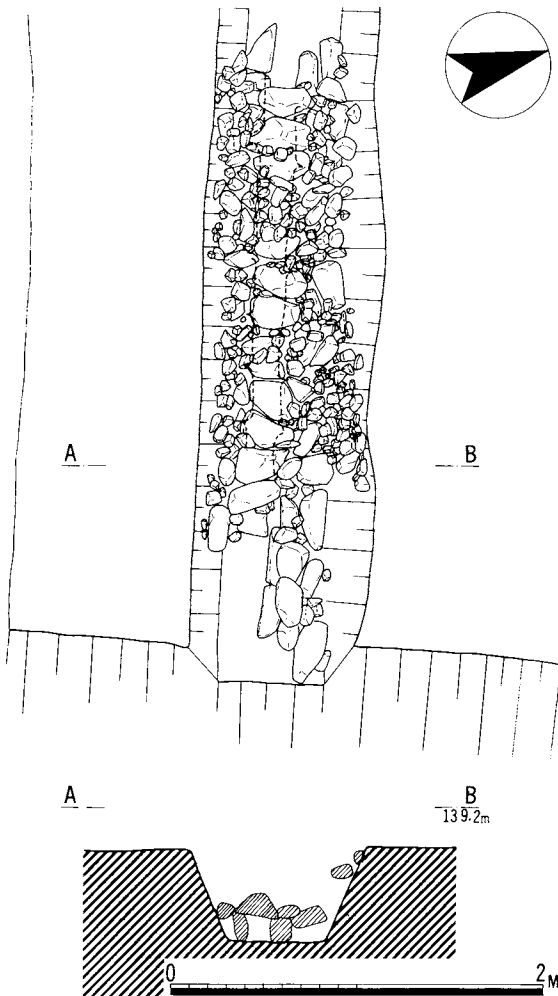
第86図 SK41実測図(1/40)



第87図 SK43実測図(1/40)

6 m・幅0.9 mを測る。断面は、逆台形となり、人頭大の石を側壁と天井部とに箱形に組み、その上に拳大の礫を詰める。石組は東半分のみしか残存しなかった為、S P 23との接点における水口の存在は不明である。

S D 28 S D 19～21が南土塁下で合流して、S D 36へ流入する。幅0.7 m、深さ0.3 mを測る。S D 21の延長と考えられる。南土塁の西を区切り、虎口の



第88図 SD24実測図(1/40)

東に位置する。

S D 26 S B 27の北1.5 mに位置し、S B 27に並行する。幅0.3 m～0.4 m・深さ数cmの浅い溝であり、長さ4.6 m程検出している。S D 27に伴う雨落ち溝と考えられる。

S D 30 虎口に位置するS B 27の南2 mに位置し、S B 27と並行する。幅0.5 m・深さ0.1 m程のもので、長さ2.6 mを測る。S B 27の南雨落ち溝とも考えられるが、虎口は、郭内外で0.6 mの比高をもち、その斜面に位置することから階段状の遺構と考えられる。

S D 38 S D 32の南5 mで、長さ11.4 m以上を検出した。幅2 m・深さ0.2 mの浅い溝である。東端からは、細い溝が直角につけられS D 31に流入する。

S D 39 S D 38の東側からはじまり、S D 38に直交するように位置しS D 31に流れこむ。

S D 40 虎口の南で検出したもので、孤状となる。虎口の全面では、8世紀の遺物を多く包含する黒褐色粘質土が堆積しており、その下面で検出したものである。幅0.7～1.1 m・深さ0.15 m程で、15 mにわたり検出している。S D 51に切られる。地山は、東側へ緩く傾斜する為、東では検出されない。古墳の周溝基底部の可能性もある。

7. その他の遺構

S X 34 郭内外を結ぶ土橋であり、幅6.3 mを測り、地山を掘りのこしたものである。S B 34には門跡と考えられるS B 33が建てられる。

S X 56 S D 37の東方に広がる凹地である。S D 37検出面と同じ高さで、暗茶褐色粘質土を除去したところ、奈良時代の須恵器(5・7)を出土。室町後期の遺物は含まず、東へ傾斜するので「古川」の西端にあたるものであろうか。

遺 構	遺 物	遺 構	遺 物
S K 5	77	S D 31	20・23・39・42・109・111・114・117(II層)
S K 6	21・22		26(III層)
S K 8	89	S D 36	25・27・41・43・115(II層)
S K 10	40・59・60・95・101		38・108(III層)
S P 22	44	S D 37	110
S P 23	五輪塔 地(2)	S K 42	3・10
S D 28	29・52	S K 46	56
S K 29	45・53・54・61・63・64・65・66	S P 49	91・113・116・118・119
	73・74・100	S D 51	18・82・84・85・86
S B 33	57	S E 55	14・15・92

遺構別主要出土遺物対照表

2. 遺物

神ノ木館跡から出土した遺物には、1. 奈良・平安時代に属し館構築以前の遺物、2. 館跡周辺で採集される鎌倉・室町時代の遺物、3. 館跡に伴う遺物で室町時代後期から江戸時代前期に属するものに大別できる。1には、須恵器、灰釉陶器、黒色土器があり、2には、瓦器がある。そして、3には、土師器、瓦質土器、天目茶碗・播鉢をはじめとする中・近世陶磁器類の他、漆器碗・下駄等の木製品、石臼・五輪塔の石製品がある。

1. 奈良・平安時代の遺物

(1) 須恵器

蓋(1~5) 宝珠つまみ(1~2)は、扁平化が進んだ形態を示し、2のように中央部が突出する。天井部はほぼ水平となり、端部は天井部と段をなし、下方へ短く屈曲する。3~4は、ともに灰色を呈し、丁寧にナデで仕上げられる。口径は、14~16cmである。

杯(6~9) 外開する体部に直立する高台がつく。6は、直線的に外開する体部をもち、口縁端部は丸い。高台は、全体に底部端によっており、断面方形を呈し直立する。8のように、僅かに「ハ」字状に開くものもある。接地面は、高台下面のほぼ全体にある。高台は、貼り付けられ、ナデで仕上げられる。6の口径は、15.1cm。暗灰色を呈し、砂粒も殆ど含まない。

これらの須恵器は、土橋の南に堆積していた暗茶褐色粘質土から出土したものと、S D 37東側の凹地 S X 56の暗茶褐色粘質土から出土したもの(5・7)である。

これらの須恵器は、8世紀後半に属する。^②

(2) 灰釉陶器

碗(10・11) ともに高台のみである。断面方形の高台は、僅かに外弯気味である。底径は、10で8.5cm・11で9.2cm程と思われる。11の外底面には、墨書を認めるが、小片であるため文字は不明である。平安後期のものであろう。

(3) 黒色土器

碗(12) 口径17.4cm・器高5.1cm。黒色土器Aである。器高のわりに口径が広い。体部は、大きく内弯して立ち上がる。口縁内面直下には、浅い沈線がめぐる。高台は、断面逆台形のもが直立する。内面は、やや太めの幅をもつヘラミガキが細かく施され、このヘラミガキの上に更に輪状のヘラミガキがみられる。内底面も平行線状にヘラミガキが施される。平安時代中頃に属するだろう。^③

2. 鎌倉・室町時代前期の遺物

(4) 瓦器

碗(13) 口径11.3cm・器高3.2cmである。高台を消失しており、丸味のある形態を示す。口縁端部の内面には、細かい沈線がめぐる。外面体部下半は、オサエのままであり指痕がのこる。体部上半は、オサエの後ナデで仕上げる。外面にはヘラミガキは施されないが、内面には、粗いヘラミガキが施される。全体に、暗灰色を示し、剥離のためか燻しは認められない。館跡東方での表採資料である。

羽釜(15) 口径23cm前後と推定される口縁上端部である。端部は、僅かに内傾する面をもち、肥厚する。鏝は、断面長方形のもが貼り付けられる。内外面ともナデで仕上げる。黒色を示し、極く僅かであるが細砂・雲母粒を含む。

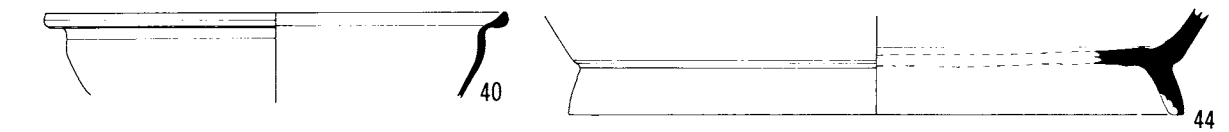
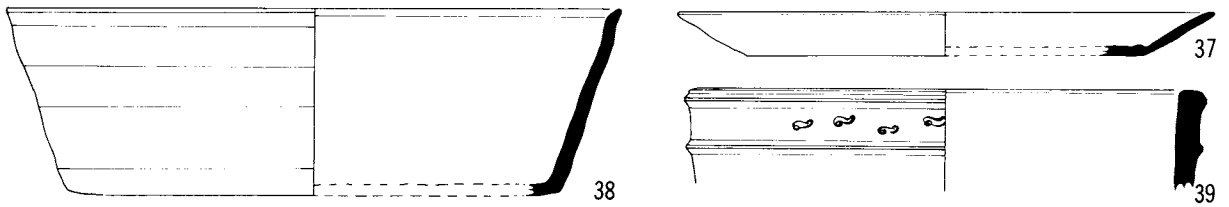
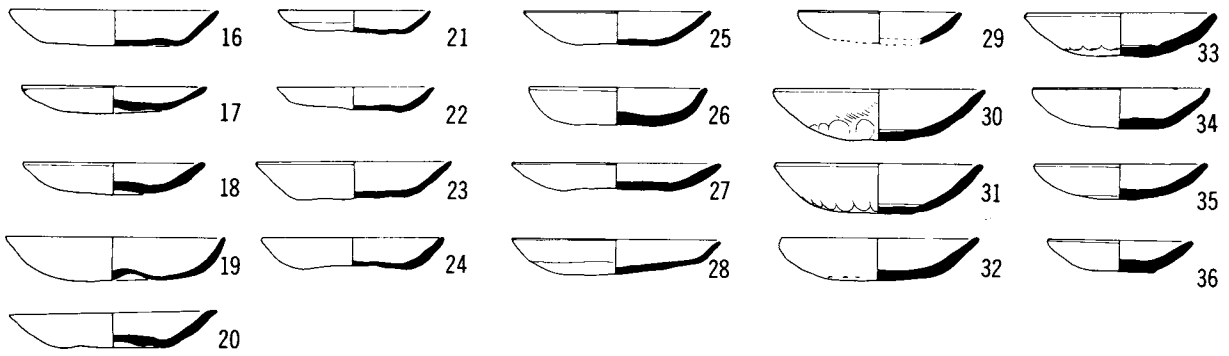
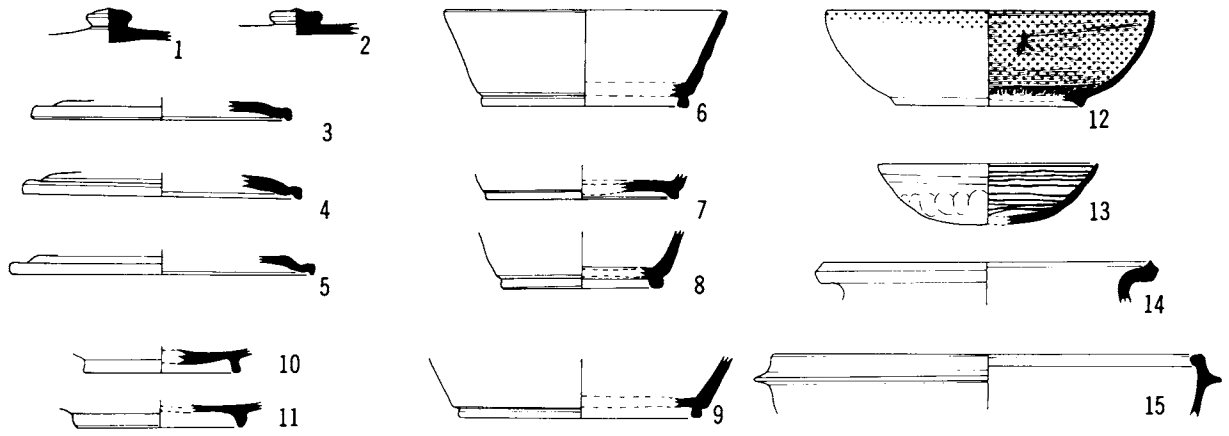
鍋(14) 口径24cm前後と推定される鍋の口縁部である。強く外方する口縁部は、端部が上方へつまみ出される。口縁内面はナデで仕上げられ、頸部はヘラ状工具でオサエられる。黒色を呈し、極く少量の細砂・雲母粒を含む。

13は、伊賀における最終末の碗の一つであり、14世紀前半のものと考えられる。^④14・15は、ともに14世紀代と考えられる。

3. 室町時代後期～江戸時代前期の遺物

(5) 土師器

皿A(16~22) 口径10~11cm前後のもの(16~20)と口径8cm前後のもの(21~22)の大小があるが、「ヘソ皿」とよばれ底面中央部が凹む。体部は、



第89图 土師器・須惠器・黑色土器・瓦器実測图 (1:4)

外上方に開く。概ね底部は、オサエのみで外面に指痕をのこし、体部はヨコナデで仕上げる。16は、口径11cm前後・器高1.9cm。底面を外方から同心円状にオサエるので、内底面の周囲が凹む。内底面は、横位のナデもみられる。18は、内外面に油が付着する。19は、歪さが目立ち、砂粒を多く含む。茶褐色を呈する。20は、口径11.2cm・器高1.9cm。丁寧なつくりのもので、体部は内外面ともナデ仕上げする。内底面の体部と底部の境にはへら状工具でもあてたのか段がつき内底面が高くなる。内底面は横位のナデで仕上げる。21・22は、小皿でありオサエのみで仕上げたのであろう。

皿B (23~29) 口径10~11cm前後のもの(23~27)と口径8cm前後のもの(28~29)の大小がある。底面がほぼ平坦な皿を皿Bとした。全体をナデで仕上げるが、26外底面のようにへらケズリした例もある。胎土も砂粒を含まず滑らかなもの(23・25・27・28)と砂っぽいもの(26・29)がある。23は、内面をヨコナデし、内底面を横位にナデ仕上げする。口径11.3・器高1.5cm。24は、底部を僅かにオサエる。25は、内外面とも丁寧にナデ、内底面もヨコナデする。口径10.4cm・器高2.0cm。

皿C (30~36) 口径が10.5cm前後のもの(30~33)と9.0cm前後のもの(34~36)と大小がある。前者のものは、器高が2.5cm前後と高く、平底であるが、体部が丸味をもつ。器壁も概して厚い。器壁をオサエて成形し、内面はナデ上げて調整する。外面にオサエた時に爪先があたったのか、刺突文が同心円状にめぐるのが目立つ。34は、他のものに比べて、細砂を多く含む。口縁部3ヶ所に油心痕をのこす。口径9.4cm・器高2.3cm。

皿D (37) 口径21cm前後と推定される大皿である。器高2.3cm。丁寧なつくりのもので、体部は外開し、口縁部が僅かに外反する。内底面は黒茶色。外面は淡褐色を呈し、砂粒を殆ど含まない。

鉢 (38・39) 口径33cm前後・器高9.8cmでやや歪な大平鉢である。外開する体部は、粘土紐巻き上げの凹凸をのこす。口縁端部は外反し、内傾する面をもつ。内外面とも黒茶色を呈し、外面には媒が付着する。

39は、火舎の口縁部と思われる。直立する体部

上部に2条の突帯を貼り付け、突帯の間に、印刻文を配す。口径27cm。内面は、黒色を呈し、媒が付着する。外面は、淡褐色を呈す。

鍋A (40) 口径25cm前後のもので、やや深めの丸底の鍋である。丸味をもつ体部は、頸部でオサエられ、口縁部が外上方に引き出され端部で肥厚し直立する。口縁端部は、断面三角形となり、外面には稜線をもつ。内外面とも口縁部付近をヨコナデする。体部の器壁は、1.5mmと薄い。茶色を呈し、外面には媒が付着する。

鍋B (41) 口径36cm前後・直立する頸部から、水平に引き出された口縁部は肥厚し、直立する面をもつ。口頸部をナデで仕上げ、体部内面を細いハケで横位に、外面を右下りの粗いハケで調整する。

鍋C (42~43) 42は、口径34cm・43は口径36cmである。形態は、鍋Bと同様であるが、鍋Bよりも浅いものである。42の体部外面は、へらケズリして器壁を薄く調整している。

(6) 瓦質土器

鉢 (44) 底径32cm前後。「ハ」字状に開く、高い高台である。内外面ともナデで仕上げる。鉢の高台であろうか。黒色を呈し、砂を殆ど含まない。

皿 (45) 口径23・器高4.4cm。外開する体部をもつ大皿である。体部と底部の境は、へらケズリするが、体部内外面、内底面はナデで仕上げる。黒色を呈し、細砂を多く含む。

小壺 (46) 口径7cm。鐏をもつ茶釜形の小さなものである。黒色を呈し、細砂を含む。

(7) 陶磁器

青磁椀 (47) 口径13cm前後である。丸味をもった体部は、口縁端部が丸くおさめられる。淡青色を呈す。

白磁椀 (48) 口径12cm前後である。直線的に伸びた体部は、口縁端部で肥厚する。内面に波状の文様がみられる。灰色を呈する。

天目茶椀A (49~55) 黒茶色の釉がかけられたもので、端部がオサエられ、外反する口縁が底部へすばまる形態を示すもの(49~53)と体部がやや丸味をもつもの(54・55)がある。高台は、すべて削り出し高台である。49は、口径11cm器高6.9cm。口縁端部は、強く内側へオサエられ、端部が外反し、

玉縁状となる。50は、口径12.3cm・器高6.3cm。成形は49と同じである。釉が剥離し、茶色を呈する。54は、口径11.7cm・器高6.7cm。口縁のオサエは弱く、端部のかえりは小さい。55は、口径10.6cm。暗茶緑色の施釉の下地に黒青色の施が口縁部外面に2条、内面中央部に1条めぐらされる。

天目茶碗B (56~59) 口縁部の内側へのオサエが弱く、口縁部が玉縁状にならず単純に外反し、体部が丸味をもつ。茶色の施釉を基本とし、56~58のように黒色釉が素地に施される。56は、口径9.8cm・器高5.2cm以上。

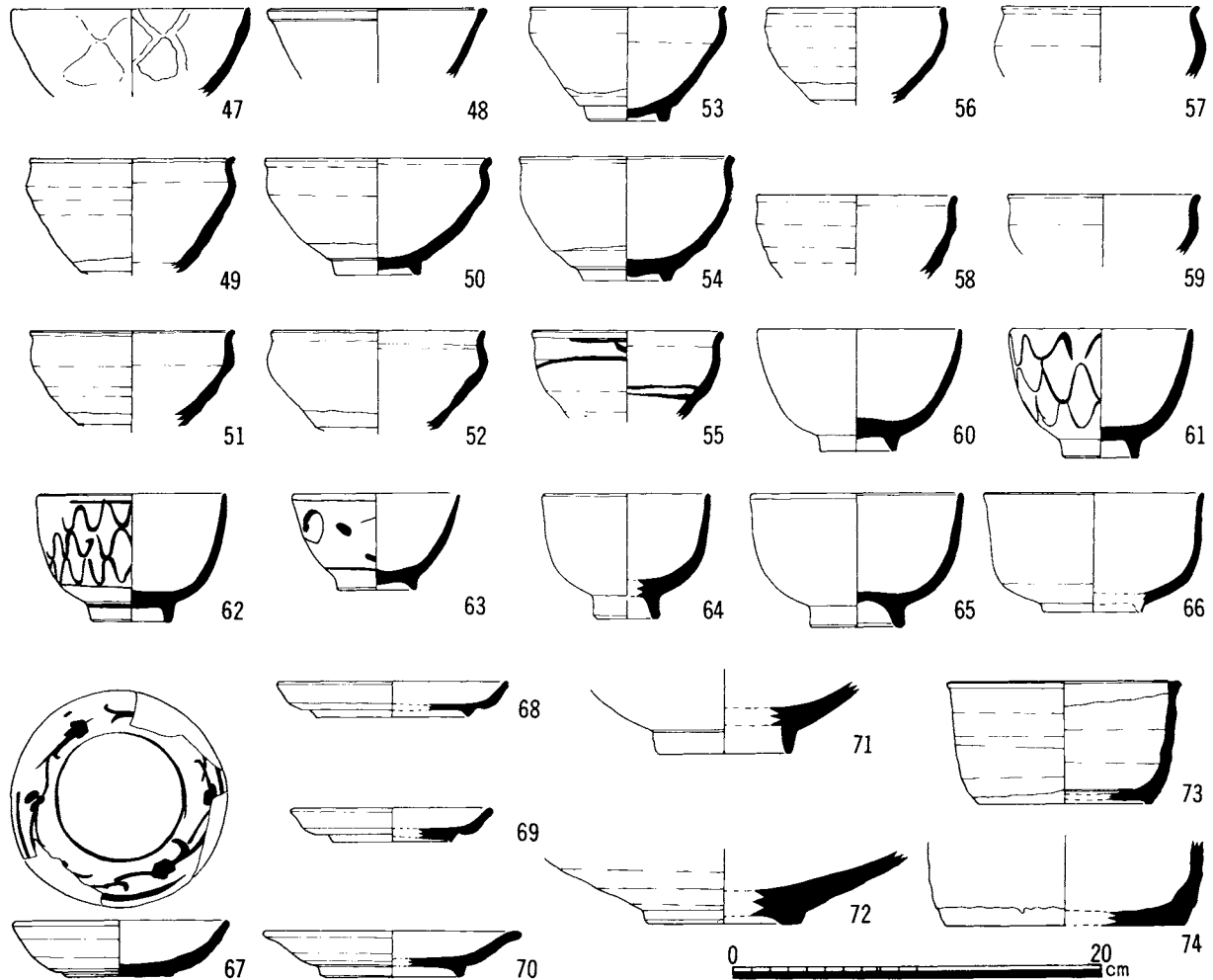
磁器碗 (60) 口径11.2cm、器高6.6cm。内弯して開いた体部は、口縁部で直立気味となる。断面逆台形の高台は、ケズリ出され直立する。淡青色を呈す。

染付碗 (61~63) 61・62は、波状文を青色で染め、63は緑色で文様をあしらう。61は、口径10.0cm・器高7.0cm。62は、10.2cm・器高6.9cm。63は、口径9.2cm・器高5.2cm。

陶器碗 (64~66) 64・65は、多孔質の素地に淡茶色の釉を施す。66は、半透明の淡緑色の釉を施す。64は、口径9.3cm・器高6.7cm。65は、口径11.6cm・器高7.2cm。66は、口径12cm・器高6.4cm。

陶器皿 (67~72) 形態上いくつかの種類に分かれる。71・72は、皿或いは鉢の高台かと思われる。67は、底部を糸切りで切り離した後、周囲をケズリ、高台を形成している。内面は、黒茶色で草花文が描かれる。口径11.8cm・器高3.1cm。68・69は、ともに断面三角形のケズリ出し高台をもつ浅い皿である。淡緑色の釉が、高台内部までかけられる。68は、口径12.6cm・器高2.0cm。69は、口径11.0cm・器高1.9cm。70は、高台の断面が逆台形を示し、ハリツケられる。口縁は、水平に引き出される。内底面に径4cmの凹みをケズリ出す。淡緑色の施釉は、口縁の内外面と内底面のみにみられる。口径14cm・器高3.8cm。

水指 (73・74) 底部から、ほぼ垂直に立ち上った体部は、口縁部で肥厚し水平な面をもつ。73の底



第90図 陶磁器実測図(1:4)青磁・白磁・天目茶碗・陶磁器碗・陶磁器皿(1/2)

部は、体部が下方へ引き出され高台状となる。体部外面から口縁部内面下まで乳灰色の施釉がみられ、志野風のものである。口径12.6cm・器高6.6cm。74は、上部を欠くが同様の形態をなすものであろう。外面に乳灰色の施釉がみられる。

擂鉢(75・76) 75は、口径36cm前後・器高14cm。やや内湾しながら外開する体部は、端部で外反する。外上方を向いた端面には、一条の沈線をめぐらす。片口鉢の形態をとる。内面下部は、使用痕をのこし滑かである。赤褐色を呈し、砂粒を多少含む。76は、底径16cmを測る底部下半のみである。底部外面直上をヨコナデし、その上方を部分的ではあるがナデあげる。外面は茶褐色を呈するが、内面は黒茶色となり凹凸が著しい。75・76ともに、筋目が施されないものと思われる。「捏る」と「搦る」の機能は、必ずしも厳密に区別しがたい要素もあるが、筋目をもたないものは一応捏鉢として扱いたい。

擂鉢A類 軟質のもので、内面に施された筋目は、1単位が4～5条を数え、内面を10～15分割したものを総称してA類とする。口縁は、概ね端部で外反するが、その形態により細分が可能であり、A₁～A₄類に区分する。

擂鉢A₁類(77～79) 口縁端部が僅かに肥厚・外反し、内傾する端面が凹線若しくは段状となる。77・78は、4条の筋目が、口縁直下まで搔き上げられ、最後に緩くカーブする。77の外面には、上方への粗いハケ目と、横位の粗いハケ目が施される。ともに淡褐色を呈し、少量の砂粒と雲母粒を含む。

擂鉢A₂類(80・81) 底部から直線的に外開する体部が、口縁部でオサエられ外反する。口縁部内面は、僅かに丸味をもち、一条の浅い沈線をめぐらす。内面は、比較的丁寧に仕上げられ、殊に下半は使用痕をのこし滑かである。外面は、粘土巻き上げ痕をのこし凹凸が著しい。内面の筋目は、4条を1単位として、底部より口縁下まで搔き上げられる。淡褐色を呈し、4mm粒の砂粒もかなり含む。81は、片口鉢の形態が明瞭である。口径31cm・器高15cm。

擂鉢A₃類(82) 直ぐ外開する体部に、僅かに外反する口縁をもつ。口縁端面は、上外方を向き、一条の沈線がめぐる。口縁内面は、内湾する段をもつ。淡茶色を呈す。

擂鉢A₄類(83・84) 直ぐ外開する体部に、僅かに外反する口縁をもち、口縁端面が、僅かに内傾し水平な面をもつ。内面は、4条の筋目が施されるが、下半以下では使用が著しく磨耗している。外面は、粗いクシ目を上方に搔き上げ、上部を横位に搔いている。外面は淡褐色・内面は明褐色を呈する。

擂鉢B類(85～86) 硬く焼き締められた擂鉢である。内面の筋目は、一単位5～6条を数え、放射状に分割され、単位も多くなる。85・86とも口縁部は外反し、端面は丸く水平となり、内面直下1cm程に段をつくる。外面調整も、A類程凹凸が目立たなくなる。赤褐色を呈し、3mm程の砂粒を少量含む。

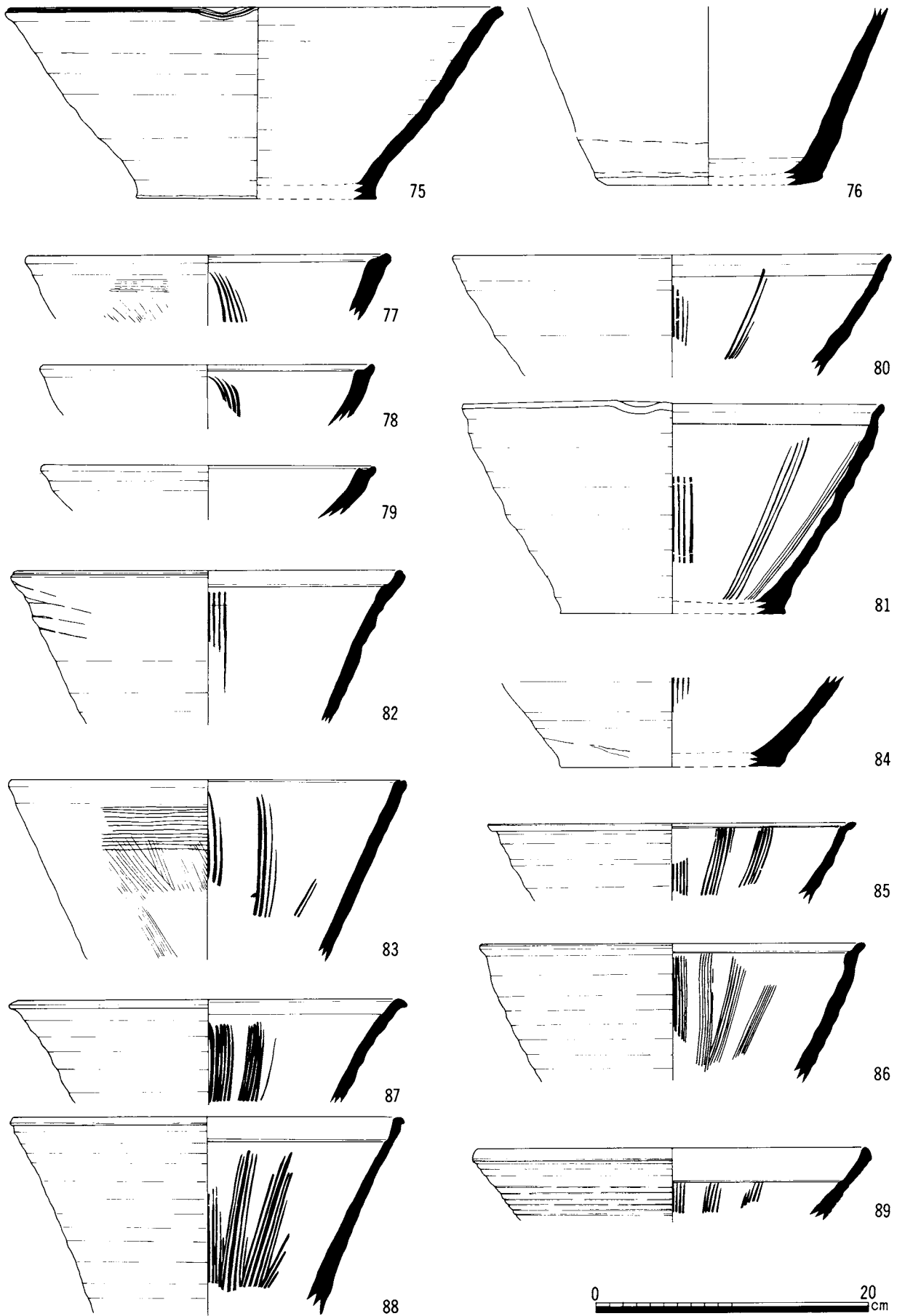
擂鉢C類(87～89) 硬く焼き締められ、施釉された擂鉢である。内面の筋目は、一単位5～6条を数え、B類よりも更に細かく分割される。口縁部は、直線的なもの(87)と内湾気味なもの(88・89)があり、ともに外方へ肥厚する。口縁内面は、口縁直下1.5cm～3cm程に段をつくる。筋目はこの段上には及ばない。87は、黒茶色・89は淡緑色の施釉が内面から外面に施される。88は、口縁端部のみに褐色釉が施される。

擂鉢D類 硬く焼き締められ、施釉された擂鉢であり、C類で認められた口縁端部の外方への肥厚が著しくなり、縁帯をつくりその外面に2条の凹線をめぐらす。筋目の施し方により2つに細分する。

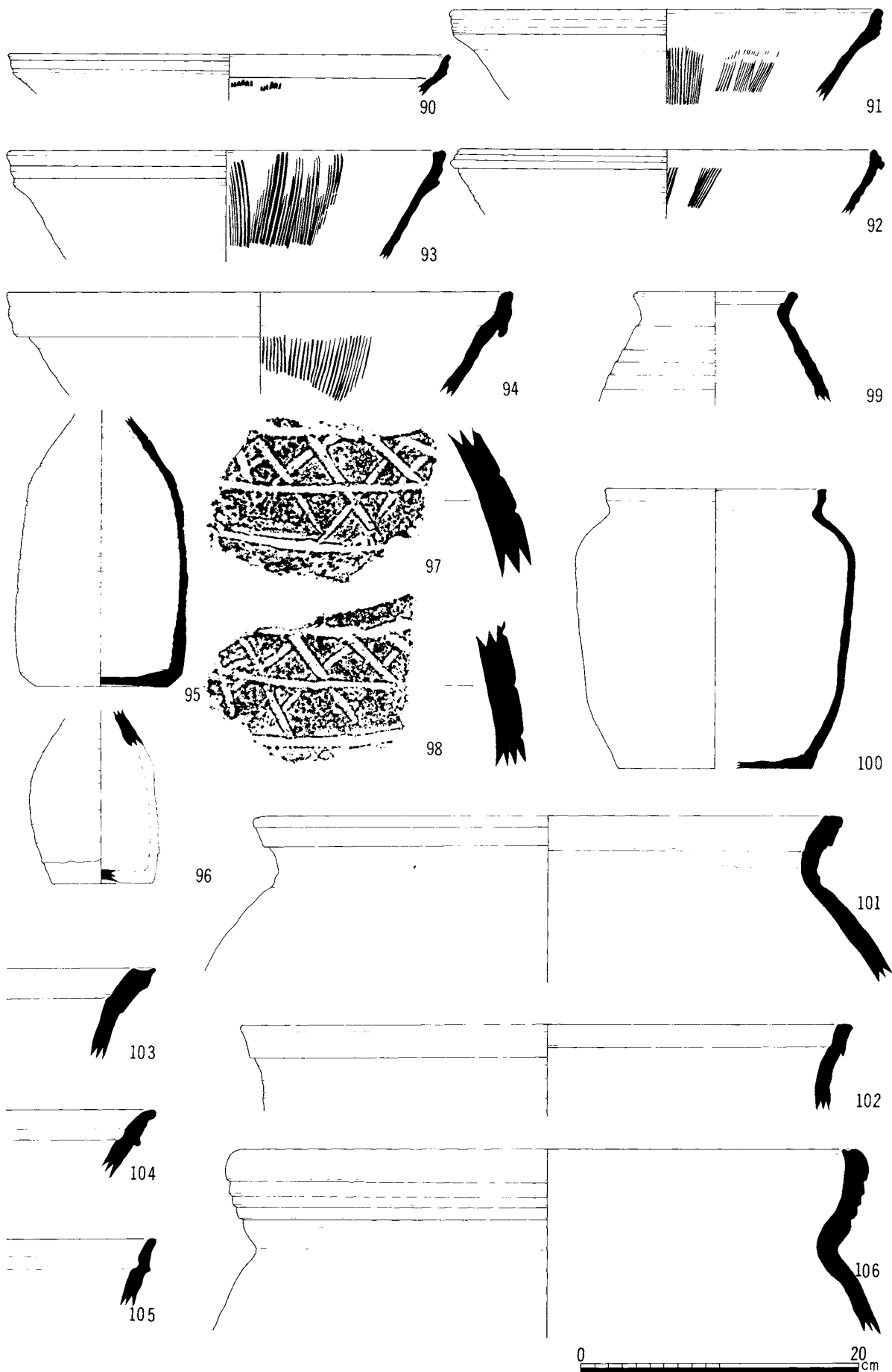
擂鉢D₁類(90～92) ともに口縁部のみの資料である。口縁部は、直立気味となり、端部は外方に面をもち2条の浅い凹線をめぐらす。92の口縁端部は、断面三角形を呈す。口縁内面は、口縁直下1.5cm～2cmで変曲点をもち段状となるもの(90・92)もある。内面の筋目は、この変曲点以下に限られ、一単位6～8条を数え、単位間の間隙も狭くなる。90は明茶褐色・91は暗褐色・92は暗茶緑色の施釉がある。

擂鉢D₂類(93) 口縁端部は、内湾して直立する。外面に巾2.5cmの縁帯をもち2条の凹線をめぐらす。端面は、僅かに凹み水平に上方を向く。筋目は、一単位8条のものが口縁直下まで全面施される。鉄泥が施され、胎土は多孔質である。館跡出土の擂鉢片は、D₂類が最も多い。

擂鉢E(94) 内面の筋目は、一単位7条を数え間隙なく全面に施される。口縁部は、D類より更に



第91图 陶磁器实测图(1:4)播鉢



第92图 陶磁器实测图(1:4)·拓影(1:2)播鉢·壺·甕

発達し、ほぼ垂直な面をもち2条の凹線をめぐらし垂れ下がる。内面は、内弯する滑かな段をもつ。口縁直下以下の内面には薄く、口縁及び外面には暗茶色のうわ薬を厚く施す。

徳利 (95・96) 95は、底径9.5cm・器高19.7cm以上である。肩の張らない形態を示し、口頸部を欠く。底部は未調整であり、体部と底部の境をヘラで面取りする。体部内外面ともロクロ目がのこり、外面には凹線ものこる。暗赤褐色を呈し、細砂をかなり含む。96は、底径7.0~7.4cm・器高12.4cm以上である。肩の張らないもので、口頸部を欠く。底部は未調整であり、中央部が凹む。口頸部以下底部直上まで鉄釉が施される。

檜垣文 (97・98) 壺の肩部に多くみかけられる文様で、信楽焼特有のものといわれ、縄目文ともいう。多くみられるものは、上下二条の沈線に格子状に沈線をめぐらすものであるが、97・98とも格子状の交点にも更に一条の沈線をめぐらす。類例が、『応永28年』銘をもつ「蹲るの壺」にある。97は、茶褐色、98は淡褐色を呈し、内面は粗い。^⑤

広口壺 (100) 口径15.9cm・器高19.8cm。底部から外傾して伸びた胴部は、中央部より直ぐ立ち上り、撫で肩に続く。口縁部は、垂直に引き出され、内面が内弯し、外面に稜をつくる。端部は僅かに肥厚し、端面は水平で上方を向く。黒茶色の釉が内外面ともかけられるが、肩と内底面の一部に茶褐色の素地がみられる。

甕A (101~102) ともに口頸部のみの出土であり、口縁部が「N」字状となる。101は口径43cmであり、直立する頸部に外反する口縁部がつく。口縁部は、折り返えされ「N」字状となる。口縁内面は、頸部との境に段をもつ。また、頸部外面は、肩部との境に段をもつ。102は、口径44cm前後のものと思われ、僅かに外傾する口頸部である。「N」字状に折り返えされた口縁部は、外面の上下で肥厚する。内面は、頸部との境に段をもつ。101は茶色、102は赤褐色を呈す。

甕B (103~105) N字状口縁の退化したものであり、「N」字状口縁外面の上下は肥厚する。口縁内面には、頸部との境に凹線をめぐらす。104は、赤褐色を呈し、長石が溶け出しざんぐりした信楽焼独

特の焼きを示している。

甕C (106~107) 内弯して立ち上がった口縁部は、丸くまとめられる。外面に4条の凹線をめぐらす。106は、口縁内面に木葉を焼きつける。106は、口径49cm前後である。茶色を呈し、かなり大きな砂粒も含む。同様な形態をもつものに107がある。

(8) 木製品

漆器椀 (108~110) S D 31・36・37より5個体分出土している。108は、口径11.2cm・器高3.5cm。109は、口径16cm・器高5.6cm以上。108は、高台までケズリ出したもので、外面黒漆・内面朱漆をかけたものである。110は、内外とも黒漆をかける。109は、朱漆地に外面のみ黒漆で文様を描く。この他に、黒漆地の内面に朱彩したものもある。

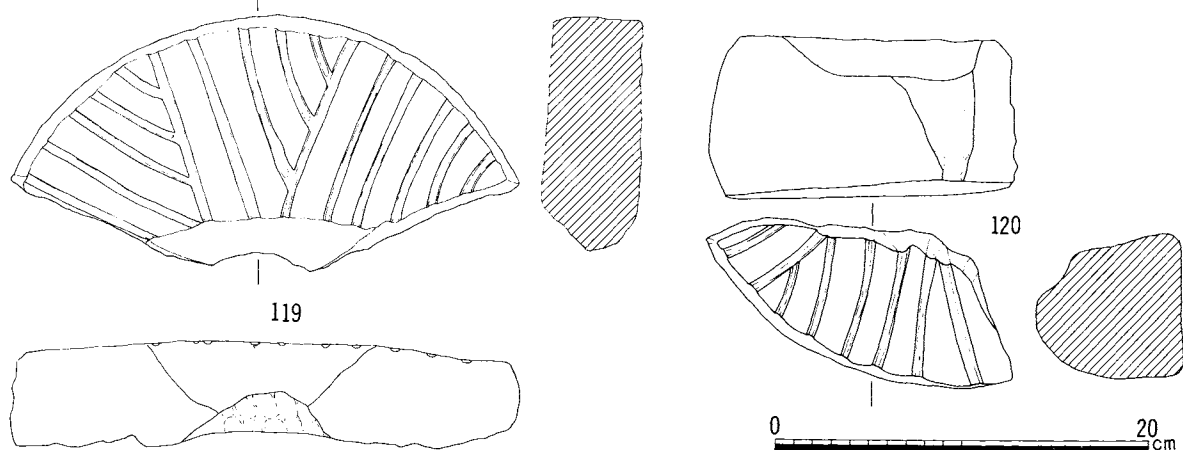
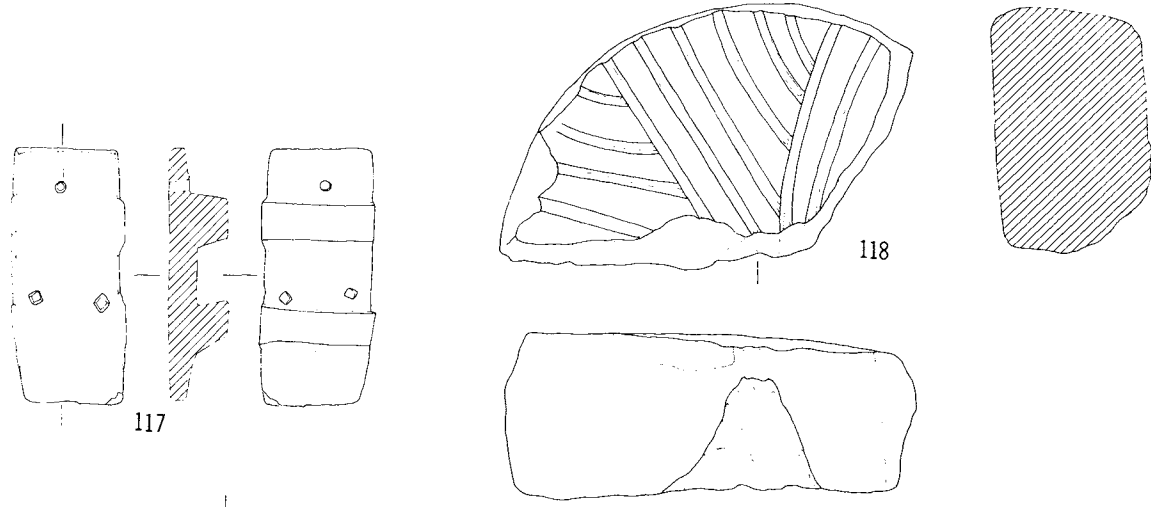
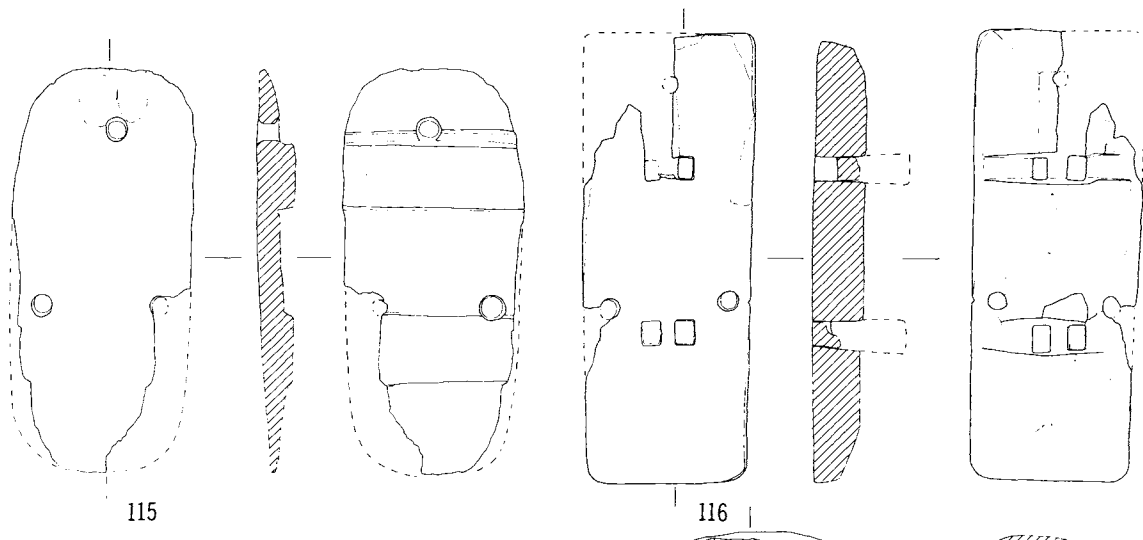
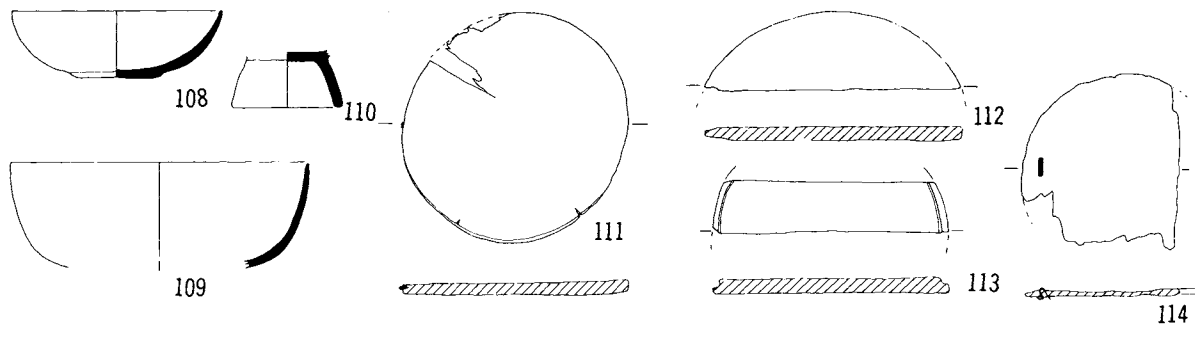
曲物 (111~114) 底板・蓋板と思われるものである。側板を竹釘で固定するもの(111)・金具で固定するもの(114)がある。111は、径12cm、厚さ0.7cm。

下駄 (115~117) 連歯下駄(115・117)と差歯下駄(116)の二形態がある。連歯下駄には、大人用(115)・小人用(117)がある。115は、長さ21.4cm・幅9.7cmで、台部は隅丸長方形となる。前緒穴は、やや右寄りである。歯部は、ノコギリで切り出される。後歯の摩耗が著しい。117は、長さ13.6cm・幅5.8cmで、台部は方形である。歯部は、比較的高い。前緒穴は凹形であるが、後緒穴は、2穴とも菱形となる。

差歯下駄(116)は、「露卯」構造のもので、両歯とも二穴の方形柄穴をもつ。台部裏面は、舟形に面取りされる。長さ24cm・幅9cmで、台部は隅丸長方形となる。

井戸枠 (121~123) S E 55の最下部に井桁状に組まれた井戸枠である。井戸枠は、東・西・北とも板目取りしている。井戸枠は、85cm×22cmの板材を各々対角線上の二隅を方形に切りおとしている。厚さは、2.4~3.2cmである。長辺は、北の枠以外では僅かに弯曲しており、立ち割ったものと考えられる。井戸の内側にあたる面は、大きな波形の加工痕を僅かにのこしており、削られたものであろう。外側は、裏ごめに使用された礫が接触して、成形時の形状を示さない。

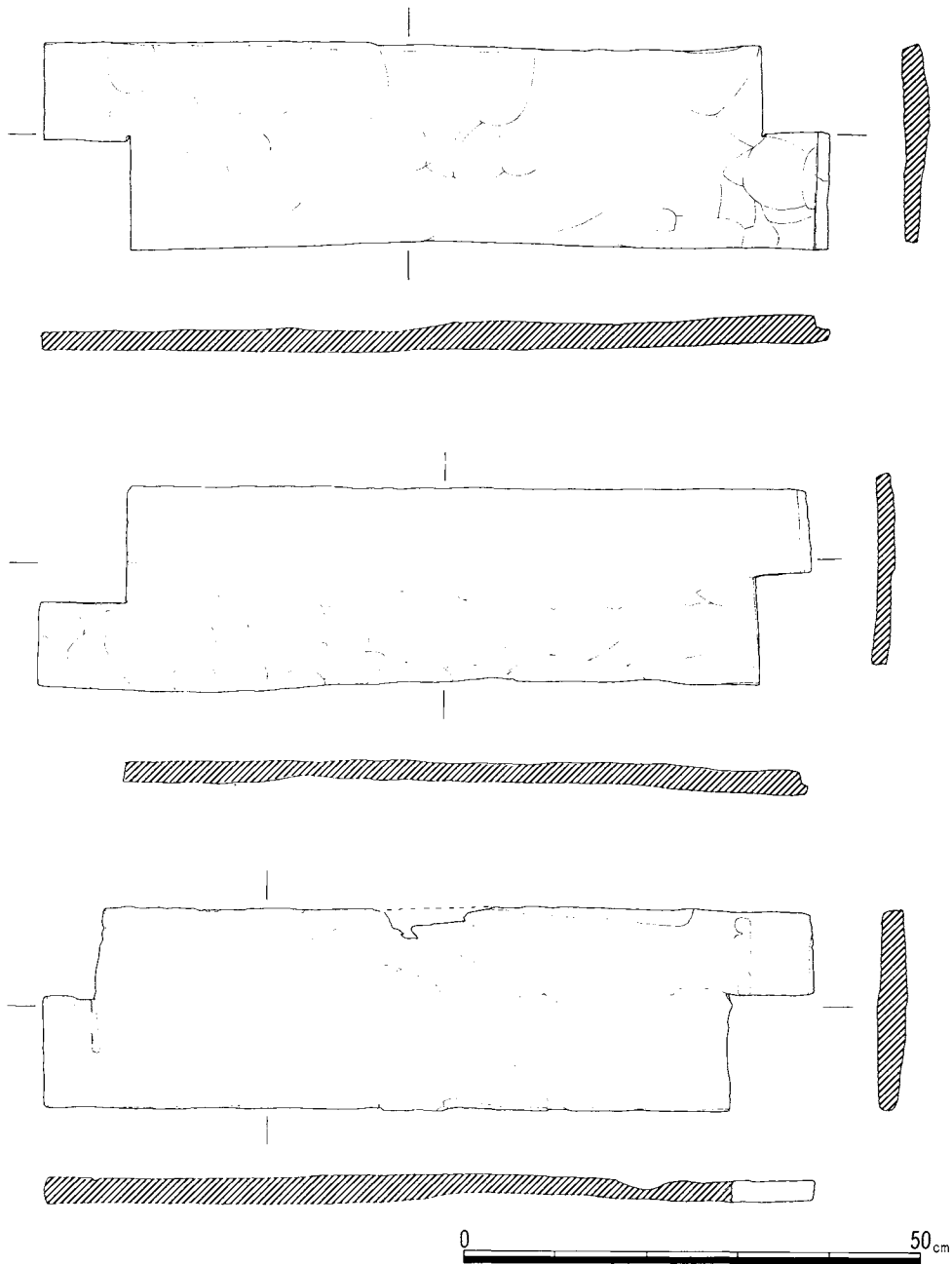
(9) 石製品



第93图 木製品・石製品実側図(1:4)

石臼（118～120）ともに粉挽き臼であり、下臼（118・119）と上臼（120）がある。118は、径14.0cm・高さ8.4cm・ふくみ0.4cm。8分画の6条溝のもので溝の断面はV字形となる。119は、径14.4cm・高5.1

cm・ふくみ0.5cm。8分画5条溝であるが1分画及至2分画は6条溝となる。120は、径15.2cm・高8.0cm・ふくみ0.8cm。上縁高2cm・幅2.4cm。8分画6条溝のものである。



第94図 SE55井戸粹実測図 東・西・北（内面 1：8）

3. 結 語

神ノ木館跡の発掘調査は、館跡の南部分に限られたが、東西48m×南北60m（推定）の土塁と濠に囲まれた館跡であることが判明した。また、出土遺物は、室町後期から江戸前期を中心とするものであり、この時期の貴重な資料を得ることができた。以下、遺構及び遺物についてその問題点を指摘して結びとしたい。

1. 遺構について

館跡土塁内の規模は、東西32m（約18間）×南北40m（約22間・推定）である。明らかに館跡に伴うと判断している遺構には、土塁・内濠・外濠以外に建物5棟（SB11～13・SB27・SB33）・SK10・SP22～23・SD2・SD9・SD21・SD24・SD26・SD30がある。

建物跡のうち2棟は、門跡と考えているSB27・SB33であり、その位置からみても問題ないであろう。ただ、形態の異なる2つの門が同時存在したかについては、疑問ものこる。

郭内の建物群は、館跡以前の建物と考えられる可能性もあるが、塁濠と棟方向を同じくし、同一場所での建替えであり、館跡の中央部を区切るSD9と並行することなどから考えて、館跡と同時期の所産と考えてよいであろう。そして、郭内の建物群は、ほぼ同一空間における建替えであり、郭内で一定の機能を恒常的にもつ建物と考えられる。母屋は、館跡の北半分存在したものと推定され、また規模からみても母屋とも思われず、母屋の前面に建つ建物と考えられる。

建物は、柱穴に巨大の礎を詰める例が多く、根石として用いたものであろう。

室町後期の集落跡の調査例は、さほど多くなく、むしろ城館跡の調査例が多い。

寺垣内館址^⑤・野元坂館址^⑦・清水北館跡^⑧・川北城跡^⑨では、掘立柱建物を検出している。一方、正法寺山荘^⑩では、礎石建物を検出している。正法寺山荘は、寺院的性格を具備するものであり、他の城館とは性格をやや異にするものであり、この時期でも掘立柱

建物が多かったことを示している。ただ、本館跡の母屋の構造については、不明である。

2. 遺物について

館跡に伴う土器類は、土師器・瓦質土器・陶磁器である。これらは、室町時代後期15世紀後半から江戸前期に至る時期が考えられ、館跡の存続時期を示している。

出土遺物は、播鉢をはじめとする日常雑器が主流を占め、天目茶碗・水指等の茶道に関係する陶器がある。その機能からみた土器の組合せは、調理形態（伊賀焼播鉢^⑪）・煮沸形態（土師器鍋）・供膳形態（土師器皿・陶器皿・陶磁器碗）^⑫・貯蔵形態（伊賀焼壺・甕）となる。

各種の遺物のうち、同一器形で長期間使用されたものに土師器（皿・鍋）・陶器（播鉢・天目茶碗）がある。播鉢は、本遺跡出土遺物のうち最も多い器形であり、5類に分類した。伊賀焼播鉢^⑬の初現をいつに求めるかについては、未だ不明な点が多い。然るに信楽焼播鉢の標式とされるものに「長禄2年」（1458）銘をもつ播鉢がある^⑭。フリーハンドで4条を1単位とする筋目は、内面を六分割する。口縁端部は、外反し内傾する面をもつ。

本遺跡の播鉢A類としたものは、筋目が櫛状工具により底部からかきあげられたもので、筋目の分割数も増し、「長禄2年」銘のものより若干後出するものであろう。播鉢A類の実年代を15世紀後半を中心とする時期と考えたい。播鉢B類は、赤褐色を呈し硬く焼き締められたもので、筋目の分割数も20区画程のものである。播鉢A類に続くもので16世紀前半の所産と考えたい。播鉢C類では、播鉢に一つの大きな変化が認められ、施釉陶器としての播鉢が出現する。信楽における本格的な施釉陶器の展開は慶長以降はじめられた京都の施釉陶器の影響を色濃くうけていったものと考えられている。従って、播鉢C類の中心時期を17世紀前後と考え、D・E類は江戸前期の所産と考えられる。また、D・E類で顕著になる口縁の形態は、備前焼播鉢に似通っている。

それは、瀬戸系播鉢にも認められ、「瀬戸系統の美濃産播鉢が少なくとも16世紀に入って、当時機能的に勝っていた備前焼播鉢の形態の模倣に走ったことが想像できよう。」とする指摘は要を得ているだろう。ただ、本遺跡のD・E類が備前焼の影響を受けたとは即断できない。更に、D・E類の時期を17世紀と考えており、その伝播の時期・経路については、尚多くの問題点をのこしている。

信楽・伊賀の播鉢は、安土・桃山時代以降茶陶窯として発達するまで、壺・甕とともにその生産を支えた器形である。木津川沿いに滋賀・京都方面に商品ルートを広げている。また、正法寺山荘でもA類が出土しており、伊勢方面への流通も充分考えられる。伊勢での調査例が少ないため、美濃・瀬戸系の播鉢との競合関係及び伴出遺物による時期決定は、資料の増加を待ちたい。

3. 神ノ木館跡の館主について

大野木地内には、田上兵庫館・三波(南)氏館・広山氏館・同砦・久保田氏館・直居氏館・竹嶋氏館・木津氏館の館主が比定された8ヶ所の城館跡の他、神ノ木館跡・大辺神社旧社地・清水北館跡・城山城跡の4ヶ所の城館跡が存在する。一方、地誌本等に記載された土豪の中に、その居館が不明なものに窪田又八郎(『参考伊乱記』)、増井氏(『三国地誌』)、今岡金治・清水金吾・富沢久左衛門(『藤堂藩無足人調書』)があり、神ノ木館跡の館主が彼等の一人である可能性がある。

また、隣接する竹嶋氏館の北外郭線と神ノ木館跡の南外郭線がほぼ一致することから、竹嶋氏館の一郭と考えることもできよう。ただ、伊賀地方の中世城館では、2～3家が隣接して館を構えることも多く、本例もその一例である可能性が高い。

以上の様に、神ノ木館跡の館主を決定することは積極的資料を欠き、現在のところ不明と言わざるを得ない。ただ、館跡が、柵(垣根)で囲まれた屋敷地を更に発展させた防禦施設であり、館主が村落における有力農民であることには相異ないであろう。

(駒田利治)

<註>

- ① 竹嶋氏館の実測図は、『青蓮寺開拓建設事業地域遺跡地図』(三重県教育委員会 1970)による。
また、神ノ木館跡の調査前実測図は、三重大学歴史研究会原始古代史部会(前川嘉宏・江尻健・広岡貞之・野田修久諸氏)及び三交不動産株式会社の協力を得た。記して謝意を表する次第である。
- ② 田辺昭三他 『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古クラブ 1966
- ③ 稲垣晋也 『瓦器碗の成立と展開 - 奈良時代黒色土器工人から室町時代火鉢座への系譜 -』 『日本歴史考古学論叢』 2 1968
- ④ 伊賀地方における最終末の瓦器碗は、この他に木津氏館でも表採されている。
森前稔 「木津氏館」 本報告書X参照。
- ⑤ 満岡忠成 『信楽 伊賀』 1976
- ⑥ 下村登良男 「寺垣内館址」 『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(三重県教育委員会 1970)
- ⑦ 谷本鋭次 「野元坂館跡」 同上
- ⑧ 1975年 木津川河川改修工事に伴い三重県教育委員会が発掘調査を実施した。
- ⑨ 1978年 宅地造成に伴い津市教育委員会が発掘調査を実施した。
- ⑩ 伊藤克幸他 『正法寺山荘跡発掘調査報告』 第1次～第3次 関町教育委員会 1978～1980
- ⑪ 調理形態に属する出土遺物には、他に石臼がある。
- ⑫ 供膳形態に属する出土遺物には、他に漆器碗がある。
- ⑬ 本館跡出土の播鉢は、91～94例を除いてすべて伊賀焼である。83例は、外面に粗いハケを用いており、他のものとやや手法が異なり、伊賀焼とは即断しかねる。
- ⑭ 河原正彦 「信楽と伊賀」 『日本の美術』 No.169 1980他
- ⑮ 註⑭に同じ
- ⑯ 大橋康二 「中世播鉢考(2)」 『考古学ジャーナル』 No.177 1980
- ⑰ 鈴木重治・松藤和人 『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』 同志社大学校地学術調査委員会 1978
松藤和人他 『京都府田辺町都谷中世館跡』 同志社大学校地学術調査委員会
丸山竜平 『観音寺城跡整備調査報告書』 滋賀県教育委員会 1971
兼康保明 『壺山遺跡発掘調査概要』 滋賀県教育委員会 1978
- ⑱ 註⑩に同じ
- ⑲ 『三重の中世城館』(三重県教育委員会 1976)
- ⑳ 神ノ木館跡の北東30.0mに所在し、旧社地とされているが、三重大学歴史研究会原始古代史部会の測量調査でも、館跡であったことが推定される。
- ㉑ 註⑧に同じ。藤堂藩無足人調書に、清水金吾の名がみえ、清水氏の館跡である可能性がある。
- ㉒ 菊岡如幻著・沖森直三郎編輯 『参考伊乱記』 1974
- ㉓ 藤堂元甫 『三国地誌』 1763

Ⅱ 上野市大野木 ^{ふけ} 婦毛遺跡

1. 位置・地形

上野市南西郊の七本木・法花地区の諸支谷の雨水を集めて北東に向って流れる岩根川は、大野木・大内・守田の地区界付近で、伊賀盆地を北流してくる木津川に合流している。

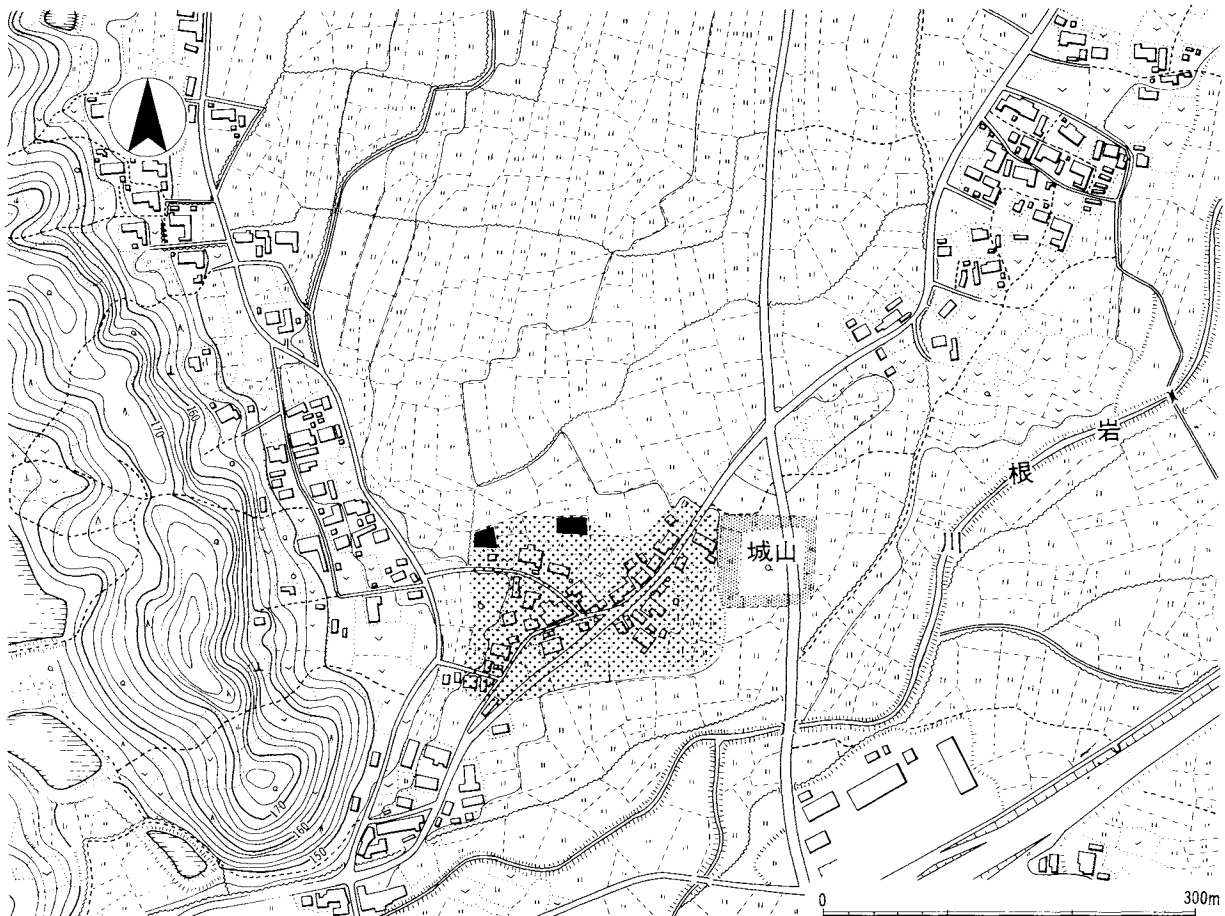
婦毛遺跡は、この合流点より330m上流の岩根川中流左岸の標高141～145mの複合扇状地及び自然堤防上に位置し、行政上は上野市大野木字婦毛に属している。

A区は南出地区から北山地区にかけての集落西方の丘陵地の東側に形成された複合扇状地の堆積面上に乗っている。複合扇状地の堆積形成要因には次の2点が考えられる。ひとつには北山地区集落南方の

丘陵が雨水によって開析され、この開析過程で多くの岩層が北東方向へ運搬された事によるものである。この運搬作用の範囲は145mの等高線に及んでいる。さらに南出地区西方の丘陵でも同様に、雨水によって開析された岩層が折々の岩根川の氾濫によって北東方向へ運搬されていたものであろう。この二者が部分的に重複したり、ずれたり等の作用の繰返の中で、A区の地形が形成されてきたものと考えられる。

複合扇状地の傾斜は方向を定めがたいが、おおむね西より東が低く、傾斜はこれに沿って扇状に廻っている。

B区は高芝地区南西から清水地区にのびる自然堤



第95図 遺跡地形図 (1 : 6000)

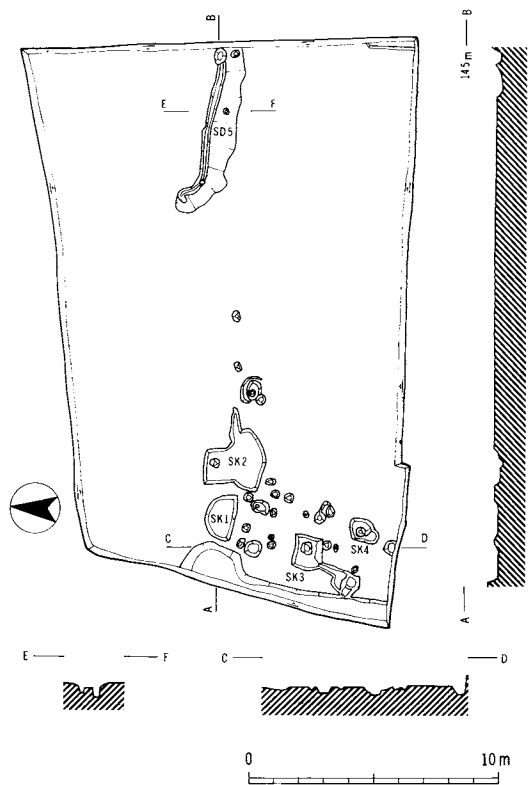
防の末端部に乗っている。岩根川の大出水のとき常流水路の両側に水があふれ、上記の岩屑や上流の土砂が堆積して、巾100m前後の自然堤防が岩根川より離れること最長で150mの場所に形成されている。

この堤防の下に続く田は、この地では新しい開発と言われ、湿田が多く、いわゆる後背湿地となっている。

2. 遺 構

発掘調査は全体で約800㎡に及んだ。A・B区ともに土壇・溝を検出したが、これら遺構からの出土遺物は数えるほどである。

A区 西部で近世の土壇4基、東部では近世の溝1個所を検出した。基本的な順序は、第1層として暗灰色砂質土の現耕作土が20cm前後あり、第2層には暗茶褐色土の床土が10cm続き、第3層に20cmばかりのやや青味がかかった黒灰色土がみられ、第4層に至り砂礫を含む黄褐色砂質土の地山となる。第1層～第3層に土師器細片及び陶磁器片が包含されていた。土師器片は全体で少量であり、陶磁器片はA区南東角でやや密となっている。



第96図 A区遺構平面図(1:300)

いる。地名も婦毛あるいは黒土となっている。

すなわちB区は自然堤防末端から後背湿地にかけての斜面を削平して開田された個所に位置している。このため、地表面はほぼ水平となっているが、遺構検出面は南西より北東へなだらかな斜面となっている。

SK1 A区西側の中ほどで確認した半円形の土壇である。規模は径約1m、深さ約20cmである。埋土上層は暗茶褐色粘質土であり、下層は黒褐色粘質土である。この上層からは近世陶磁器片が出土している。

SK2 SK1の東側に近接する土壇である。一辺70cmの方形のものに、長径130cm・短径70cmの楕円形の土壇が重複した形となっている。さらに、方形の土壇部分には、径30cm・深さ20cmのpitも見られる。このpitと土壇との関連は不明である。

SK3 A区西側のSK1・SK2より少し南から検出された複雑な形の土壇である。1辺120cmのほぼ方形と径1mの不整円とを40cm×70cmの短形の形がジョイントしている。前2者の形の中に各々、径40cm・深さ20cm程度のpitが1個所ある。

SK4 SK3の南側で検出された土壇である。径110cm×90cmのやや短形のくずれた形をしており、中心部には径35cm、深さ20cmのpitがみられる。

SD5 A区東側の中ほどで東西に6m程の長さを持つ溝である。巾は1m強、深さは30～40cmである。溝の底部が北に偏っているため、溝の断面を見ると北は急傾斜となっているが、逆に南は緩傾斜であり、この部分に径20cm前後のpitが3個所ある。溝の東端は、径50cm・深さ20cmのpitで切られており、西端は北西に向って終わっている。その他、上記以外に土壇とpitを合計して、28ヶ所の遺構を検出したが、纏りあるものには至らなかった。

B区 確認できた遺構は近世の土壇が2基、近世の溝4個所である。すべて、調査区西半に属している。層序は明瞭な整合をなしており、第1層が15cmの厚みの黒灰色砂質土、第2層が20cmの厚みの茶黒

灰色砂質土、第3層が5cmの厚みの黄褐色土、第4層が20cmの厚みの茶褐色黒色土、第5層が5～25cmの厚みの暗黒褐色粘質土、第6層が5～15cmの厚みの黒色土、第7層が5～10cmの厚みの暗黒褐色粘質土、第8層が黄褐色粘土である。第1・第2層が耕土、第3層が床土、第8層が地山で、第1～第6層までが遺物を包含している。第1～第3層は主に陶磁器片を出土している。第4層はマンガン粒斑状の多い層で、土師器片を主に出土しており、第5～6層は稀に土師器片を含んでいる。また、第6層は有機物を多量に含み、墨に近い黒色を呈し、地名「黒土」の名のとおりである。ただし、第5～7層はB区の北東部に限定される。土師器片の出土状況はB区中央部で密、溝北部でやや多いという状態である。陶磁器片は標高142.0～142.4mのゾーンに均一に出土している。

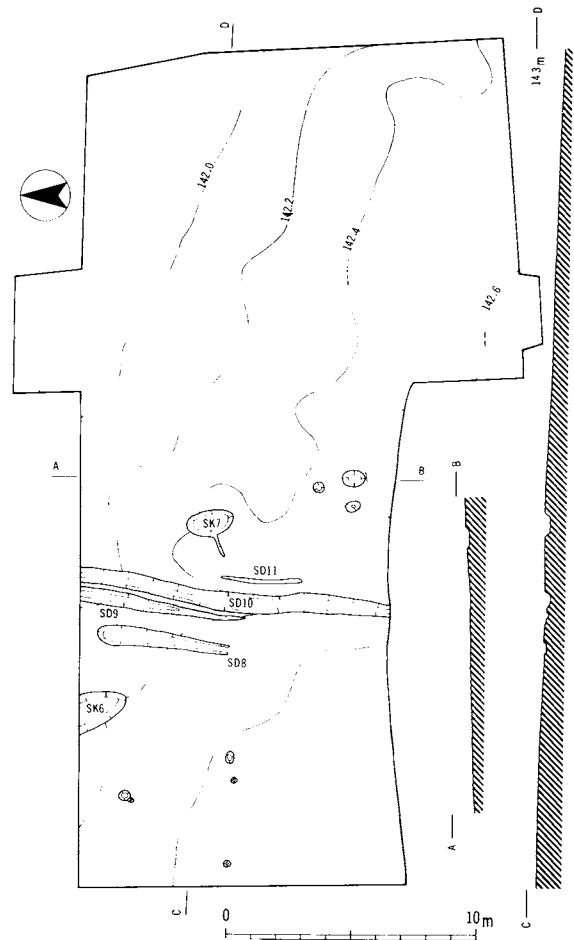
SK6 B区北辺に位置する土塚で、半分ほどは未検出である。大きさは推定長径4m、短径1.5mの楕円形で、深さ30cmである。

SK7 B区の中央付近にある土塚で、ほぼ楕円形である。大きさは長径2m、短径1m、深さ20cmである。埋土は暗黒褐色粘質土である。

SD8 SK6の東2mに位置し、SK7及びSD9～11の西側にある溝である。規模は延長5.5m、巾40～80cm、深さ6cmで、形は南から北へ徐々に拡大していき北端で半円形で終わっている。

SD9 SD10の西側にほぼ接した溝である。規模は延長6.5m、巾10～60cm、深さ20cmである。

SD10 B区西辺寄り等に位置し、東にSD11、西にSD9が近接しており、ほぼ南北に伸びる溝



第97図 B区遺構平面図(1:200)

である。規模は延長12.5m、巾50～80cm、深さ15cmであるが、南北端は未調査区に続いている。埋土は茶褐色黒色土で、播鉢・土師器片を出土している。

SD11 SD10の東側50cmにある溝である。規模は小さく、長さ3.3m、巾10cm、深さ3cmである。その他の遺構として、pitを8箇所検出しているが、纏りはない。

3. 遺物

遺物の多くは細片で、約500点出土している。殆んどが土師器、陶磁器である。

1. 土師器

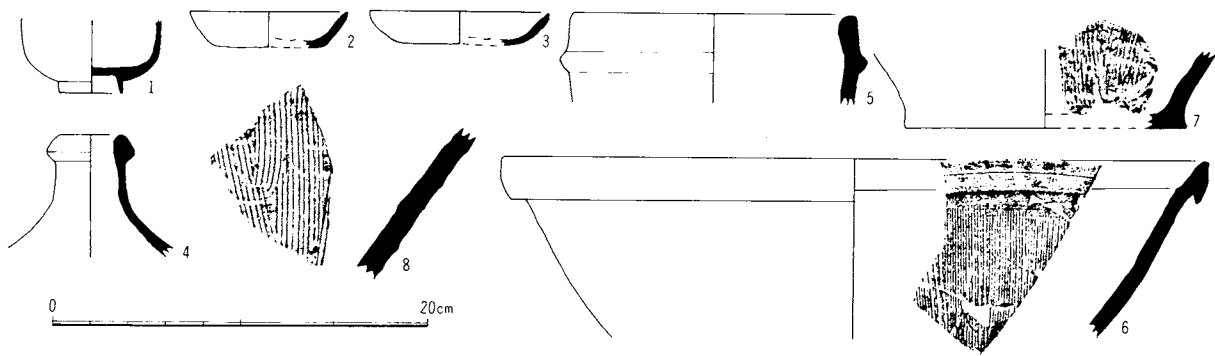
皿(2・3) 土師器の細片は160点を数えるが、復元できる遺物は皿ぐらいで、列んどが細片である。いずれも口径9cm前後、器高2cm程度の小皿で、胎

土には小石と金雲母をふくみ淡橙色を呈している。

2. 陶磁器

染付椀(1・10・11) 白黄色の地にくすんだ青色で草花等が描かれた細片が12点ある。1は高台内に「香山」と記されている。

徳利(4) 口径3.2cmで、黒褐色の鉄釉が施され、



第98図 土器実測図（1：4）

胎土は緻密で、焼成は良好である。

鉢（5） 口径15.2cmで、口縁部すぐ下に幅1cm高さ5mm程度の突帯がめぐる。口縁部内外面は横ナデ調整がされている。胎土に小石を多く含み、淡黄橙色を呈する。

播鉢（6～8） 施釉のものが17点ある。6～8はいずれも内面に筋目が密に施されている。色調は6が茶色、7と8が淡茶赤色を呈している。その他

に器形不明の細片が170点ほどある。

3. その他

以上の他に須恵器片、瓦器片、平瓦片、鉄製品などが出土している。須恵器は大甕の胴部破片で、外面には格子状の叩目が施されている。鉄製品は長さ4cm、断面5mm四方の角釘が2点と他に2点用途不明のものがある。

4. 結 語

今回の調査で検出された遺構は多数のpitと土坑、溝である。pitは発掘区の各所で検出されており数も多いが、掘立柱建物や柵列のように整然と並ぶものはなかった。又、土坑や溝についても遺跡の特徴を示すものではなく、これらの検出状況から今回の調査範囲は遺跡の中心ではなく、周辺部であろう。

又、出土した陶磁器等の遺物も中世にさかのぼるものがないところから婦毛遺跡はこれより南の自然堤防上に中心をおく近世以降の集落跡と思われる。

地名語源と発掘について、若干ふれてみたい。地名「フケ」は、深田とか沼沢地を意味する言葉である。遺構の層序で述べた如く、土の中心は黒色系の粘質土であり、とりわけB区第6層は墨に近い黒色

で、有機物を多含している。試掘時に昔の暗渠を掘りあてて、いきよよく湧水してきたグリッドもあった。これらの事実は、かつて湿地であったことを如実に示すものである。婦毛遺跡の「フケ」も深田とか沼沢地の状態から地名が生じたものと考えられる。

尚、「フケ」にあてる字として、鈴鹿郡では「希氣」、貝弁郡では「長深」が用いられている^①。当遺跡の「婦毛」の字は、全国的にも使用例がないのではなかろうか。呼称の開始時に何か歴史的事実が存在していたのだろうか。（森前 稔）

<註>

① 山中襄太『地名語源辞典』1968

XIII 上野市摺見 ^{かみでら} 上寺遺跡他

上寺遺跡は比自岐神社の北東約600mに位置し、行政的には上野市摺見字上寺に属する。この遺跡は歴史時代の周知の遺物包蔵地（県遺跡番号3137）として登録されており、現況は水田と畑である。

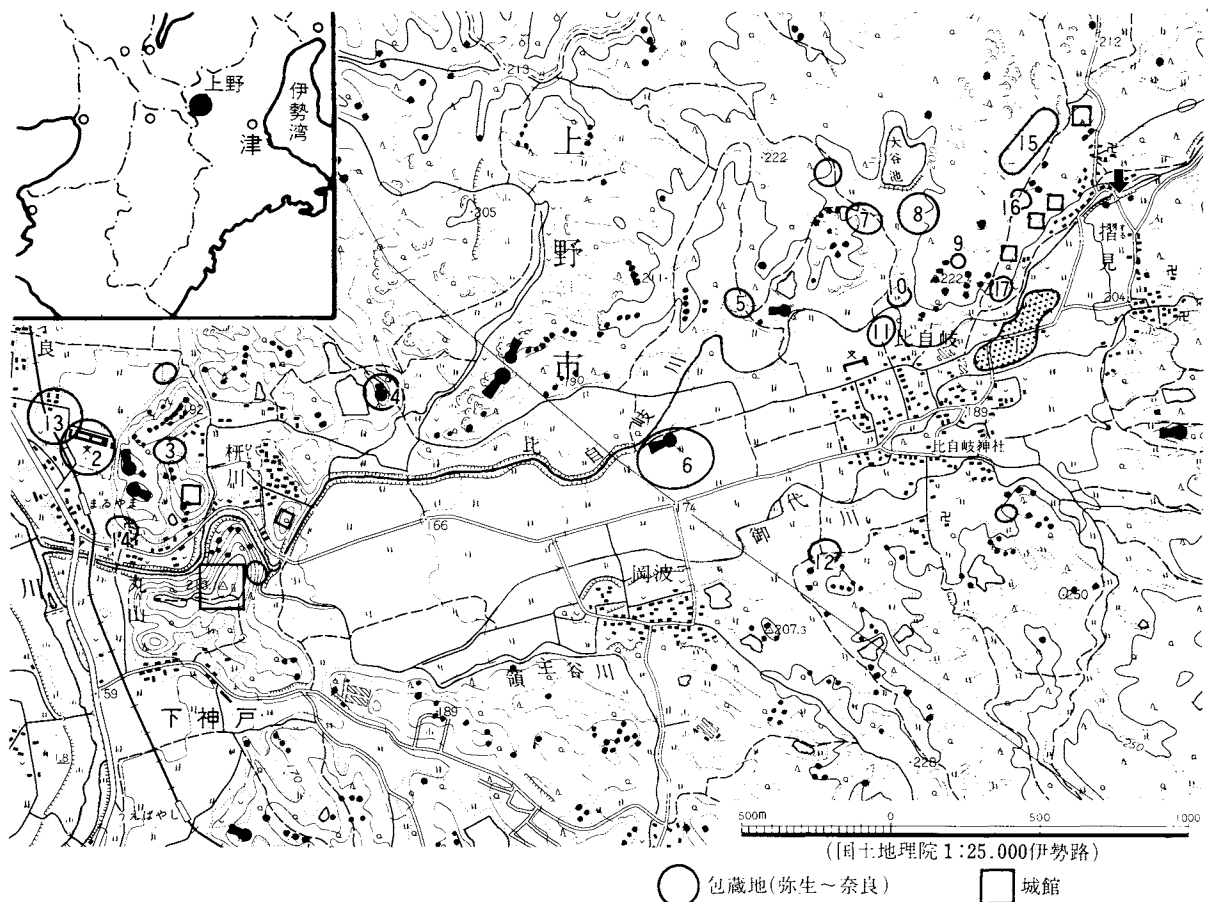
また、石神塚1・2号墳は比自岐神社の約1km北東に位置し、上野市摺見字一ノ井に属する。2号墳は周知の古墳（県遺跡番号3138）であるが、現況は両墳共水田中に墳丘がわずかに残る草生地である。

上寺遺跡と石神塚1・2号墳は、昭和54年度県営圃場整備事業上野南部地区の予定地に含まれた。そこで、この取り扱いについて県農林部および上野耕地事務所と協議したところ、上寺遺跡はまず夏季施行分について、遺跡の範囲、遺構の有無確認を目的とした試掘調査を実施することになった。そして、6月7日から11日までに4m×2mの試掘坑を15ヶ

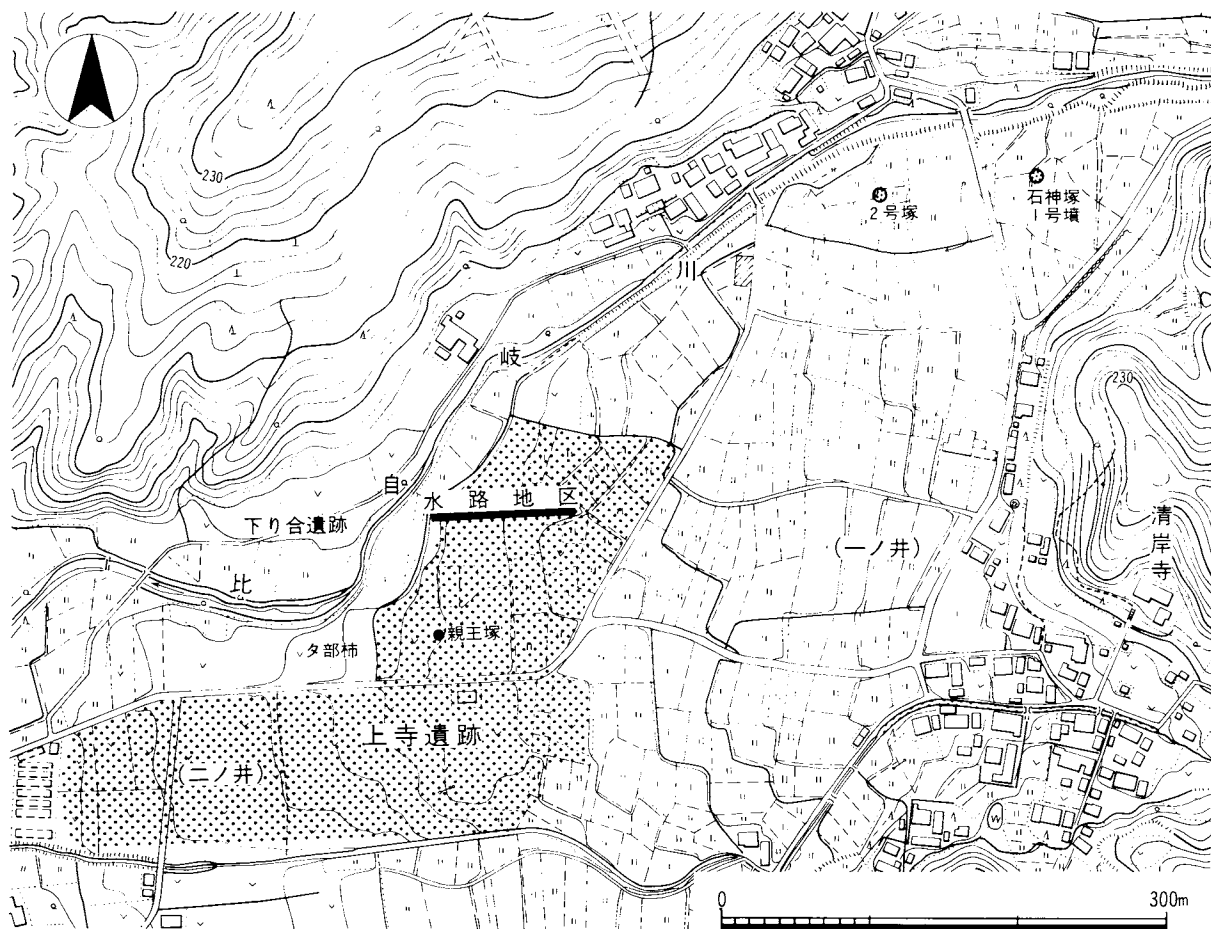
所に設定した。この結果に基づいて再度協議し、可能な限り計画変更したが水路予定地は本調査を実施することになった。これと併行して、遺跡地内で発見された「親王塚」と呼ばれる小円丘も発掘調査することが決定した。

一方、石神塚1・2号墳は協議の結果、墳丘残存部は現状保存し、既削平部分については事業が実施されることになった。このため、両古墳の規模確認を目的とする試掘溝調査を実施することとした。

上寺遺跡と親王塚、石神塚1・2号墳の調査は、昭和54年7月9日から27日まで実施した。この間、秋季施行地内の上寺遺跡について、4m×2mの試掘坑を24ヶ所に設定した。この結果、遺構・遺物が広範囲に確認され、協議により設計変更がなされて遺構面の削平はまぬがれた。



第99図 遺跡位置図（網目＝上寺遺跡、↓＝石神塚）



第100図 遺跡地形図（1：5000）

1. 位置

調査に際しては、地元土地改良区、上野耕地事務所、工事請負会社等の協力を得た。記して謝したい。

比自岐盆地における弥生時代以前の遺跡（2～5）は詳らかではないが、盆地周辺の丘陵上には百基以上の円墳が存在する。古墳時代の遺跡（5～12）や前方後円墳は盆地北側に多い^①。南側には、6世紀を中心とする小規模な集落跡である馬場西遺跡（12）^②がわずかに知られるのみであり、古墳も前方後円墳は存在しない。古墳時代前期までの集落は盆地北側の山裾を中心とし、後期には各所に分散する。

ところで、盆地中央の水田地帯には比自岐独自の方位（N16°W）を持つ条里遺構が良く遺存していた。そして、この条里とは不整合な方位で、式内社である比自岐神社が鎮座する。この条里や神社の成立期は知り得ないが、盆地東方の水田地帯に立地する上寺遺跡の周辺には「一ノ井」・「二ノ井」の地名が残

る点も興味深い。古墳時代までの谷水田を中心とする生活から、盆地中央部への進出は用排水の問題を解決する必要があったであろう。上寺遺跡は、7世紀以降を中心とした集落跡であり、その立地は前代までの山裾とは異なり、平野部に位置している。

平安時代から鎌倉時代の比自岐には貞観寺の比自岐荘^③や神宮の御厨^④が設置されていた事が文献から知られる。一方、考古学的には馬場西遺跡について上寺遺跡からも緑釉陶器や、いわゆる志摩式製塩土器^⑤等も確認された。また、上寺遺跡西方には「夕部柿」と呼ばれる史跡がある。これは「御幣寺」の跡であり、「御贄所」の転化であるとされ、「御部柿（夕部柿）は当寺（御幣寺——筆者）の境内にあり」、「太神宮御厨なり」とする説もある^⑥。「神鳳鈔」に伝える「比自岐御厨」は、11丁余あり、「御神酒代布十七段白布八反並苧」を貢納していたという。

2. 上 寺 遺 跡

調査区は水路地区とこれに前後して調査した39ヶ所の試掘坑とに大別される。水路地区は原則的に幅3m、長さ94mの試掘溝調査である。39ヶ所の試掘坑も4m×2mの規模であり、いずれも各遺構の全貌や性格を明らかにすることはできなかった。しかし、各地点とも飛鳥時代から鎌倉時代頃の多様な遺物が出土し、広範囲に及ぶ集落跡である事が明らかになった。

なお、水路地区の方位は現存条里とほぼ一致し、その位置も大略坪界に相当する。そこで何らかの關係する遺構の存在が想定されたが、確認するまでには至らなかった。

層序は全般的に、耕土や床土の下に遺物包含層である茶褐色砂質土が堆積し、地山は茶褐色等の砂礫土であり、遺構面の深さは20～60cm程である。

1. 遺 構

SK1 小穴が並ぶが不規則であり、建物や柵等とは考え難い。出土遺物はなく、時代は不明である。

SD2・6・7 この3条の溝はほぼ平行する。共に浅いものであり遺物は出土しなかった。耕作に關係するものとも考えられるが、現存条里とはその方向が異なる。

SK3・4 略円形の土塚であり、川原石が混入している。自然の落ち込みの可能性がある。

SK5 径約30cm、深さ5cm程の小穴だが、「承和昌寶」(写65)が28枚以上出土した。試掘坑No.4で確認したSD15の延長部分にも相当するため拡張したが、SD15等の遺構は認められなかった。

SD8 調査溝を斜行する幅約70cm、深さ約10cmの溝である。出土遺物はない。

SD10 やはり斜行する溝であり、幅40～50cm、深さ10cm前後を測る。小型短頸壺(1)が出土した。

SK11 径約80cm、深さ数cmの略円形土塚である。出土遺物はないが、SK12等と同時代であろうか。

SK12 不定形な土塚であり、長辺約2.8m、短辺約1.2m、深さ数cmを測る。中央東寄りに長さ約20cm、太さ数cmの自然石が直立し、この南側40cm程

の土塚底面が焼けていた。そして、この焼土付近からは須恵器(2～4)や土師器(5～6)が出土したので、カマドの付設された竪穴住居が想定された。そこで、調査区壁面観察をする一方、記録後のダメ押しとして竪穴住居を想定して掘り進めてみた。しかし、やはり竪穴住居とするには至らなかった。

SK13 長径約1.8m、短径約1.2m、深さ20cm程の不定形な土塚である。3個の川原石以外は出土しなかったが、SK12と同時代のものであろうか。

SK14 径約1m、深さ数cmの円形土塚である。土師器片を出土したのみであり、詳細は明らかでないが、周辺から出土した類似する土器は7世紀前半頃の所産である。

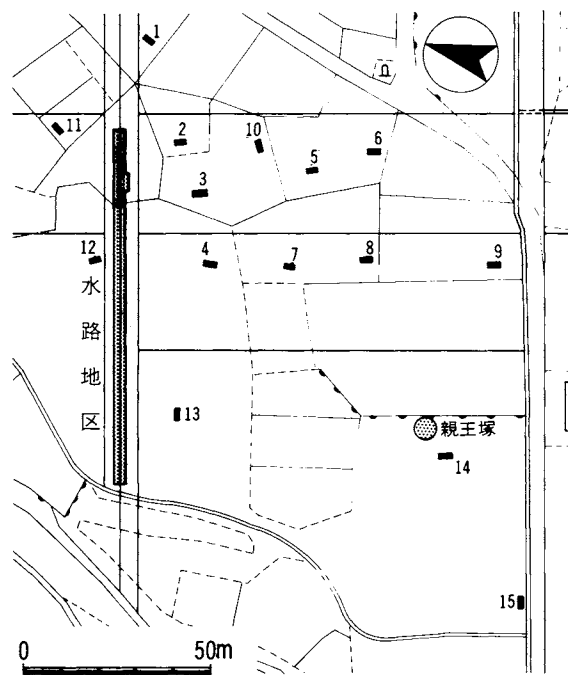
SD15 No.2の試掘坑を斜行するものであり、幅約1m、深さ約20cmを測る。

埋土内からは9世紀前半の土器が出土した。

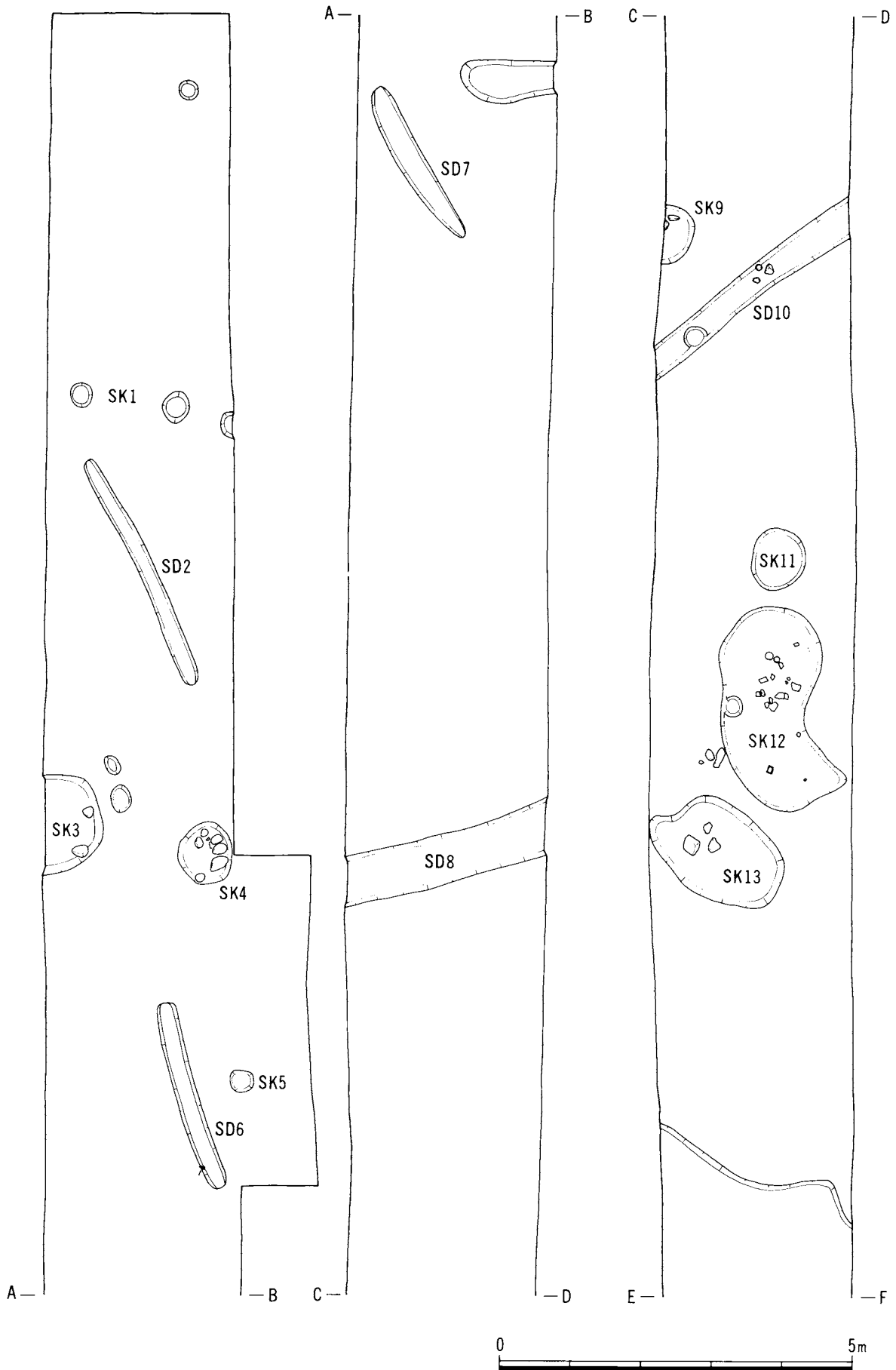
SK16 No.4でその一部が確認された、深さ10cm程の浅い土塚である。埋土には炭化物が見られた。

SK17 No.13の南東隅付近くで検出された小穴である。近接して自然の落ち込みが認められた。

SD18 秋季施行予定地内の試掘坑No.20で検出した細い溝である。須恵器片が出土した。



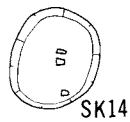
第101図 発掘区平面図(1:2000)(夏季施行区)



第102図 水路地区遺構平面図 (1 : 80)

E-

-F



SK14

No.	遺構	遺物		
		須恵器	土師器	その他
1		細片	細片	瓦器
2	溝	細片	皿	黒色土器
3				瓦器碗・皿 杯(黒色)
4	土壇		皿・甕・羽釜	
5		細片	細片	中世陶器
6				
7				
8		細片	細片	
9				
10			甕	
11		細片	皿	中世陶器
12		細片	皿・甕	
13	小穴		皿・甕	瓦器
14		細片	細片	青磁
15		細片	羽釜	瓦器碗・皿
16				
17		細片	細片	瓦器
18		細片	細片	瓦器、サヌカイト片
19				
20	溝	甕		
21				
22			皿	瓦器
23				
24			細片	
25				
26			皿	
27		杯蓋等	細片	
28				
29			細片皿	瓦器
30		細片	細片	瓦器
31		細片	細片	瓦器
32				
33				
34			細片	
35		細片	細片	
36		細片	細片	瓦器
37		細片	細片	瓦器
38			細片	瓦器
39		細片	細片	瓦器

第6表 試掘調査結果一覧表

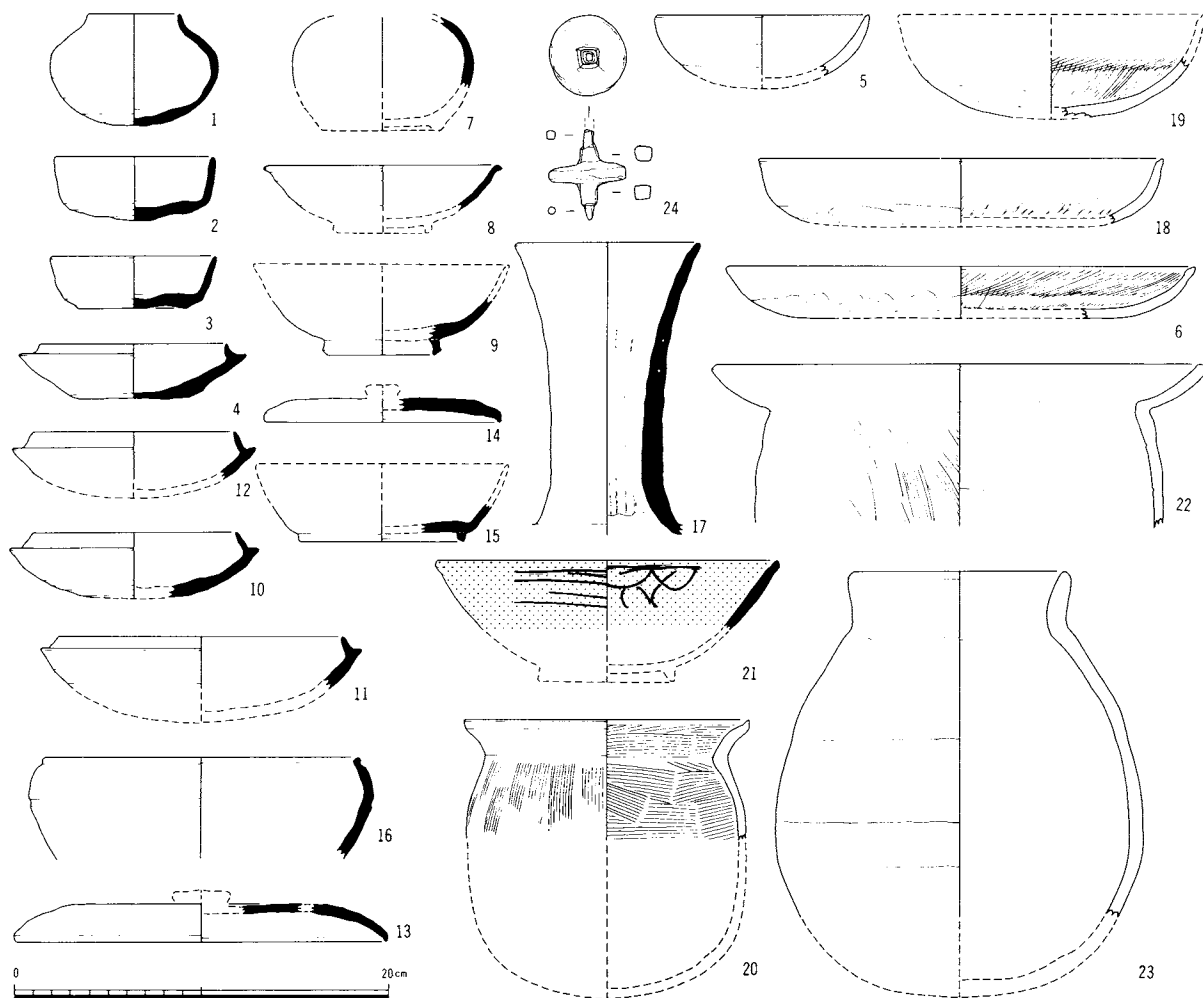
2. 遺物

水路地区出土品（1～24、写64～65）(1)はSD10出土の小型短頸壺である。他には伴出遺物はない。(2～6)はSK12出土の一括資料である。須恵器の杯(2～3)は口径が8～9cmと小型であり、底部はヘラキリのままである。杯(4)はかえりが短かく直立し、底部はヘラキリのままで平らである。口径は10cmを測る。(6)は2段斜放射暗文を止める。胎土や色調をはじめ、成形・調整技法に至るまで、坂田寺のSG100出土例に良く類似する^⑦。

図示できなかったが、土師器の長甕の破片も出土している。これは口縁部内外はヨコナデを、体部外面にタテハケを施すが、ヘラケズリの技法は見られない。淡黄褐色を呈し、金雲母微片や小石を含む。

上記以外の(7～24・写64)は水路地区包含層出土である。(7)は内外に淡緑色の釉を施した緑釉である。小型の壺類であろうか。(10～12)は(57)と共に、

今回の調査で出土した上寺遺跡における最古の土器といえる。(18～19)は(6)と同様な暗文を施す土師器であり、同時期の所産であろう。(18)は砂粒が目立ち、やや軟質である。(22)は近江型と呼ばれる長甕である^⑧。(23)はSK14の西方から出土したものである。胴部がやや長くなっているが、いわゆる長甕とは別なものであろう。さらに鉄製紡錘車(24)も出土した^⑨。紡錘の断面形は方形を呈し、挿入部分には方筒形の補助用部品がみられる。(写64)はいわゆる志摩式製塩土器である。細片であるが20片程出土しており、4個体分以上が存在したらしい。(写65)はSK5から出土した「承知呂寶」である。錆化しているため、確認できないものが多いが、観察可能な6例は全てが「承和呂寶」である。判読不能な例も全て同形同大であり、別種のものとは含まないと考えられる。直径は20㎝強を測り、「承和呂寶」としては小様である^⑩。取りあげる事ができたものは28枚で



第103図 水路地区出土遺物実測図（1：4）（1；SD10、2～6；SK12、他；包含層）

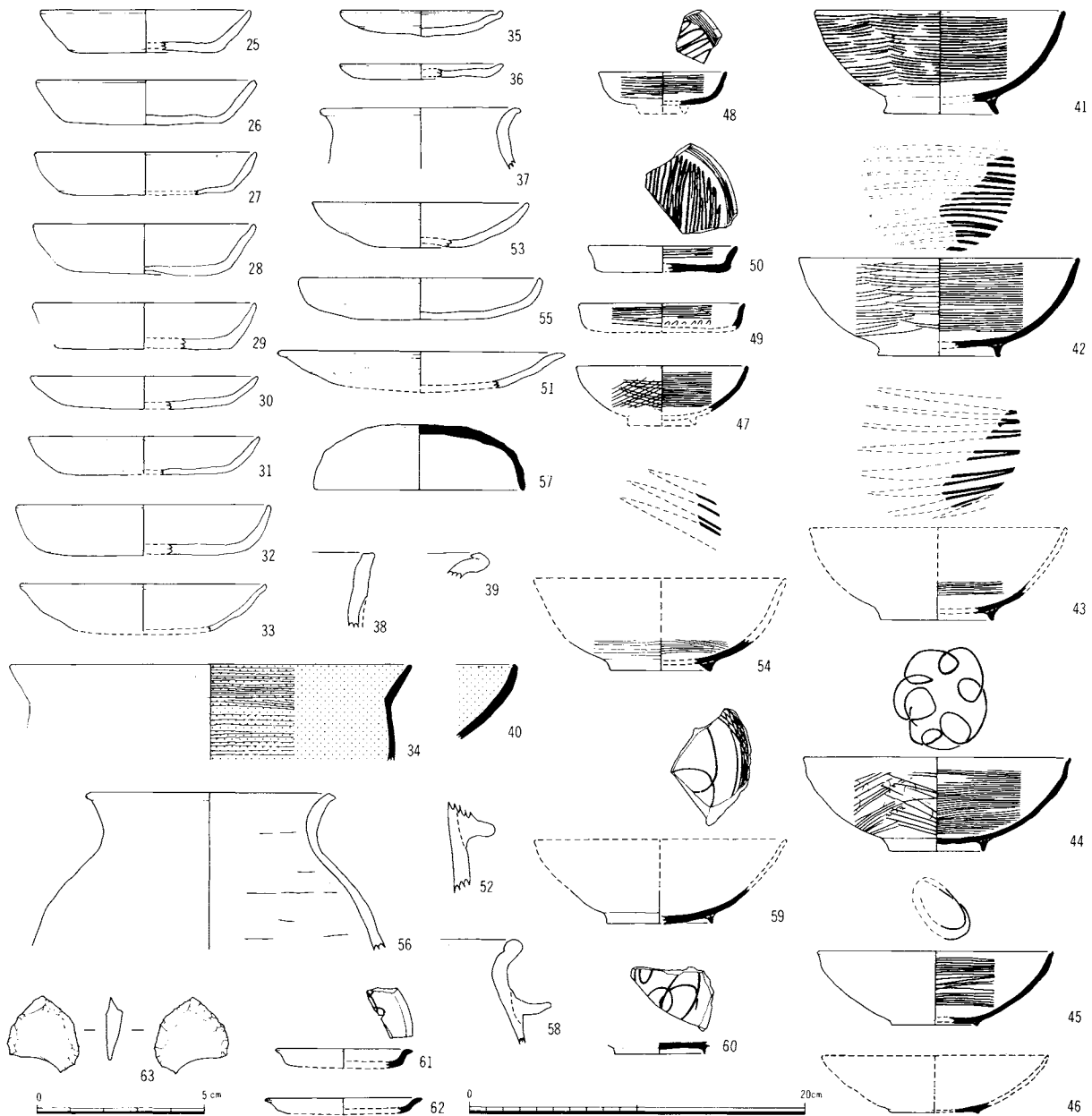
あるが、本来はもう少し多数であつたらしい。

試掘坑出土品(25~63) S D15出土の土師器皿(25~32)は、口径が12.5~15cmを測り、技法や色調等も共通するが、(33)のみが別形式であり、焼成は良好で橙褐色を呈する薄手のものである。また、黒色土師器Aの鍋(34)も出土した。S K16出土土器(35~42、47~50)は、量的には多くはないが、良好な一括資料である。(35)は口縁端部が屈曲して直立する土師器皿である。(40)は小片だが黒色土師器Bらしい碗である。口縁端部内面に沈線を持つが、暗文等は不明である。瓦器碗(41)は深い杯部に高い高台がつき内外に入念なへらミガキを施す。底部内面には暗文がないようであり、内面のへらミガキとは明らかに

異なる多方向のナデを施す。器高指数は42である。(42)も瓦器碗であり、へらミガキは密である。しかし、口径が大きい反面、高台は(41)程高くなく、器高指数は35である。暗文は密に施したジグザグ文である。(47)は小型の瓦器碗である。銀黒色を呈し、細砂粒を含む。小片だが、火燻らしく変色した部分が見られる。(48)は台付皿であり、瓦器としては類例の少ない器種である。口縁部の内外には入念なへらミガキを施し、暗文はジグザグ文である。(49~50)は瓦器皿である。口縁部が深く立ち上り、入念なへらミガキと暗文を持つ。(43・51~54)はS K16の覆土から出土したものである。瓦器碗(43・54)の暗文はやはりジグザグ文ではあるが、その間隔は大きい。

No.	質	器形	大きさ cm		成形・調整技法	胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高					
1	須惠	短頸壺	5.0	6.0	ロクロケズリ・ナデ共時計廻り	砂含	良	灰色	半欠
2	須惠	杯	8.4	3.4	ロクロナデ時計廻り 底部へラキリ	砂多含	硬	灰色	ほぼ完成
3	須惠	杯	8.8	2.8	ロクロナデ時計廻り 底部へラキリ	砂含	良	暗灰色	口縁部小残 底部は多残
4	須惠	杯	10.0	3.0	ロクロケズリ逆時計廻り ロクロナデ時計廻り	砂含	良	灰色	ほぼ完形
5	土師	杯	11.3	—	外面にツギメ	砂含	良	淡黄褐色	小片
6	土師	皿	24.8	2.8	底部外面へラケズリ	精良	硬	橙褐色	暗文
7	緑釉	小型壺	—	—	ロクロナデ時計廻り?	精良	硬	灰色	内外に薄く淡緑色の釉を施す
8	灰釉	皿	(12.0)	—	ロクロケズリ・ナデ共時計廻り	砂含	硬	白灰色	薄く全面に施釉 小片
9	灰釉?	杯	5.7	—	ロクロ方向不明	砂含	良	淡黄灰色	釉は剥離
10	須惠	杯	(10.9)	(3.9)	ロクロナデ時計廻り	砂少含	良	灰色	外面に灰かぶり 小片
11	須、惠	杯	15.2	—	ロクロナデ時計廻り	砂含	良	黄灰色	内外に灰かぶり 小片
12	須惠	杯	10.7	—	ロクロ方向不明	砂含	良	暗灰色	内外に灰かぶり 小片
13	須惠	杯蓋	19.8	—	ロクロナデ時計廻り	精良	良	灰色	小片
14	須惠	杯蓋	12.6	—	内面乱ナデ	砂含	良	灰色	小片
15	須惠	杯	8.8	—	ロクロ方向不明	砂含	硬	暗灰色	小片
16	須惠	鉢	16.7	—	ロクロナデ時計廻り	砂含	硬	灰色	小片
17	須惠	長頸壺	9.6	—	ロクロナデ時計廻り	砂含	硬	暗灰色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 残
18	土師	皿	21.6	(3.6)	底部へラケズリ	砂含	良	橙褐色	暗文
19	土師	杯	(16.2)	(5.6)	底部外面へラケズリ?	精良	硬	橙褐色	暗文 図上復元
20	土師	甕	15.1	—	口縁部内外ヨコナデ、ハケ4~5本/cm	砂含	良	明茶褐色	小片
21	黒色B?	碗	(18.3)	—	暗文・へらミガキ共幅2%弱	砂含	良	黒色	外面へラケズリ? 小片
22	土師	長甕	(26.0)	—	口縁部ヨコナデ時計廻りハケ6本/cm	砂含	良	淡茶色	歪み有
23	土師	甕	11.2	—	口縁部ヨコナデ外面にツギメ	砂多含	良	黄褐色	黒斑 口縁部 $\frac{1}{4}$ 残
24	鉄	紡錘車	紡輪径(4.1)	紡輪厚(0.5)	紡錘に方筒形の補助具が付く	—	—	—	紡錘下部は遺存

第7表 水路地区出土遺物一覧表



第104図 試掘坑出土土器実測図（1：4ただし63のみ1：2）

（SD15：25～34、SK16：35～42・47～50、SK16覆土：43・51～54、
No.11：55、No.12：56、No.13：44、No.15：45～46・59～62、No.18：63、No.27：57～58）

(44)はNo.13の包含層から出土した瓦器碗である。外面にヘラミガキを残し、暗文は連続輪状文である。器高指数は35を測る。(45～46・59～62)はNo.15の包含層から出土したものである。(45)は外面にヘラミガキが見られず、内面のヘラミガキも疎らである。暗文は渦巻文らしく、器高指数は31である。(46)は細片のため詳らかでないが、内面ヘラミガキと一体化しない暗文を持つようである。他遺跡の類例から類推すれば、高台を持つ瓦器碗としては最終の形態であり、口縁端には沈線がある^⑩。(60)の高台は高さの割には薄手である。瓦器皿(61～62)は浅く、口

縁端部が水平に開き、LI縁部にはヘラミガキを持たない。(55)は橙褐色を呈し、焼成等も良好な土師器皿であるが、(6)等とは胎土等も異なり、暗文を持たない。(63)はサヌカイトの剥片である。ブランディングは見られるが製品とはいえない。

3. 小 結

比自岐盆地の瓦器 SK16出土土器は11世紀の良好な一括資料である。(41)は(42)よりは、少くとも型式学的には先行するものである。小型碗(47)は類例の少ない器種であり、その色調や胎土、また、火

No.	質	器形	大 き さ cm		成形・調整技法	胎土	焼成	色 調	備 考
			口 径	器 高					
25	土 師	皿	12.5	2.5	底部不調整	砂含	良	橙 褐 色	1/4残
26	土 師	皿	13.0	2.7	底部不調整	砂含	良	黄 白 色	歪み有、ほぼ完形
27	土 師	皿	13.2	2.5	口縁部ヨコナデ時計廻り 底部不調整?	砂含	良	黄 白 色	半欠
28	土 師	皿	13.2	3.0	底部不調整	砂含	良	黄 白 色	歪み有、ほぼ完形
29	土 師	皿	13.2	2.8	底部不調整	砂含	良	黄 白 色	小片
30	土 師	皿	13.6	2.0	底部不調整	砂含	良	淡橙褐色	1/4残
31	土 師	皿	13.7	2.3	底部不調整	砂含	良	黄 白 色	1/4残
32	土 師	皿	15.0	3.0	底部不調整	砂含	良	黄 白 色	歪み有
33	土 師	皿	14.6	(3.0)	底部不調整	精良	良	橙 褐 色	小片
34	黒色A	鉢	(24.0)	—	内面ヘラミガキ	砂少含	硬	暗 褐 色	小片
35	土 師	皿	9.6	1.6	底部不調整	砂含	並	淡 黄 色	完形、歪み有
36	土 師	皿	9.6	0.9	底部不調整	砂含	良	褐 色	小片
37	土 師	甕	11.6	—	ヨコナデ	砂含	並	茶 褐 色	小片、黒斑
37	土 師	鉢 ?	—	—	ヨコナデ	砂含	並	淡 褐 色	小片
39	土 師	羽釜?	—	—	ヨコナデ	砂含	良	赤 褐 色	小片
40	黒色B	杯	—	—	内外にヘラミガキ	砂含	良	黒 褐 色	小片
41	瓦 器	杯	14.8	6.2	内面ヘラミガキ幅2%弱	砂含	良	胎土は白 灰土は色	暗文なしか 杯部1/4残
42	瓦 器	杯	16.7	5.9	ヘラミガキ幅2%弱	精良	並	胎土は白 灰土は色	歪み有、1/4残
43	瓦 器	杯	—	—	ヘラミガキ幅1.5%弱	精良	並	胎土は白 灰土は色	小片
44	瓦 器	杯	15.9	5.6	暗文、ヘラミガキ共幅1.5%強	精良	並	胎土は白 灰土は色	歪み少し有
45	瓦 器	杯	14.1	4.4	ヘラミガキ幅1.5%弱	精良	並	胎土は白 灰土は色	外面ヘラミガキ なし
46	瓦 器	杯	—	—	暗文有	精良	良	胎土は白 灰土は色	歪み有、小片
47	瓦 器	小型杯	(10.2)	—	口縁内側の沈線細	砂含	良	胎土は白 灰土は色	歪み有、小片
48	瓦 器	台付皿	(7.6)	—	暗文幅 1.5%弱 ヘラミガキ幅1%弱	精良	硬	胎土は白 灰土は色	内外のヘラミガキ 密
49	瓦 器	皿	(9.8)	—	ヘラミガキ幅1.5% 暗文幅2%	砂含	良	胎土は白 灰土は色	小片
50	瓦 器	皿	8.8	1.6	ヘラミガキ幅1.5% 暗文幅2%	精良	良	胎土は白 灰土は色	外面ヘラミガキ 見られず
51	土 師	皿	16.5	(2.5)	外面指圧調整	砂含	良	淡茶褐色	小片
52	土 師	羽 釜	—	—	ツバより下にヘラケズリなし	砂含	良	茶 褐 色	小片
53	土 師	皿	12.8	2.7	外面指圧調整	砂含	並	淡茶褐色	歪み有、小片
54	瓦 器	椀	—	—	ヘラミガキ 幅1%強	砂含	良	胎土は白 灰土は色	底部片
55	土 師	皿	14.2	2.5	底部ヘラケズリ	砂含	良	橙 褐 色	暗文なしか 口縁部少残
56	土 師	甕	14.2	—	タテハケ	砂多含	良	淡黄褐色	口縁部少残
57	須 恵	杯 蓋	12.5	3.9	ロクロケズリ逆時計廻り ロクロナデ時計廻り	砂含	良	灰 色	口縁部少残
58	土 師	羽 釜	—	—	ツバより下はヘラケズリ	砂多含	良	茶 褐 色	小片
59	瓦 器	椀	—	—	暗文幅 1.5%弱	精	良	胎土は白 灰土は色	底部片
60	瓦 器	椀	—	—	暗文幅 1%	精	良	胎土は白 灰土は色	底部片
61	瓦 器	皿	8.0	1.1	内外にヘラミガキなし	精	良	胎土は白 灰土は色	暗文有、小片
62	瓦 器	皿	9.4	1.0	内外にヘラミガキなし	精	良	胎土は白 灰土は色	小片

第8表 試掘坑出土土器一覽表

轆があるらしい点は、伊賀地方にあっては異質的な印象を受ける。台付皿(48)も大変類例が少なく、小型碗等と共に新しくなると見られない器種である。また、黒色土師器Bと思われる碗(40)も注目される。(41)は11世紀中葉、(42)は11世紀後葉、(43)は11世紀末から12世紀初頭、(44)は12世紀前葉から中葉にかけて、(45)は13世紀前半、(46)は13世紀後半の所産であろうか。さらに、他遺跡では高台の消失した例も少くとも2型式は存在する^⑫。伊賀の瓦器は14世紀までは確実に存続したようである。

ところで、少なくとも比自岐盆地の瓦器は、旧阿拝郡下出土例よりも暗文やヘラミガキの幅の広い例が多い。巨視的には大和ブロックに属しながら、その内部での微細な異差を持ついくつかの系統の存在が想定されよう。

承和昌寶とSD15出土土器 「承和昌寶」は皇朝十二銭のひとつであり、初鑄年は835年である。同一銭のみがまとまって出土した事から、出土状態は次に鑄造された「長年大寶」の初鑄年である848年以前の状態を止めていた可能性が大きい。このように、単一種類の皇朝銭をまとめて入手、所蔵できた者は、社会的に限定された立場の者と考えられ、遺跡の性格を考える上で興味深い。

なお、SD15出土土器(25~34)は、型式編年上9世紀前半に位置付けられる一括資料である。この年代観は、近くから出土した「承和昌寶」と一致する。

緑釉陶器と製塩土器 伊賀では、半世紀程前に田中遺跡から緑釉陶器片1点が表面採集されていたが、その後、馬場西遺跡や下郡遺跡でも緑釉陶器と志摩式製塩土器が出土した。そして、上寺遺跡でも同様に二者が出土したわけである。平安時代の馬場西遺跡は性格不明だが、下郡遺跡は伊賀郡衙推定地であり、上寺遺跡も「承和昌寶」の出土等から一般集落とは異質な要素がある。緑釉陶器や志摩式製塩土器の流通に自由な商業活動は考え難く、やはり何らかの権力を背後に想定すべきであろう。

上寺遺跡の性格 6世紀末から中世に及ぶ上寺遺跡は、比自岐盆地には珍しく平野部に立地する。この遺跡は、多数の「承和昌寶」をはじめ、緑釉陶器や志摩式製塩土器を出土し、一般集落とは異質な印象を与える。そこで、文献にみる貞観寺比自岐荘

や神宮御厨が問題となる。特に、「夕部柿」は即ち「御幣柿」^⑬であり、「御贄所」の所在地とする説が想起される。この説に従って神宮の御厨と仮定すれば、「御神酒代布十七段白布八反並苧」が貢納されていたわけである。そこでまた、鉄製紡錘車の出土が注目される。これは包含層出土であるが、他の多くの遺物と同様に、御厨のあった頃の所産であろう。

状況証拠に過ぎないが、「夕部柿」と上寺遺跡の神宮御厨説に有利な事実が確認されたわけである。

<註>

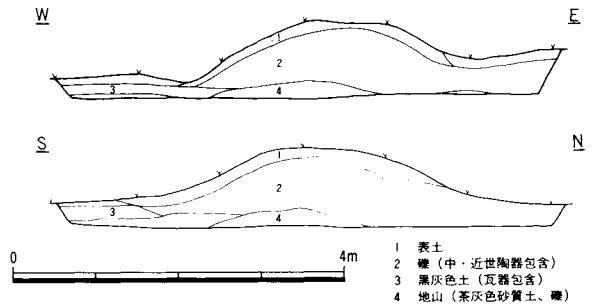
- ① 小林行雄「三重県石山古墳調査略報」『日本考古学協会第8回総会研究発表要旨』1951
- 山田猛「上野市岡波 王塚古墳」『昭53県圃埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1979
- ② 山田猛「上野市比自岐 馬場西遺跡」『昭52県圃埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1978
- ③ 『平安遺文』第165号文書
- ④ 『平安遺文』第763号文書
- ⑤ 近藤義郎『小海』磯部町教育委員会 1976
- ⑥ 佐々木弥四郎『伊賀史の研究30年』1937
- 中野銀郎『新編伊賀地誌』1939
- ⑦ 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』3 奈良国立文化財研究所 1973
- ⑧ 小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の上師器とその流通」『考古学研究』104 1980
- ⑨ 「宇陀・丹切古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第30冊 奈良県教育委員会 1975
- 奈良県立橿原考古学研究所『大王山遺跡』橿原町教育委員会 1977
- 上記2書に全国の鉄製紡錘車が56例集成されている。県下では寺垣内館址(下村登良男『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県文化財連盟 1970)で1例出土している。
- ⑩ 奥平昌洪『東垂銭志』1938
- ⑪ (41)と同型式の類例は、上寺遺跡の西隣りに位置する下り合遺跡でも確認されている。
- ⑫ 当『昭54県圃埋蔵文化財調査報告』掲載の神ノ木館跡や木津氏館跡で表面採集されている。
- ⑬ 白石太一郎「越智氏居館出土の瓦器」『古代学研究』85 1977
- 橋本久和「中世土器の地域色と流通」『考古学研究』104 1980
- ⑭ 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報』8 1978
- ⑮ 沖島卯之「三重県田中遺跡出土の瓦器と緑釉土器片」『古代学研究』15・16 1956
- ⑯ 中森英夫・山田猛・山本雅晴『下郡遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市下郡遺跡調査会 1978
- 山田猛『下郡遺跡試掘調査概報』三重県教育委員会 1979
- ⑰ 註⑥に同じ

3. 親 王 塚

1. 遺 構

現状では、直径約 3.5m、高さ約60cmの小円丘であり、俗信により耕作地の対象外におかれている。

調査の結果、この円丘は人頭大以下の円礫により形成されている事が明らかとなった。さらに、この礫層中から、中・近世陶器片(66~68)が出土した。これにより、近世以降に成立したものと判明したが意図的な築造か、畑の石を捨てた結果できたような非意図的なものかは明らかでない。



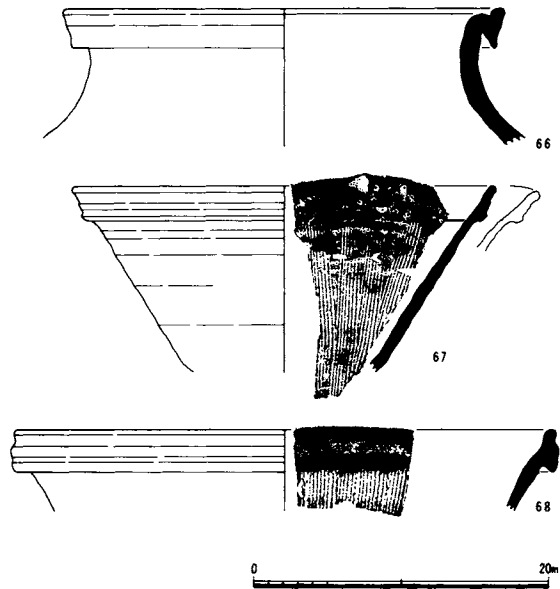
第105図 土層断面図 (1 : 80)

2. 遺 物

(66)は常滑焼の大甕であり、口縁部は折れ曲がる。

(67)は無釉の片口摺鉢である。7本の目を持つ櫛状具で逆時計廻りに施すが、各単位は上部では間隔を開ける。やや薄手であり、茶色の硬いものである。

(68)は茶色の釉を全面に施した摺鉢である。



第106図 土器実測図 (1 : 5)

3. 小 結

播鉢 石神塚2号墳表面採集例(75)は15世紀の所産と思われるが、(67~68)は近世に属し、産地も異なるものであろう。(67)から(68)へと型式的変遷を遂げており、(68)は江戸時代に属すと考えられる。

親王塚 近世以降に成立したものであるが、意図的な築造であるか否かは明らかでない。しかし、いずれにせよ、いつ頃からか「親王塚」と呼ばれ、手を入れてはならぬものとして村民に伝えられてきた、ひとつの民俗遺産である事は明らかである。

4. 石神塚1・2号墳

1. 1号墳

(1) 遺構

幅1m、長さ5～6m余りの試掘溝を4方向に設定した。しかし、いずれの試掘溝でも封土や周溝を始めとした人為的な遺構を確認するに至らなかった。層序は、水田耕土下に床土が1～2層見られ、この下には粗砂や砂質土が薄く堆積し、地山に至る。

周溝は、元来存在しなかった可能性が大きい、浅い周溝なら削平された可能性もあり、現状ではい

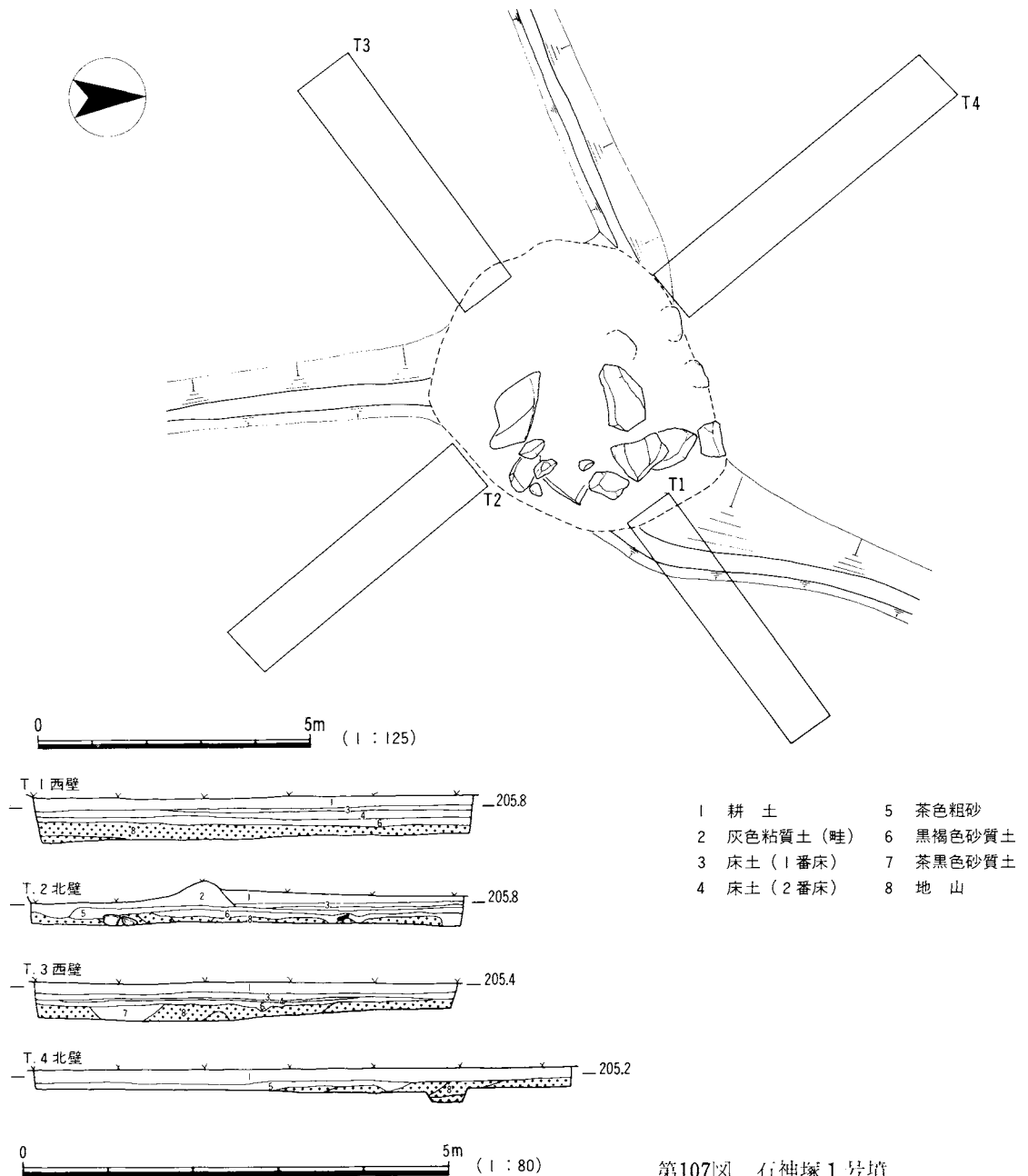
づれとも決し難い。

残存墳丘部には1m程の山石が見られる。平板測量と表面観察による限り、横穴式石室であり、玄室幅1.3m前後で西に開口するような印象を受ける。

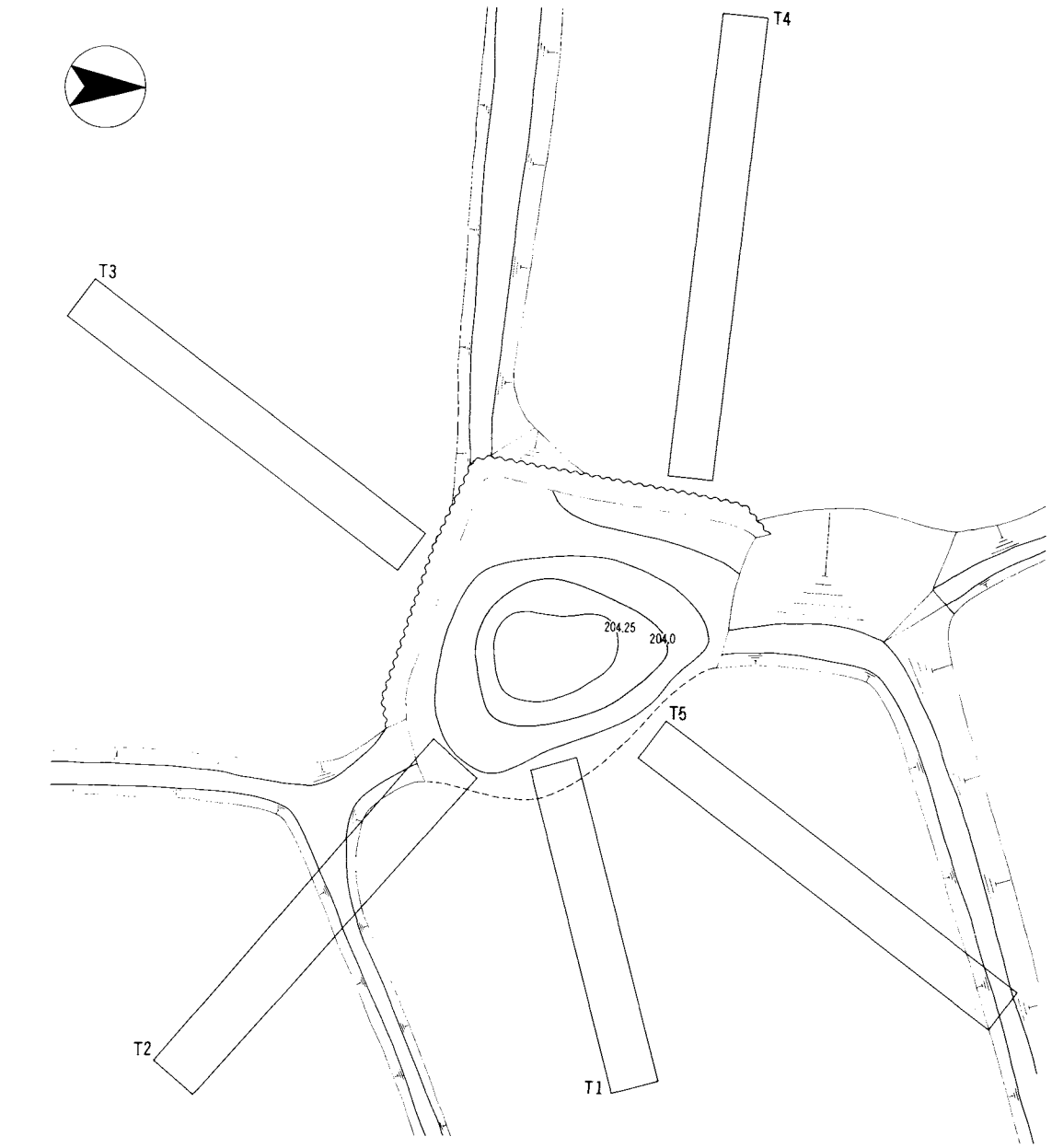
(2) 遺物

(69)はT2出土の高杯脚部片である。沈線は有るが、透孔は無いようである。灰色を呈し、焼成は良好であり、胎土中に砂粒をほとんど含まない。

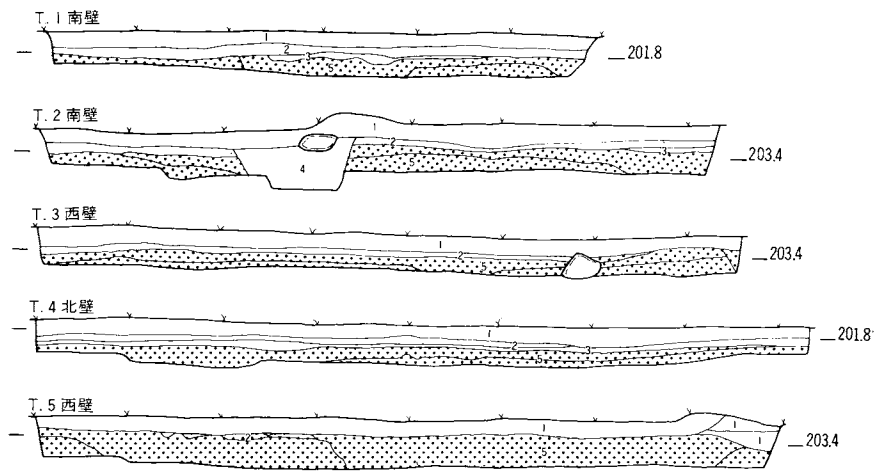
(70)はT2出土の土錘であり、34gを測る。



第107図 石神塚1号墳



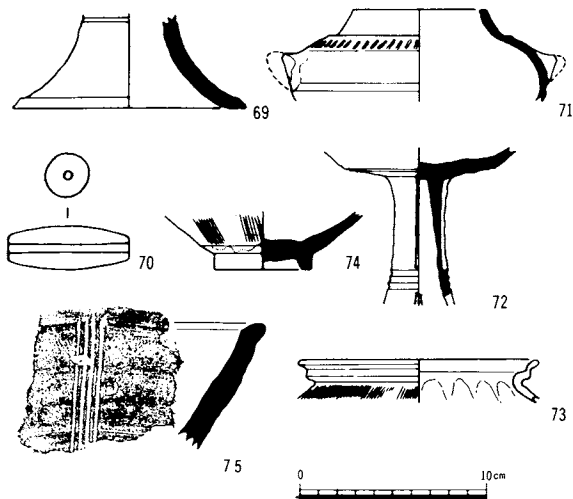
0 5m (1 : 125)



- 1 耕土
- 2 床土(1番床)
- 3 床土(2番床)
- 4 灰褐色粘質土
- 5 地山

0 5m (1 : 80)

第108图 2号墳平面・土層断面图



第109図 遺物実測図(1:4)
1号墳(69~70)、2号墳(71~75)

2. 2号墳

(1) 遺構

現存する墳丘は、径約5m、高さ1m足らずを測り、小円礫が多数見られる。

幅約1m、長さ6~8mの試掘溝を5方向に設定したが、封土や周溝等は認められなかった。土層は1号墳付近と基本的な相違は無く、水田耕土下に2層の床土が見られ、この下には部分的に薄い灰褐色粘質土が存在し、地山に至る。

(2) 遺物

(71)はT5出土の短頸壺である。小片のため不明確だが、把手状のものが1対付くらしい。胴上部には楡描列点文を持つ。器表面は暗灰色であるが、器肉は暗いセピア色を呈し、硬質である。

(72)は(75)と共に、表面採集品である。

(72)は長脚2段透高杯である。透孔は4方向に施すが、上段のものは「透し」になっておらず、切り込みに止まっている。杯部外面には灰白色の厚い灰かぶりが見られる。器表は黒灰色だが、器肉は暗いセピア色を呈し、硬質である。

(73)はT5出土のS字状口縁台付甕である。灰褐色を呈し薄手であり、胎土中には砂粒を含む。

(74)は青磁碗である。高台削り出し時のロクロは逆時計廻りである。釉は灰緑色を呈し、厚く施される。胎土は灰色を呈し、硬質で砂を含む。

(75)は摺鉢片である^②。口縁部はやや外反し、ロクロは時計廻りである。4本の目を持つ櫛状具をまば

らに施す。茶褐色を呈し、焼成は良好であり、白色小石を含む。推定口径は25cm程である。

3. 小 結

1号墳 墳形、規模、周溝の有無等は明らかでなく、伴出遺物も確実なものはない。しかし、墳丘上に残存する石から横穴式石室であり、その玄室幅は1.3m前後と推定される。残存する墳丘と考え合わせれば、後期の小規模な円墳である可能性が大きい。

築造時期は、確かな根拠はないが、強いて求めれば高杯脚部片(69)が6世紀後半頃のものである点から、この頃に築造もしくは追葬の一時期が考えられよう。

2号墳 やはり墳形や規模、周溝の有無等は明らかでなく、確かな伴出遺物もない。墳丘上には小円礫は多数見られるが、横穴式石室の石材と考えられるものは見られず、内部主体も明らかでない。築造時期も確かな根拠は得られなかったが、試掘溝出土品(71)と表面採集品(72)の色調や焼成等が良く共通しており、副葬品の一部である可能性が大きい。これらは7世紀初頭の所産である。したがって、2号墳は築造もしくは追葬の一時期が7世紀初頭に属する、小規模な円墳と推定される。

畿内の群集墳は、7世紀初頭頃から急速にその形成を停止し、追葬期に入る例が多いと指摘されており^③、伊賀においても同様な傾向が窺える。石神塚1・2号墳も群集墳のひとつとして、その盛期に築造されたものであろう。ただ、多くの古墳が丘陵上に立地するのに対して、石神塚1・2号墳は平地に立地する点がやや相違する。また、比叡盆地では、横穴式石室を有する古墳は多くなく、石室規模も概して小さい。こうした傾向は、例えば大山田盆地等とは明らかに相異なるものであり興味深い。

なお「石神塚」の名は、この古墳の別名である「將軍塚」と共に、寒の神信仰と関係するようである^④。

(山田 猛)

<註>

① 森川桜男氏の表面採集品であり、氏の御好意による。

② 信楽窯業試験場蔵の長祿2(1458)年銘摺鉢に類似する。

③ 森浩一「古墳時代後期以降の埋葬地と墓地」『論集終末期古墳』1973

④ 柳田国男監『民俗学事典』1972

大塚民俗学会編『日本民俗事典』1972

XIV 名張市西田原 ^{いっぽんすぎ} 一本杉遺跡

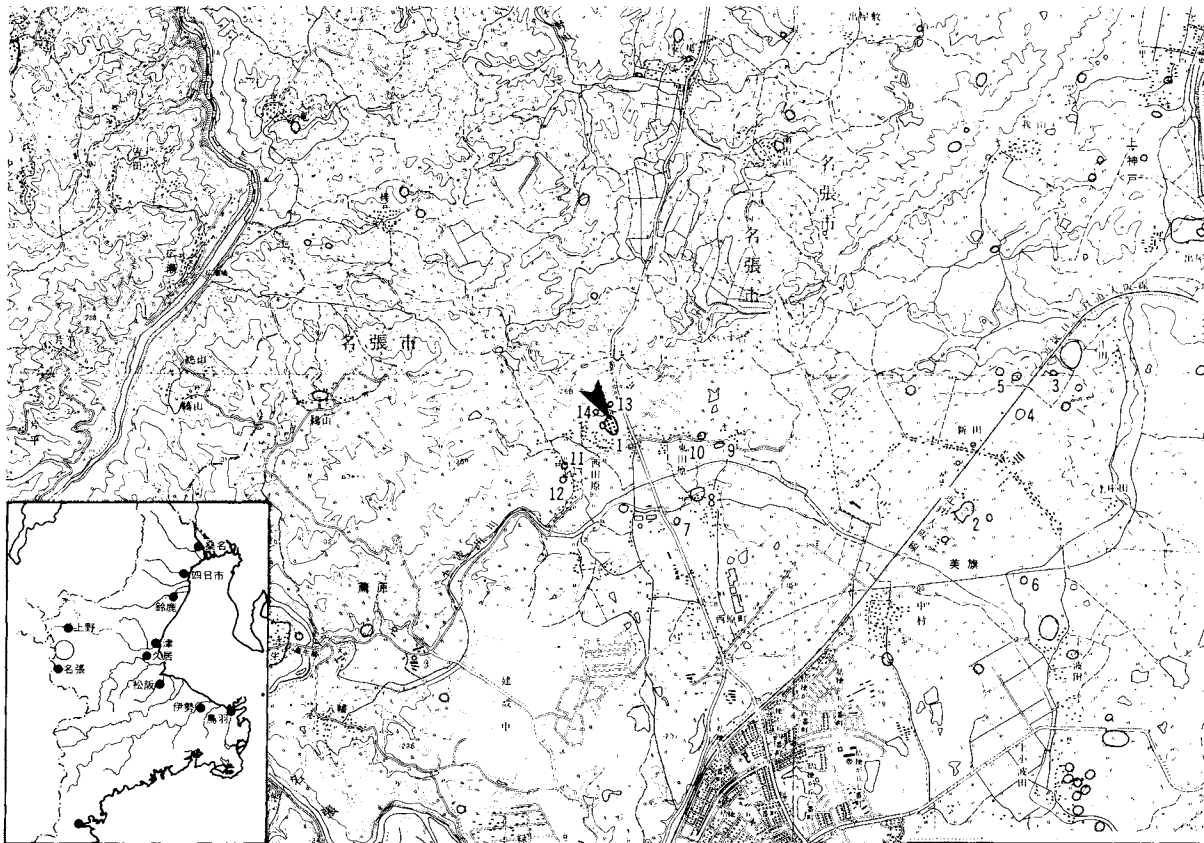
1. 位置と環境

一本杉遺跡(1)は行政区画上、名張市西田原字一本杉に所在する。近鉄大阪線美旗駅西北西約1.8kmの地点に位置し、すぐ東には上野と名張を結ぶ幹線道路である国道368号線(名張街道)を臨む。遺跡は地形的には西から東へ下る山の斜面状に位置し、標高205m内外を有する。

周知の如く、美旗駅周辺は県下最大級の規模を誇る馬塚(2)をはじめ、殿塚古墳(3)、女良塚古墳(4)、毘沙門塚古墳(5)、貴人塚古墳(6)とよばれる大小の前方後円墳が所在し、美旗古墳群として国史跡として指定されている。これらの古墳はそれぞれ时期的な差異をもつ点等より同一政治集団が構築

した一世代一墳的なものとして捉えられている。一方、当遺跡の周辺の遺跡として、東田原地区には土師器、瓦器の散布している東田原A・B・C遺跡(7~9)、室町時代の単郭式の城跡である殿藪城跡(10)等が知られ、西田原地区には界外遺跡(11)、田原氏堡(12)、また、遺跡に近接するところでは水越A・B遺跡(13・14)があり、B遺跡では埴輪片も採集されている。

以上、遺跡周辺は古墳時代から中世に至る各時代の遺跡が点在する処であるが、発掘調査例もかつて無く、当地域の歴史は不明な点が多いが、かく周辺の遺跡等を紹介、概述するにとどめておきたい。



第110図 遺跡位置図(1:25000名張・月ヶ瀬・阿保・伊勢路・国土地理院)

2. 遺 構

遺跡の層序は第Ⅰ層；表土、第Ⅱ層；黄褐色土(地山)となる。遺物包含層は明確に認められず、地形的に斜面状にありすでに流失したものと思われる。遺構は第Ⅱ層上面で確認でき、遺構内埋土はおよそ黒褐色土で、これが包含層にあたるものであろう。検出遺構は竪穴住居 3 軒、溝、柱穴等である。

1. 竪穴住居

SB1 東に低くなる斜面に検出されたコの字形の周溝で竪穴住居址の一部と考えられる。復元すると約一辺5.2mの方形プランの住居址となる。プラン周溝ともに東側の低い部分はすでに削平を受けて床面が流失されている。周溝は幅30cm前後、深さ約20cmである。主柱穴等はみられない。

SB2 SB1より約3m下のテラス状の地形で検出。SB3の床面埋土を切ってつくられ、竪穴の深さはSB3より若干深い程度で、周溝を有する。

周溝は壁際にめぐり幅35～40cm、深さ床面より20～25cmである。南壁面東寄りには長軸1.2m、短軸1m余、深さ約50cmの貯蔵穴をもつ。床面では中央部寄りの隅に主柱穴4個を検出した。北壁面に接してカマドと煙道がみられる。カマドは周溝を掘った後につくられ、現況は馬蹄形に両そで部のみ残り、白色粘土で構築されている。煙道は長短2本みられ、時期差と考えられる。床面に焼土はみられないが、炭化した木材片を検出した。

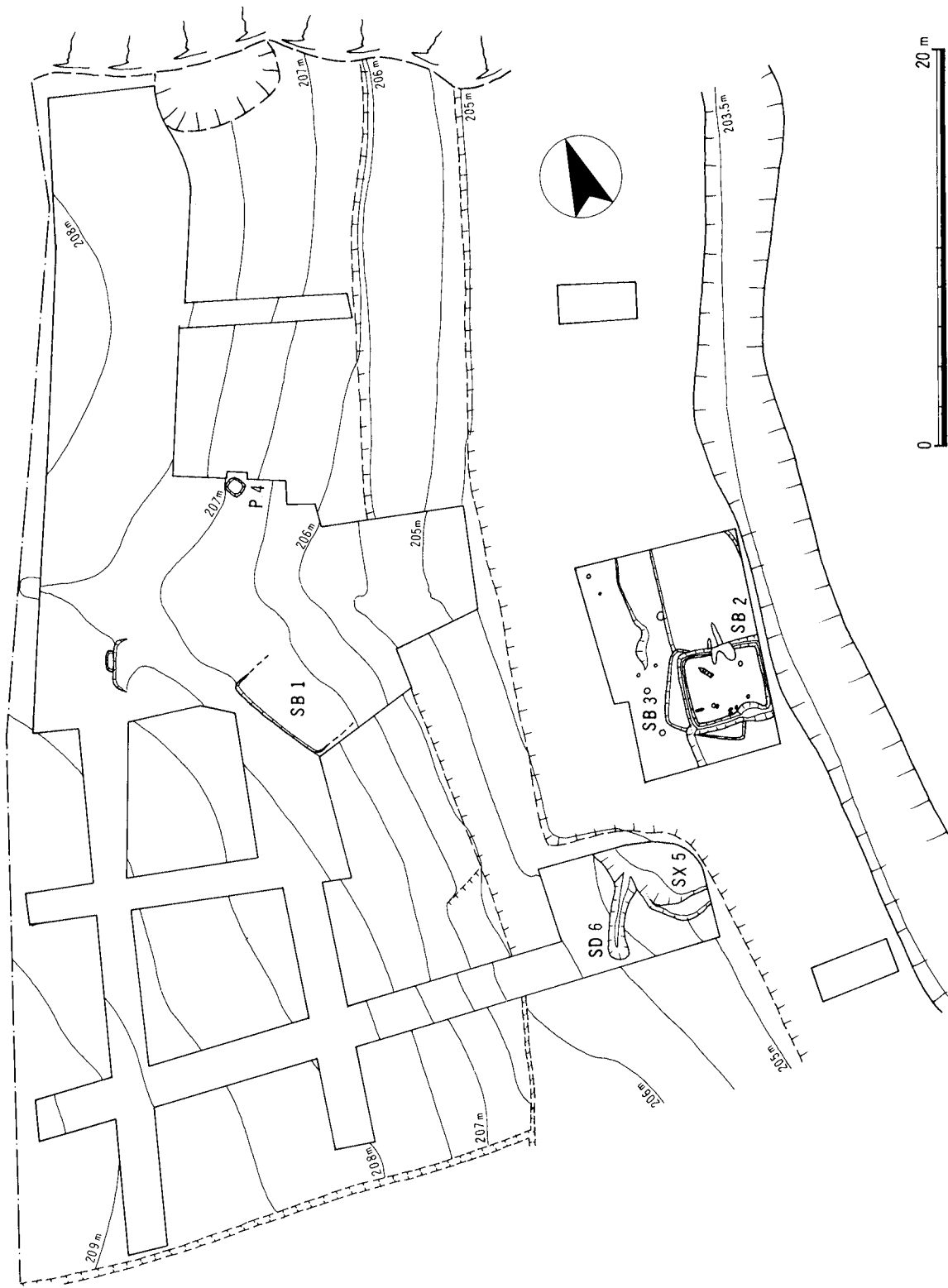
SB3 SB2に切られ、その全容は不明であるが、一辺約3.8mの方形プランをもつ住居址と考えられる。周溝、主柱穴等はみられない。

2. その他の遺構

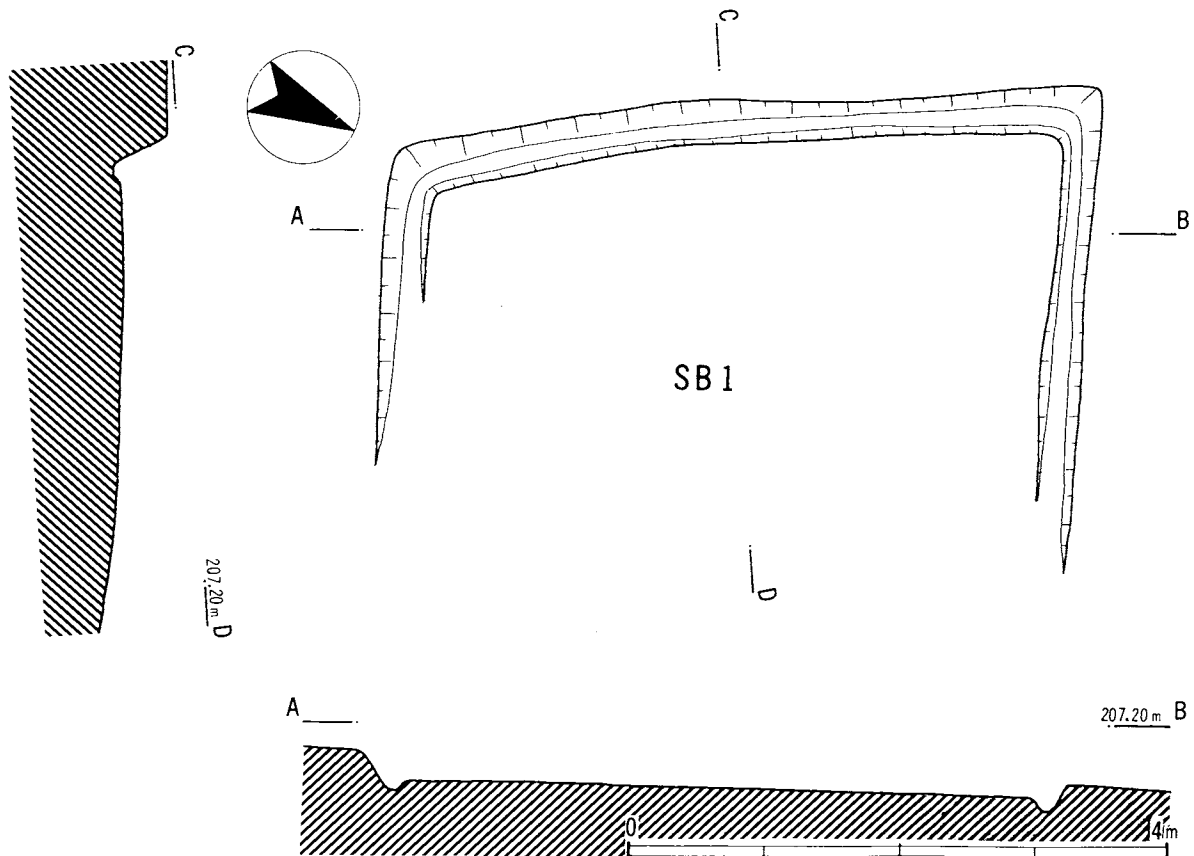
SB1の北方約12mで検出した柱穴と考えられるP4、また、SB2・3の南西で検出された溝(SD6)とそれにつづく落ち込み遺構(SX5)等が



第111図 遺跡地形図(1:5000)



第112区 遺構平面図 (1 : 300)



第113図 SB1実測図(1:60)

あるが、いずれも局部的な検出のため、その全容と性格は不明である。尚、P4の埋土からはほぼ完形

に近い須恵器杯(21~23)を検出している。

3. 出土遺物

出土遺物はコンテナバット(整理箱)10箱程度と少量である。種類は土師器、須恵器、瓦器、陶磁器等の土器類がその主を占めるが、屋瓦、砥石、五輪塔(風輪)の欠損部、また、表採資料として石鏃とチャート剥片がある。時期的には表採のものを除くと大半は古墳時代後期から飛鳥時代に属するが、下って中世、近世の遺物も含まれている。遺物は小片が多く、図示し得るものは少ないが、以下、竪穴住居(SB1・SB2)を一括資料として取り上げ、他は包含層出土として種類、形態別に個々概述してゆく。

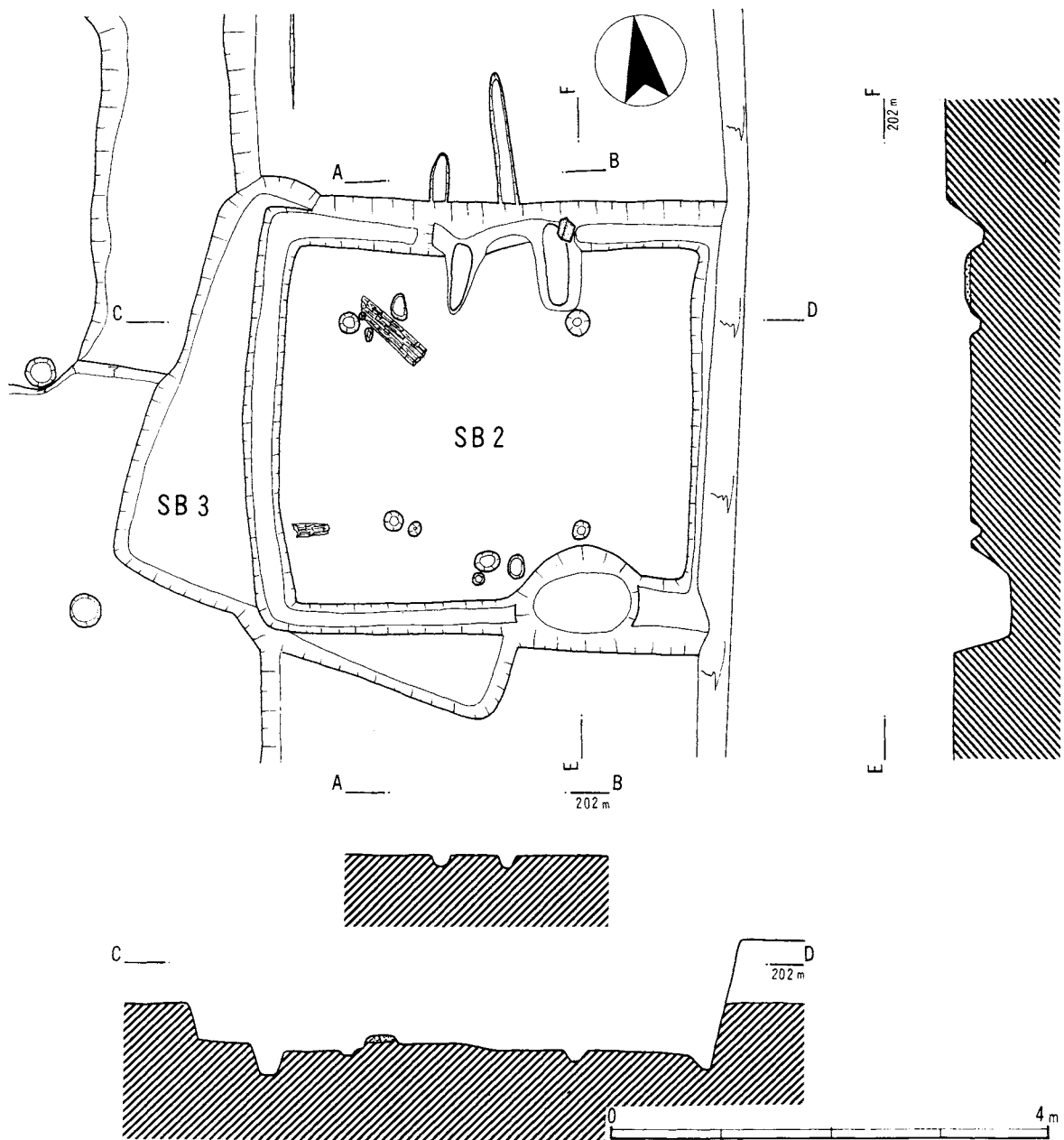
1. SB1出土の土器

土師器甕(1・2) いずれもくの字形に外反す

る口縁部をもつ甕であるが、1は厚手、2は薄手である。1は口縁部内外面をヨコナデ、体部はハケメ調整がみられる。色調は橙褐色を呈し、胎土は細砂粒が目立つ。焼成は良好である。2は白っぽい淡褐色を呈し、石英粒を多く含む粗い胎土をもつが、調整技法は内外ともに磨減がすすみ、不明である。

須恵器杯A(3・4) 口径15.2cm・11.6cmと法量に差異をもつが、両者ともに底部ヘラ切り未調整の杯身である。色調はそれぞれ淡灰色、灰色であるが、砂粒を混入する点は共通している。4の内面中央には仕上げナデの跡が明瞭にのこる。ロクロ回転はいずれも順廻りである。

須恵器杯B(5) 外方に強くふんばる形の高台をもつ。胎土は比較的緻密で、色調は杯Aに比べ白



第114図 SB2・SB3実測図(1:60)

っぽい。外底面はヘラ切り後、一部ナデている。内面中央に仕上げナデがみられる。ロクロ回転廻りである。

2. SB2出土の土器

土師器椀A(6) 底部を欠くが椀形態と思われ口縁部は外反し、端部は尖り、内側に面をつくる。口縁部内外面はヨコナデ調整されているが、体部は内外ともに磨減がすすみ、調整手法は不明である。赤味がかかった茶褐色を呈し、大小の砂粒を多く含む

胎土である。体部の一部に黒斑がみられる。

土師器椀B(7) 黄褐色を呈し、緻密な胎土をもつ。口縁部は垂直に立ち上り、端部は尖先となる内面は全体に平滑にナデられているが、外面は口縁部をヨコナデする他は、不調整で凹凸が残る。

土師器椀C(9) 形のややいびつな深鉢状を呈する椀で底は平底風である。色調は明茶褐色を呈し胎土は大小の砂粒を多く含む粗い。全体に磨減がすすみ、調整技法等は不明である。

土師器甕A(8・10) いずれも肩の張らないな

だらかな体部をもつ甕で、8は口縁部はゆるやかに外反して端部は丸くおさまる。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデられる。外面には磨滅がみられるが、わずかにハケメの跡がのこる。調整手法は両者共通するところが多いが、10の体部外面には一部分縦方向にヘラケズリされたような面をもつ。8は淡茶褐色、10は明黄褐色の色調をもち、胎土はいずれも砂粒を多く含む。

土師器甕B (11) く字形に外反する口縁部で端部にはヨコナデによる一条の沈線が走る。口縁部内外面はヨコナデ調整、肩部内面はナデられるが、外面はハケメ調整が施される。色調は黄褐色、胎土は砂粒を多く含む。

土師器甕C (12) いわゆるS字甕の退化した厚手の短い口縁部と張りのある体部に脚のつく台付甕である。脚部はハの字の開き、最下部は内側に折り返され、ヨコナデによる凹面をつくる。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面は粗いハケメが施される。内面はナデつけられるが磨滅が進み不明な部分が多い。脚部の端部はヨコナデがみられるが、その上方は不調整でユビオサエによる凹凸、指頭圧痕がみられる。赤味を帯びた淡褐色を呈し、砂粒を多く含む胎土をもつ。内面の底部近くは焦げによる煤の付着が濃くみられる。

須恵器杯身 (13) 復元口径11.4cmの杯身の小片で、立ち上りは垂直に近く高い。淡青灰色の色調をもち細砂粒を含む。ロクロ回転逆廻りである。

3. 包含層出土の遺物

(土師器)

直口壺 (14) やや外反する短い口縁部に長球状の体部をもつものと考えられるが、底部近くは欠けて全体は不明である。口縁端部には9ヶ所の輪花に似たえぐりがある珍しい形態をもつ。全体に磨滅が進み調整手法は不明であるが、肩部に一部縦方向の細いハケメの跡が残る。体部内面には幾線もの粘土輪積みの痕跡が確認できる。色調は淡茶褐色、胎土中には多量の大小の砂粒を含む。甕とも考えられるが、内外ともに煤の付着はみられない。

広口壺 (18) ラップ状に開く口縁部より体部は強く肩の張る形態と考えられる。全体に磨滅がひど

く調整手法は不明である。色調は濃茶褐色、胎土には大小の石粒、砂粒を多量に含む。

甕 (15) くの字形に外反する口縁部は端部で上方につまみ上げた形態をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はやや粗いハケメが施されるが、内面は磨滅して不明である。黄褐色を呈し、胎土は細砂粒を含む。

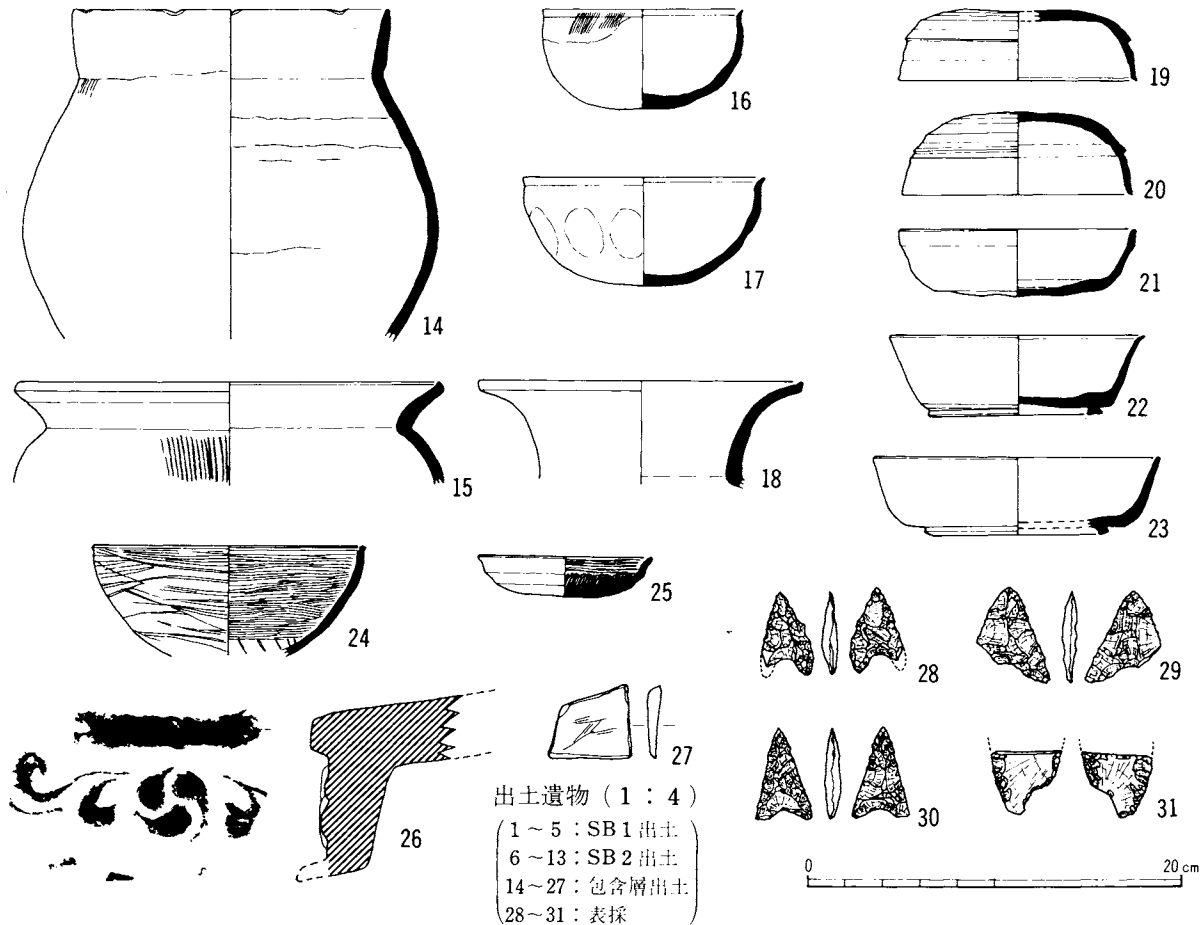
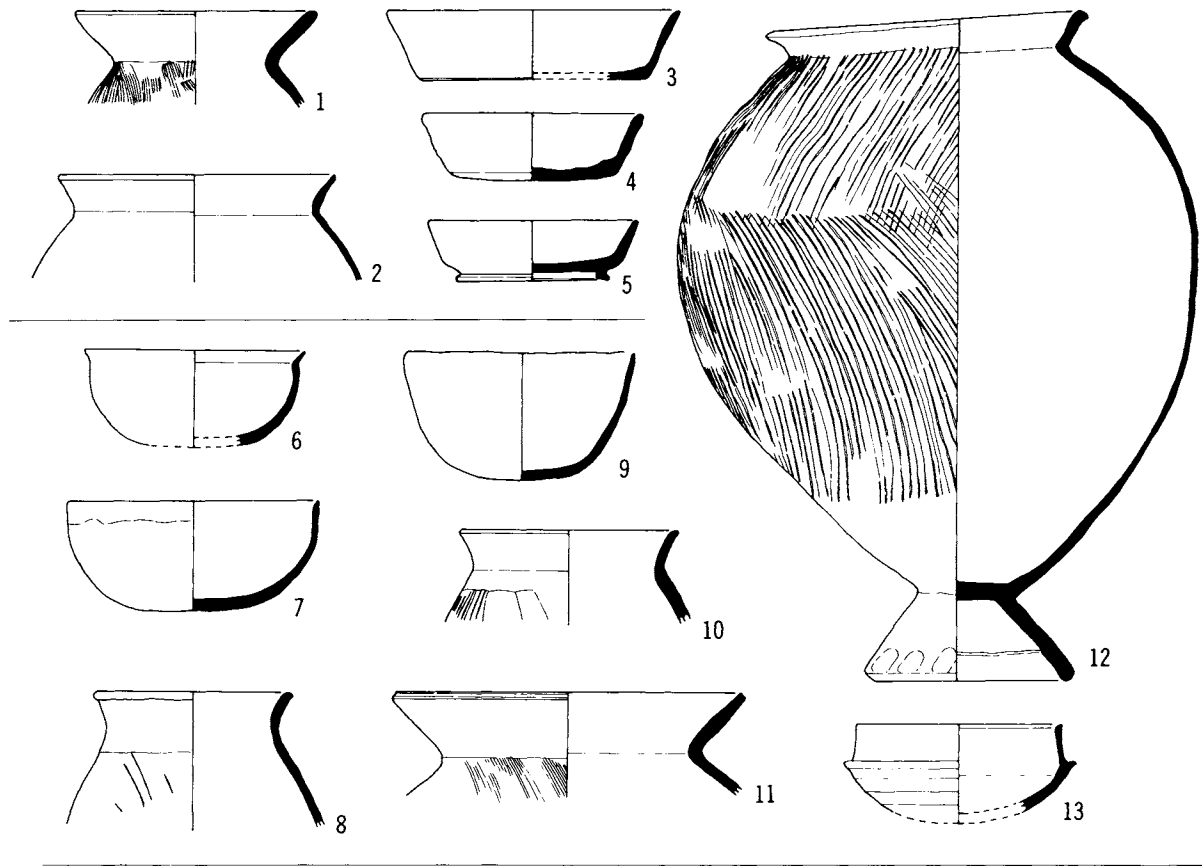
椀 (16・17) いずれも丸味のある体部から口縁部は垂直に立ち上り、端部は外反する形態をもつが17は16よりひとまわり大きい。両者とも口縁部付近は内外面ともにヨコナデされて、内面はナデられている。外面、16ではナデが不徹底でオサエによる凹凸を残す。口縁近くにはハケメの痕も若干残る。17ではナデも多少みられるが、全体に不調整で、オサエによる凹凸と共に指頭圧痕を多く残している。色調は白っぽい茶褐色を呈し、胎土は比較的緻密である。尚、17の内面全体に黒煤の付着が厚くみられ、椀内部でものを燃やした痕とも考えられる。

(須恵器)

杯蓋 (19・20) 19は口径13cm前後、20は口径12.3cmで法量的に似ているが、19の天井部は20に比べ扁平である。両者ともに天井部と体部を分ける鋭い稜線を有する。19では天井部約 $\frac{1}{4}$ 、20では約 $\frac{1}{2}$ ヘラケズリされている。ロクロ回転は逆廻りである。19は白灰色でやや焼成が軟弱、20は青灰色で焼成は堅固である。胎土中には19・20ともに細砂粒を比較的多く含む。

杯身A (21) 口径12.7cm、器高3.6cmで、白っぽい灰色を呈する。底部はヘラ切り後、不調整である。内面中央には一方向の仕上げナデがみられる。胎土は堅緻。

杯身B (22・23) 22は低く外方へふんばる高台を有し、体部は、ゆるやかに外反して立ち、口縁端部はなお外反してやや尖り気味におさまる。底部外面はヘラ切り未調整である。内面中央付近に仕上げナデの跡がのこる。色調、胎土ともに21に極めて類似している。21と共にP4(柱穴内)より出土したものである。23は青灰色を呈し、21・22と色調を全く異にする。低く外方へハの字状にのびる高台より体部は垂直に近く立ち、端部はそのまま丸くおさまる。胎土は堅緻である。



第115図 土器(1 : 4) 石器(1 : 2)実測図、瓦拓影(1 : 2)

(瓦器)

椀 (24) 口縁端部の内面に沈線が一条走る椀である。外面の口縁部付近は横方向、体部は乱方向にやや粗いヘラミガキをもつ。内面は見込み部近くまで細いヘラミガキ調整がみられる。見込み部は小片で不詳であるが、ジグザグ状の暗文と考えられる。色調は黒灰色、胎土は淡黄灰色で、細砂粒を少量混じえる。

小皿 (25) 口径9.2cm、器高2.2cmで外面は口縁部と底部の境目で鈍い稜を2段もつ。口縁部はヨコナデ、底部は不調整でオサエによる凹凸を残す。内面、口縁部は横方向に細いヘラミガキ、内底部にはやや粗いジグザグ状の暗文が平行して走る。色調は淡灰色、胎土は灰白色で細砂粒を少量含む。

(屋瓦)

軒丸瓦 (26) 段顎・浅顎形式の軒平瓦の一部である。瓦当は周縁と内区のみで飾られ、内区は中央

部に三巴文を一つ配し、巴文を中心に均整唐草文を配するものと思われる。色調は淡灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含むが焼成は堅緻である。

(石製品)

砥石 (27) 板状に自然剥離した砥石の一部分と考えられ、一面に使用擦痕がみられる。色調は暗灰緑色を呈し、堅緻な石質で、結晶片岩(千枚岩)と考えられる。

4. 表採の遺物

石鏃 (28~30) いずれも無茎凹基式の形態で、石質はサヌカイト製である。

フレイク (31) チャート製の剥片で、両サイドに刃遺しがみられ、抉れた一面にノッチがみられる。器形は不明であるが、製品として使用されたものと考えられる。

4. 結 語

1. 遺構について

検出遺構として明確なものはSB1・SB2・SB3の竪穴住居3軒である。床面埋土の出土遺物より時期決定すれば、SB2は古墳時代後期(6世紀初頭~前半頃)、SB1は下って飛鳥時代(7世紀中葉~後半頃)に位置付けられる。なお、SB3は遺物を含まないが、SB2との切り合い関係よりSB2より古くなる。時代順にはSB3→SB2→SB1となる。SB2・SB3は規模も類似し、小時期差による立て替えとも考えられる。構造的にSB3は周溝をもたず、主柱穴も不明である。SB2は周溝、主柱穴をもち、また貯蔵穴を具備している。北壁面にはカマドと煙道が確認された。当時期の竪穴住居としては普遍的なものであろう。

さて、限られた発掘面積と少数の住居検出のため、集落構造等を云々することはできないが、立地条件的には斜面をテラス化して、あるいは各時期毎の竪穴住居群(集落)が、帯状、あるいは環状に広がっている可能性も全面的には否定できない。

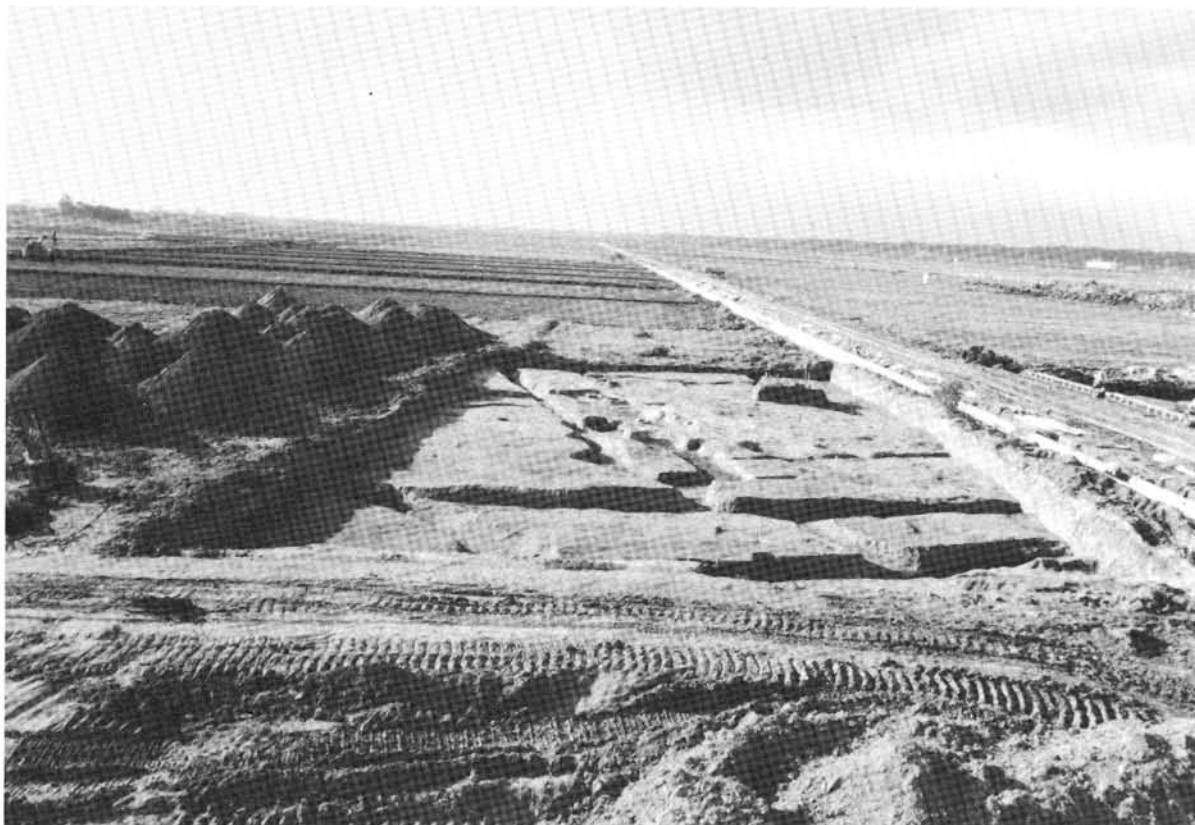
また、SB1の北約10m、発掘区北壁近くで掘り方、深さともしっかりしたピット(柱穴?)を検出

している。ピット中の遺物は時期的にはSD1に近い。竪穴の他に、掘立柱建物の周辺への存在も想像されるが、遺跡全体の性格、あり方については本調査では不明と言わざるを得ない。

2. 遺物について

少量ではあるが、竪穴住居(SB1・SB2)より土師器(椀・甕等)と須恵器杯が伴出して出土している。これらを一応、一括資料として扱えば、SB1出土のものは飛鳥時代(7世紀中葉~後半)、SB2出土のものは古墳時代後期前半(6世紀初頭~前半)のものとして各時期の土器編年資料の一つとして有効となろう。他は包含層、あるいは、表採のもので時代的に各時期のものを混在するが、数量的には古墳時代後期に属するもの(14~20)が多い須恵器杯B(22・23)は飛鳥時代のものと考えられる。その他、瓦器は古手のものが多く、24・25共に平安時代末頃に位置付けられる。25は形態的にも稜線をもち、瓦器小皿としては珍しい。26の屋瓦は三巴文を配し、中世(鎌倉時代)に下るものであろう。表採としての石鏃(28~29)は縄文時代後・晩期か、31は時期不明である。(三ツ木貞夫・新田 洋)

版 图



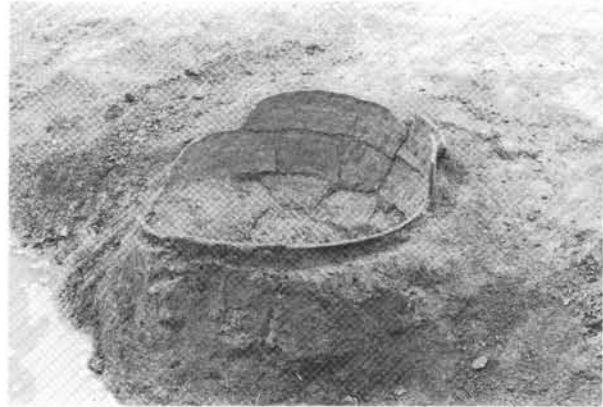
B地区近景（東から）



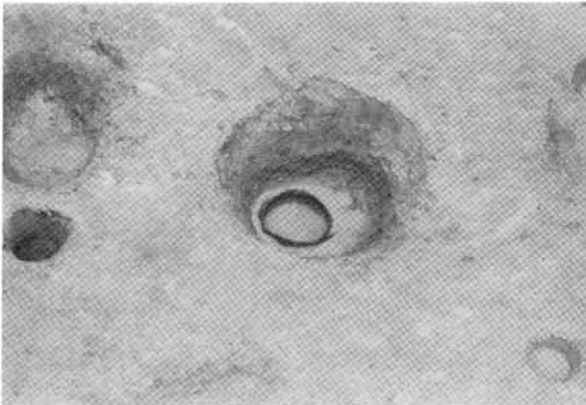
幹線排水路部分近景（東から）



幹線排水路部分 SE104 (東から)



幹線排水路部分 SX109 (西から)



A地区 SE204 (東から)



A地区 SK215 (南から)



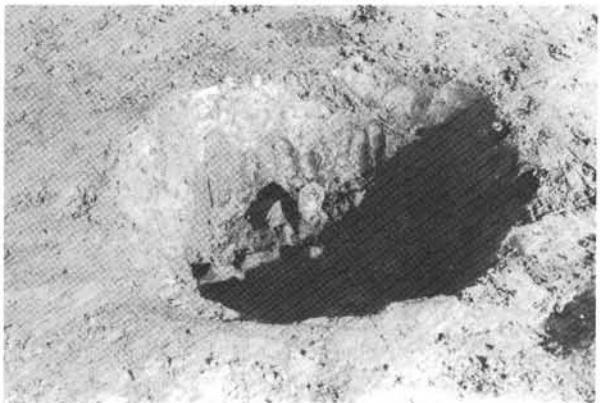
B地区 SE301 遺物出土状況 (南から)



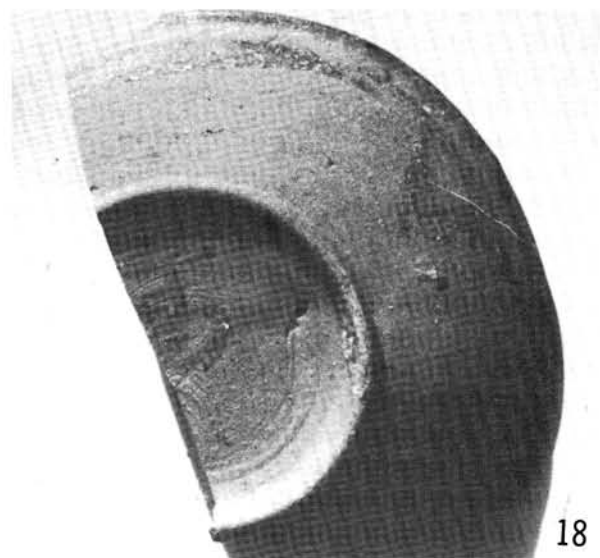
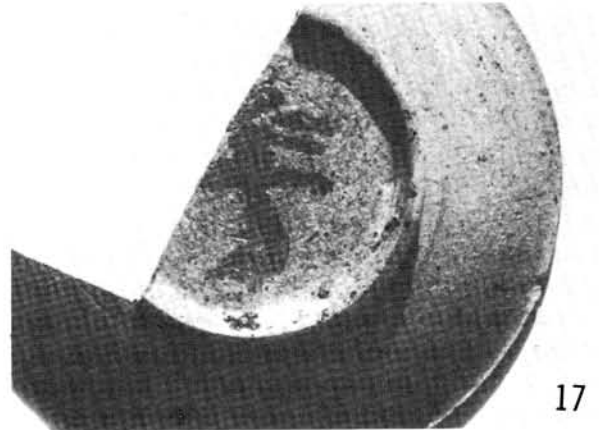
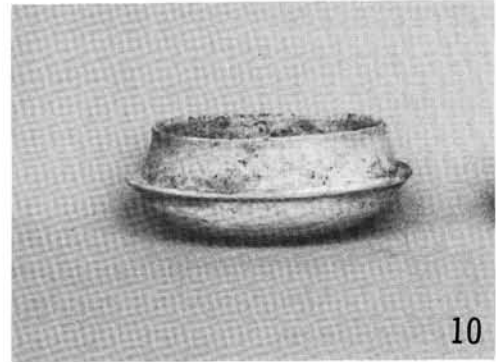
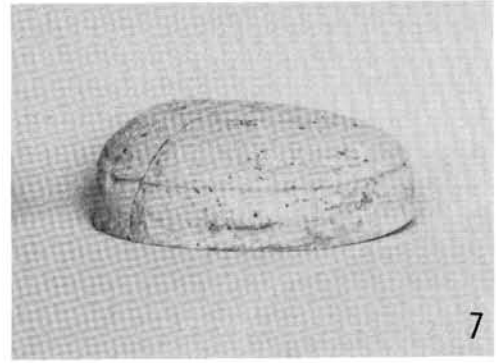
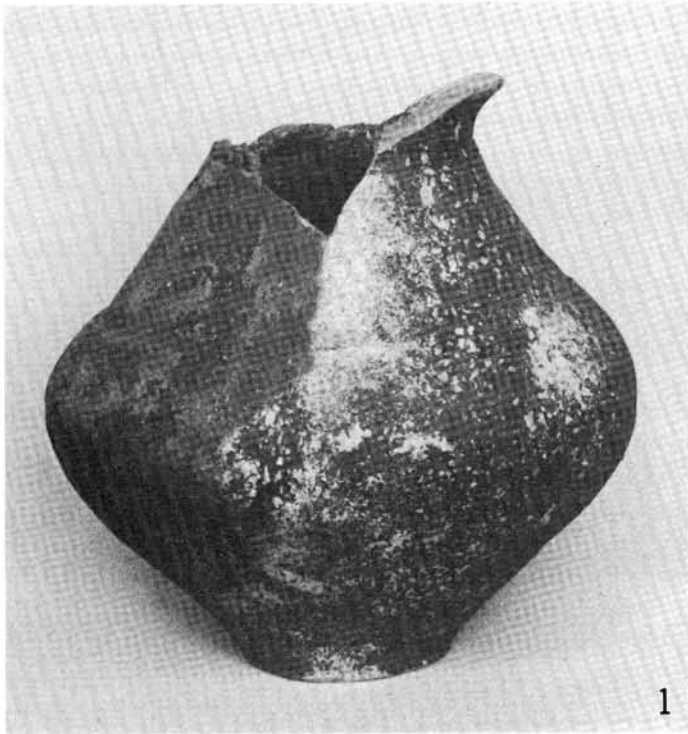
B地区 SE301 (南から)



C地区 SE401 (南から)



C地区 SK404 (南から)



出土遺物 (1 ~ 16; 1 : 3、17 ~ 18; 1 : 2)



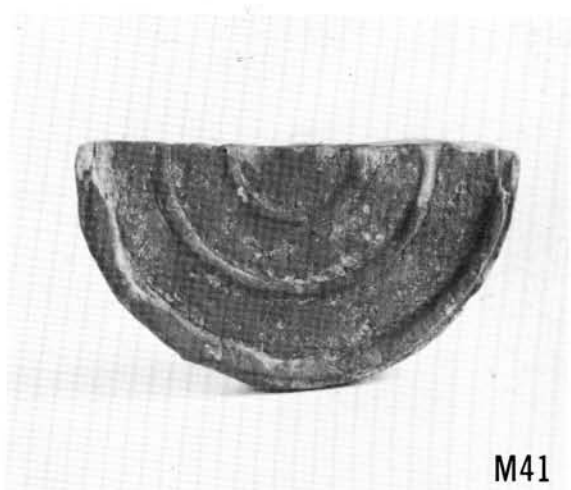
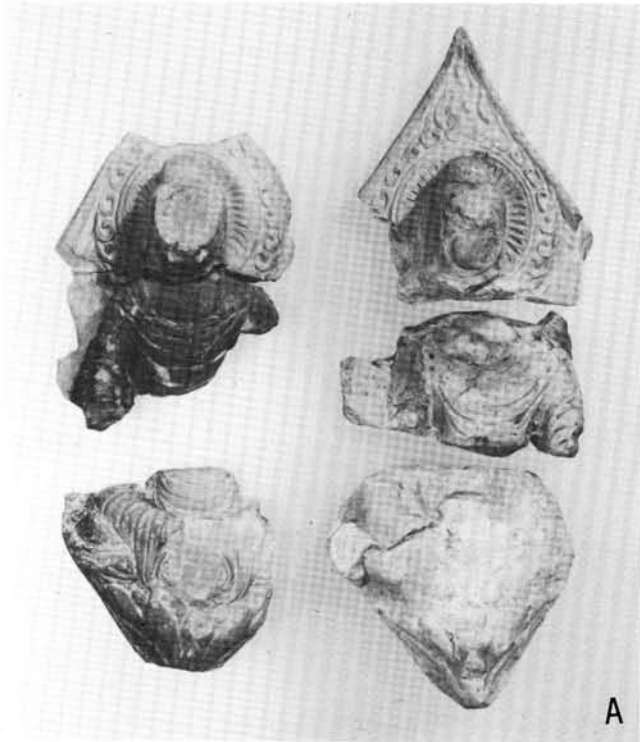
遺跡全景（南から）



金堂跡全景（南から）



塔跡全景（東から）



PL 6

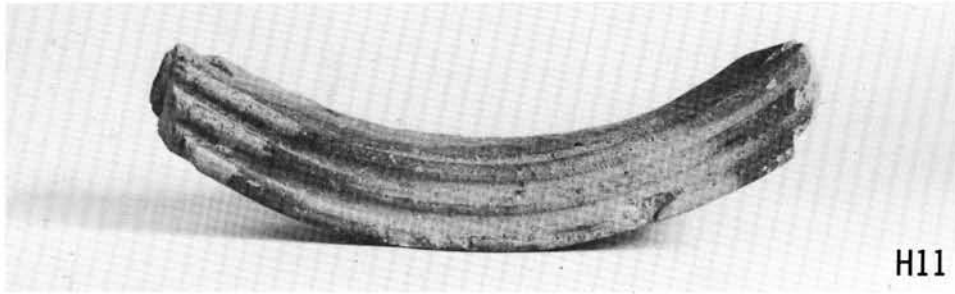
天華寺廢寺



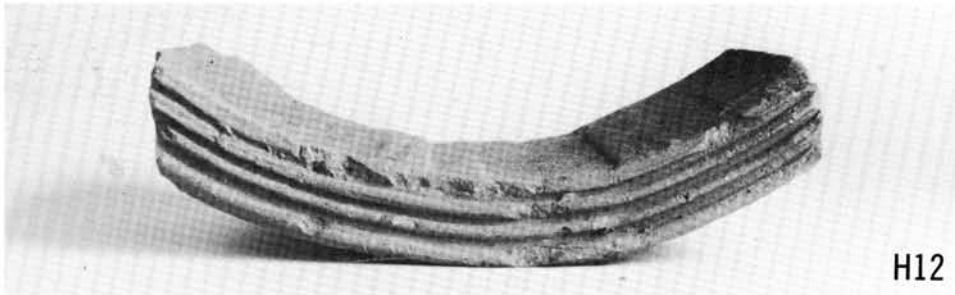
M3B



M3Aa



H11



H12



H21B

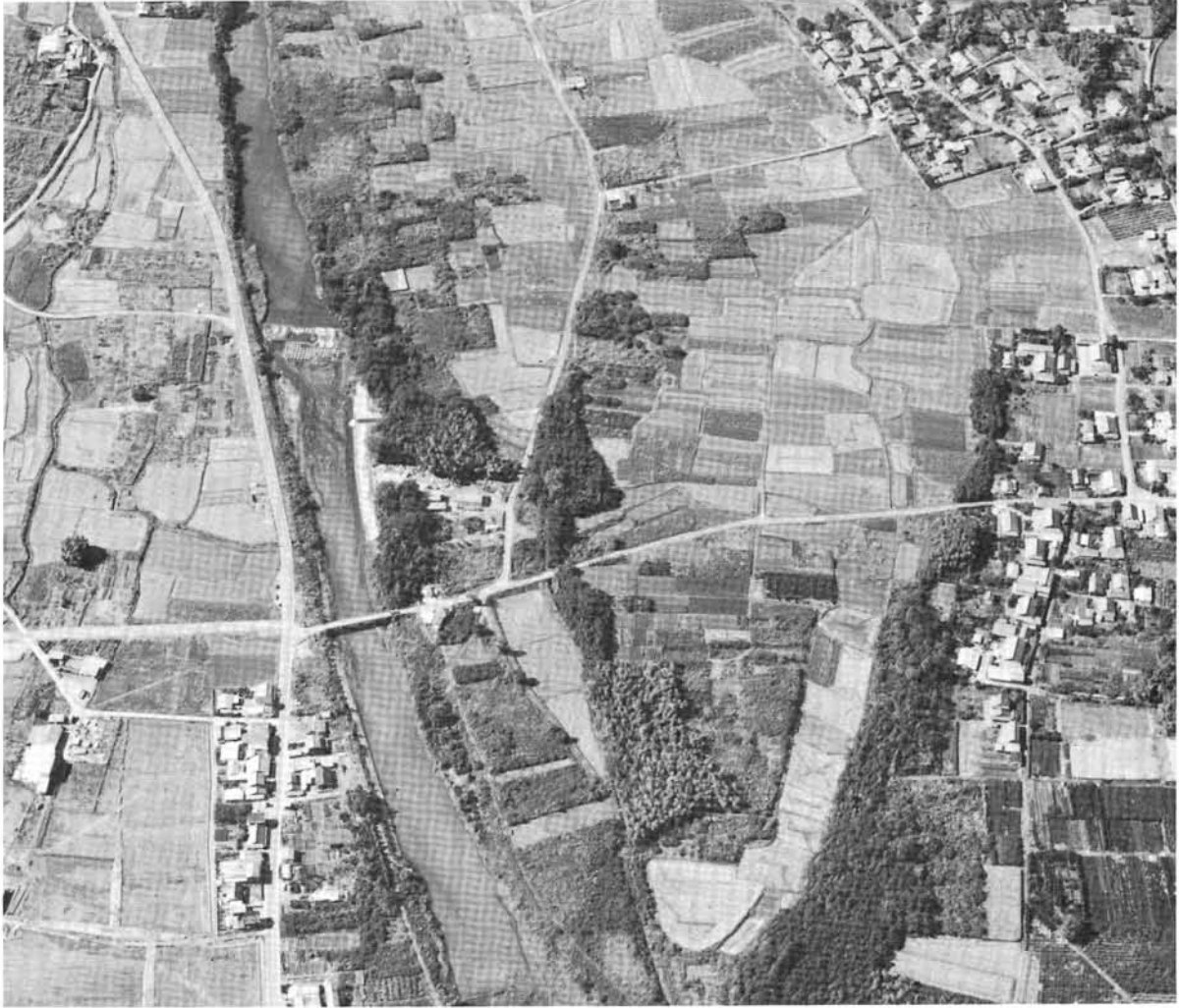


H22



H31

軒丸瓦・軒平瓦 (1 : 3)



航空写真



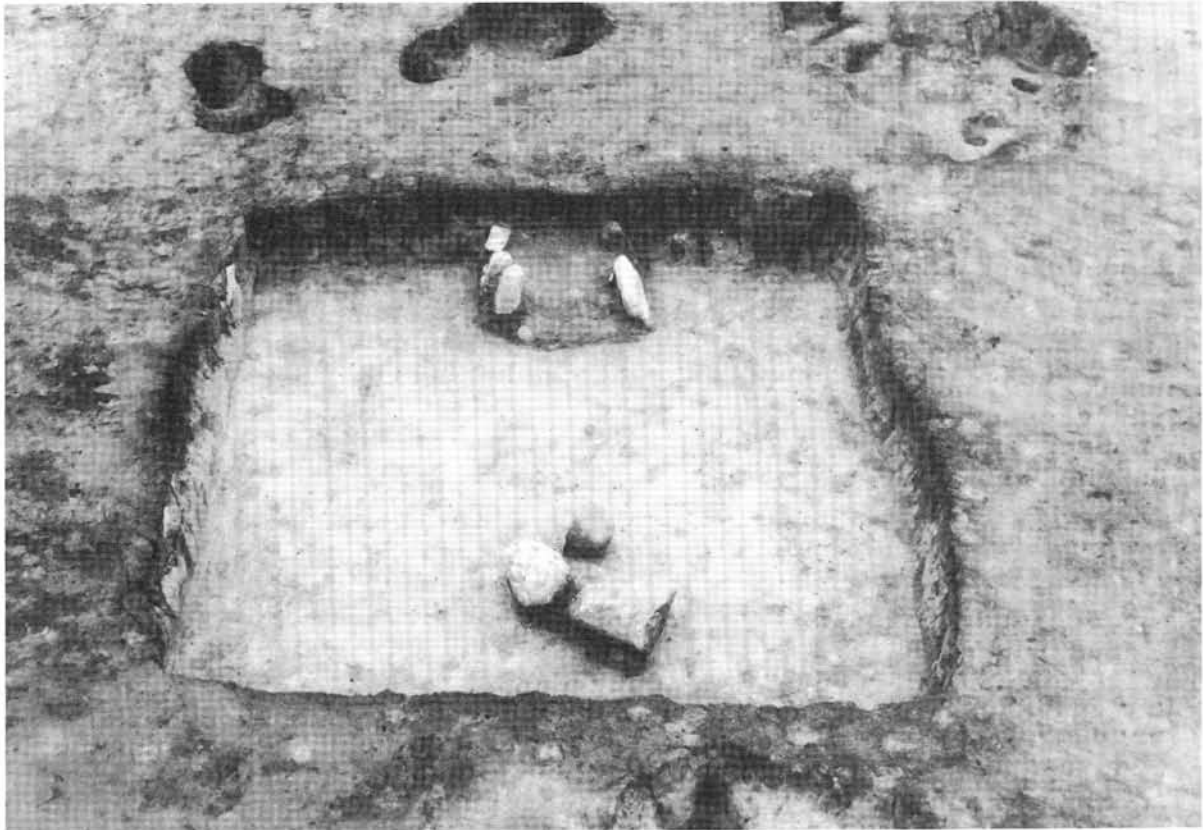
遺跡近景（西から）



調査区近景（西から）



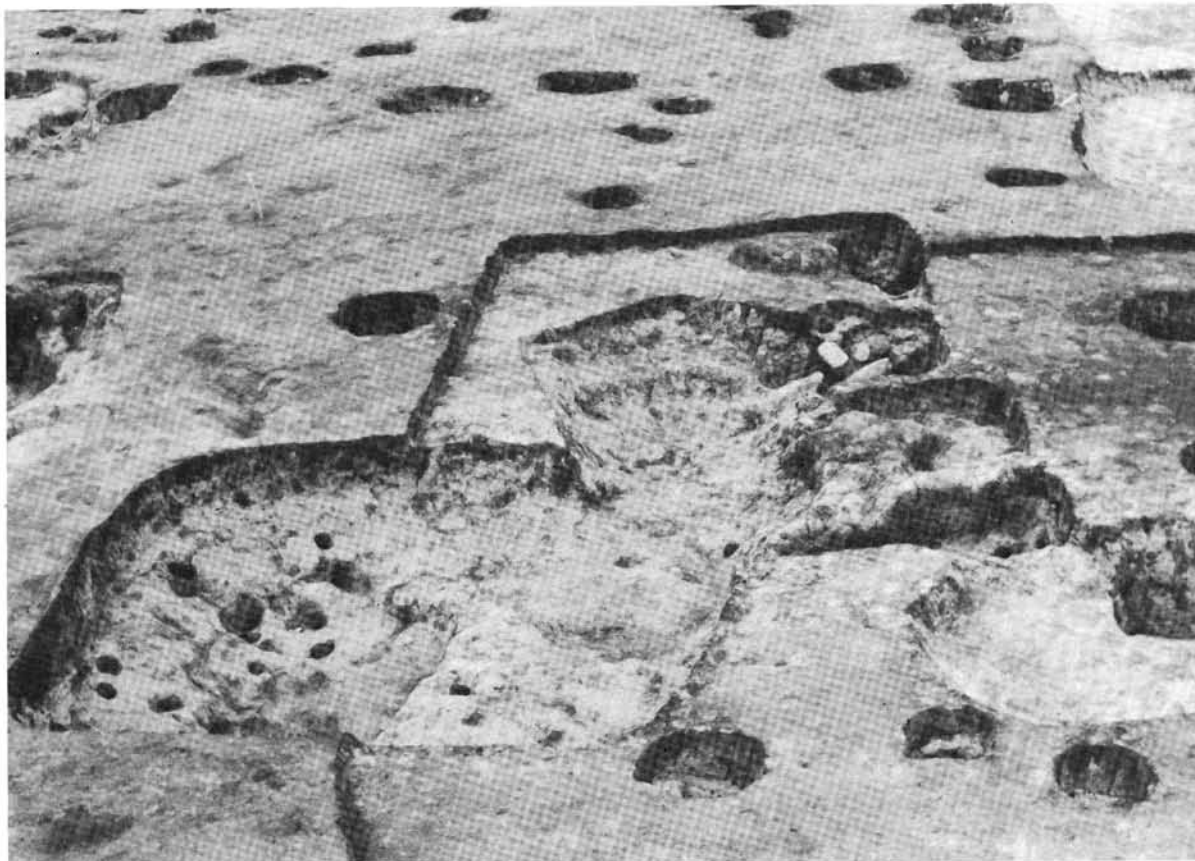
調査区近景（北から）



SB27 (西から)



SB28 (西から)



SB32~35・66 (南から)



SK10 (南から)



遺跡遠景（南から）



東トレンチ全景（東から）

PL12

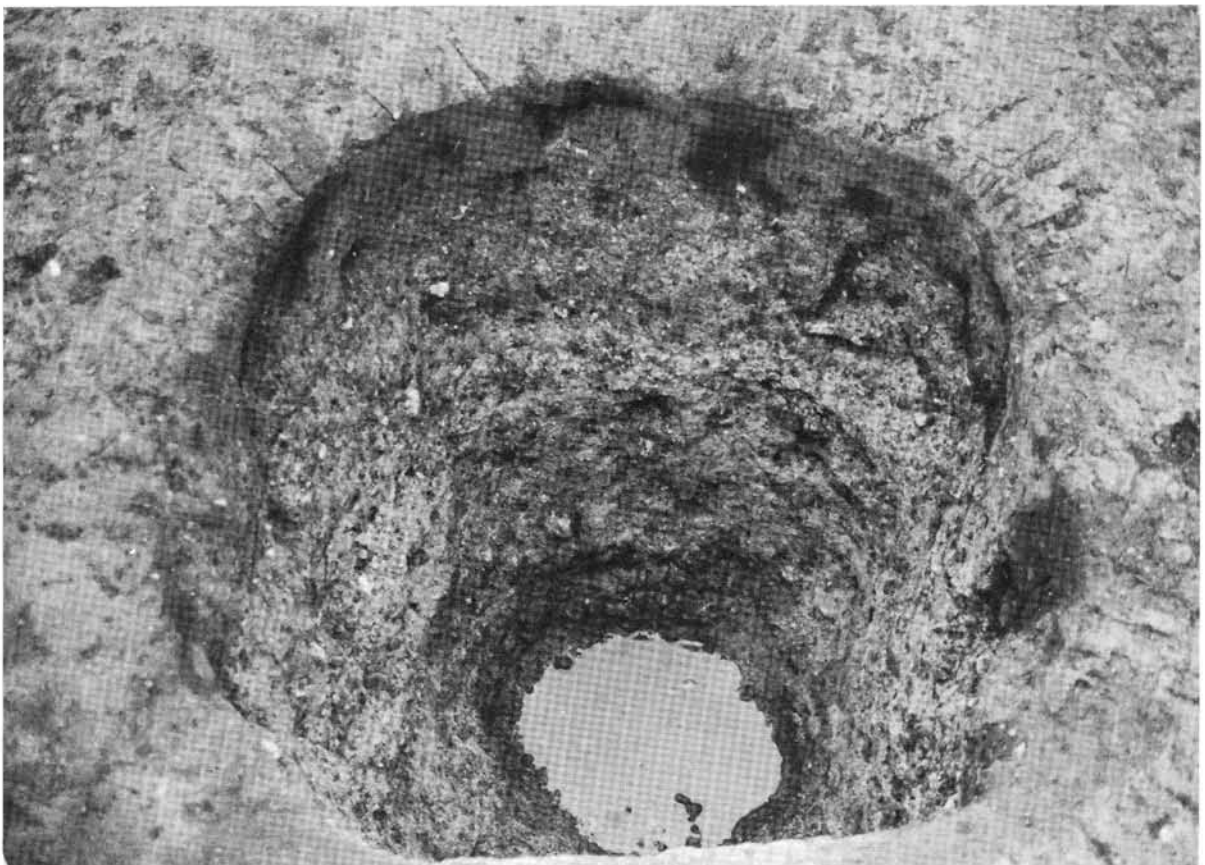


東トレンチ (西から)

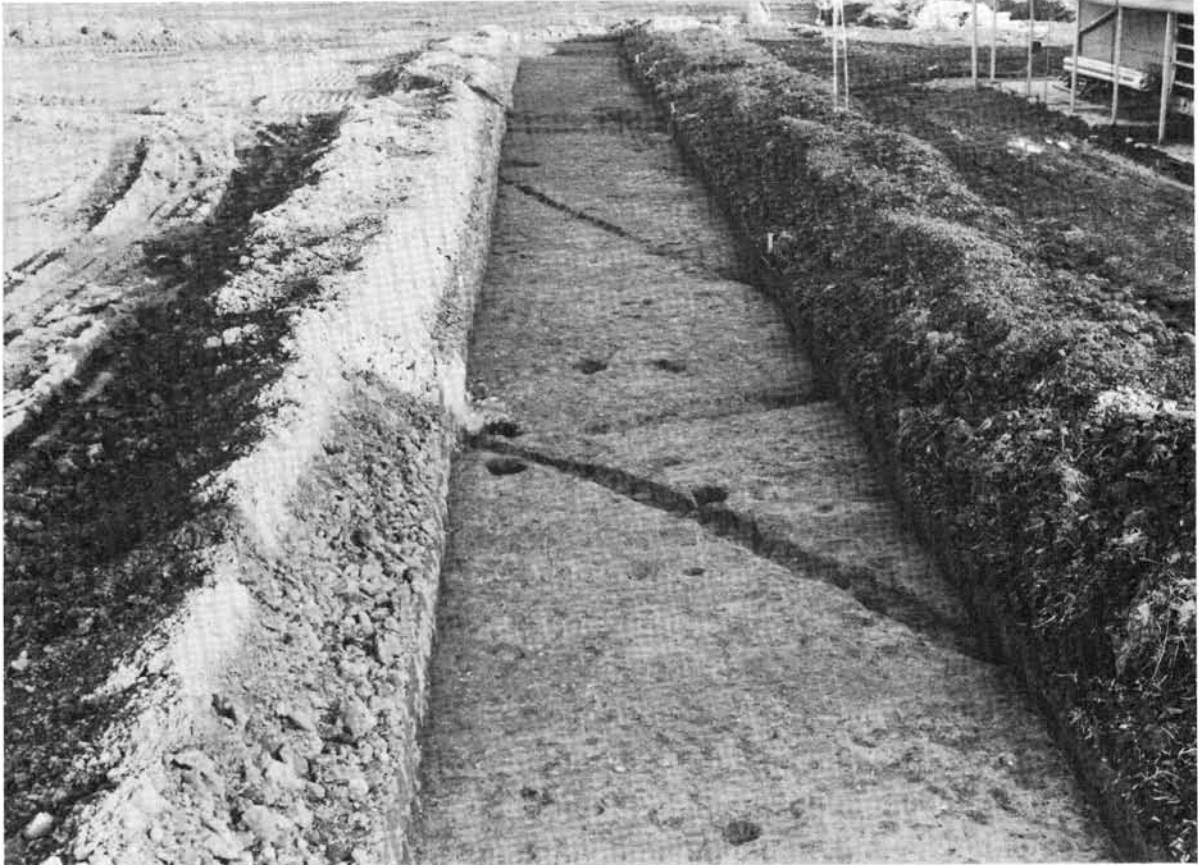
東村遺跡



SD 2 (南から)



SE 1 (南から)



西トレンチ全景（西から）



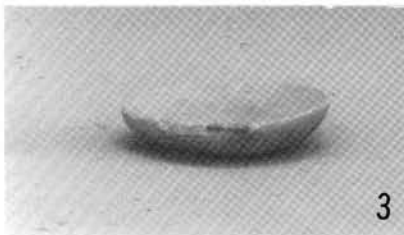
SD4（東から）



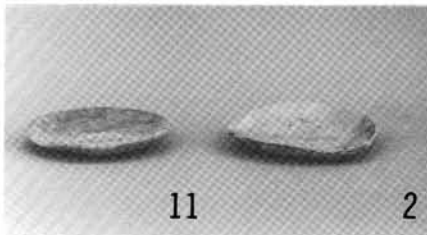
SD 7 (西から)



西トレンチ全景 (東から)



3



11

2

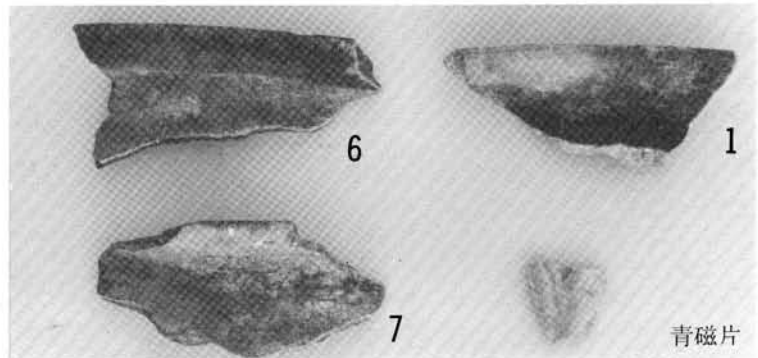


8



10

出土土器 (1 : 3)



6

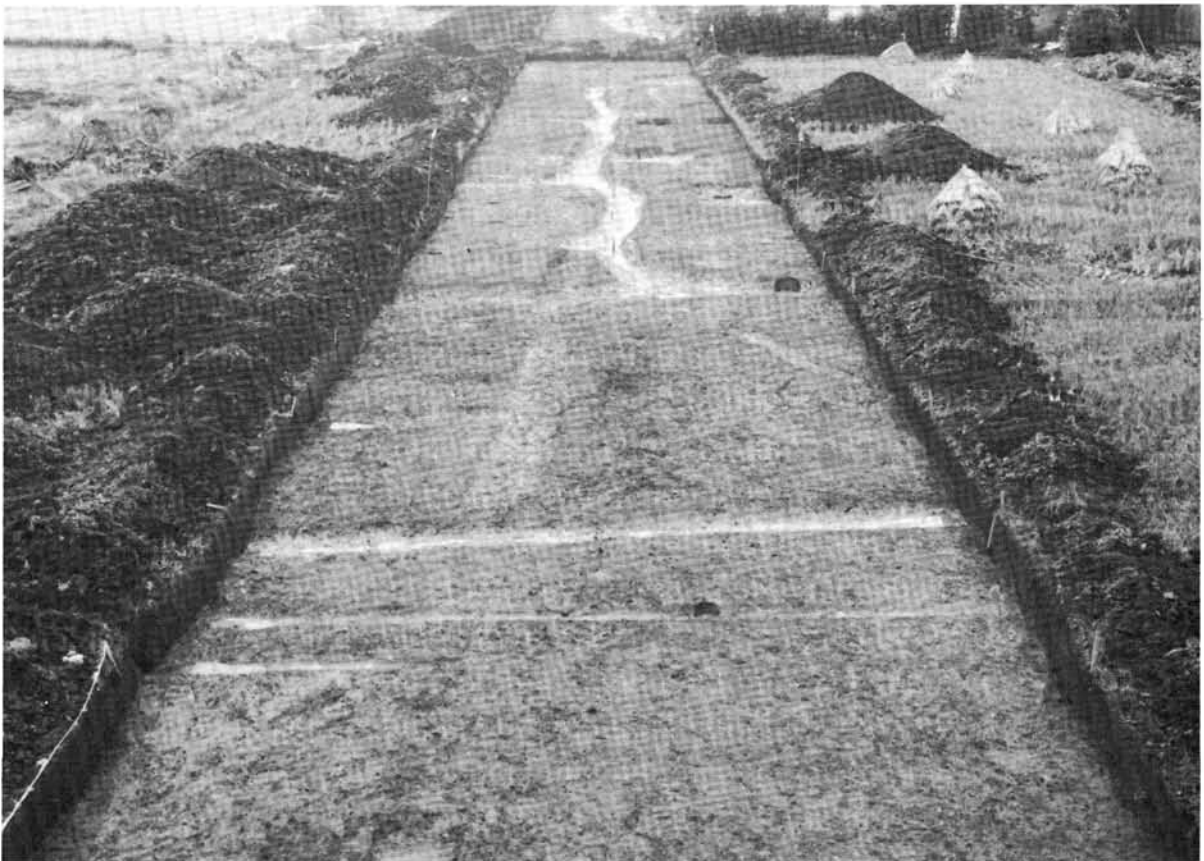
1

7

青磁片



遺跡遠景（南より）



SD1538・SD1535・SD1515（東より）

PL16

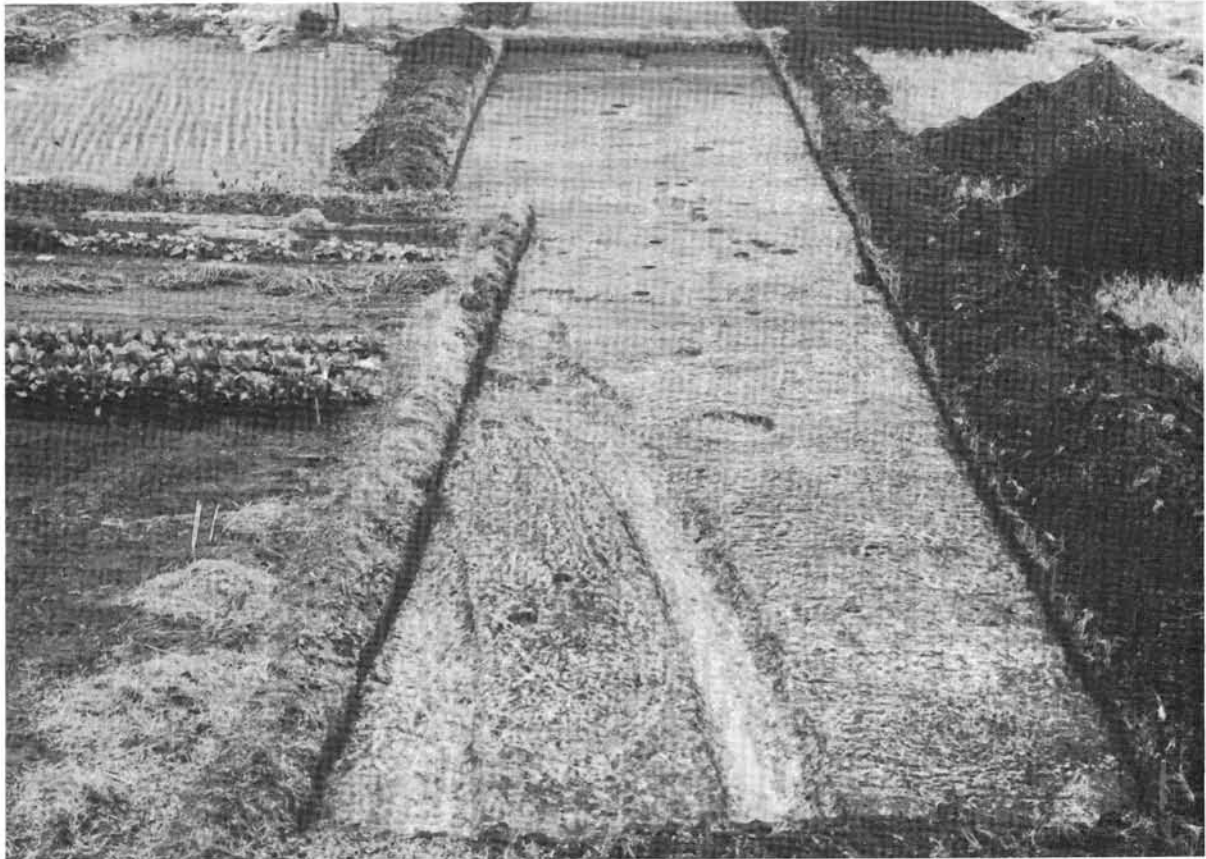
斎宮跡



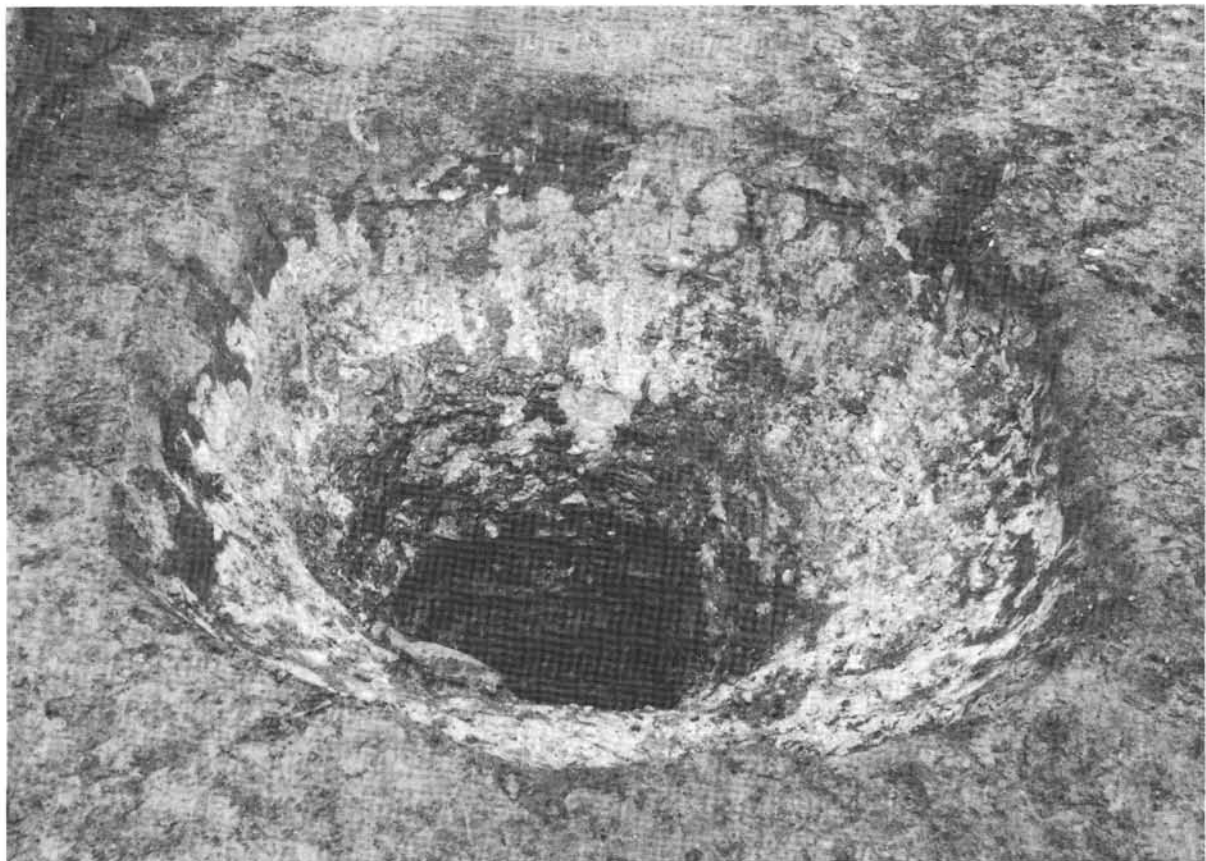
SD1515・SD1517 (西より)



SE1530・SK1528 (東より)



SD1504・SD1507 (西より)



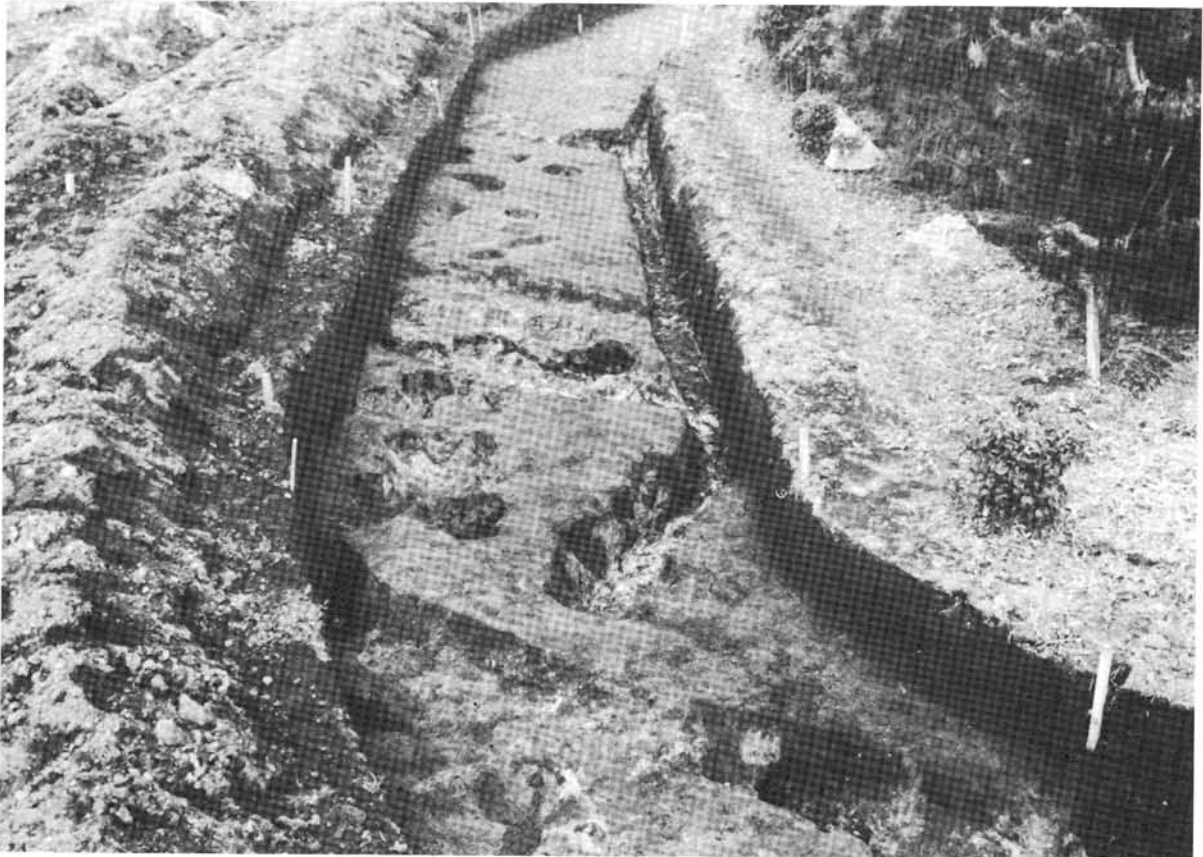
SE1530 (東より)



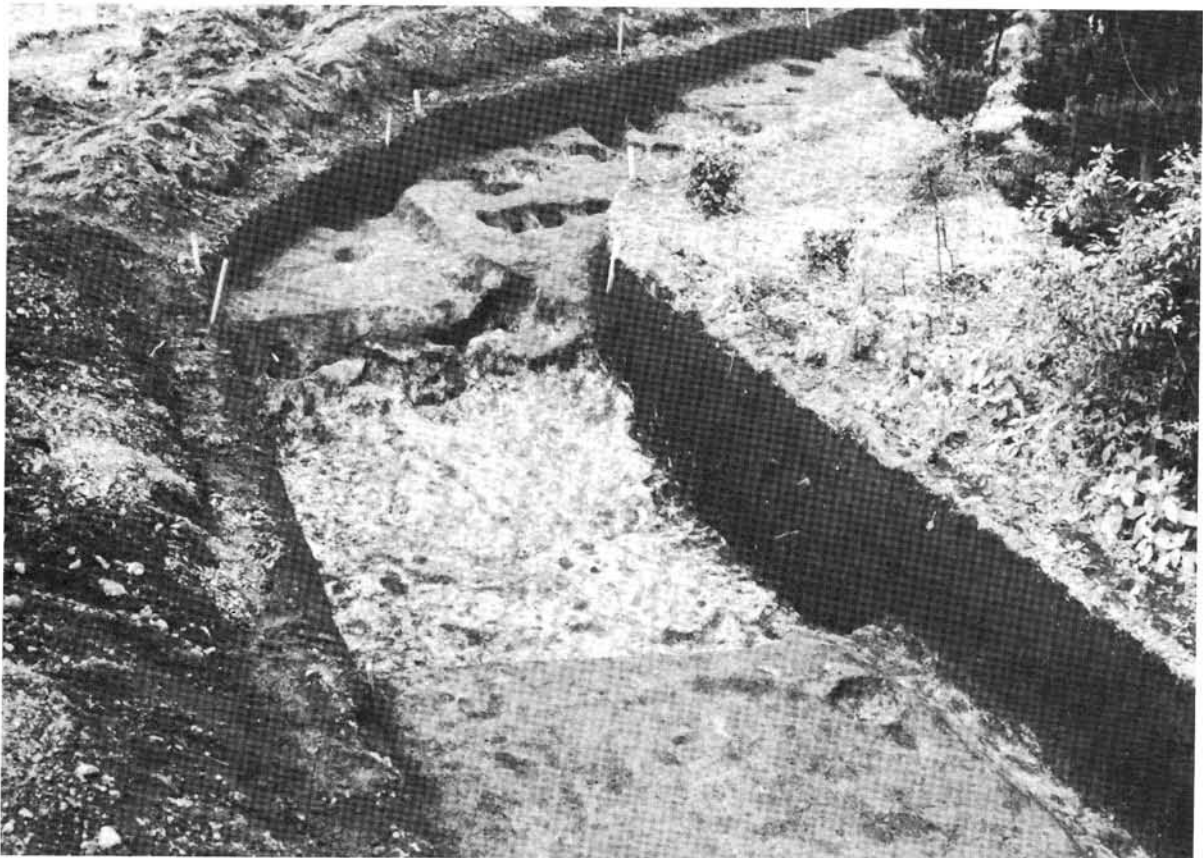
SD 1 (西より)



SD 1 遺物出土状況 (東より)



SD3・SD5・SD7 (南より)



SK8 (西より)

PL20

露越遺跡



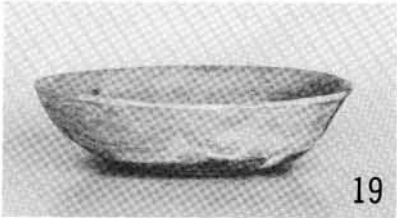
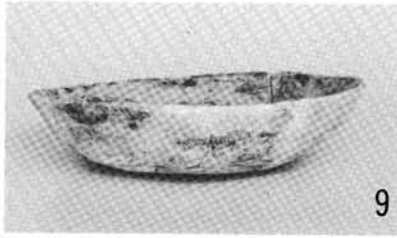
SE10 (西より)



SD20・SK22 (西より)

斎宮跡

PL21



露越遺跡



出土土器 (1 : 3)



14



15



16



24



27



22



23



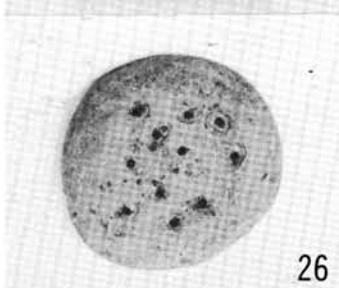
32



28



35



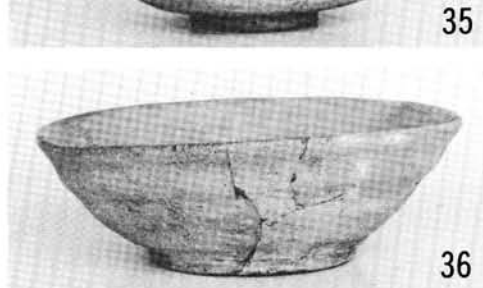
26



29



31



36



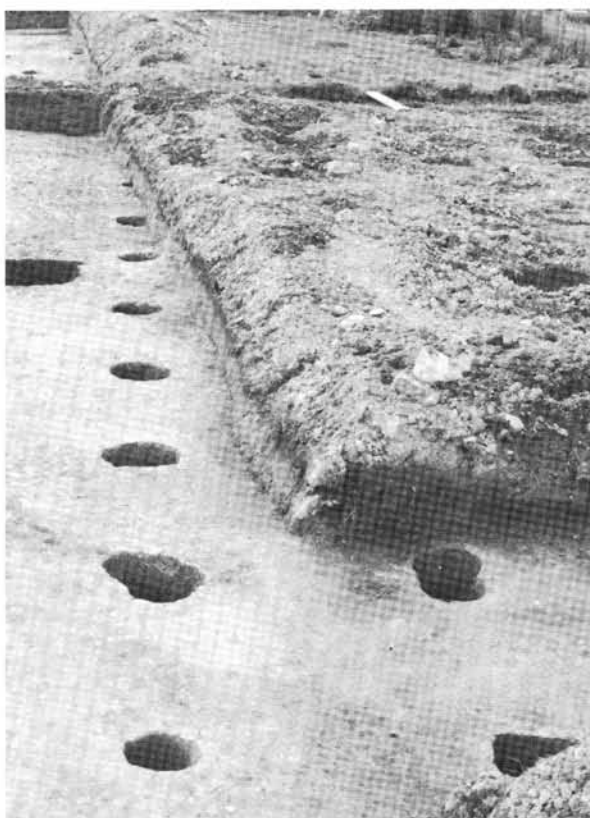
遺跡遠景（南上空より）



遺跡遠景（北東より）



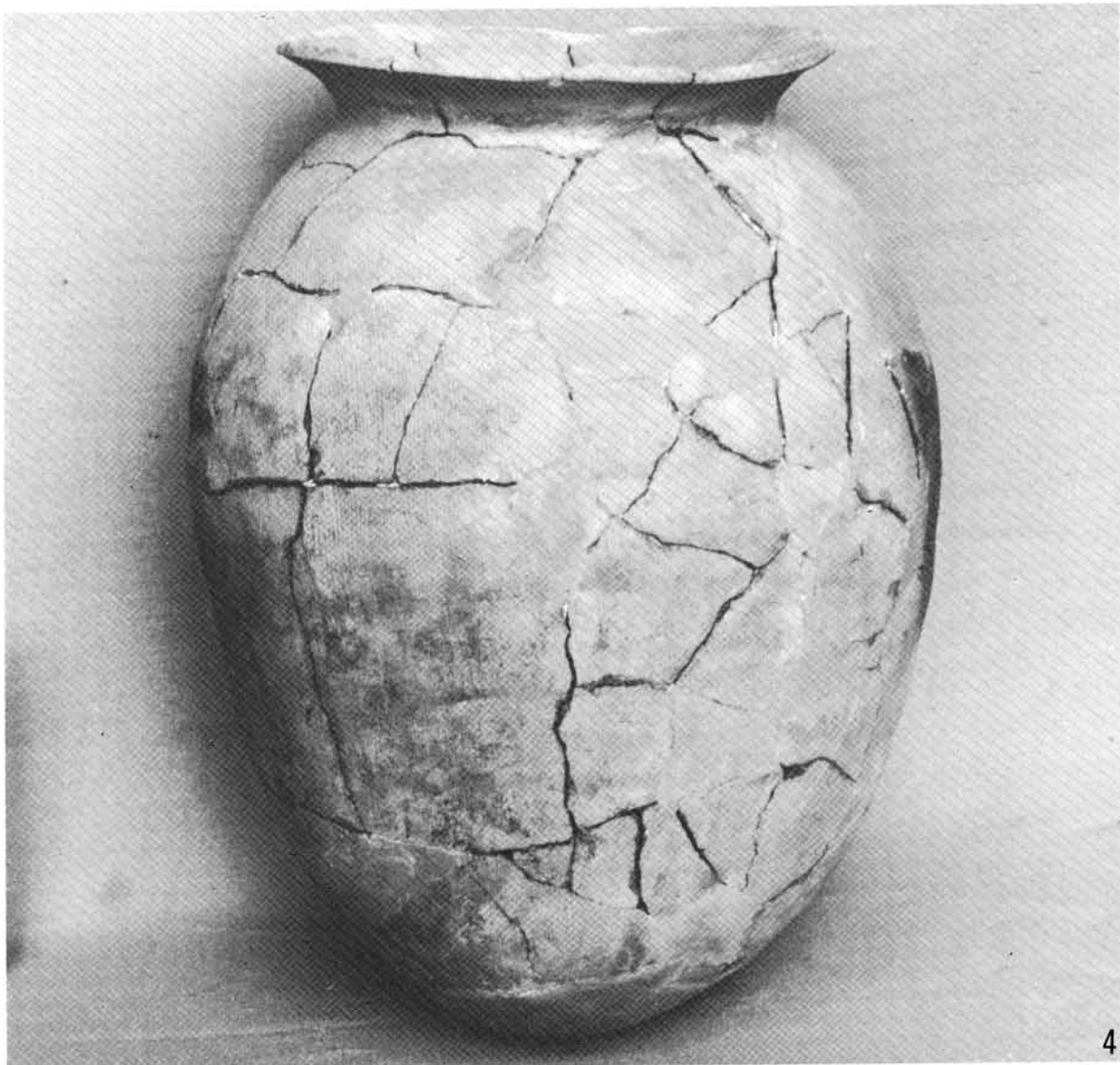
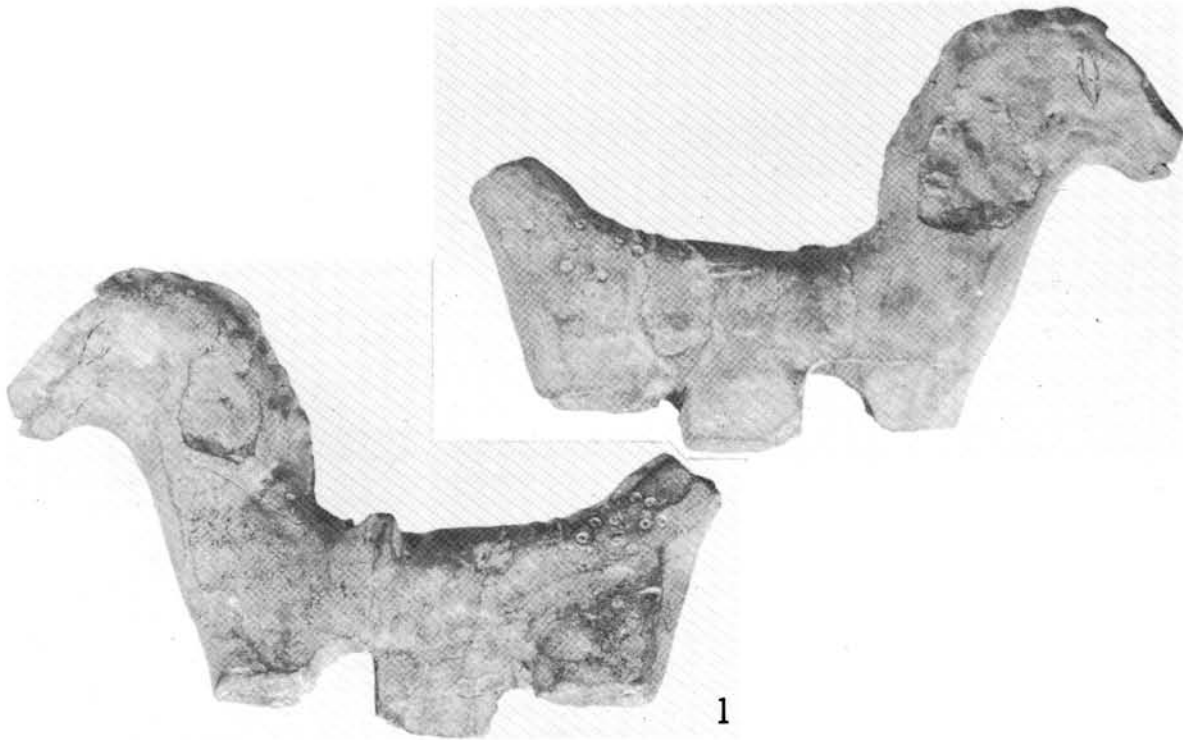
発掘区近景



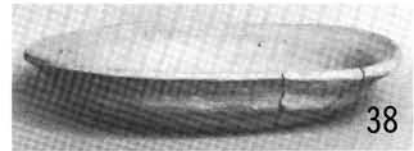
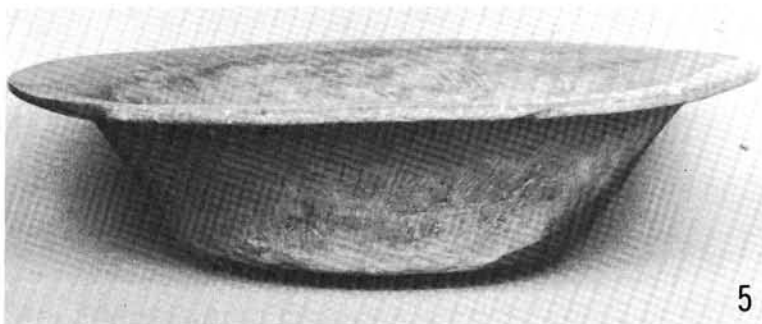
SB5



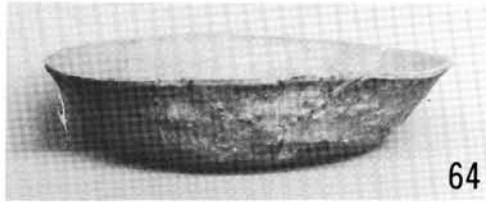
SD14発掘風景



SD14 出土土馬・土師器（1：3）



SD14 出土土師器 (1 : 3)



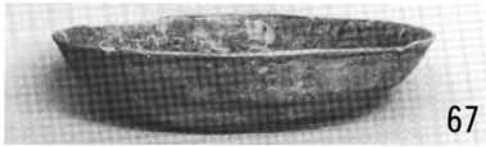
64



96



98



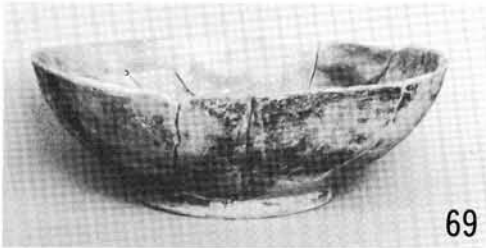
67



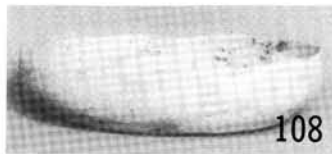
97



100



69



108



110



71



148



151



152



154



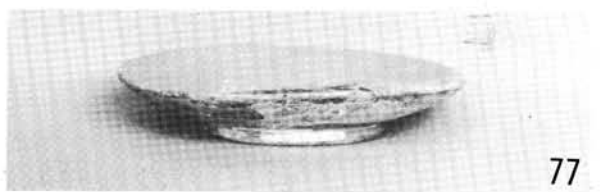
95



159



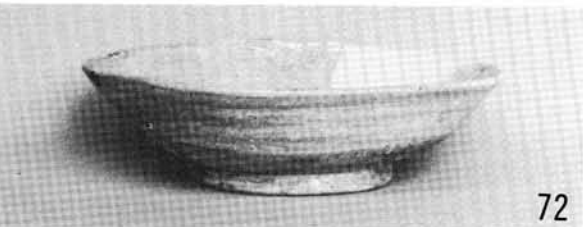
74



77



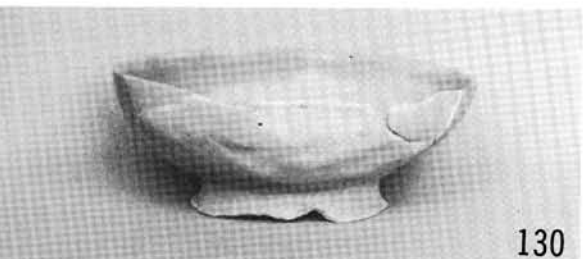
73



72



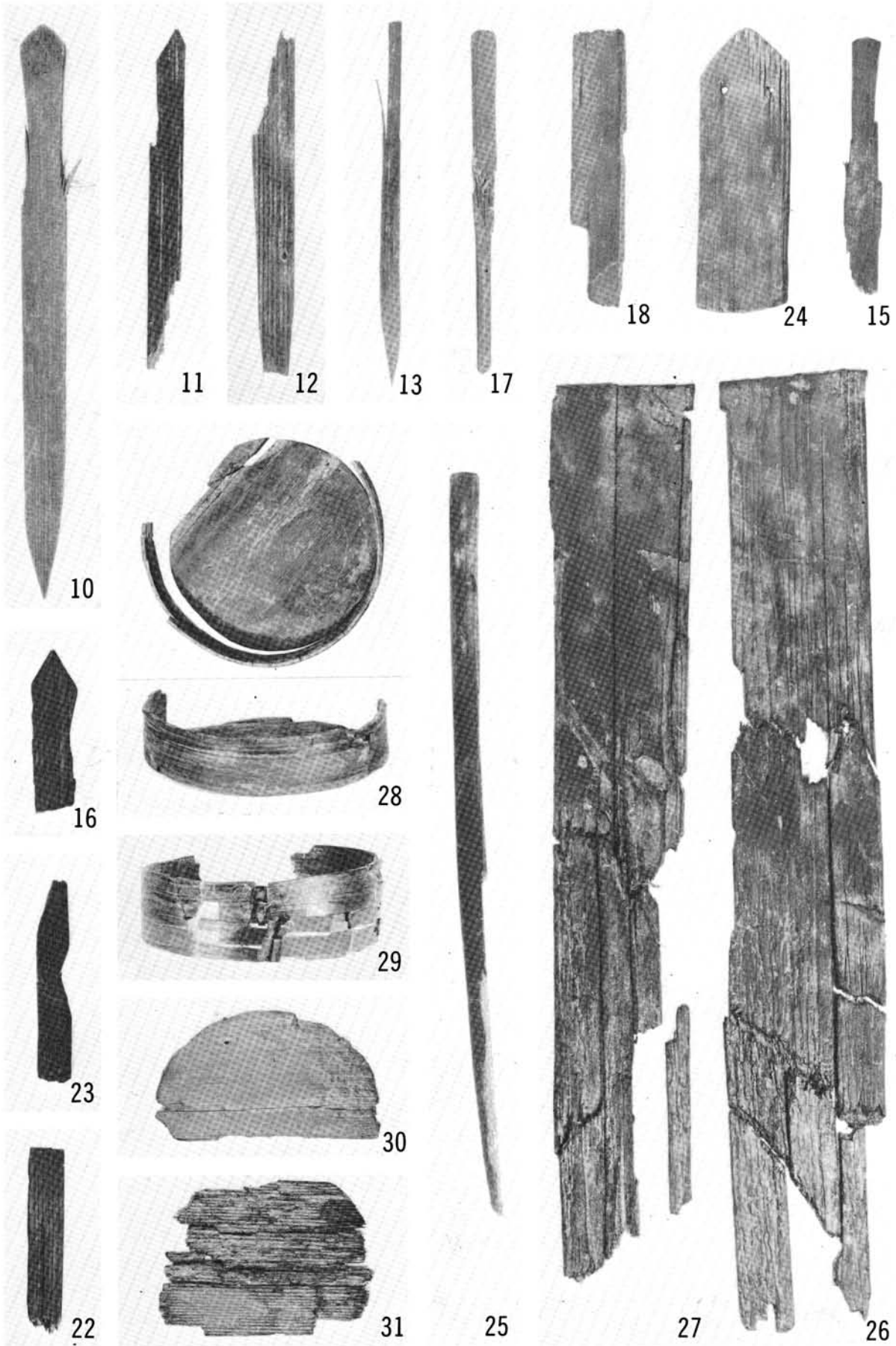
79



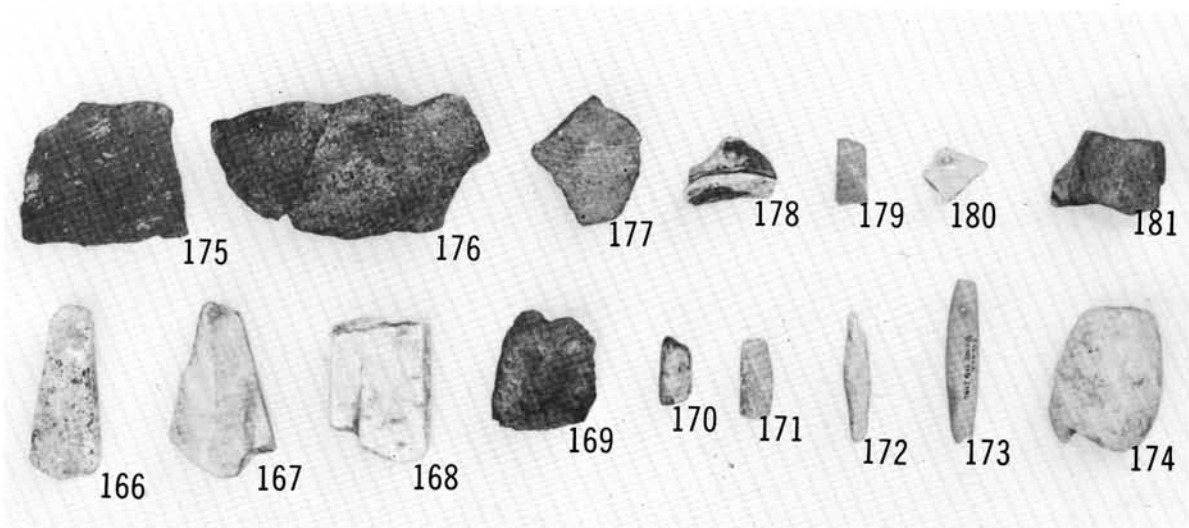
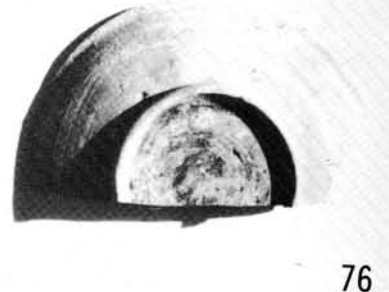
130

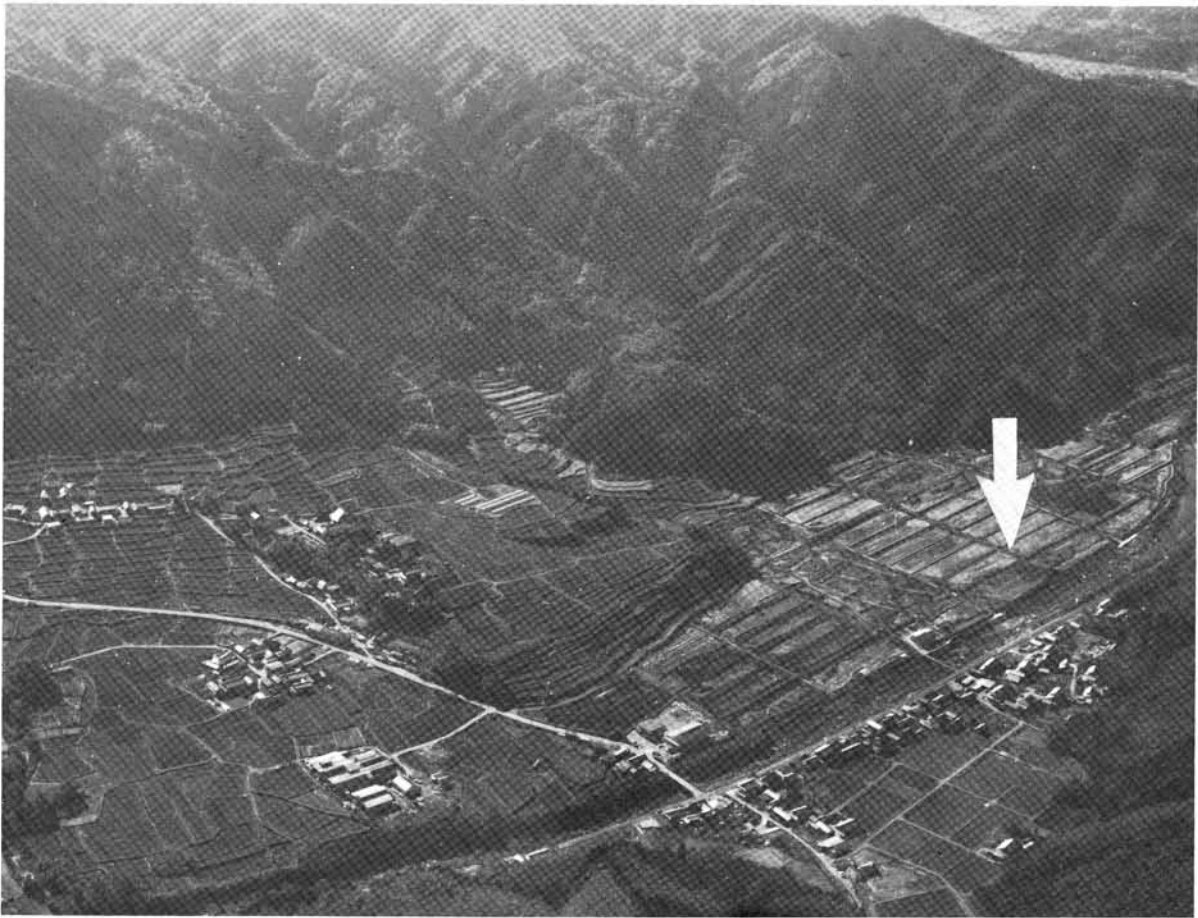


103



SD14 出土木製品 (1 : 3)





航空写真（北東から）



遺跡遠景（北から）



1号墳調査前近景（南から）



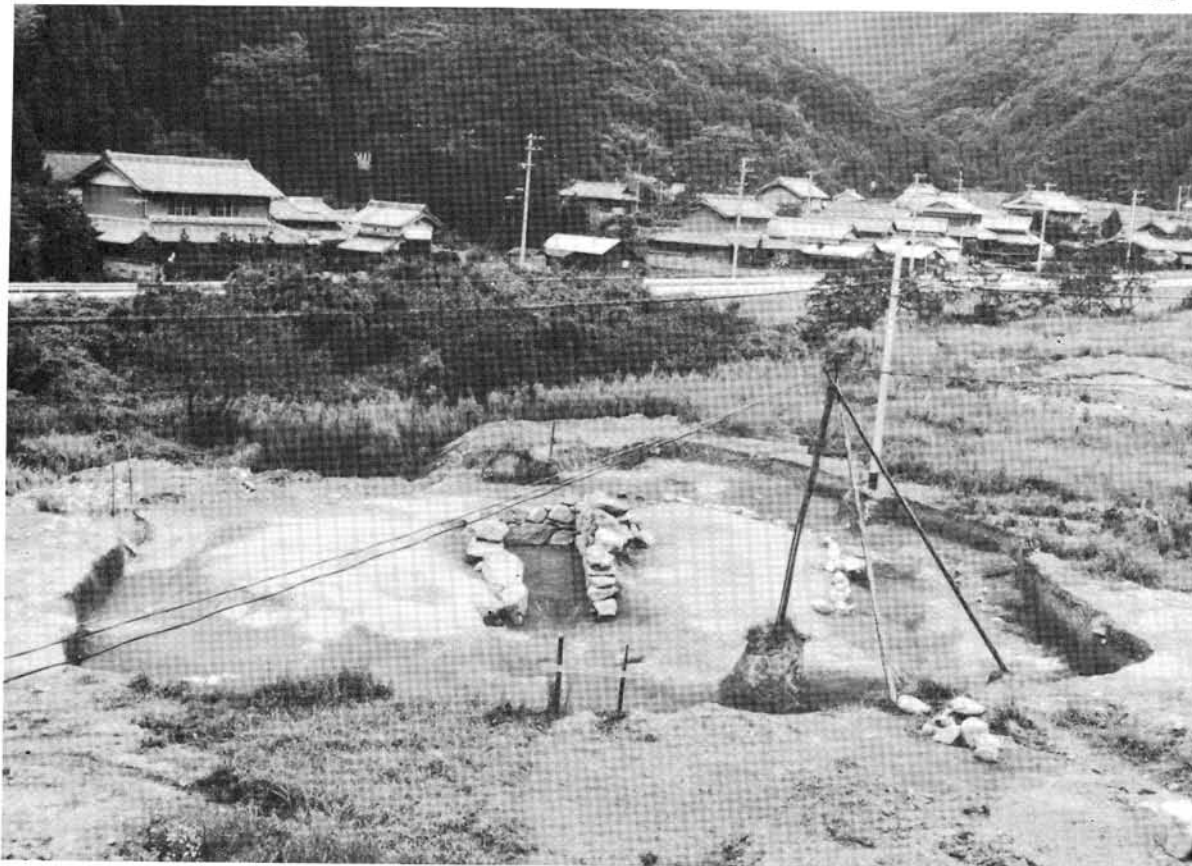
1号墳調査後近景（南西から）



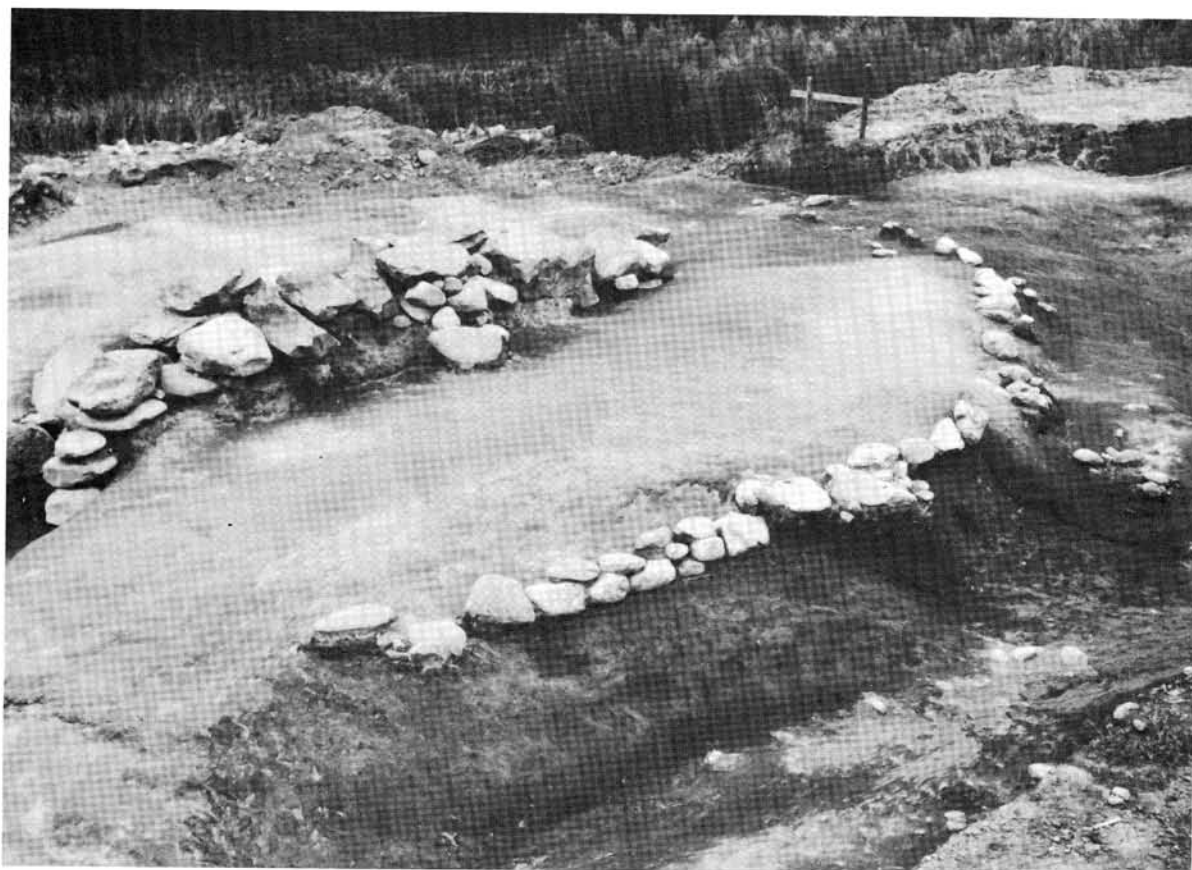
2号墳調査前近景（南から）



2号墳調査後全景（北から）



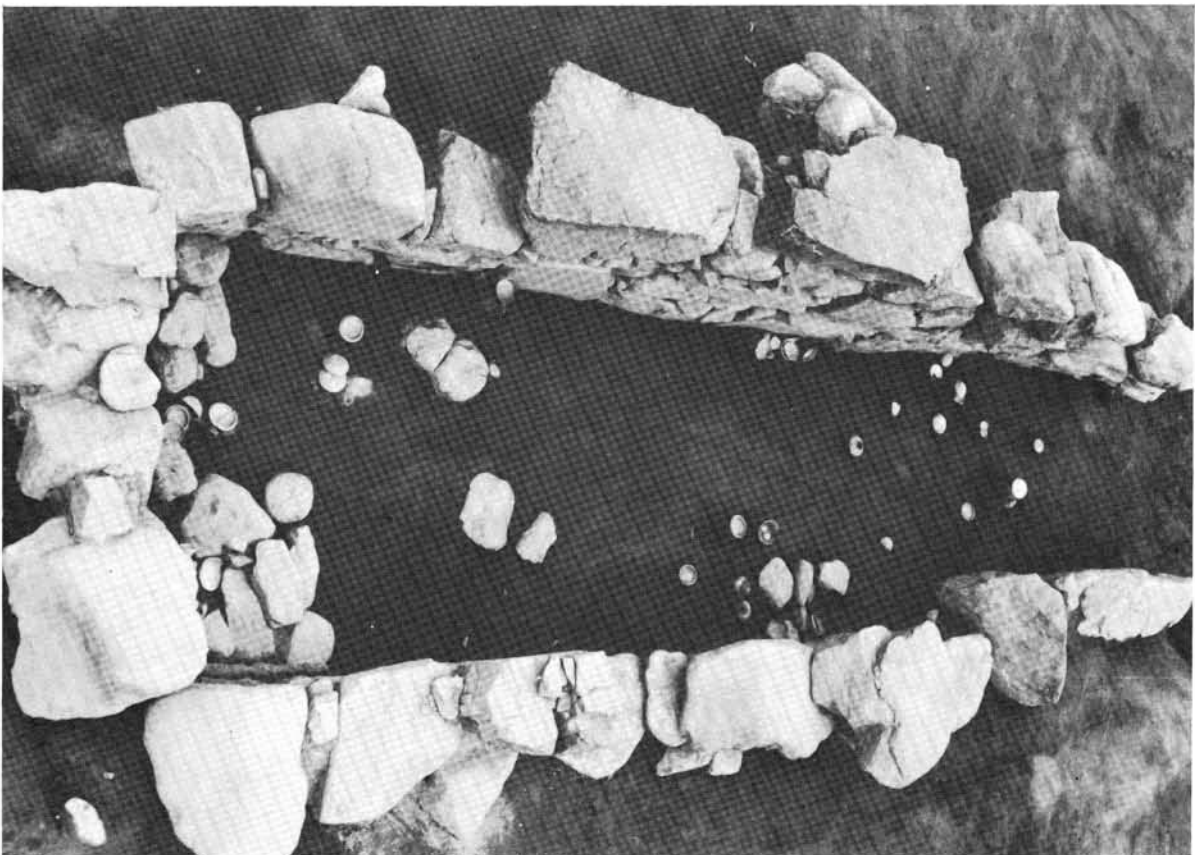
2号墳調査後全景（南から）



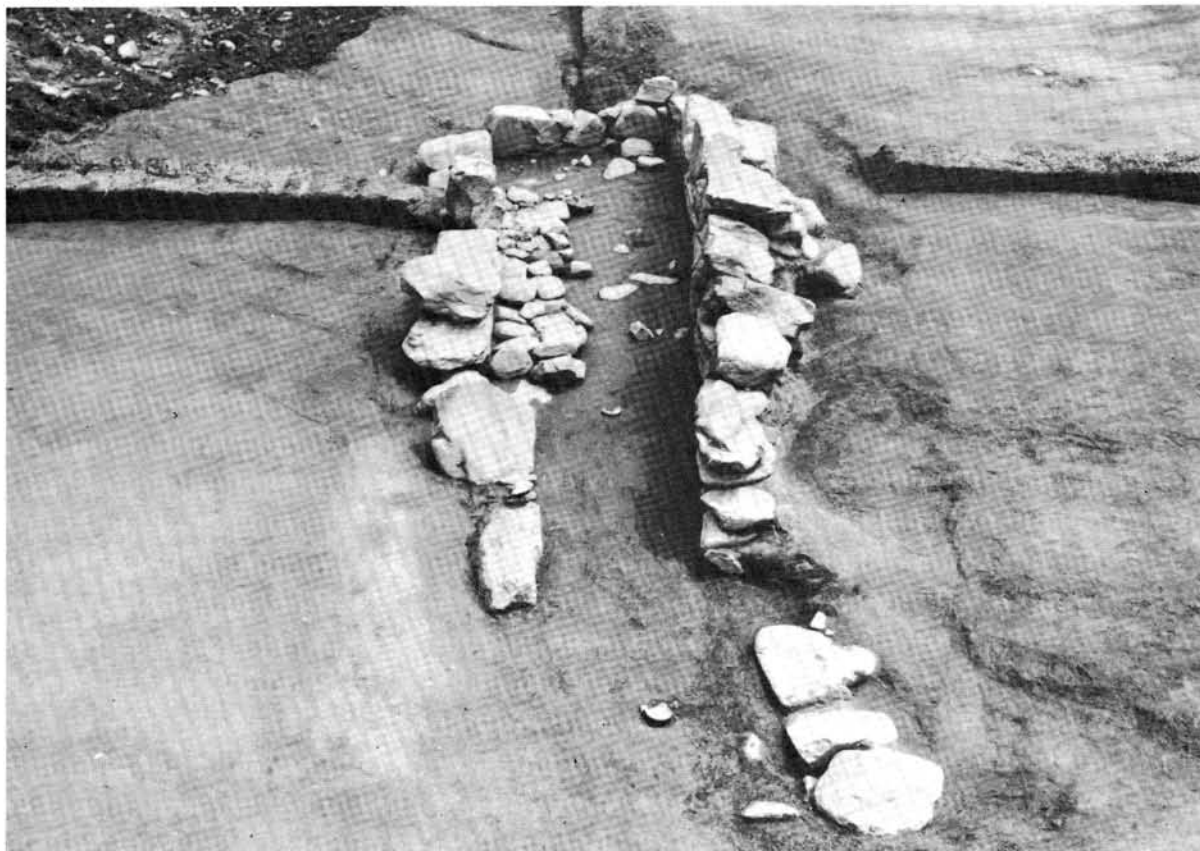
2号墳調査後近景（南東から）



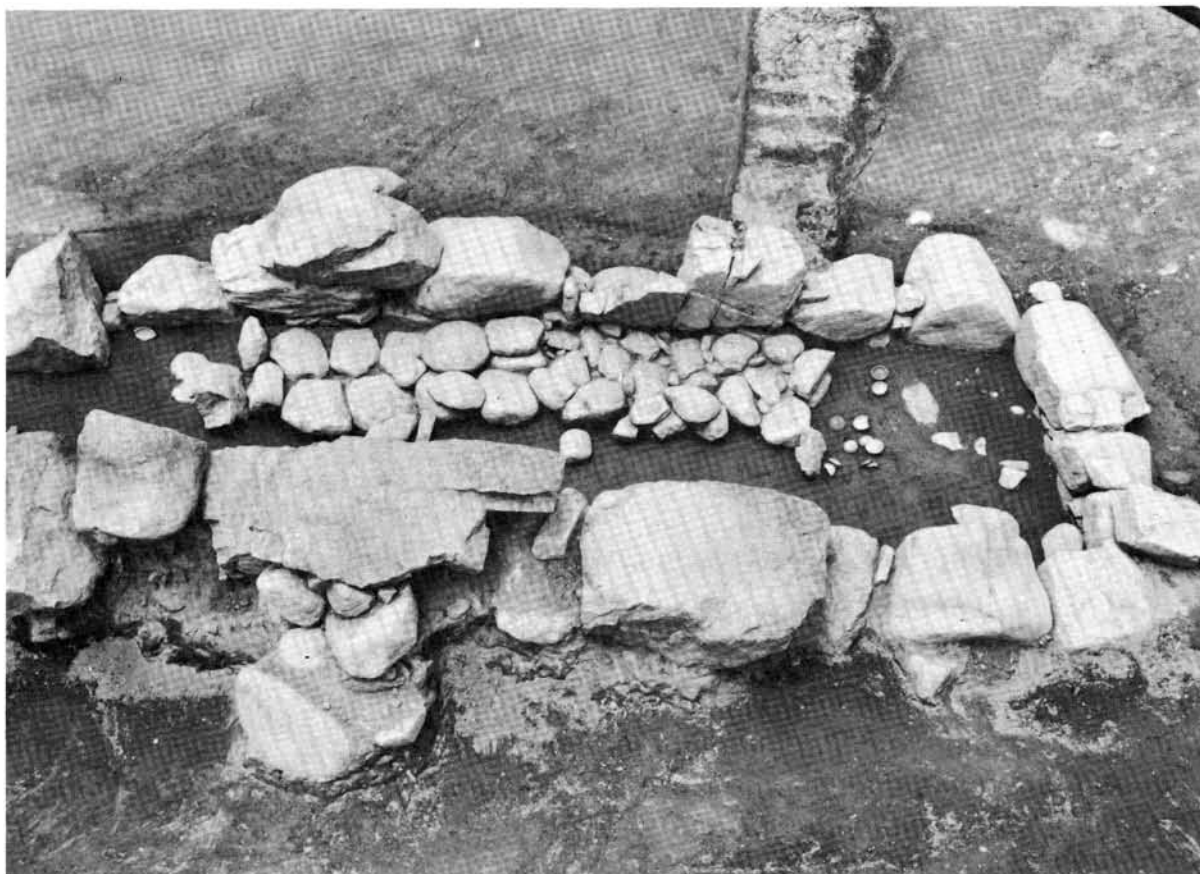
2号墳石室上層遺物出土状況（南から）



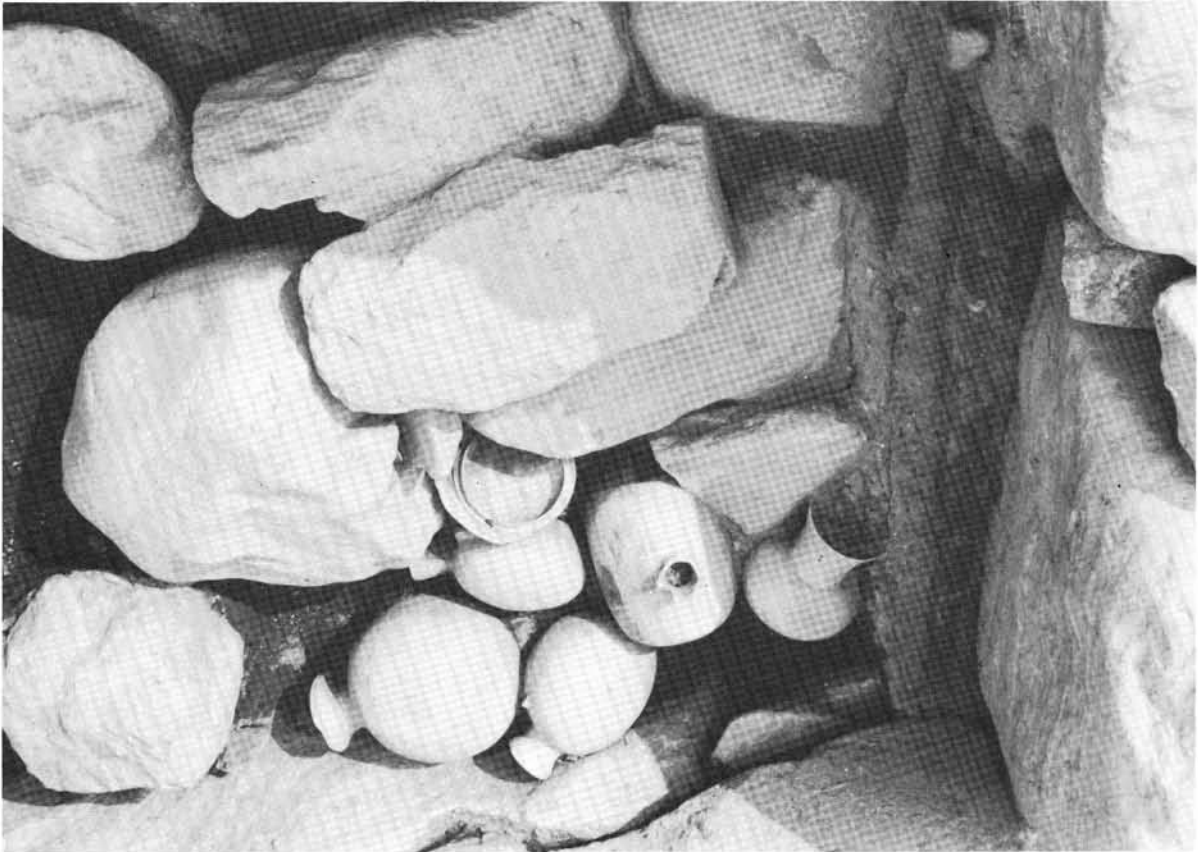
2号墳石室上層遺物出土状況（北から）



2号墳石室下層遺物出土状況（南から）



2号墳石室下層遺物出土状況（東から）



2号墳奥壁付近遺物出土状況



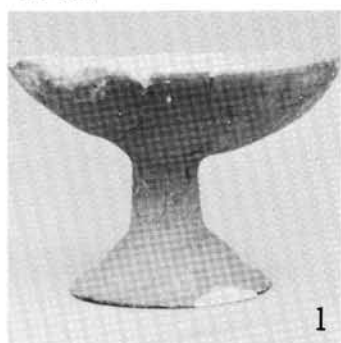
2号墳玄室遺物出土状況



2号墳側壁



2号墳羨道部分



1



6



16



2



7



17



3



8



18



4



9



19



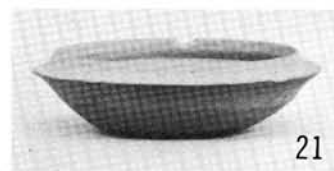
10



20



11



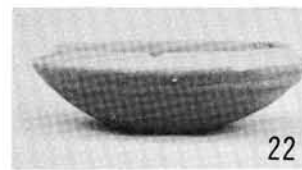
21



5



12



22



13



23



14



24

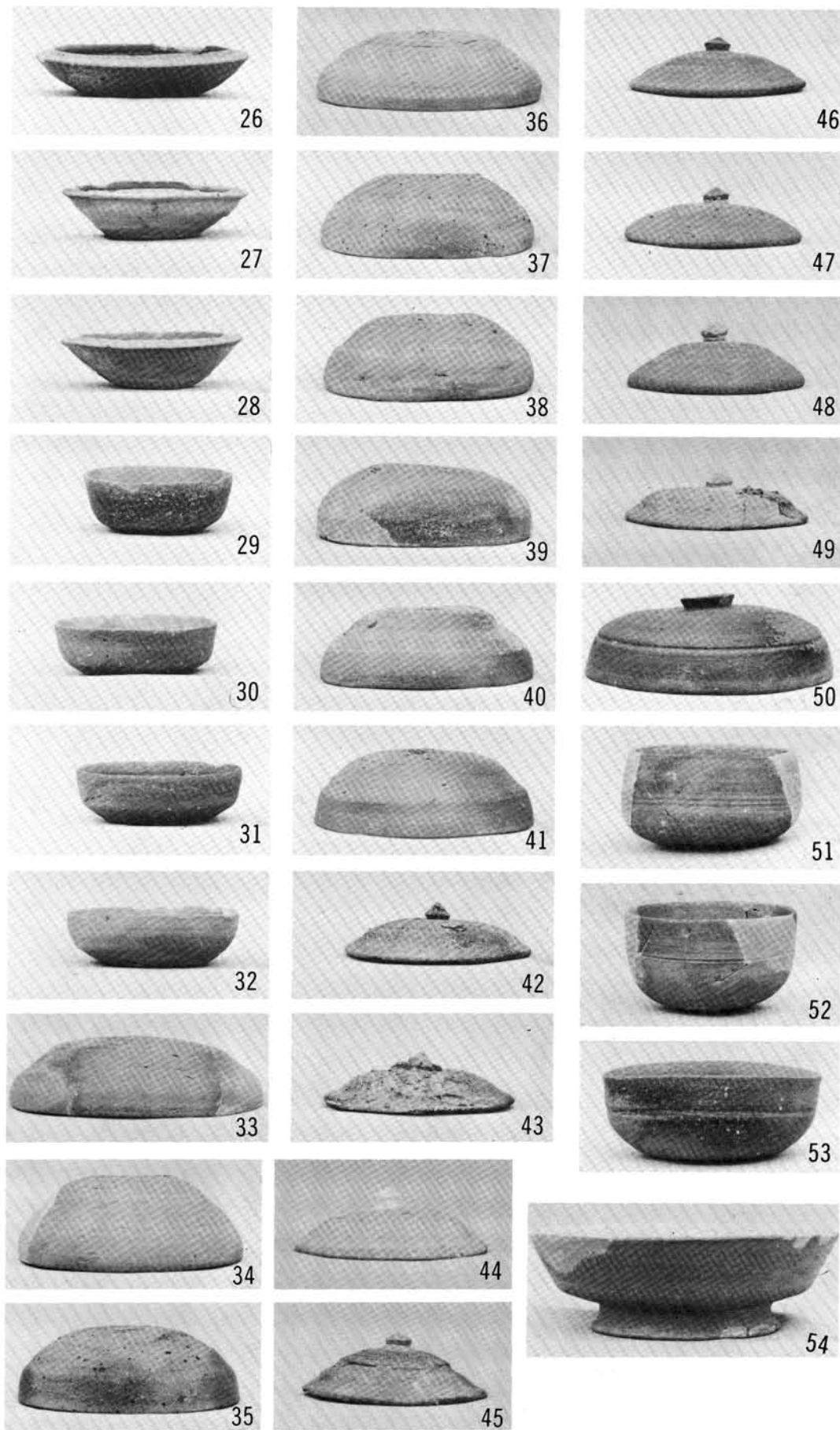


15

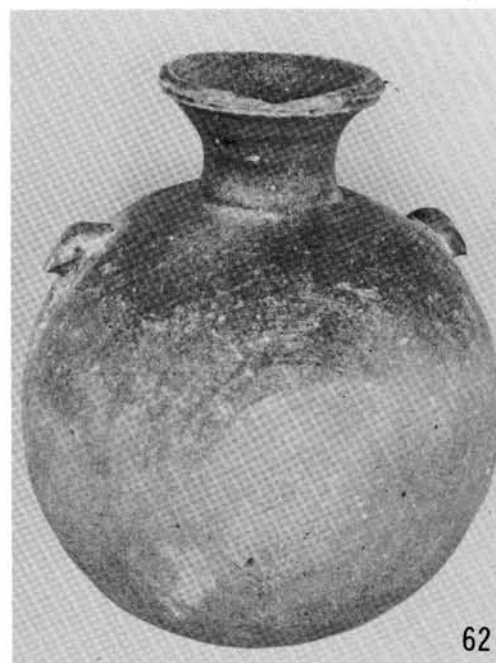
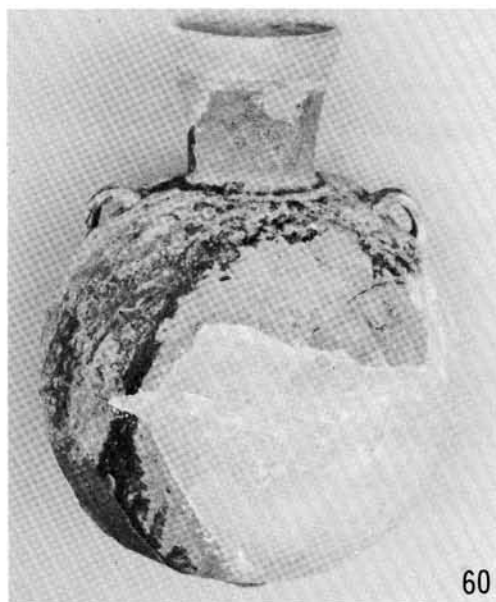
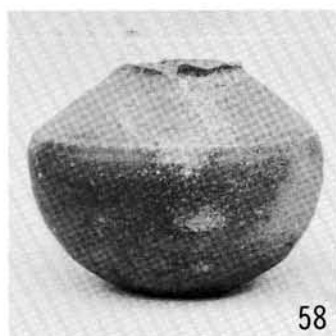


25

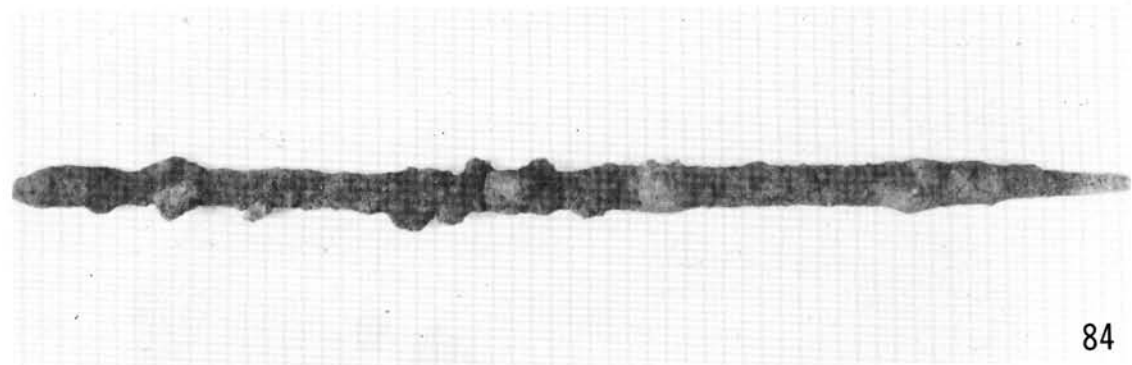
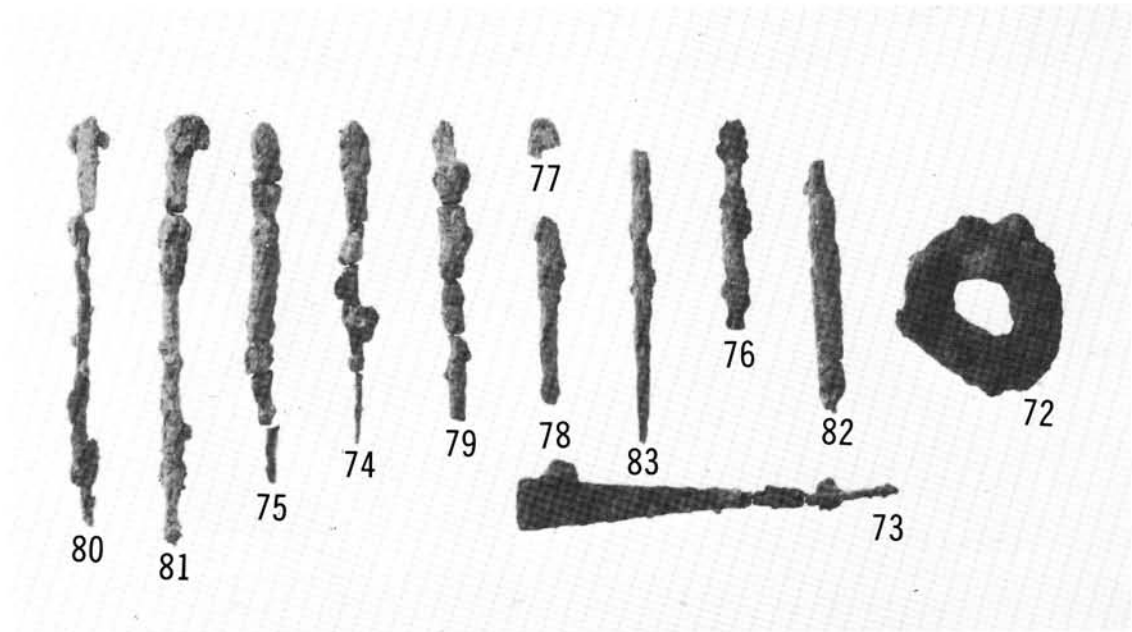
出土土器 (1 : 3) 1 ~ 5; 1号墳、6 ~ 25; 2号墳



2号墳出土土器(1:3)







2号墳出土土器・鉄器（1：3）



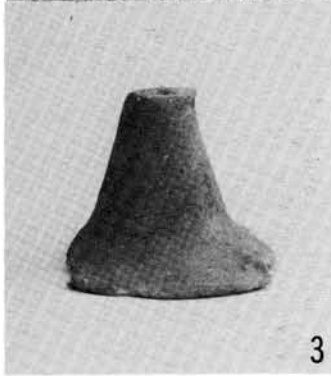
遺跡全景（西より）



調査区全景（南より）



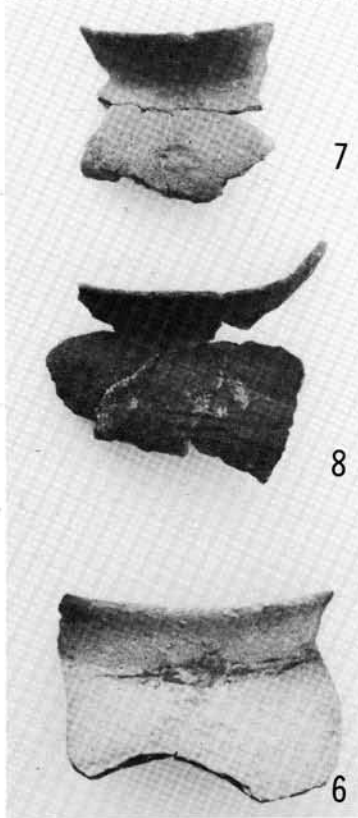
SK6 (南より)



3



5



7

8

6



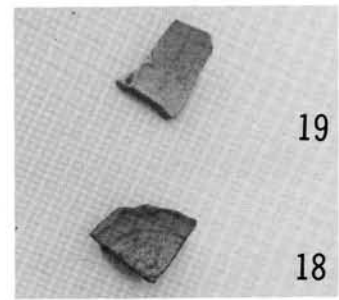
11



14



15



19

18

出土土器 (1/3)



上野西部航空写真（南から）



木津氏館跡航空写真（南から）



発掘風景（南東から）



発掘風景（西から）



北東隅発掘区全景（東から）



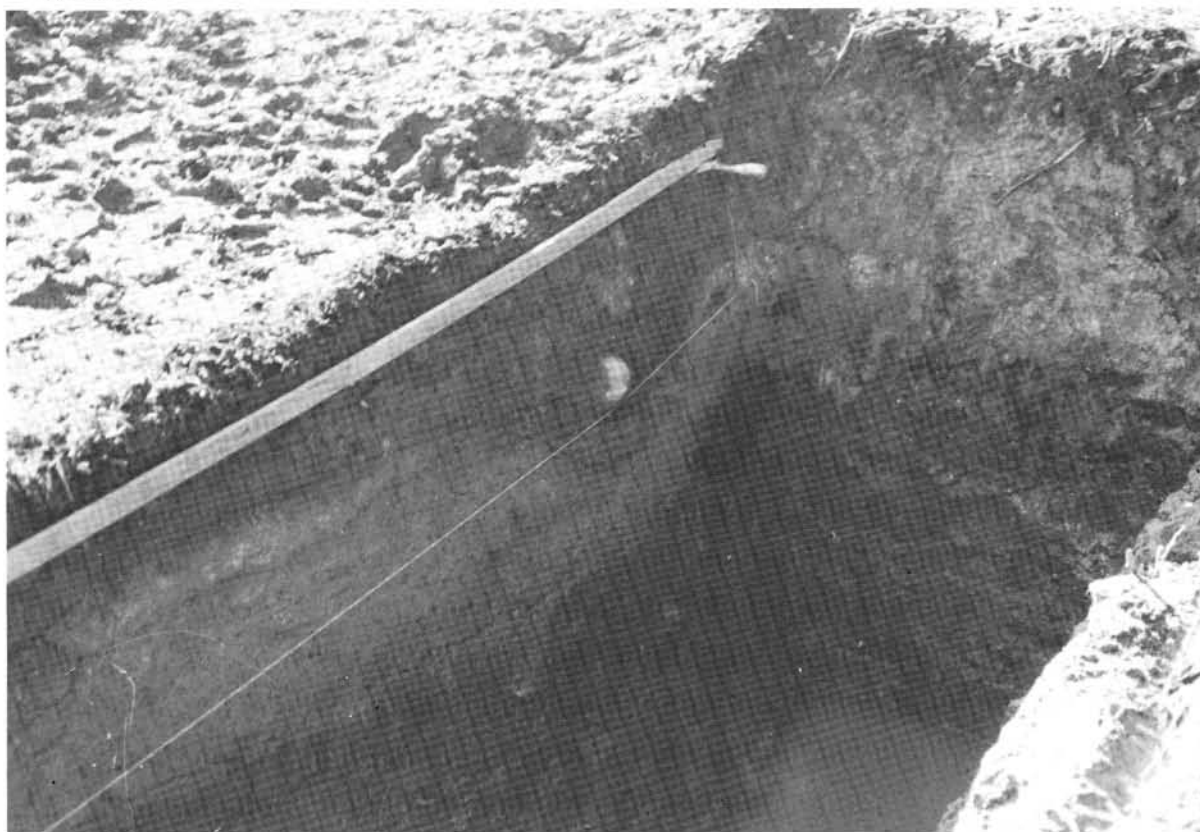
堰西端部南側（南東から）



堰東端部北側（北から）



堰東端部（南西から）



Aトレンチ (西から)



Fトレンチ (東から)



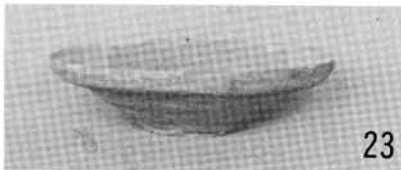
18



19



22



23



31



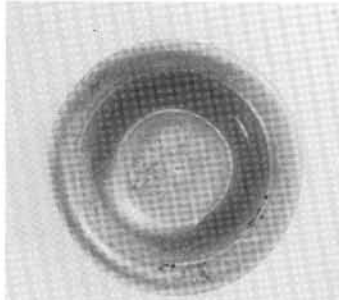
32



35



36



27



24



25



26



28



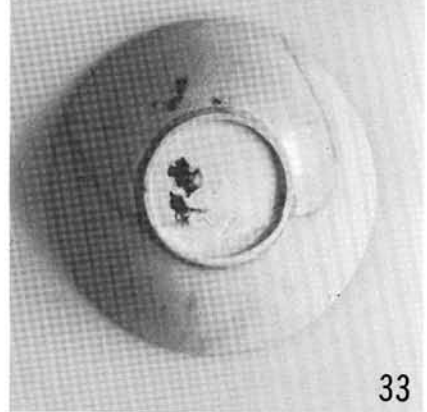
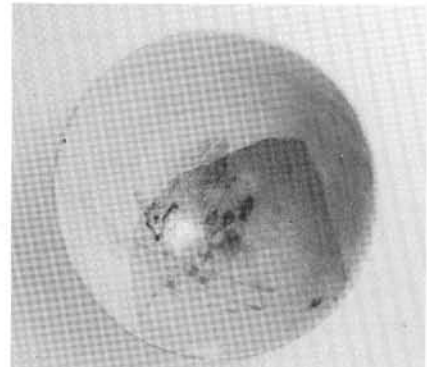
29



37



37



33



30



39



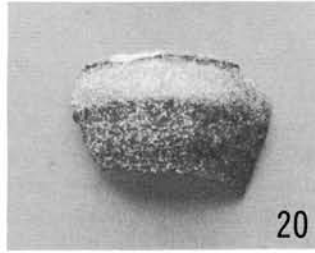
40



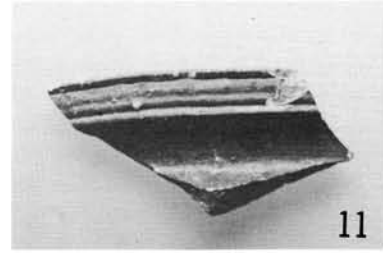
41



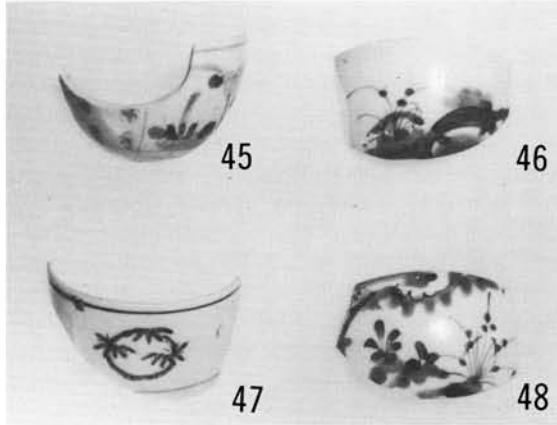
44



20



11



45

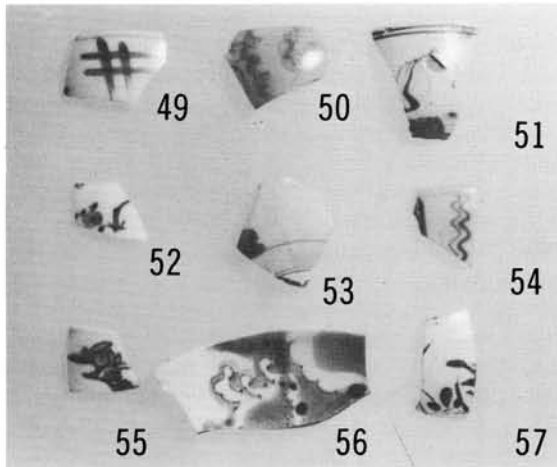
46

47

48



34



49

50

51

52

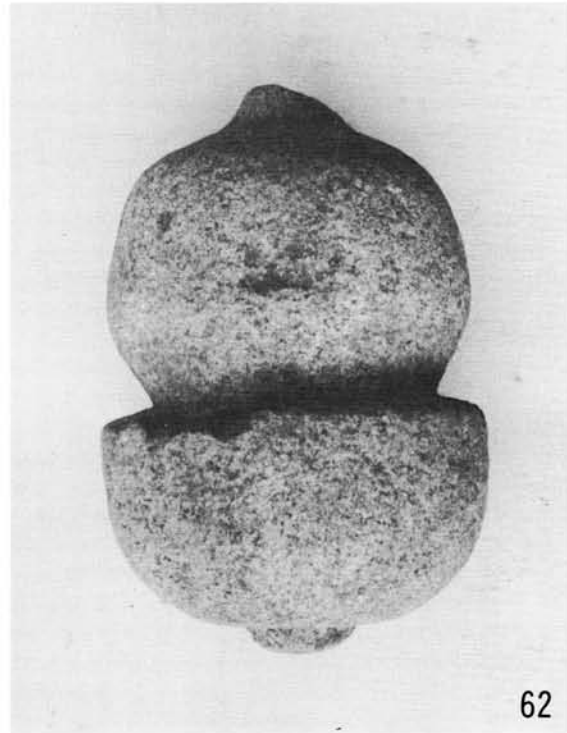
53

54

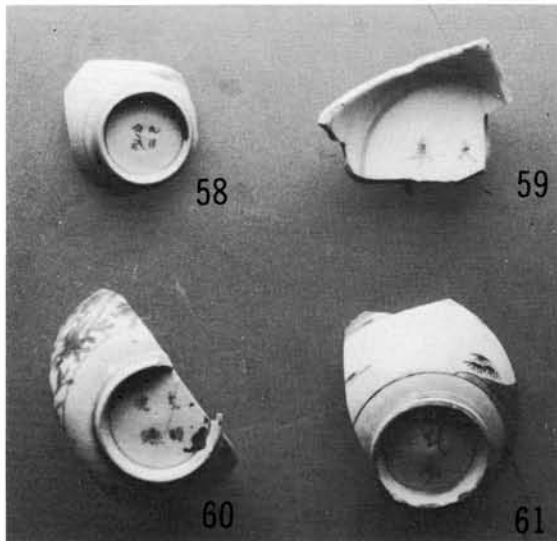
55

56

57



62

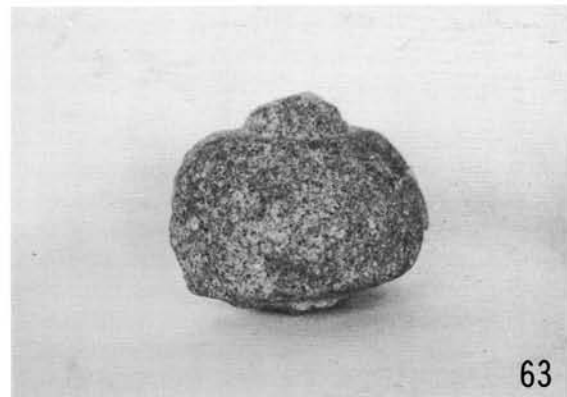


58

59

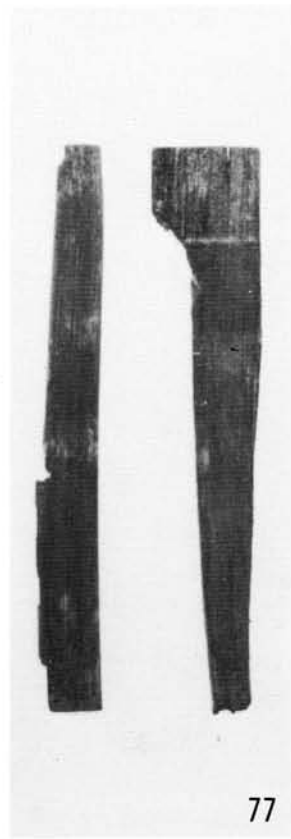
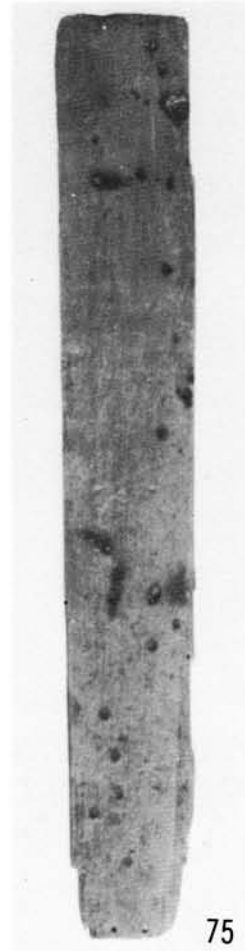
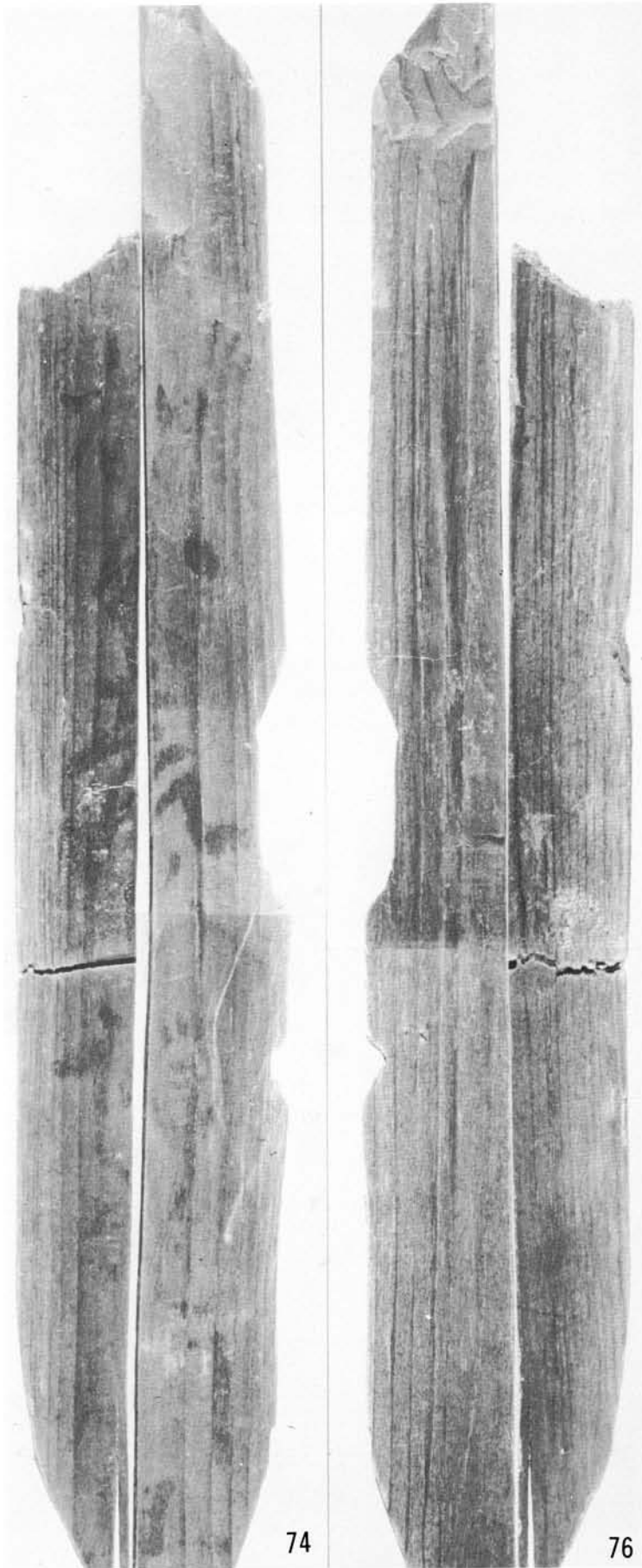
60

61



63

出土土器、五輪塔 (1 : 3)





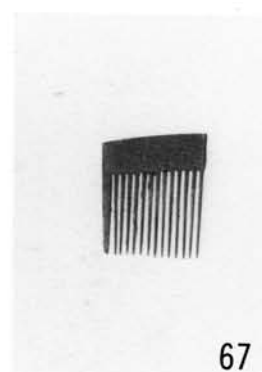
64



65



66



67



68



69



16



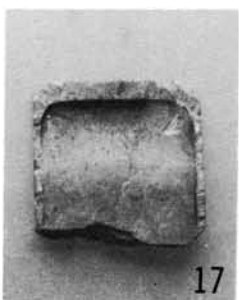
70



71



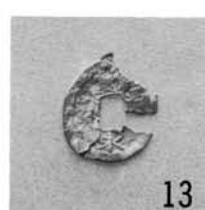
72



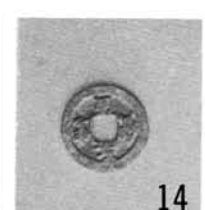
17



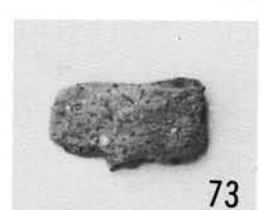
78



13



14



73

木製品、碗、古銭他



竹嶋氏館、神ノ木館跡航空写真（南西より）



調査前近景（西より）



発掘調査後全景（南より）



発掘調査後全景（東より）

PL56

神ノ木館跡



神ノ木館跡 SA25・SD31・SD36・SD37



SD31 土層断面



SD31・SD51



SB11・SB12・SB13



SB27



SB33



SK7 (西より)



SK10 (北より)



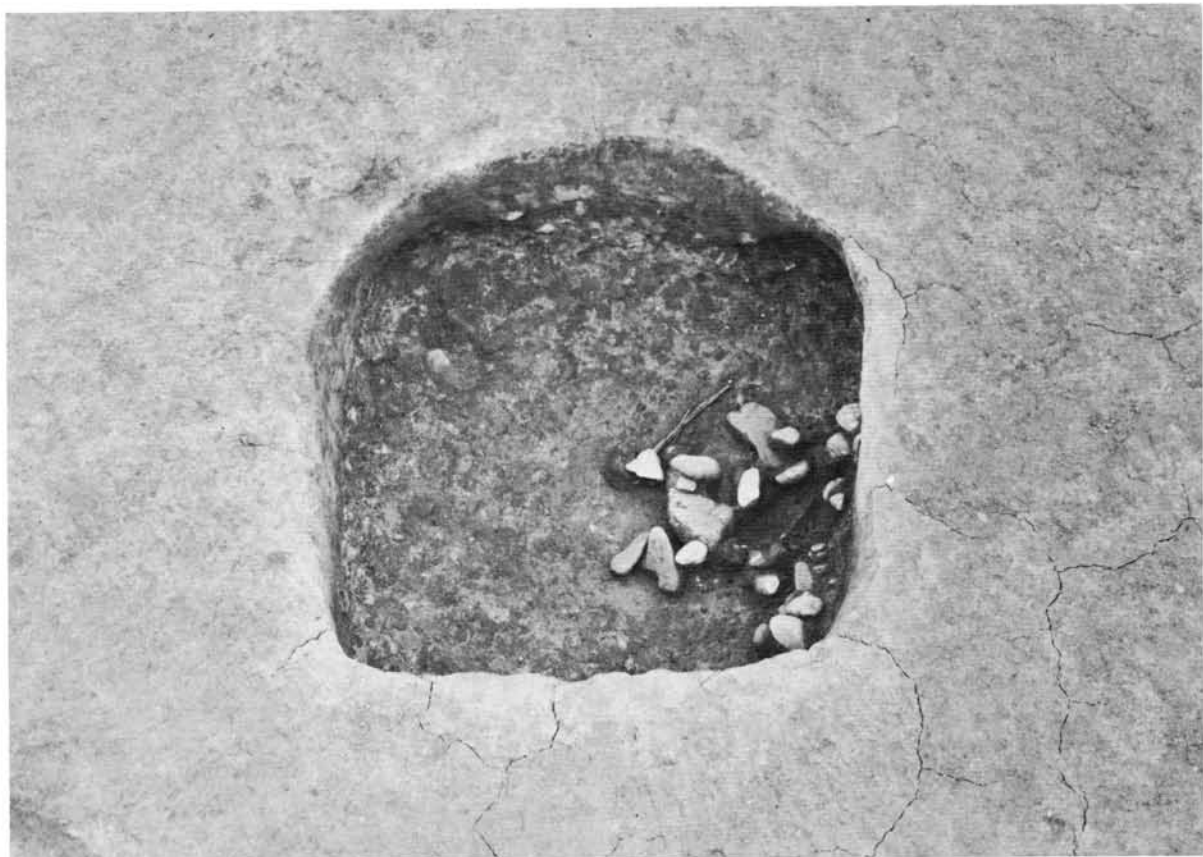
SE32



SE55



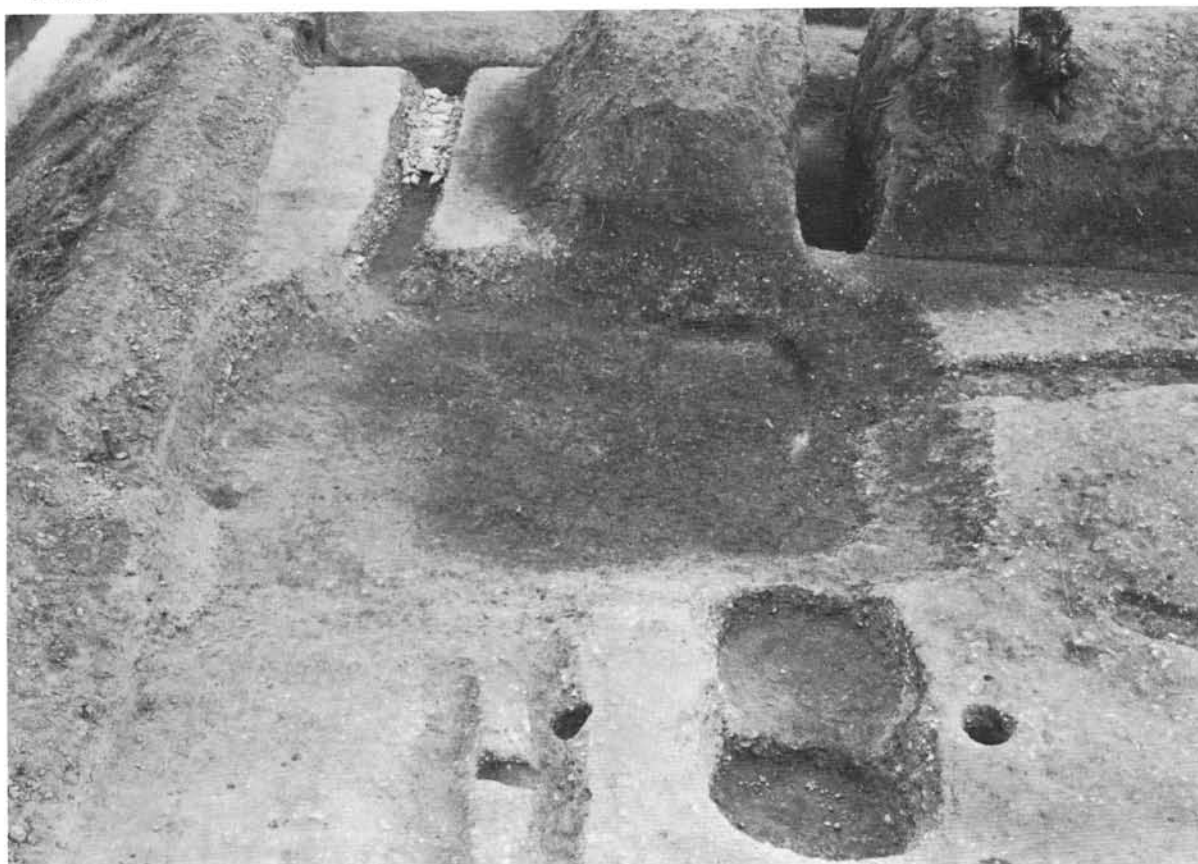
SE45 (西より)



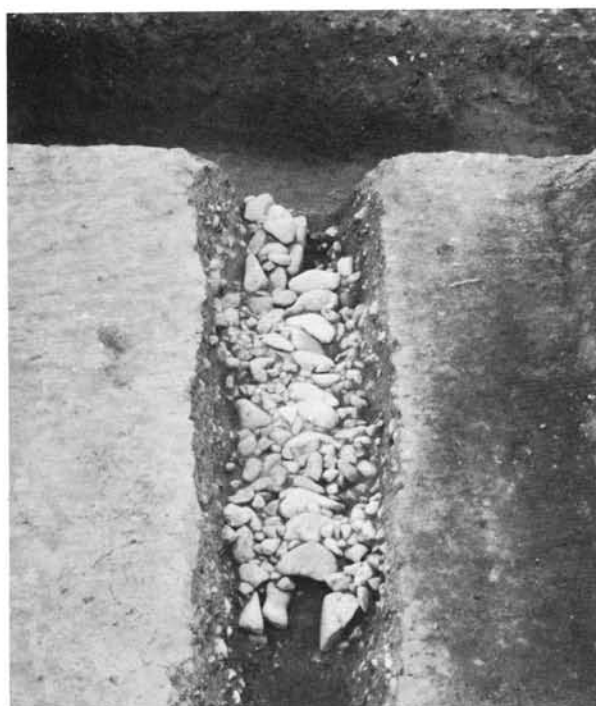
SK41 (南より)

PL62

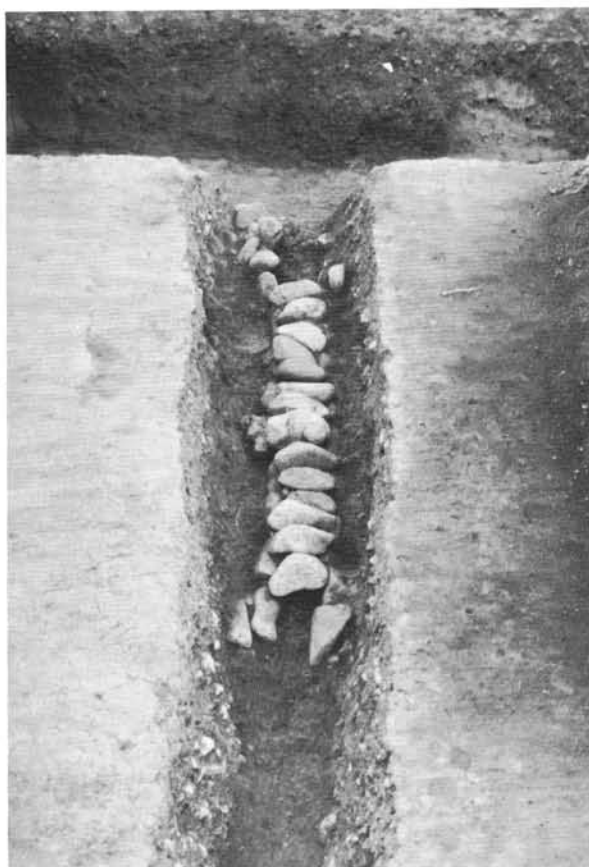
神ノ木館跡



SP22・23 SD24



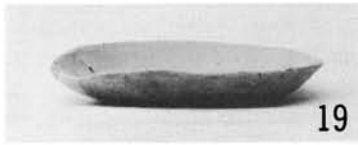
SD24 詰石の状況



SD24 詰石除去後

神ノ木館跡

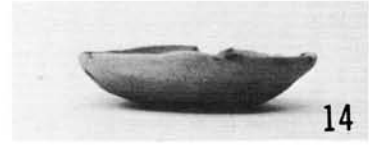
PL63



19



21



14



20



26



23



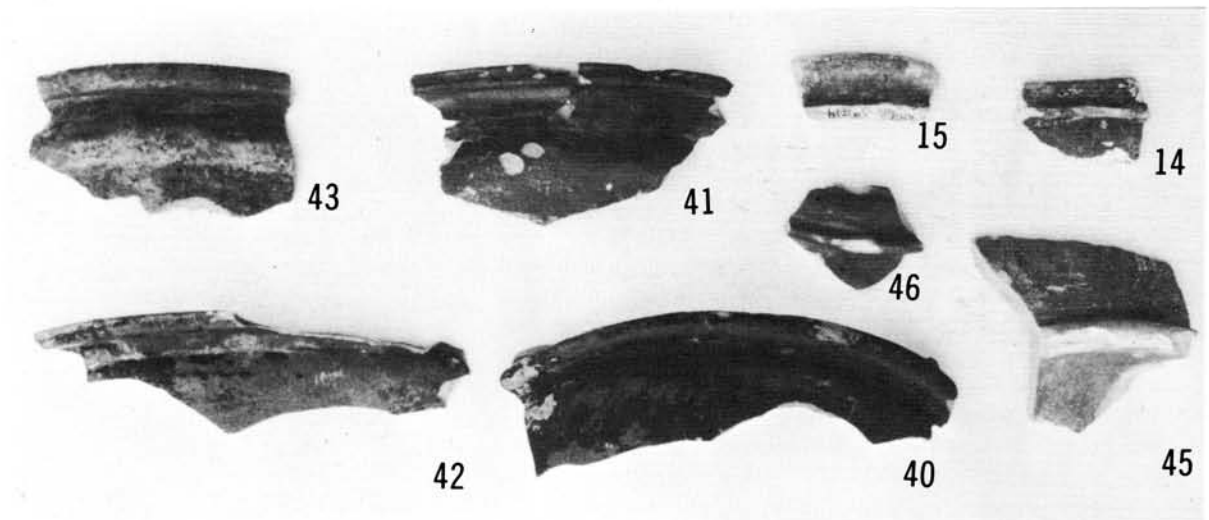
66



96



58



43

41

15

14

46

42

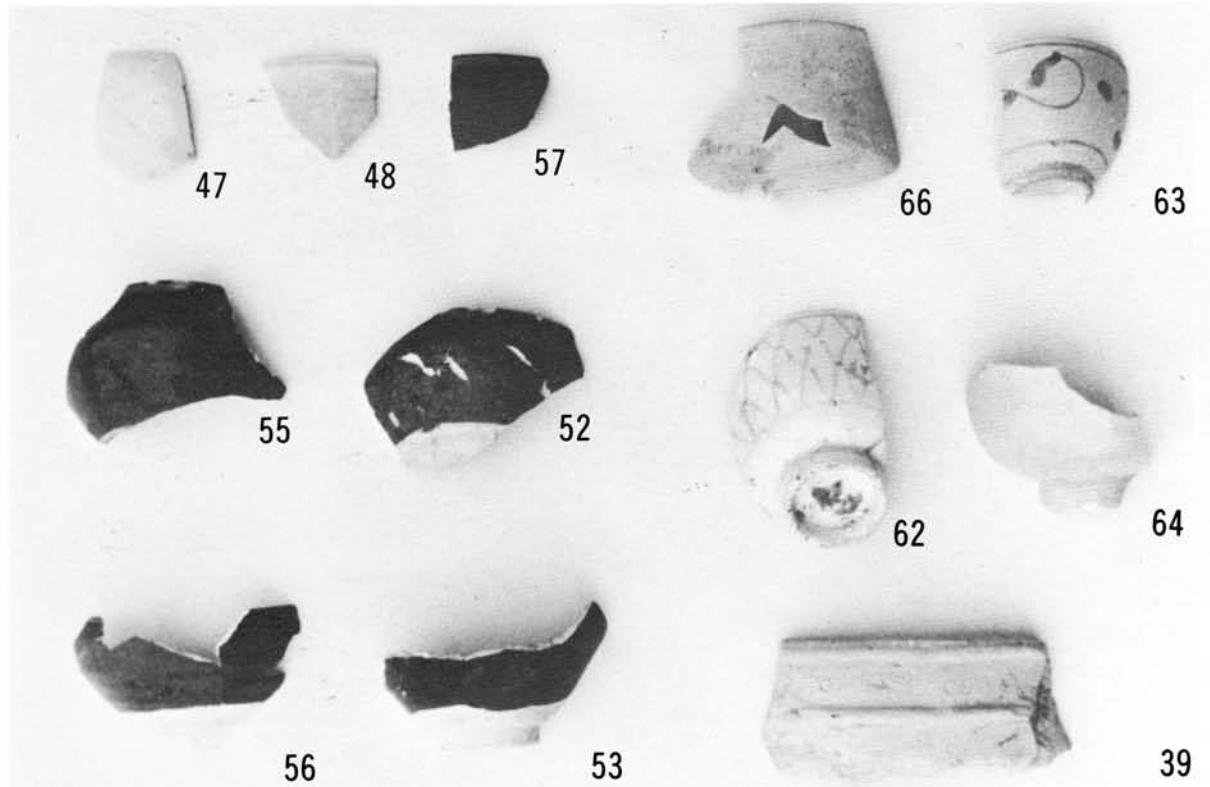
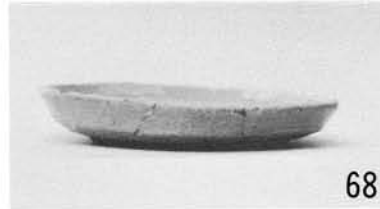
40

45

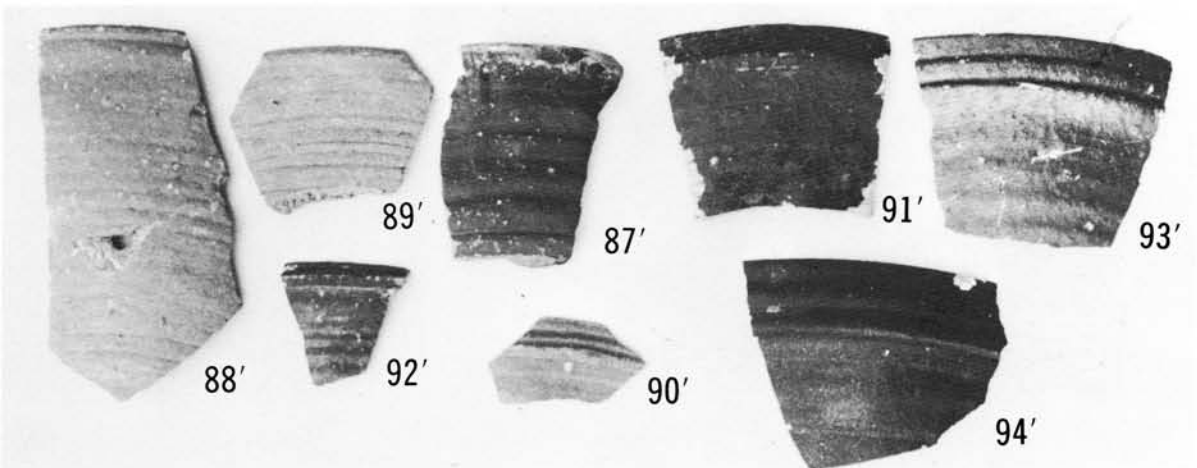
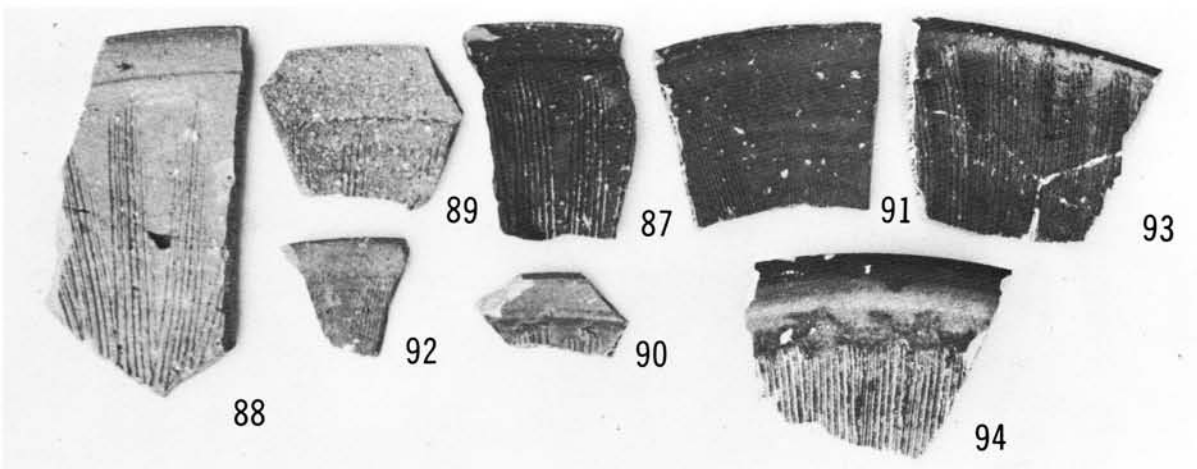
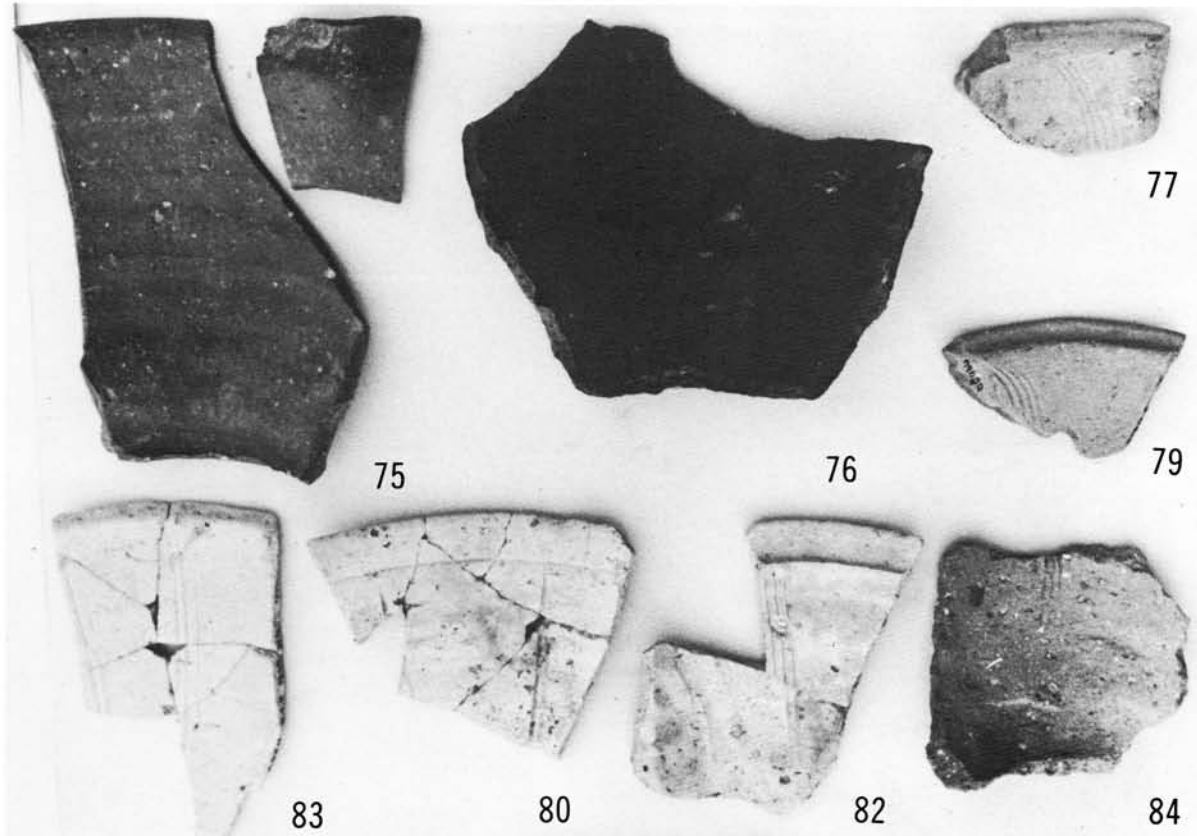
土師器・瓦質土器・陶器 (1/3)

PL64

神ノ木館跡

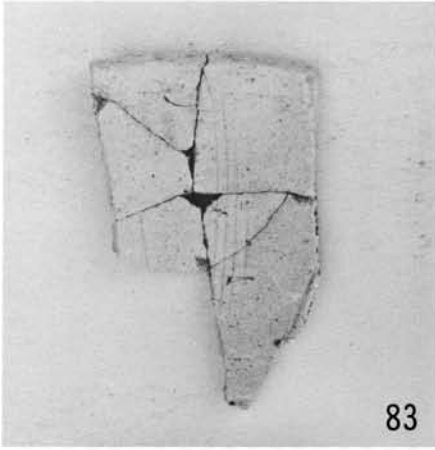


瓦質土器・陶器・磁器 (1/3)

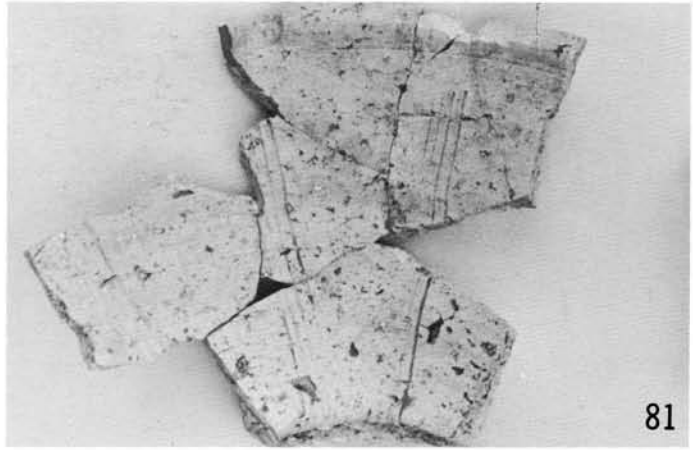


PL66

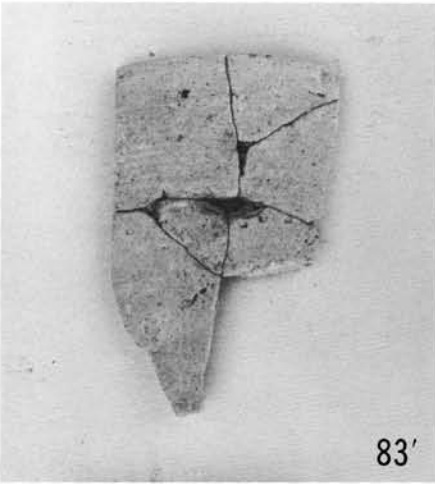
神ノ木館跡



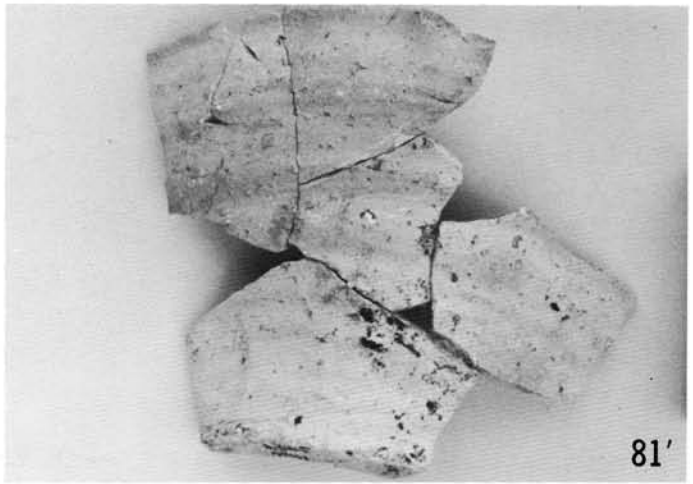
83



81



83'



81'

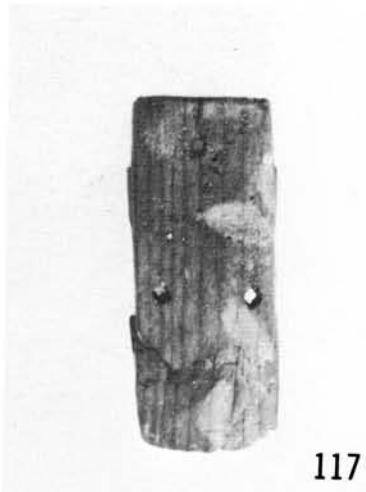
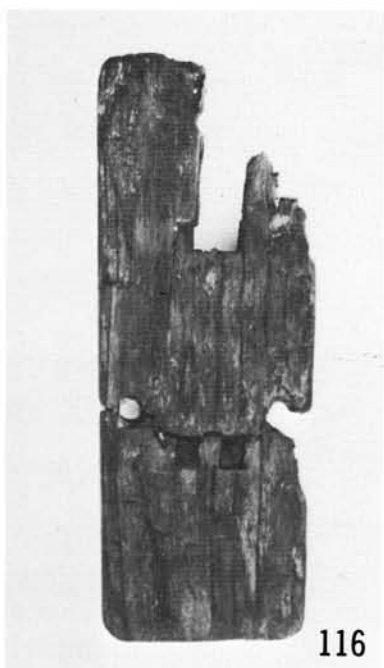
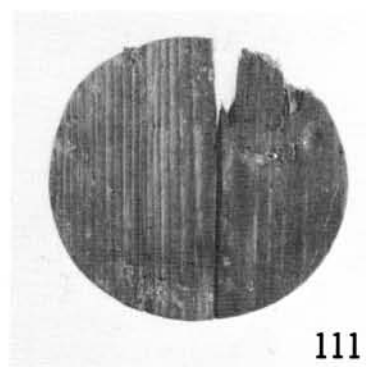
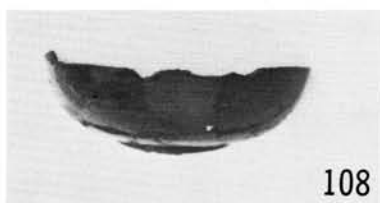
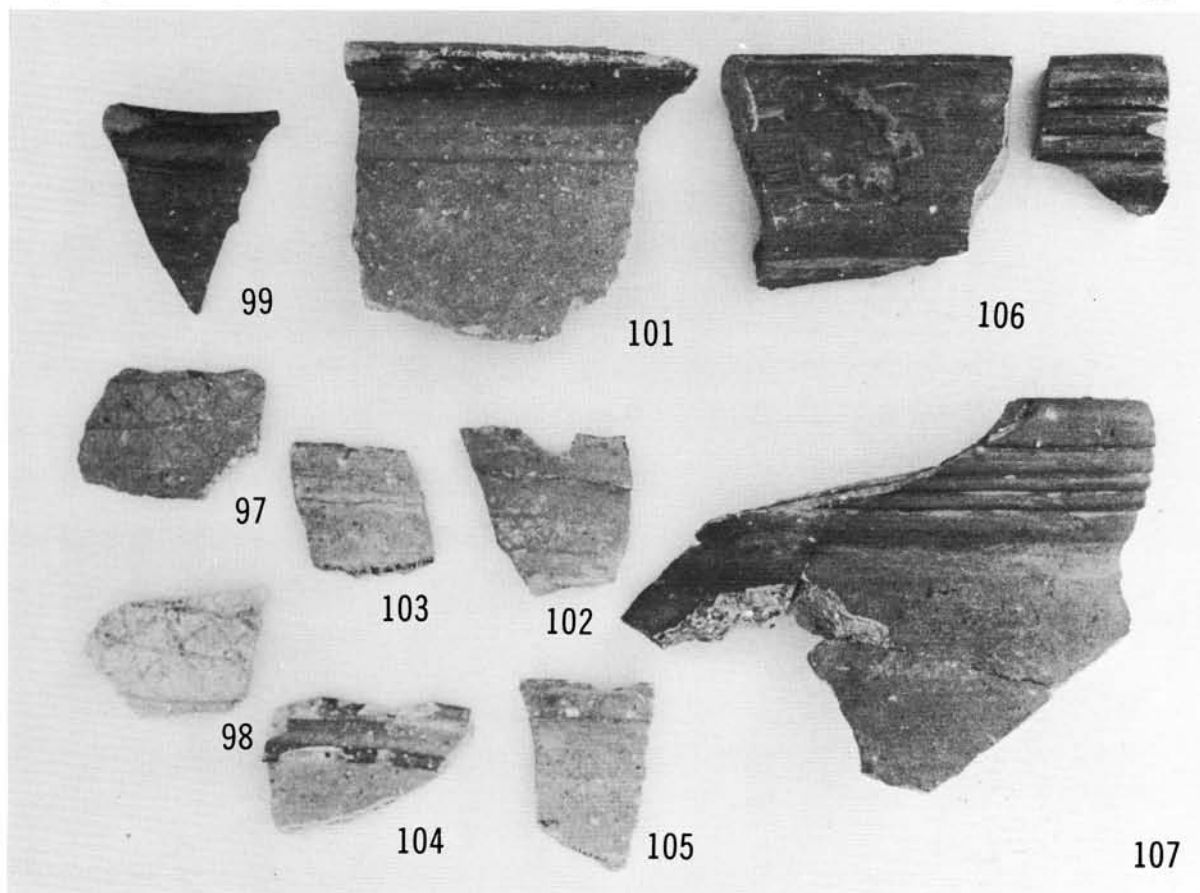


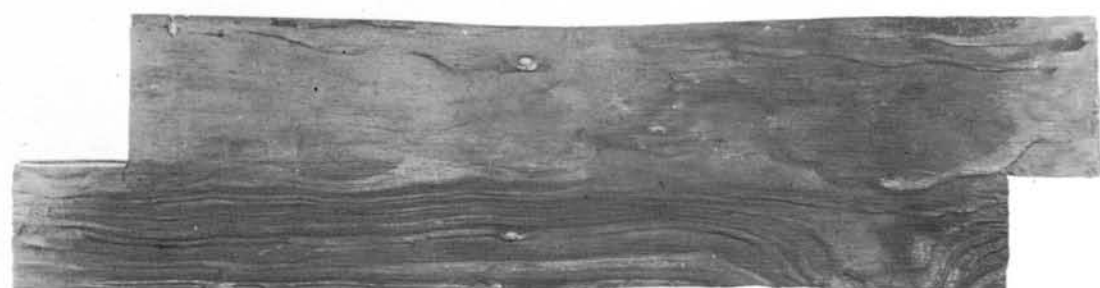
100



95

陶器 (1/3)





SE55 井戸梓 内側・外側 (1/6)



SE55 井戸梓 内側・外側 (1/6)



遠景（北東から）



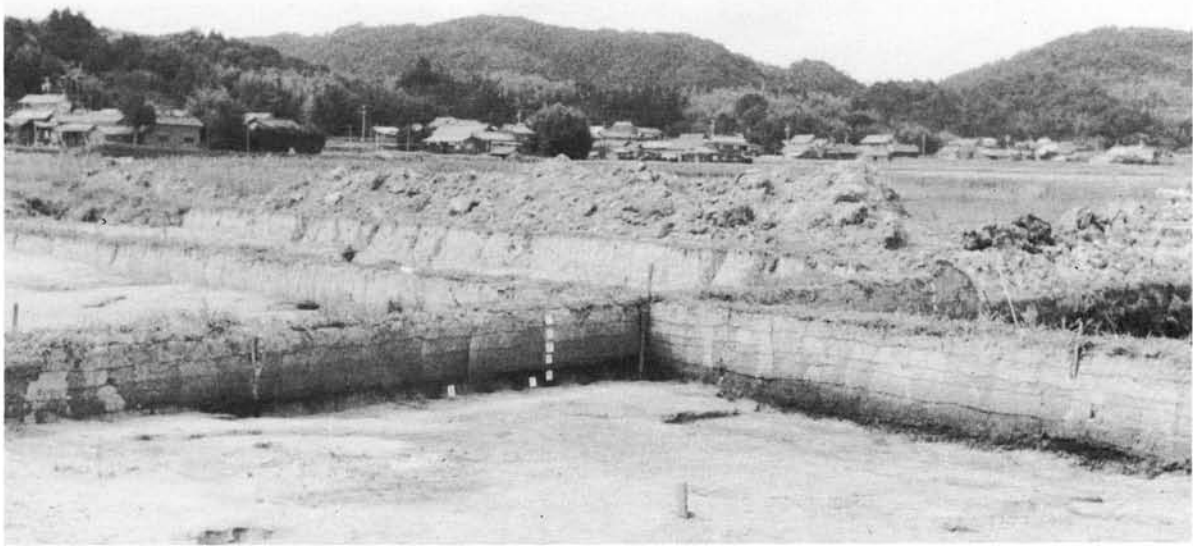
近景（西から）



A区主要部（西から）



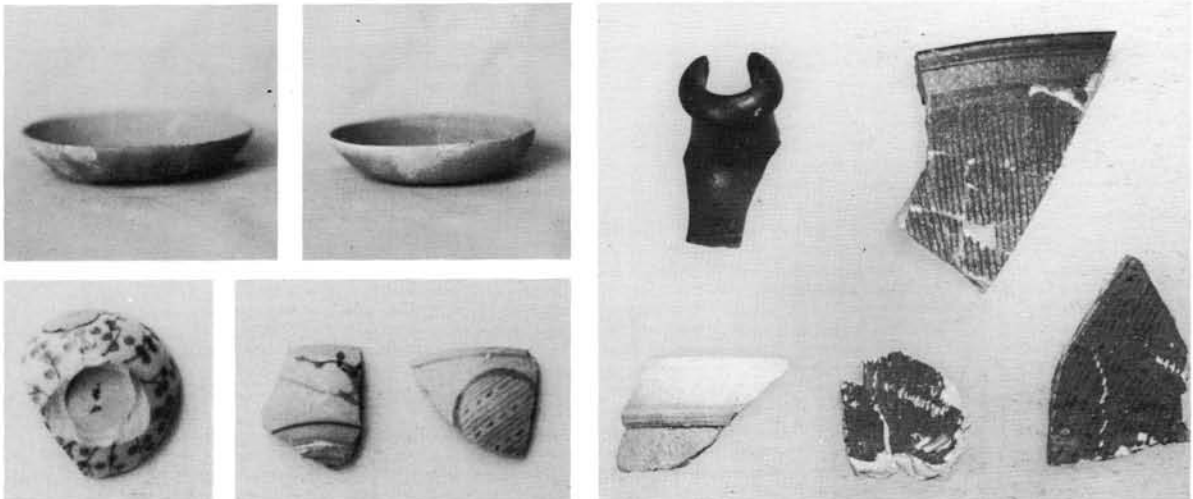
B区主要部（北から）



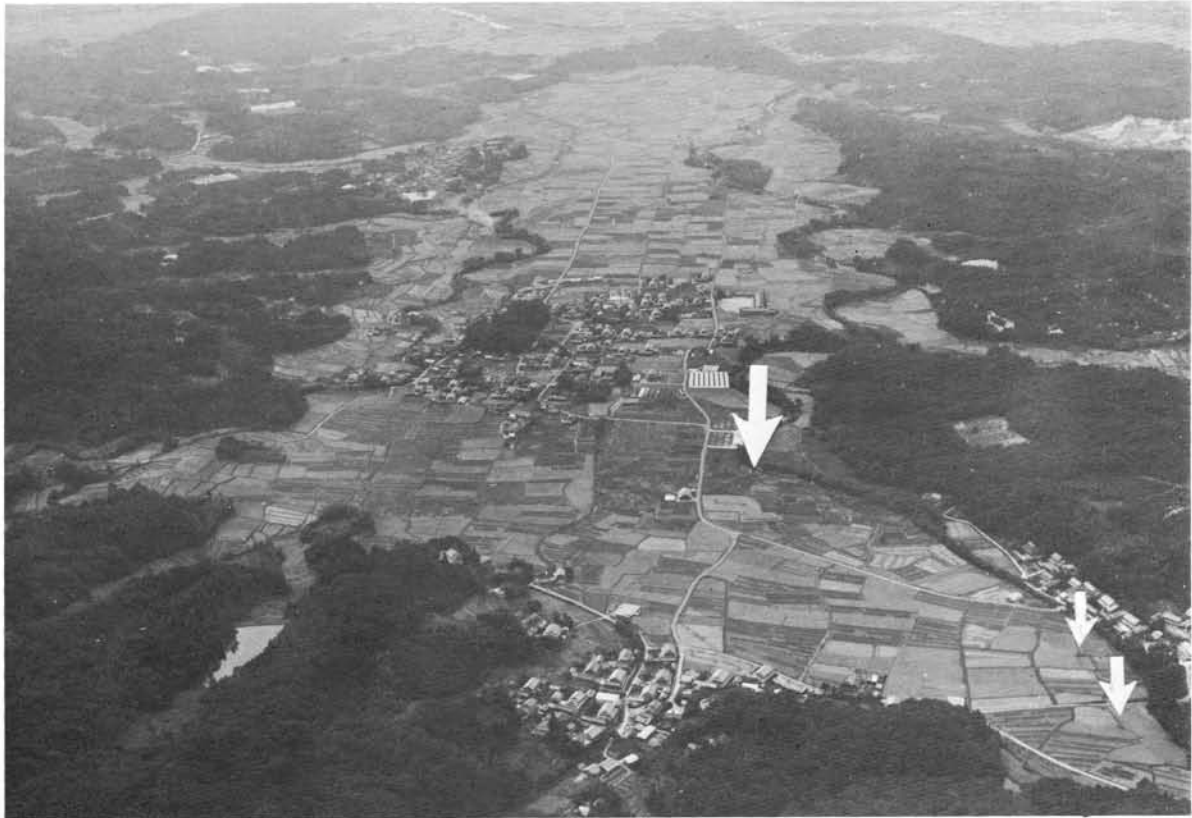
B区土層



発掘風景



出土遺物 (1 : 3)



比自岐盆地航空写真（東から）



水路部分（東から）



SK12 土器出土状況（東から）



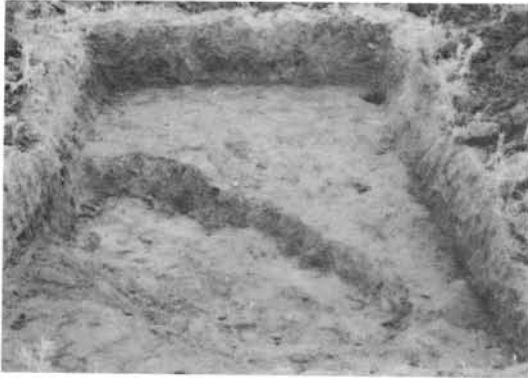
SD15（南から）



SK16（西から）

上寺遺跡

PL73



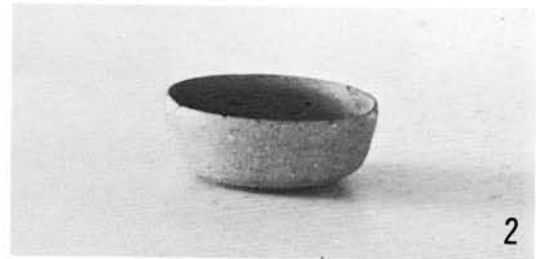
No.13 SK17 (北から)



No.20 SD18 (北から)



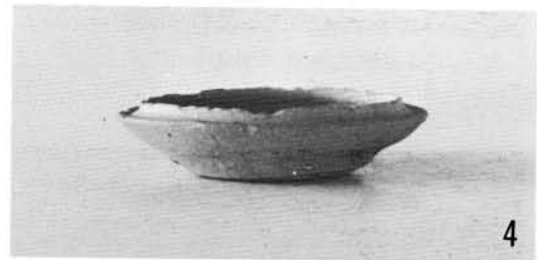
1



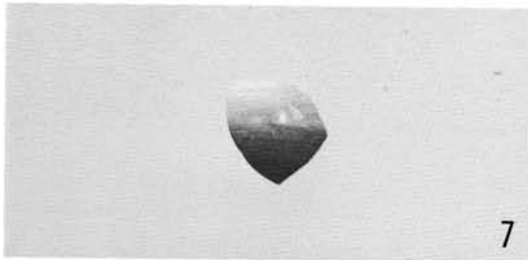
2



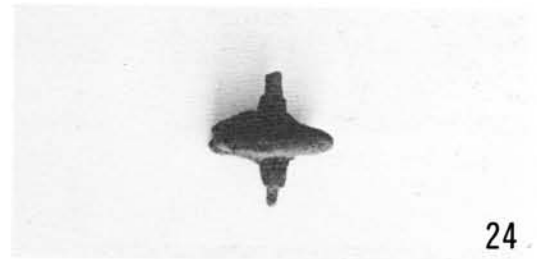
3



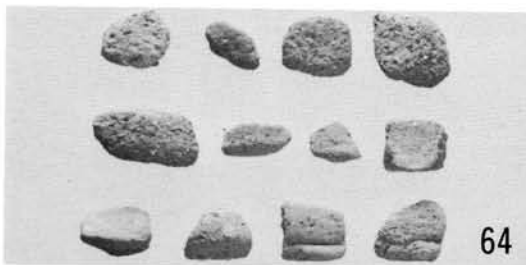
4



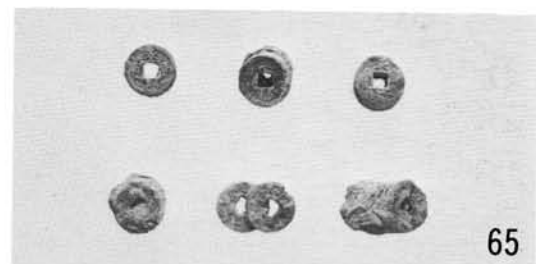
7



24



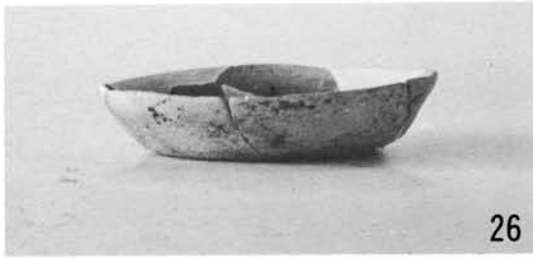
64



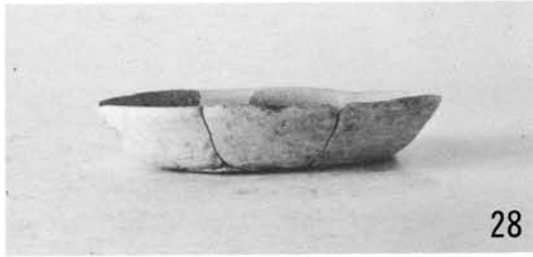
65

水路部分出土遺物(24)以外は約 $\frac{1}{3}$

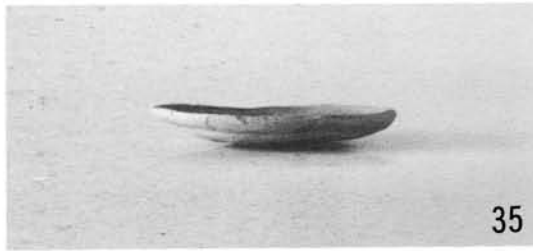
PL74



26



28



35



41



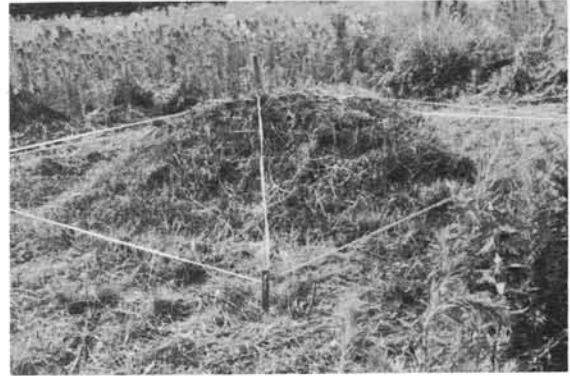
42



44

試掘坑出土土器（約 $\frac{1}{3}$ ）

上寺遺跡



親王塚調査前全景



調査後全景



石神塚1号墳



石神塚2号墳



航空写真



遺跡遠景（南から）

PL76

一本杉遺跡



遺跡近景



SB 1



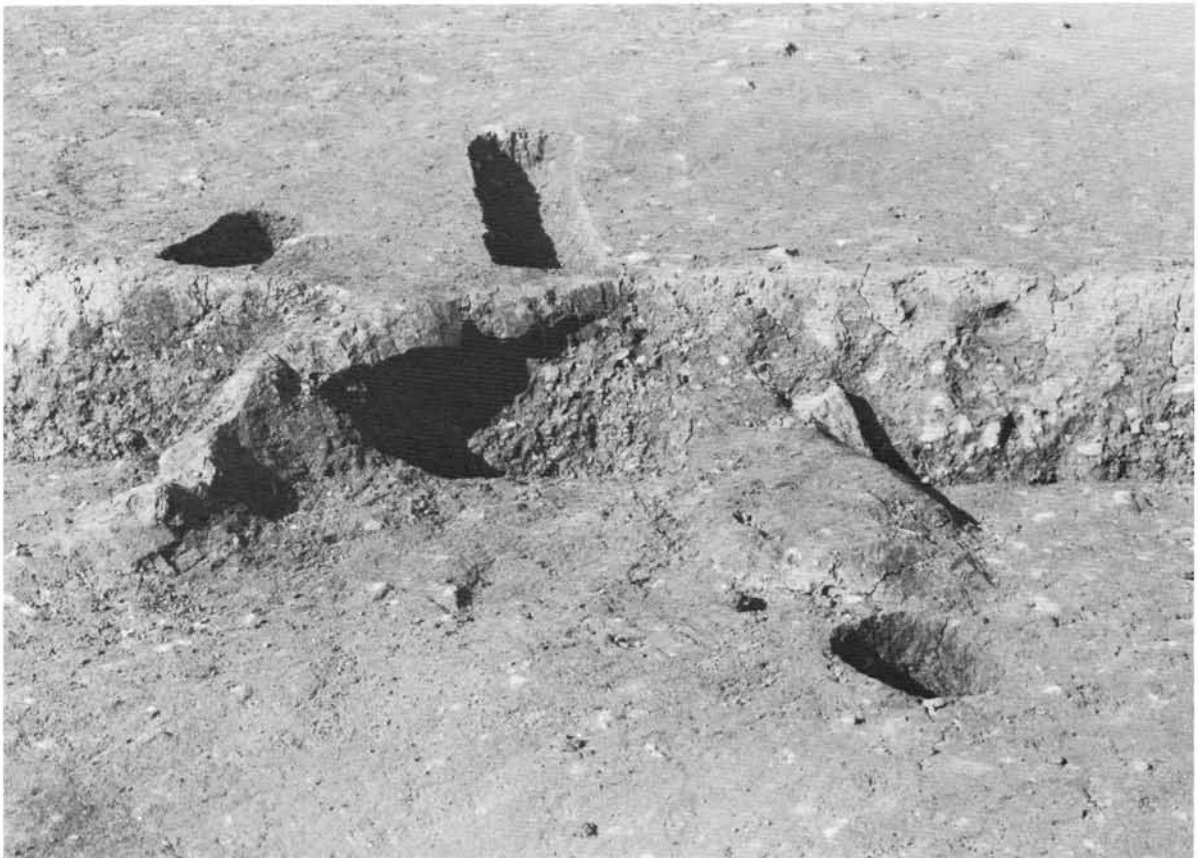
SB 2 (南から)



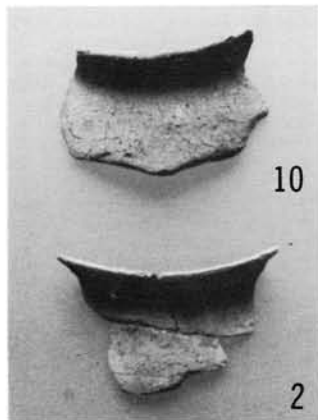
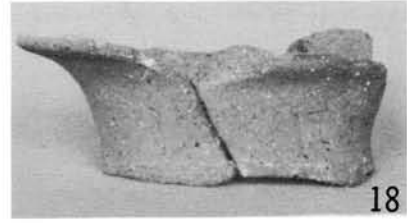
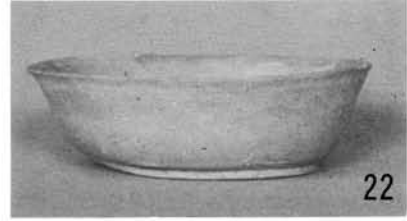
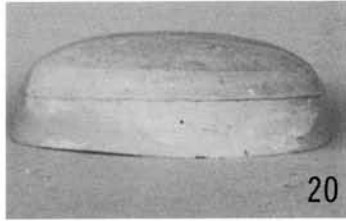
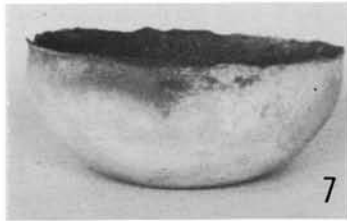
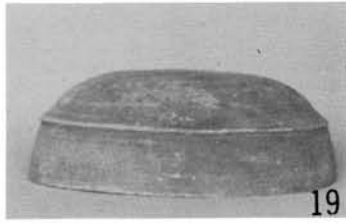
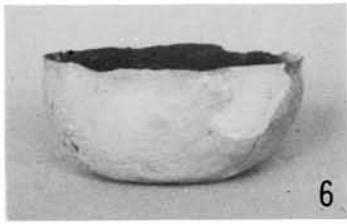
SB 2・3 (北から)



SB 2・床面炭化材出土状況



SB 2・カマドと煙道（南から）



昭和55（1980）年3月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告43

昭和54年度県営圃場整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査報告

昭和55年3月31日

編集 三重県教育委員会
発行

印刷 オリエンタル印刷株式会社
